

---

# 新約的・雲の学園生徒会!!!

skyofnet

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新約的・雲の学園生徒会!!!

### 【コード】

N6260H

### 【作者名】

skyofnet

### 【あらすじ】

雲の学園生徒会のタイトルを改めて、『新約的・雲の学園生徒会!!!』として再連載をしていきたいと思っております。

相変わらずの誤字脱字がありますが、よろしく願います。

## 1 第一章『私たちの生徒会のお仕事』（前書き）

すみません・・・

第一話はまだグダグダな設定だったので、へたれ文です。

なので、興味を持っていただけの方は軽く最新話を見てください。

では、雲の上学園生徒会スタート!!

## 1 第一章 『私たちの生徒会のお仕事』

東京都八王子市…

ここには超がつくほどの金持ちが通う学校がある。駅から専用バスで、20分、自然の中に、小中高一貫されている学校である。敷地面積は、正直ここは八王子市か？というくらい無駄に広い。外見の特徴としては、小中高の密接された真ん中に高い鐘楼塔がある。

その名は…

「雲の上学園」

金持ちは、小学生から通うエスカレーター式であるが、一般人からは、とても偏差値が高い学園である。

3

二月、まだまだ肌寒い季節である

一年F組

「ZZZ…」

今は昼休み、ここに一人の少女が寝ていた。髪はオレンジ。長さはミドルショート。頭のとっぺんの髪がピヨンと跳ねている。そして今はヨダレを垂らしている。そして寝言を

「……肉まん……」

彼女は主人公の一人、「東海林桜」  
趣味は食べ歩き。特技は大食い。

「う起きろー！ー！！」

ズバン！！とノートを丸めて殴られた。

「は！肉まんと豚まんは！」

とヨダレを垂らしながら寝ぼけた。

「寝言は寝て言えっていうけど、正にアンタに言っでやりたいわ。」  
殴った少女は言った。彼女は西園寺七海。主人公ではない。髪の色は黒。長さは桜よりも短くカチューシャで止めている。

「あ、おっは〜」

「何年前の流行語よ……。今日こそは行かないといい加減会長が怒るよ。ほら」

「じゃあ……あと十分だけ……寝る……」

「昨日と同じ手を使うなー！！」

と桜を引きずりながら教室を出た。

東海林桜。

身長はおおよそ160。

小さくもないし、決して大きくもない。

髪はオレンジ、長さはミドルショート。  
体系が全てがスラッとしていることが悩みの一つ。  
スラッしていながらも筋肉はかなりついている。  
彼女曰く、食べたものが筋肉になるらしい。

西園寺七海。

桜より少し身長が高い。

茶髪のロング。

胸がポンツとでているナイスプロポーションの持ち主。

視力が悪く、赤ふちの眼鏡を愛用している。

眼鏡をはずすとNOBITA状態になる。

本人曰くDS。

「え〜っと何だっけ？ああ、生徒会の仕事か。めずらしいね、七海がやる気になってるなんて」

「いや…それが、今朝生徒会長に偶然出くわしちゃって、昨日サボったこと怒られたのよ。で、今日こそは働かないと生徒会をクビにするって脅されたのよ」

この二人は生徒会役員である。が、かなりのサボり魔である。三回に二回はサボるので生徒会長からつねに「クビにするよ」と脅迫をされている。

「南は？」

「教室に行ったらすでにいなかった。察してバツクレたか？」

七海はものすごく不機嫌そうに言った。

生徒会室は、生徒の教室である、学習棟にあるのではない。この学

校は大きいため、学習棟・食堂棟・体育館・図書棟・運営棟とそれぞれの建物がある。運営棟は学習棟の隣にあり、一階には職員室。二階三階には委員会の部屋。四階は空き部屋で五階に生徒会室がある。

五階に行くときのみエレベーターの使用が認められている。

二人は運営棟に着いて、エレベーターに乗った。ゴウンと低い音がなり上に上り始めた。

「七海は中間大丈夫？つて聞くまでもないと思うけど」

「ふっ、もちろんいつもどおり、桜とおなじさ」

「赤点とりそうってことね」

チンとなり、生徒会室についた。

生徒会室は普通の教室とは違い、とても広い。天井も高く、まさに選ばれた人のみの空間である。

奥の作業室では二人座っていた。

真ん中の大きい机で作業しているのは、雲の上生徒会長「北皇子氷柱」である。

容姿はまさに清楚で黒く長い髪の毛の持ち主。体系はかなり細い。不健康に見えるくらい細い。正にお嬢様の見本のようなようである。周りからは、完璧超人と一部では言われている。噂ではファンクラブがあるとか。

隣の椅子で寝ているのは生徒会役員

「南島木葉」通称「南」。ぶっっちゃけちびっこ。頭はツインテールの金髪である。

体系は幼児体系というかロリ体系である。  
画像をアップできないのが残念だ。

「あ、やっときた。仕事が溜まってるから協力してやっちゃってください。南も起きて」

と南に定規を投げつけた。

「いて！」

と見事にクリーンヒットした。

そして桜たちに気づいた。

「お、桜ちゃんと七海ちゃんではないか。」

「南、もう来てたのか。教室まで迎えに行っちゃったよ」「ごめんごめん。でもさきに氷柱ちゃんが直々に迎えにきたんだよ」

と南は笑顔で言った。

などと会話をしていると

・・・

こっそりと非常階段から逃げ出そうとする足音。

それに気づいた生徒会長は

「桜、逃げたらこの前、お昼に鼻からラーメンと牛乳だったこと新聞にのせるわよ」

七海と南「ぶっ」と吹いた。一方桜は顔を真っ赤にして

「な、ななななななんぞ知ってるの!!!!」



「私に知らないことはないのよ」

と悟るように言った。

「桜ちゃんかわいい」

「鼻から牛乳って小学生かよ！さらにラーメンまでも・・・」

二人は茶化しながら腹をかかえて笑った。

「もう！氷柱！何で知ってるか知らないけど恥ずかしいでしょ！！」

とまだ顔を真っ赤にしながら叫んだ。

こうしていつものやりとりをし、会長の厳しい監視の中仕事をした。

「ご苦労様。ほら、いつもあなた達サボってるけどやればできるでしょ」

三人は屍のようになっていた。

「やっと終わった・・・」

「死ぬ・・・」

「疲れたよ・・・」

氷柱は書類をまとめ、ながら

「じゃあ、私は迎えが来てるからもう帰るけど、帰りに、目安箱あるでしょ。たぶん何も入ってないと思うけど見ておいてくれる？」

「やあまた明日ね。あまり残ってちゃだめよ」

といい颯爽と帰っていった。

桜は机に顔面を伏せながら、

「あゝ・・・目安箱なんてもんあった？」

「何言ってるんの、アンタが提案したことですよ」

七海は呆れながら小さな声で呟いた。もう気力がないようだ

「一人一個案を出さなきゃいけないかったとき、桜ちゃんが目安箱の案をだしたんだよおゝ」

南は三人の中で一番ダウンしていた。

「じゃあとつととやって帰ろうか・・・」

目安箱は食堂棟の売店コーナー入り口に設置されている。

桜達は仕事が増えるのがいやだったので、何も入ってないよう祈った。

「じゃあせつかくだから入ってるか賭けようか？」

「え、またあ・・・」

と桜はいやそうにいった。七海は何かと賭け事が好きで、ことあるごとに話を持ってくる。桜は基本的に不運の星の下に生まれており、前回は負けていた。

「たしかこの前は、このアンパンがこしあんか、つぶあんか、だったよね。私は勝ったけど桜ちゃん一人負けだったよね」

桜とは対称に乗り気な南。

「よし、今回の罰ゲームは……。」

「あ、じゃあ乗り気じゃない私から決めていい？」

「お、珍しい。いいよ。決めちゃって」

桜が乗り気になるならなんでもいいという気分らしい。

「じゃあ……シンプルだけど一番きつい。何でも言うことを聞いてもらう。どんなことでもね」

最後のどんなことでも、を強く強調した。

「あいかわらずセンスないね。もっとボキャブラティーをきかせることはできないの？」

「な！これでもけっこう考えたんだからね！！あーもう始めるよ！ウチは入ってるほう。」

その答えを聞いて後の二人は顔を合わせた。

「桜といっしょの答えにしたら、はずしそうだから、入ってない一票」

「私も道連れはゴメンだから入ってないに一票」

「そんなに信じられないか！！！」  
「いい、箱を開けてみる。」

「あ、」

中には一通の手紙が入っていた

「入っているよ」

二人は青ざめた。

「急に嵐が来るかも」

「あしたは、空から例の赤い人がコロニーを落とすかもね・・・遺書書かなきゃ」

などぼやき始めた。y

「もう・・・。で手紙の中身は・・・」

□

学校の七不思議でイタズラをする人がいます

以上  
□

「いつからこれは鬼○郎の妖怪ポストになった？」

「で、この妖怪退治をするの？」

「まあ依頼だからやらなきゃ。それに、これを解決したら今後どんどん依頼者が増えるかもしれないよ。それに、活躍したら他の生徒会の仕事をサボれる！」

おお！と七海と南は声をあげ拍手をした。桜はえっへんと踏ん反りかえっていた。

ここで七海は当然の質問をした

「で、差出人が書いてないけどいいの？」

「いいのよ、どうせうちの学校の関係者しかポストに入れられないから」

ここはいわゆるお金持ち学校であるから、誘拐者などの犯罪者から狙われないために、警備システムは最新鋭のものを使い、一流の警備員によって守られているので、関係者以外の学内への侵入はほぼ不可能である。

「七不思議つてえ何」

南のほうへ首を振り向かせ、七海と桜は同時に告げた

「「さあ?」「」

次回予告!

桜「次回予告つて何やるの?」

氷柱「私たち生徒会メンバーが次回のみどころや、話の裏設定を話したりするのよ」

桜「じゃあ、とりあえず生徒会の設定から話そうか。」

氷柱「そうね。じゃあ私から…まず

生徒会長 北皇子氷柱

副会長 まだ秘密

会計 南嶋木葉

書記 中嶋識

渉外 西園寺七海

治安維持係 東海林桜

雑務 秘密

の七人で構成されているわ。」  
桜「なんというか、作者がへたしだから途中で設定変更するかもしれないから、そのときは伝えるね」  
氷柱「では今回はここまでで」  
桜、氷柱「バイバイ」  
桜「次回は南と七海！」

## 2 学園の図書館

翌日。桜たち一行は昼休みに、図書館に集い、学校の七不思議について調べていた。

「桜、そっちは見つかった？」

「ないよー！南は？」

「なあいよお」

三人はそれぞれ慣れない「調査」を行っていた。

この学校は金持ち学校なだけに図書館が広い。とにかく広い。

「だめだ、見つからないよ。」

三人はあきらめ、椅子で休憩をしていた。

「学校の歴史なんて本見つからないね」

三人は図書館で学校の歴史関係の書籍を探していた。

これだけの規模の学校の図書館ならば、学校の歴史を記した資料があるはず、と思い探していた。

だが、どう探しても見つからない。

南がパソコンで検索しても、七海と桜が図書館をグルグル回ってもまったく見つからない。

もしかしたら、学校の歴史関係の本なんて存在しないのかもしれない。

だが、手紙を出した主曰く、七不思議でイタズラをしている人がいるということは、その人物双方は、七不思議を知っているということになる。

どこで七不思議を知ったのか。

「いや、もしかしたら氷柱ならわかるかもしれない。」

急に桜が眩き、驚いた二人が振り向いた。

「急に言い出すから、驚いたよ。氷柱？まああのスーパー超人ならわからないことがないと思うし」

すると後ろから声がしてきた

「七不思議ですか？」

後ろに立っていたのは、長い黒髪をしいわゆる清楚な感じの女性だった。

「あ、ごめんなさい。私は図書委員の薬師寺といいます。」

「ええっと薬師寺さんだっけ。七不思議を知っているの？」

「ええ、私もどういいうわけか資料としてないのが不思議ですが、私は先輩づてで七不思議についてうかがってます。まず一つめが…」

キーンコーンカーンコーン

チャイムがなり、昼休みが終わりを告げた。

図書館にいた生徒は立ち上がり、それぞれの教室へと歩き出した。

「ごめんなさい。お話したいのですが、授業がありますので、放課



後でよろしいですか？」

そう言い、薬師寺はスタスタと教室へと戻っていった。

「私たちどうする？」

「サボるか？」

「じゃああ、学校の裏山へレッツゴー」

裏山

「ZZZZZZ……」

一人の少年が裏山の丘で寝ていた。この丘は学校が一望でき、昼は少年の寝場所。夜はカップルのスポットとなっている。ちなみにこの裏山も雲の上学園の敷地内である。

この裏山へは教師の監視はこない。

学校、裏山を大きな塀で囲んでいるのが雲の上学園の敷地である。

「……でさあ、そのお店のアイスクリームがねえ」

桜たち三人が少年の寝ているところへ、会話をしながら近づいてきた。

「あ、識。いたの？」

識と呼ばれた少年はムクリと起き上がり、寝ぼけ眼で三人を見つめた。

「…桜…三馬鹿か。なんでこんなところに…」

「あんたいいの？授業始まるよ」

そついい桜は時計を見せた。時刻を見た識は寝ぼけていた眼を大きく見開かせて、飛び上がった。

「やつべ！もうこんな時間か！寝すぎた！おい三馬鹿。またサボりか？」

「最低限の出席はしているからいいのよ。ホラ、遅刻しちゃうぞ」

桜がそう言つと識はいそいで山を降りていった。

「中嶋くん、私たちと違って真面目だよネ。」

「勉強もできるし、スポーツもできるんだよネえ。桜ちゃんと同じくらい運動面ではバケモノクラスなんだよネ」

「私まで化け物言つな！」

ちよつと反撃をしようと、桜はニヤツとして意地悪く冗談を言つてみた

「あれゝ。もしかして南、識にホの字かな？」

すると南はシラツ冷たい眼をし、

「いやいや、ないってないって。それなら七海ちゆんだよ。ね」

「ばっ！ちちちち違う！バカバカ」

普通ならこれだけ否定をすれば、真実はその逆であると思つのが常だが、この三人は恋愛に関する感がひどく鈍い。

「まあ、そつだよネ。識が誰かに好かれることがあつたら逆立ちし

て校舎一周してもいいわ」

「桜ちゃんならそれ普通にできるよね。」

この東海林桜はどういうわけか、金持ちでスポーツ万能、頭はいまひとつという人間である。

この学校の金持ち生徒の大半はスポーツや運動をまったくしないので学内遠足を行うと翌日は筋肉痛になる人が大勢いる。

この南と七海も例外ではない。

特に生徒会長氷柱はかなり貧弱は部類に入る。

以前、桜たちが中学生の時、七海がバイクのひったくりにあい、その犯人を屋根を飛び越え追いかけて捕まえた一件。三人で下校しているとき銀行強盗の車に桜がぶつかり、放置自転車の鍵をぶっ壊し追いかけて鉄拳制裁した件。

この二件以降桜を「バケモノ」と呼んでいる。

桜も言われて本気で嫌がっているわけではないのであまり注意はしない。

「しっかし…やることないなあ。POPもってきた？」

「私今日忘れちゃったよお」

「あー、ごめん。昨日家の親父に取り上げられちゃった。」

「そっか、モ○ハンのリオ○イアと一緒に討伐してもらおうと思っただけだな。」

鞆から取り出したPOPをしぶしぶとしまっ

「  
」  
「  
」  
「  
」

三人はやることがみつからずその丘で寝てしまった。

放課後

1・7組から昼休みに丘で寝ていた中嶋識が生徒会室へ向かおうと、鞆を持ってでてきた。

中嶋識はいたって外見は普通の歳相応の少年である。

170くらいの身長

髪は長くもないし、短くもない。ちょっと髪を立てている。茶髪である

ただ家が恐ろしく貧乏なので家は今にも壊れそうというより、半壊している。

本人曰く親は中学生のときからいないらしい。

この学校へは特待生として学費免除の権利を得て入学した。

その識は氷柱から呼び出しをくらっていた。

巨大なエレベーターを上り生徒会室へつくと既に氷柱が会長机で仕事をしていた。

「氷柱さん。先生づつて呼び出しするのやめてくださいよ」

「あら、いつまでも携帯を買わない識くんがいけないのよ。プリケイ（プリペイド携帯）なら生徒会の経費で落ちるっていつているのに」

「携帯をもつことによって時間とかいろんなものに束縛されるのはいやなんです」

「じゃあ文句いわないで。」

この言い合いは氷柱が勝った。

識と氷柱は桜たちと同じ一年生である。が、なぜか識は氷柱に対して敬語を使う。

そして、氷柱は本題といわんばかりに書類を識に差し出した。

「……………なんです。このすつごく怪しいのは」

氷柱が渡したのは桜の目安箱に入っていた依頼の紙である。

差出人不明。内容の不十分。これを見て怪しまない人はいないだろう。

「桜たちがそれを調べているのだけれどどうも心配だから、桜たちとは別ルートで調査してくれる？」

「調査ですか…。わかりました。けどいつもなら桜たち関連のことなら氷柱さんがやるのにどうして今回は俺にたのむんですか？」

言われると氷柱はフィツと横を向きどこか遠くを見ながら極力識に顔を見られないように話し出した。

「……………おばけ……………怖いから」

学校の見える丘

「ZZZZZZZZ……………」

三人は寝ていた。

トゥルルルル！トゥルルルル！

「うわっ！！！」

寝ていた桜がとびおき携帯を鞆の中から探し出し、手にとった

『桜ですか？茜です。』

「あ、茜さん。どうしたの？」

『今日は晩御飯のときでもよかったと思ったのですが、従兄弟の恋  
継さんが来週結婚式を桜の家で開きたいといってるのですが、』

「え！？…じゃあウチから電話するからいいよ」

『わかりました。なるべく早く電話してくださいね』

そう言っつて電話を終えた。

茜というのは東海林家の使用人である。これは次の次くらいの章で  
詳しく話そう。

恋継も同様に後に話そう。

桜は電話をきり、チラリと携帯の時計を見た。

「うわわあああああ！！！！起きろ！！二人とも！！」

桜は叫んで二人を起こした。

「おかあさああん。あと五分だけえ」

「親父…あとちよつとだけ…」

「二人して似たこといな」

とりあえず二人をビンタして叩き起こした

この時、時刻は4時30分であった。

今日図書館が閉まるのは4時45分。

## 次回予告

南「南でえ〜す」

七海「七海です」

南「今回はキャラ設定について少し説明しま〜す」

七海「作者がヘタレ+国語能力が低いから誰が話しているかわからない時があると思うので軽く説明をするね」

南「私が話しているときは、小さい「え」とか「お」が入ったり、「〜」をつけたりするよ」

七海「私は少し男気が混じってる話方だな。それが一人称を「私」と言ってる。」

南「桜ちゃんの一人称は「ウチ」だからなんとなく区別してね」

七海「じゃあとりあえずこんなところで」

南「あ、待つて。前回担当した氷柱ちゃんから伝言で、

感想を募集中!!!って」

七海「アクセスを解析したら意外と20人くらいは見てくれていたからね」

南「そんなわけで、よろしくねえ!」

七海「バイバイ。次回は識と桜!」

### 3 七不思議の不思議

4時45分…

寝起きの桜たちは図書室についた。

雲の上学園の図書室は4時45分まで開いている。

時間になると、図書委員が鍵を閉め、その鍵を職員室へと持っていく。

図書室の扉を開くと他の生徒たちは帰り仕度をしていた。

薬師寺は、図書室のカウンターで整理をしており、図書室へ入ってきた桜たちに気がついた。

「…あの…薬師寺さん…遅れてごめんなさ」

「い」を言おうとしたとき、薬師寺は笑顔で顔だけ桜たちに向け

「いいえ、全然気にしてませんよ。私の予想では授業後に来てくれると思いましたが、まさかこんな帰り際の迷惑な時間帯にくるとは思わなかったなんて思っていますから…ね」

桜たちは正直かなりビビっていた。

この威圧は氷柱のものと同じ種類だと三人は察していた。

やられる…そう思った。

「では、ちょっと今日はあまり時間がないので帰り道でお話ししましょうか」



「「はい！是非何卒よろしくお願いします」「」

三人は全身全霊で懇切丁寧に言った。

その後、三人は薬師寺と帰りながら話を聞くため、校門にて待つていた。

薬師寺は職員室に鍵を届けるので10分くらい待つように言ったのであった。

三人は適当に話していると、一人の女性が近づいてきた。桜は薬師寺が来たかと思ひ声をかけた。

「あ、薬師寺さ…」

その女性の顔を見た瞬間、急に桜の顔が険しくなった。

「あら、薬師寺さんとやらじゃなくてごめんなさいね、桜」

その女性はどこから取り出したのか、黒い扇子を綺麗に広げた。

「なんだ椿…。いたの」

「つれないわね。私と貴方の仲じゃない。あの夜を一緒に過ごした関係なのに」

「過ごしてないわよ！あなたの妄想にウチを登場させるな！」

この少女の名前は、黒雛椿。桜たちと同じ一年生。

身長は桜と変わらないが、胸が大きい。制服がきついそうだ。

髪は綺麗な金髪で軽くロールを巻いている。後ろ髪は長くたれてい

る。

とても綺麗な顔立ちをし、プライドの高そうな顔をしている。

「ところで、桜。聞いた話によると何かめずらしく生徒会の仕事を  
しているそうじゃない」

「そうだよお！桜ちゃんのお目安箱に手紙が入ってね。そのオシゴ  
トしてるんだよお」

「そういうわけだから、それじゃ」

桜はどうにか椿を追い返そうと手を振った。

「相変わらずね。まあいいわ。それじゃまた何かあったら私の部屋  
にきなさい。」

「極力いかないようにするわ」

椿と別れたすぐ後に薬師寺がやってきた。

「ごめんなさい。あなた達ほどではないけど、お待たせしてごめん  
なさい」

（ ）（ ）いやむしろこちらがごめんなさい（ ）（ ）

「では、いきましようか。家はすぐなので早くお話します」

「七不思議は七つの不思議があると思っ  
てませんか？」

「違うんですか？」

「たしかに七つあるらしいのですが、今はいくつか変な話がありま

す。順に説明しますね。

第一の謎がよくある花子さんの存在

第二が夜走る銅像

第三がエリーゼのためにを引く人体模型

第四が首なし

第五が欠番

第六が花子さんの次の住人

第七が欠番

「第五以降がなんだか変ですね。」

「わたしも同意見。欠番も気になるけど、第六の話もおかしいですね。」

「ですが、この話はすでに捨てられたという本に書いてあった本当の話らしいです。欠番というのはまだいないということらしいです。なので実際は五不思議です。ですが、書物によると欠番も数に含まれ、七不思議となると書かれていたらしいです。これは信頼できる方からの情報なので間違いないと思います」

「で、なんですけど、この七不思議でイタズラしている人がいるらしいんですよ」

「不謹慎なイタズラですね。本当にでたらどうするんでしょう」

その瞬間桜と七海が笑い出した

「あつはははは！お化けなんているわけないでしょ！！」

「あははっは、ウチもそう思う。」

薬師寺は少し怒ったような顔になったが、すぐに笑顔になり

「じゃあ、お願いできますね。イタズラの解明を直接していただくこと」

「「えっ」「」

「では、私はここで曲がりますので、ではおねがいしますね」

一方、中嶋識も調査をしていた。  
桜たちとは別に、ある人を訪ねていた。

「こんにちはー！先輩生きてますか？」

識は学校の近くにある 真道神社 というところを訪ねていた。

ガラツと扉を開けて頭を丸めた青年がでてきた。

「なんだ、識か。あまり時間がないんだが用があんのか？」

「先輩はたしか去年まで図書委員長でしたよね。それで聞きたいことがあるんです」

「ん…本のことか？」

「七不思議ってしてしてます？最近それでイタズラするやつがいるらしいんですよ」

その瞬間、顔が変わった。

「なに？あの学校でそんなことをするやつがいるのか？」

「そうなんですよ。で七不思議ってどんなのかなって…って先輩かなり顔ヤバイことになってますよ」

「ああ、すまん。俺の卒業した母校でそんなことをしているやつがいると思っただらついな」

どうにか青年は顔を元にもどした

「で、そいつらを懲らしめたいので七不思議教えてもらえませんか？」  
「いや…、ちよつとわけあって今はダメだ。明日でいいか？」  
「…わかりました。」

識は真道神社を後にした。

一つの疑念を抱え、同時に一つの決心というほどではないが、決めたことがあった。

「今日にでも夜の学校にいつてみるか。」

次回、七不思議解決編 前編

次回予告

桜「そういえば私たちの名前の読み方を説明しましょう」

識「そうだな、東海林しゅうかいりんとかわからない人もいるかもしれないからな」

桜「東海林桜しゅうかいりん

さいおんじななみ

西園寺七海

みなみしまこのは

南嶋木葉

北皇子氷柱 きたおつじつら

中嶋識 なかしましき

黒雛椿 くろひなつばき

だよ

識「さて今回の話ってか七不思議編はグダグダだよな」

桜「しょうがないわよ。だって作者は次の話から考えていたんだけど、次の話は最初の話としては、あまりよくないのよ」

識「まったく…」

桜「つてこで、また次回！次は椿と…またウチっ！？やだよー！！」

#### 4 今日から君がゴーストバスター

その日の夜は二月というには少し暖かい風が吹いていた。少し、外にでるの普段よりも楽にできることができた。

桜、南、七海の三人はそれぞれ勉強会をやるといい、家を出た。

この三人は成績がひどく悪いので、たびたび教師である紫部も招き勉強会を開いている。

今回は、紫部に直接連絡を入れられたら嘘がばれるので、中嶋家で勉強会をやるのと口裏を合わせた。

中嶋家は家電話がない。そこに目をつけたのだ。

「シクシク……」

「もう泣くなよ。南。」

先に集合場所についた七海が泣いている南をあやしていた。

「私…あのとき笑ってなかったのに…おばけこわいのに…シクシク」

「だから帰り際も謝ったじゃないか」

「もし私が気絶したらしっかりと運んでよね……」

「それは桜の役だな」

ちょうど噂をすれば、桜がやってきた。

「ゴメンゴメン。遅れた遅れた！モ〇ハン3をW〇iでネットプレイしてたら遅れちゃった。」

「……………」

桜は二人に殴られた。

三人は正門より校舎に入った。

なぜ校舎に入ることができたかというところ、この生徒は夜でも10時までなら警備員に言えば中に入れてもらうことができる。だが消灯しているため明かりは懐中電灯だけである。

「じゃあ、さつそく第一の謎から見に行こうか」

「おー!!!!」

早速三人はトイレの花子さんの存在を確かめにいった。

一階から順に見ていくことにした

「……………」

トイレについたものの、三人は固まった。

さすがにあの時は笑ったものの、実際は怖いらし。

「じゃ〜んけん…」

七海が急に大声を出した。

「ポン!!!!」

桜 パー

七海 パー

南 グー



「南よ、さらばだ。私は心を鬼にして南を…」

ドーンと七海は南の背中を押してトイレへ入れた。

「ぎいやややあああっつ！……！……！」

そのまま勢いで南はトイレの最深部までヨロヨロと手をブンブン回し歩いていった。

1分後

「桜……。ちょいやばくない？」

「うん。南が出てこないね。」

背中を少し押しただけだったのですぐに戻ってくると思っていた。しかし、南が帰ってこないのですさすがに心配になってきた。

「仕方ないから、二人で見にいこうか」

二人はさすがに怖いので手をつないでトイレへと入っていった。

幽霊なんて信じていない。

だがやはり暗闇は怖い。

何かよくわからないけど怖くなるのは人間としての本能だろと思う。

二人が歩いていると床に南のと思われる光が消えた懐中電灯が落ちていた。

「これは…、まさか南！」

二人は花子さんの的なのに南が捕まった最悪の事態を想像した。

「南ー！！どこ？いるんでしょ！？お願いだから声をだして！！！」

するとパツと二人の懐中電灯の光が消えた。

「うわっ！」

「きゃっ！！！」

二人は驚いて手を離してしまった。

あわてて手をつなぎなおそうと、手探りを探していると、桜は暗闇のた少しバランスをくずし後ろへよろけると、何かを踏んだ。

「んななな…何かをつ！！！」

「桜！そっちにいるの！？今携帯の明かりをつける」

七海が携帯のシャメをとるためにあるライトをつけると桜が踏んでいたのは…

「南が目を回してる」

どうやら、七海に押されたときトイレの中で気絶をしたようだ。

桜が南を背負いトイレを見回した。

「花子さんいないね」

「どうやら一階にはいないようだ。次にいこう。」

二階のトイレに行こうとしたのだが、先に一階にある美術室に銅像を確認しにいこうという話になった。

美術室

ガツガツ！

あたりまえだが、美術室には鍵がかかっていた。

「あれ？ダメだ。鍵がかかっている。これじゃあイタズラなんて無理だよ」

「ん〜、じゃあ音楽室も同じだな。あとは首なしただけだけど、どこにいるかね」

「一応、花子さんも残っているけど…なんか、もうどうでもよくなってきたよ」

二人は早くもやる気がなくなった。

しかし…

…エ…レ

「七海？何か言った」

「桜じゃないの？じゃあ南…は気絶中か。」

…カ…エ…レ

それは三人から発せられた声ではなかった。

カッン……カッン……

さらに足音まで聞こえてきた。

「こ……これは！第二の謎歩く銅像！？」

「っ！！」

「七海！南を頼む！」

桜は背負っていた南を七海に預け、空手の構えをした。

「お化けでも所詮銅像！私が壊してみせる！」

そして

桜は

驚愕の光景を目の辺りにする。

## 次回予告

椿「今回私でてないわよ」

桜「でも前回の次回予告で言っちゃったからさ」

椿「で、今回も裏設定話すの？」

桜「さすがに今回は別の話にしようかなって思っただけど」

椿「あら、残念。私と桜の淫らなアルバムを紹介してさしあげよう  
と思っただのに」

桜「そんな妄想アルバムは焼却処分だ！！！」

椿「つれないわね。そんなだから男がよってこないのよ」

桜「グサツ！！う…うるさいわね！」

椿「ところで、今回は私でいいのかしら？」

桜「椿はしばらく出ないわよ」

椿「ちょ！第二の主役でしょ！私は！」

桜「そんなわけで、今回は氷柱と南！」

5 あなたは誰・・・？

カッソ

カッソ

徐々に音が近づいてくる。

姿は暗闇で見えない。

携帯の光だけでは、弱く姿が確認できない。

桜は覚悟を決め、構える。

桜は格闘技には少し自身がある。

本人曰く、昔祖母から格闘術を習ったという。

額に汗が降りる。

カッソ・・・カッソ・・・

音がすぐ近くにまで聞こえてきた。

ぼんやりと桜からシルエットだけが見えてきた。

まだこの距離は、桜の射程範囲外ではあったが、恐怖による焦りからか、桜はシルエットに向かい飛び出した。そしてまず左の拳を牽制のつもりで突き出した。

桜が飛び出した瞬間、シルエットは少し驚いたが、すぐに体勢を立て直し、桜の左手を右手でさばいた。

「っ！！さばかれた！まだ！」

桜は腰をひねり、回転しながらしゃがみ右足で相手に足払いをする。これで相手の体勢を崩すのが目的である。

しかし

ヒュッと後ろに跳ね、桜の攻撃をかわした。

だが、まだ桜は追撃をする。

しゃがんだ姿勢から膝を伸ばしながら、相手との距離をつめ左手右手で相手を攻める。

相手は最初防御に徹していたが、次第に攻撃をしはじめた。

両者の打ち合いを七海は姿が見えないので音だけを聞いていた。音を聞いていると、バシツバシツと聞こえるが、あくまで攻撃をはじいている音であった。



お互いはまだ一度も致命傷を与えていない。

そう思ったとき、相手の隙を見つけ、顔面に右をだした。

だが、その瞬間、桜は思った。

(違う！これは誘いかっ！しまった！)

相手は右頬に当たる右拳を最低限の動きでかわしたが少し当たる。だが、最初から覚悟をしていたように、怯むことなく前へと踏み出す。

ガツと桜の顔面を手で覆い桜の体勢を後ろへ追いやる。

さらにそのまま桜の足を引っ掛けて桜を仰向けに転ばせる。

「っ……！！（まずい！）」

無我夢中で桜はこのままではまずいと感じ、受身をとる前に、顔を覆っている相手の手を下から上へとはじき、つかむ。

はじくことには成功したが、ダウンは免れない。しかも、相手の腕をはじくことに意識を集中していたので、受身にまで意識が回らなかった。

桜は受身はあきらめ相手の腕を掴んだままその腕を引き、相手の顔を少し下へと持ってくる。

そして顔が下へ動くと同時に相手の顔に向かい足をつきだし、顔面蹴りをくらわすことに成功した。

その直ぐ後、桜ももろに硬いコンクリートに背中を打つ。

「「いてえー！！！！」」

両者が同時に叫ぶ。

叫んだと同時に両者は「へっ！？その声は？」と間抜けな声で喋る。

「識？」

「桜？」

またも同時に喋った。

夜の雲が月を覆い隠くすのをやめ、光が校舎中の二人の顔を照らす

「……」  
「……」

桜が戦っていたのは、同じ生徒会の中嶋識であった。

識も桜の姿が見えず、桜を謎のシルエットと見ており、急に謎のシルエットが襲ってきたので戦っていた。

二人の沈黙を破るように七海が

「識くん！？なんでこんなところに？」

「あゝ、ある程度予測はしていたけど、まさか今日いるとは。」

「は？」

「実はな…」

識は氷柱から調査をするよう言われてたことを話、なぞここにいるかを話した。

「で、今日調査してたんだが、まさか、お前たちも今日調査をしてるとはな。」

「まあ、善は急げっていうか、行動は早いほうがいいし」

「嘘つくな。薬師寺さんに脅されていやいやであろう」

七海がちよっと調子こいて嘘をついた桜にツツコむ。

それにちよっと恥ずかしく思い、話を変えるため、先ほどのことを話す。

「それにしても、識けっこういい反応するよね。ウチの攻撃を暗闇でかわすなんて。ウチはてっきり、ニューオーイプかイノオーダーにバックアップを受けている奴かと思ったよ。」

「まったく…ガン〇ムネタばかり使いやがって」

その後、三人（＋一人）は話し合い、気絶した南をこのままにしておくのは、どうかと思い、先に南を背負っている七海二人を教師が寝ている宿直室に行かせることにした。

今日の宿直は桜たちの担任である紫部なので、まあちよっと遊ぼうとお邪魔してもいいだろうという話になった。

なので、見回りは桜と識の二人がすることになった。

桜はそのとき、「男と女が夜の学校に二人きりだよ。まずいでしょ」と言ったが、笑われて、「桜を襲う物好きなんて発情期の兔くらいでしょ。それにアンタ襲われたら実力でぶっころしでしょ」といわれた。

二人で見回りをしている。

ここで桜は気になったことを識に尋ねてみた。

「ところで、なんで識、カエレなんて言っていたの？」

「俺がいつそんなこと言った。」

「さっきウチとバトルする前にさ」

「そんなこと言っていないぞ、俺は」

では、誰が？そう考えたとき、背筋がゾクツとした。

カ・・・エ・・・レ

再びあの声が聞こえてきた。

「桜か？今喋ったの？」

「違う…」

カ・エレ

「声が近づいてきてない？」

「後ろだな…1・2・3で振り向き」

1

2

3

二人は勢いよく後ろを向く。

しかし、誰もいない…

二人はふうと息をはき前に向きななおそうとしたその時

「帰れっでいてんだろー！！！！！！」

「「「っっ！！！！！！」」

恐怖というより、大声を出されて言葉がでなかった。

目の前には先ほどいなかった人物がたっていた。

その人物は仁王立ちをし、キセルをくわえていた。

見た目は、30後半くらいの女性。長い髪がくしゃくしゃになっていて、目は眠そうにしていた。

服装は濃いワインカラーの着物になぜか白いシャカジャンを着ていた。

変

見たときにまず最初にそう思った。

とにかくアナタダレと聞くことにした。

「あの…スンマセン。あなたは？」

「ハイハイハイ、人に聞く前にまず自分からだろ。まあいい。お前らの名前なんて興味ないからな。聞いてもすぐ忘れるだろうし」

そこまで言うとキセルを口からはずし、煙を吹いた。

「私は　座敷わらし　だよ」

二人の頭は真っ白になった。

#### 次回予告

氷柱「最近あまりでていない氷柱です」

南「気絶して今回は何も話していない木葉です」

氷柱「この話の舞台はお嬢様学校という設定だからみんなの父親が何の仕事をしているか説明しようかしら」

南「んとねー。私のパパママは一流税理士だよ」

氷柱「私のお父様は北皇子総合病院の病院長をしているわ」

南「桜ちゃんはたしかお爺さんがトレジャーハントに成功して、今は資産家っていつていた」

氷柱「七海は教えてくれないのよね」

南「七海ちゃんは秘密することが好きだからねー」

氷柱「今日はこんなところでいいかしら」

南「では、ばいばい」

氷柱「次回は桜と識くんよ」

氷柱「それと感想待ってるわ」

南「感想に足跡つけてね」。実は作者は女だよ」

## 6 妖怪がいる話

座敷わらし……

子供というイメージがあったが、現実を見て、ぶっ壊れた。

いや、この人がうそついている可能性は否定できない。

そう思い、質問を試みることにした

「あの…すみませんが、いまひとつ信じられないんだけど」

「ああ！？証拠みせろってゆーの？」

恐縮です！と言わんばかりに頭を下げてしまった。

「じゃあ浮いてやんよ」

自称・座敷わらしは、ふわっと浮き、天井に手をつけた。

そのままの位置を固定し、座敷わらしは話し出した

「で、ガキども。他になんか聞きてーことあんのか？」

はっと意識をもどし、これは人間ではないことがわかった。

座敷わらしかどうかは置いておいて、もう一つ質問を試みた



「私たちの空想の座敷わらしとずいぶん違うんですが」  
「んなの人間どもが考えた空想だろ。つっても、私も昔は子供だったんだが、わけあってこの姿になったんだよ。」

とりあえず、二人は幽霊のような者であることにして、調査を試みることにした

「最近、ここの学校で、夜イタズラしている奴がいるらしいんだが、知らない？」

「この学校の七不思議ってのを真似てやってるらしいんだが」

座敷わらしは ああ と呟き告げた

「もしかしてあの百葉箱の手紙の件か？」

「目安箱だけど、知ってるの？」

少し解決に向けて話が進むことを期待した。

だが、

「あの手紙だしたの私だ。」

「はあああああ！？妖怪が何してんの！？」

桜は口を大きく開けて言った。

「夜暇だったから、イタズラで入れてみたんだ。」

座敷わらしは失礼といいながらキセルに火をつけ吸い始めた。

「だってよー。妖怪だって暇よ。たまに事情知ってる人間と話せるけど基本暇なのよ。で、手紙入れたら、夜学校に誰かくるかなって思ってたよ。」

どうやら桜たちは暇潰しにつきあわされただけらしい。

桜は事件が解決したので、あいさつでもしてとっとと帰ろうとした。

「じゃあ、私たち帰るから、」

「じゃあな、座敷わらしさん」

「待て、ガキ共、忠告することがある。」

二人は足を止めた。

「七不思議は本当にある。だが、出るのは旧校舎の方だ。近づくんじやないぞ」

「えっ！？七不思議は本当にあるの？」

「ああ、旧校舎はヤバイ。夜は近づくな。私でも近づけない」

忠告しているときの座敷わらしの目は本気であった。  
それほどまずい場所であることを二人は察した

旧校舎・・・今はもう使わないので壊そうという意見もあるが、理事  
長やらがなぜか許さないのでも今そのまま残っている。

「旧校舎には行かないよ、約束する。」

「あともう一つ。私のことは他のやつらに言うな」

「なんで？」

「話を広められて、肝試しにでもこられたら迷惑なんだよ。」

「じゃあ、なぜ俺らには声をかけたんだ？」

座敷わらしは少し考え、

「お前らはそこらへんのミーハーどもと違う、そう感じたし、何よ

り」

「何より？」

「…話し相手がほしいんだよ」

宿直室

「ドロー2」

「じゃあ私はドロー4」

「うっそ、六枚？」

南、七海そして教師である紫部の三人はウノをやっていた。

旧校舎

「あら？」

「ん？」

桜たちのいる校舎ではなく旧校舎前に一人の青年と少女がいた。

「真道さん、お久しぶりです。」

「薬師寺か。偶然だな」

「今日はどうされました。」

「ただの見回りだ。ちょっと気になることがあってな。」

「私もです。」

この二人は顔見知りらしい。

「今日、後輩から七不思議のことを聞かれてな。それでちょっと見回りをな」

「偶然ですね、私も今日は七不思議関連のことで、来ましたの。」

「話したのか？」

「ええ、ですがあえて偽の七不思議を言いました。何かしら言わないと、下手したら旧校舎の方へ情報もなく調査してたかもしれないからね」

「それはかなり危なかったな」

そして二人は旧校舎のドアを開け、中へ入っていった。

中の光は当然であるが、月の光のみである。

「準備はできてますか？」  
「誰に言っている？」

薬師寺は札を

真道は人の形をした紙を出し、旧校舎の奥へと進んでいった。

校門

宿直室から南と七海を広い、校門まで歩いていく。

「で、結局どうだったの？七不思議とやらは？」

ここで桜は約束どおり、真実は言わず、用意していた嘘情報を告げた。

「それが、何もなかったのよ。イタズラで手紙を入れたんでしょ。ホラ生徒会宛のイタズラってやつよ」

「まったく迷惑な話だ。俺まで巻き込まれたぜ」

七海と南は「な〜んだ」と決して疑うことはなかった。  
友達に嘘をついた桜は少し、心が痛んでいた。

だが、こんな非現実的な話をしてもらえても信じてもらえるか疑問である。  
寝ぼけていたんじゃないかと言われるのがオチである。

正門を通りすぎ、四人は別れた。

くエピソード

その後、氷柱に報告をし、すべて何事もなく終わった。

この話オチなしなのね、っと言われた。

衝撃的な体験をしたのは、桜と識だけであった。

二月…、そして三月になる。

これから、桜の目安箱の仕事を含め、生徒会本来の仕事が増えていく。

こうして、

この物語のプロローグは終わりを告げる。

## 次回予告

桜「なんつーか、オチなしよね」

識「ないな」

桜「読んでいる方に失礼よね」

識「まあ次回からの新章に期待しよう」

桜「まあ、今回言いたかったことは」

識「この物語では妖怪が出るってこと」

桜「そんだけよ」

識「じゃあ桜！次回の展開を言ってくれ」

桜「ついに始まるまともな生徒会の仕事！三月、私たちはテンテコマイな状況でスタートする新章。新たに判明する生徒会役員！次回から始まる戦いをお楽しみに！」

識「次回は新人と俺！って俺二回連続かつ！」

## 7 第二章『三月旅行』

三月…、桜たち一年生にとって学年最後の思い出旅行が開催される。

これは全学年同じ日に行くが、学年によって行き先はバラバラである。

一年生は国内、二年生は海外、三年生は海外をぐるっと一周する。

桜たち一年生は国内旅行をする。行き先は各クラスのHRの時間に投票を行い、一番希望が多いところを基準に考えられる。

その基準に考えるという仕事をするのは、生徒会の仕事である。

この票を統計し、まとめ、会議を開くというのを、各学年分行わなくてはならないので、この時期の生徒会は多忙である。

「サボりたい…い…」

桜が机に額をつけ、大声で叫んだ。

そんな桜を氷柱はキツと睨んだ。

「桜、口を動かす時間があるなら、早く票を集計して」

氷柱も余裕がないししゃべり方をする。

「私もサボりたいよ。でも…」



七海がそう言うのと氷柱の背後に何か黒いオーラのようなものがモヤモヤと見える気がしてきた。

「氷柱ちゃんが黒いよぉ〜」

「おい、桜。馬鹿言っでなくて早く集計してくれ。大体、三人で一学年分やっているのに対して、俺たちは一人で一学年分やっているんだからな。」

識、氷柱は一人で一学年分の集計作業を行っていた。

これは桜三人は基本作業が氷柱や識に比べて、格段とはいえないが遅い。といっても氷柱たちが単に異常なだけでもある。

「ところで間宮たちは何しているんだ？」

「彼らは、卒業式に関する仕事をしてもらっているわ。」

「あ〜〜もう終わらないな〜！」

などといいながらも真面目に仕事をしていたので、夕方までには仕事が終わった。

“間宮”というのは隠されていた生徒会メンバーの一人である。

「と、いうわけで一年生は小樽温泉スキー場に行きます」

氷柱が発表した。

実際は票をとった結果、沖縄が一番多かったが、昨年度の一年生が沖縄へ行ったので、二年連続同じ場所へ行くことは理事長の指示で許されていない。

なので、二番目に多かった京都にしようという話になったが…

「京都ねえ〜…アタシ一週間前にいったんだけど…」

「私も一月前に父の出張に付き合ってたわ」  
「あたしもお〜京都是舞妓しにいったよお」

その瞬間、全員が南を凝視した。

「……はっ?」「」

ぶっ桜が吹いたのを切に、七海まで笑い出した。

「ぶわっはっははは!!南が舞妓を!!!ロリ属性舞!!!うける  
〜!!」

「そ、想像しただけでっ、……っつお…お腹が」  
「っ…くっ…」

二人は笑い転げて、氷柱も必死笑いをこらえていた。

「んもおおおーっ!!!失礼でしょお!!!怒るよ!」  
「ごめんごめん…、え〜っつと、じゃあ京都以外で決めよう。氷柱  
?」  
「っ……っ…」

氷柱はまだ笑いをこらえ震えていた。

「氷柱が再起不能だから、私たちが決めちゃおう。」  
「私は一応飛行機に乗りたくないな。」  
「じゃあ、北海道に行こう!」

というノリで北海道の小樽に温泉とスキーをしに行くことに決まっ  
た。

「あれ？日程を見ると、学年旅行って卒業式後？三年生は卒業式後に旅行なんだ。」

日程表を見た桜が疑問に思った。

「そうよ、本当の最後は笑顔で楽しい記憶にしましょうって理事長のお考えよ」

それを聞いたとき、桜は驚愕した。

「あの理事長がそんなことを！！ありえない！！あの歩く竜巻…いや歩く災害がそんな気配りを！？」

「まあ、確かに理事長が生徒のためにそんな気配りをするのは驚きだけどそんなに驚く？」

その意見に桜は机を叩き抗議した。

「あの人が何をしたと思う！金曜ロー〇ショウでジヨー〇を見たって理由でプールに鮫つれてきたでしょ！それから、あの宇宙人と人間の交流を描いたE〇を見た翌日、私だけ夜までミステリーサークル作ったり、UFO来い来いって踊らされたのよ！しかもやらないと理事長権限で、単位全部落とすって脅迫までしてきたのよ！」

「桜ちゃん理事長さんにも好かれてるからねえ〜。椿さんみたいに」

「桜は男には好かれないけど、変な奴にはとことん好かれるな」

「つーか、桜は体が男だ…へぶし！！」

“だ”の後に話していた識に向かって桜がドロップキックをかました。

そうしてその日の生徒会の仕事は終えた。

帰り仕度をしていると、生徒会室のエレベーターがチンとなり一人の少年が出てきた。

「あ、間宮くん。ごくろうさま」

氷柱が声をかけた人物こそが、生徒会メンバー“間宮千”である。

識と同じくらいの170cm、

髪は少し長いが、垂れるほどではない。色はアッシュグレイ。

顔はかなり焼けている。本人は海で焼いたといっている。

そして無口。

同じ男性である識くらいしか滅多に話さない。

「会長。卒業式に関する資料です。おおむねですが…」

間宮と氷柱は仕事に関する話を始めた。

桜たちは今日は氷柱とアイスを食べようと約束したので、エレベーターを降りたところで待っているといい、先に生徒会室を後にした。

続いて識もエレベーターに乗ろうとしたとき、氷柱に呼び止められた。

「中嶋くん、卒業式で中嶋くんと間宮くんに頼みがあるの」

## 次回予告

間宮「……………」

識「間宮、次回予告ってか初登場なんだから自己紹介とかあるだろ」  
間宮「任せる」

スタスタスタ

識「あ、こら！いくらグダグダな小説だからってボイコットとかバツクレはねーだろ！」

識「バツクレだな。仕方ない、紹介はまた今度にしよう。

ここで重大発表！！

なんとこのオリジナル小説を始めて

初めて“お気に入り”を登録してくれた方がいます。

本当にありがとう！

あと評価ポイントも“2”ついてた！

みなさん本当にありがとう！！

これからも頑張ります！！！！

やっぱ一人じゃ寂しいな。」

## 8 あなたに捧ぐ美しき花・序

「おねがいって言うのはね、我が校の卒業式では生徒会が育てたパンジーを通り道に大量に飾るのよ。でね、そのパンジーを…」

識は言いたいことが、わかったので先に言ってみた。

「パンジーを取ってくるんですね。あれ？校内の庭にパンジーありましたっけ？」

氷柱は少し、うつむいて暗い声で言う

「それが…秋に小火が起きてね。」

「そ、それは災難でしたね。どこのバカが犯人なんですか」

氷柱はさらに俯いて告げた。

「えっと、……し」

「はい？」

何と言ったかまったく聞こえなかったので、もう一度尋ねてみた。

「私……と桜……と理事長」

「ブフオ!!!!」

氷柱と桜まではまだ、少し驚いただけであった。いや氷柱は驚いたが、桜はありうろと思っていた。

だが、

「なぜ“理事長”がいたんですか？」

昨年秋

そのときは、まだ桜も氷柱も生徒会役員ではなかった。  
桜と氷柱と理事長はグラウンドに来ていた。

「桜さん氷柱さん。今日娘伝手であなたたちに来てもらったのはや  
つてほしいことがあるの」

この人は理事長である。

「なんですか、また意味のわからない呼び出しして、前はプールの  
鯨を水族館に帰すから手伝えでしたよね」

「あの、桜はともかく私はあまり肉体労働はできませんよ。」

「大丈夫よ。今日は焚き火つてやつをやって、焼き芋を食べさせて  
ほしいの」

理事長はずっと金持ちの家で育ってきたのでこのようなものを知ら  
ない。

だが、氷柱もお嬢様なので知らなかった。

「それなら、昔お婆ちゃんときつこうやりましたからいいですよ。」

桜は手際よく材料を用意し、周りの安全を確認し、引火の恐れのない場所を選んだ。

「理事長、ライターとか持ってませんか？」

「私はタバコとか吸わないわ。」

「じゃあ、原始的な方法で火をおこします」

桜は木を激しい勢いでこすり直ぐに火をおこした。

「桜！すごいわね！さすがは自前の弓矢を持っている原始人ね」

「…なんで知っているの？」

話しているとモクモクと煙がたち、焚き火が完成した。

その中に芋を入れた。

それを見ていた理事長は

「けっこう時間がかかりそうね。ちよつと待ってなさい。こういう

ものは火力が大事なのよ」

「ちよつ！理事長！何を」

どこからか大型火炎放射機を取り出し気持ちよく放射。

「これでよく焼けるわよ」

ポオオオオオつと芋を焦がす。

すると、理事長の鼻に木の葉がひらりと舞い…

「は…は…ハクシヨオオオン！！！！」



その時、理事長は出力を最弱から最強に入れてしまい、炎が、真っ直ぐとんだ。

炎はそのまま離れた花壇に引火。

「ぎゃあああ！！理事長！！何してるんですかあ！！」

「は、早く消防車を！」

「あっはっは、やってしまったね。メソメソゴ。」

「それで済むかあ！！」

「ということがあって、その時花壇に咲いていたパンジーは消滅したのよ。それ以降、桜は理事長を歩く災害と呼んでいるのよ」

識も理事長がメチャクチャな人と聞いてはいたが、まさか火炎放射機を使うとは思わなかった。

「幸い火は直ぐに鎮火して、けが人はなし、そして理事長が事件をもみ消したわ。」

「黒いですね。」

「で、そのパンジーの代わりなんだけど、修羅山のムソウという私の親戚が栽培家だね。用意してくれたの」

「名前からいって相当危なそうな山ですね。」

「で、私がそんな山にいったら、五分で倒れるわ。」

エヘンと何か自慢そうに言う。

「で、体力のある間宮さんと中嶋さんと桜の三人で明日にでもいつてきてくれる？」

「わかりました。間宮、いいか」

「俺はかまわない」

「ごめんね、私の後始末をさせるようなことさせてしまって。桜にはもう言っておいたわ。」

そして、識はエレベーターを降りて帰ろうとしたとき、氷柱は思い出したように告げた。

「あ、忘れてたけど、その山には熊が出るわ」

「ちよちよちよ!!!熊つて!危ないでしょ!」

「大丈夫よ。道なりにいけば絶対に出ないわ。ムソウさんも言うてるからだから」

「道は外れるなってことですな。わかりました。」

次回…あなたに捧ぐ美しき花・中編

## 9 あなたに捧ぐ美しき花・破

翌日土曜日。

雲の上学園は基本的には週6日の登校であるが、月に2回、第二土曜、第四土曜が休日となる。

本日は2月の第四土曜日である。

桜、識、間宮の三人は修羅山の最寄り駅である修羅駅にて待ち合わせをした。

修羅駅は、桜たちの通う雲の上学園前駅から一時間電車に乗った場所にあるド田舎である。

当日、いかにもド田舎の駅な作りをした駅に待ち合わせをしている。すでに、間宮と識が到着していた。

「あと、三分で9時。また桜は遅刻か？」

「.....」

約束の時間は午前9時である。が、桜はまだきていない。

すると、修羅駅に9時ちょうど電車が到着した。

ブオオーーーーー

「発車します。ご注意ください。」

発車するアナウンスが鳴り、電車が修羅駅から発った。

「桜がこねえ……」

「……」

「間宮、携帯貸してくれ」

間宮は無言で識に携帯を差し出した。

ちょうど、桜に電話をかけようとしたとき、

「……き、識い!!!間宮あ!!!ここでーす!!!」

識は桜の声が聞こえたので周りを見渡したが、間宮と駅員の人以上見えない。

「上だよー!!!上え!!!」

識は上を見た。すると、そこには簡易パラシュートを広げ、空から降下してくる桜がいた。

「桜か?何で空から来てるんだよ」

桜は駅外に着地し、簡易パラシュートを片付けていた。

「それがさあ、寝坊しちゃってへりで来てさ」

「また寝坊か。それにしても、金がある奴は……。それにしても、お前スカイダイビングとかできたんだな」

「小さいころからお祖母ちゃんにやらされまくってね。その他スキューバー、トレジャーハント、クライミングまで強制でやらされて数回死にかけたよ」

「それでお前はバケモノになったんだな」

「アンタもバケモノでしょ！」

そんな二人のやりとりを冷たい目で見える人が一人。

「……………」

間宮は黙々と移動の準備を始めさくさくと山へと進んでしまった。

「あ、間宮ちよつと待ってっ！おい桜、先いくぞー！」

「ちよつと！待って！まだパラシュートがああ！」

桜はパラシュートを近くのコンビニで配送をし、二人に追いついた。

標高1000m。この山は、修羅という名前の通り、とても険しい道である。さらに少し道を外れてしまうと、遭難したり、獰猛な動物に襲われる危険性に満ち溢れているので、一般人はまず近寄らない。

この山には、どういう訳か、ほとんど人間の手による影響を受けていないおかげで、特殊な植物が育っているため、この環境を保護対象とするので、外部から山の調査など危険性の指摘は受け付けない。

その山のふもとには、桜たちが今いる駅がある。

氷柱の親戚であるムソウという人物は、山の中腹に住んでいる人物である。中腹まではそこまで険しくないのも、一日で登り降りが可能である。

氷柱曰く、ムソウはこの山の警備をするため、特別に住んでいるようだ。

桜たちは登山を始めた。

今はまだ登り始め、しばらくたち、恐らくムソウの家まで半分を過ぎたであろう場所にいた。

「なあ、この山にかなり狂暴な動物が住んでるって知ってるか？」

「ああ、氷柱が言ってたわね。」

二人で話していると、普段無口な間宮が間に入り話し出した。

「サーベルベアー、と呼ばれている熊がいる。」

「サーベルベアー？サーベルタイガーの親戚か？」

「サーベルベアーは修羅山で発見された熊だ。名前の通り特徴は爪にある。普通の熊よりも明らかに長く、だいたい指くらいの長さの爪を持つ。そして丈夫な爪を持ち、獲物を見つけると二足歩行で走り襲いかかるらしい。身長は3mにも及ぶ。まあ二足歩行だからな」

間宮が淡々と説明する

「だが、見つかった時の対象方がある。動かないことだ。そして喋らないことだ。もし動いた場合、諦める他ない。」

「おいおい、かなり危なくないか。」

「だからウチら三人を行かせたんでしょ。それに話を聞く限りだと、道なりに行けば危なくないんでしょ。」

桜たちの今進んでいる道は、人が横に二人並んで通れる広さの道である。

その道を外れると急激な坂道となっており、通り道に復帰するのは困難といえる。

桜たちは会話をしながらしっかりと注意しながら道を進んでいた。

「桜？どうした」

一番後ろを歩いていた桜が急にしゃがみだした。

「ちよつと、靴紐が……」

桜が紐を結びなおし、立とうとしたその瞬間

グルルオオオオオーーーー！！！！！！

何か得たいの知れない、いや今まで聴いたことのない鳴き声でした。それは桜たちの左方向からした。

「っ！！！！これは！？」

「まずいぞ！これは！」

「……サーベルベアーかもしれない。この道を進んでいる限りは襲われない。気を抜くな」

三人はまた気を引き締めて歩き出す。

「ぎゃあああああ！！！」

誰かの叫び声が聞こえた。

三人は直感で感じていた。

誰かがサーベルベアーに襲われている。

三人が感じたのはほぼ同時期であったろう。

桜がすぐに飛び出した。

「おい！桜あ！まさかおま……」

すでに遅かった。桜は道なりを外れて坂道を下っていた。

「ごめん！でも……でも！何かできるかもしれないのに何もしないのは……」

後半はあまり聞こえなかった。すでに識から見える桜の姿は小さくなっていた。

「あの馬鹿っ！閻宮！すまん。」



識も坂を下り、桜を追いかけた。

「……………」

桜は坂道を下り、跳ねるように声が聞こえた方向へと向かう。

桜は耳も異常によい。声のした方向にはほぼ誤差なく進むことは簡単であった。

それにしても今桜が進んでいる道は足場が悪い。

前を一見して自分が無事足をつける場所を確認し、そこに足をつけ、次の足場へと跳ねる。

桜は跳ね続け、一人の老婆と白い熊を見つけた。

老婆は腰をぬかし、気絶をしてしまったのか、その場に倒れていた。白熊は老婆を見つめる。

桜はその熊の手に注目した。

その指から先が、長い…長い爪が生えていた。

あたりが少し反射するほど綺麗であった。

爪を見たとき、桜は、

（ああ、あれがサーベルベアーなんだな。参ったな。死ぬかもしれないな…）

先ほどの間宮の言葉を思い出していた。

動いたり喋ったりするな…そう言っていた。

その老婆は今は動きも口を空けることはない。

だが、気絶する前に老婆が叫んでいたのを目撃し襲うかもしれない。

脳裏にその可能性がよぎり熊の意識をこちらに向けようと思った。

「だあああああつああ!!!」

桜は立ち止まり超大声で叫んだ。

あたりの木々が少し揺れる。

風で揺れたのではない。桜の発した振動から揺れたのだ。

その時、熊はこちらを向いた。

桜と熊の目があった。

桜の中で時が止まる。

たしかに今、熊の意識は老婆から桜へと移った。だが、今、とてもまずい状況である。

熊が体を反転し、桜へと体を動かす。その初動をしたとき、桜は全速力で逃げようとした。

だが、

(もし、ここで逃げたら、また老婆が狙われるかもしれない。)

桜は意を決した。

桜が今いる場所は回りにくらべて足場がとてもない。熊が襲ってきても何とかよけることはできるかもしれない。

そしてよけた後、老婆を安全な道へと逃がせばいい。そう考えていた。

ダッダッダ！と熊は二足歩行でこちらへ近づいてきた。

二人…ではなく一人と一匹は対峙する間もなく戦闘が始まった。

右爪によるひっかき。

桜は後ろへかわす。

が、

すぐに熊の左ストレート…とは名ばかり、あたれば爪に串刺しにされる突きがきた。

よけきれない。予想外の左爪の攻撃を普段の桜ならよけることはできただろう。

だが、今は見たことのない猛獣。その威圧に少し押されていたり、老婆を助けることを間がいたり、普段とはまったく精神状態であった。そのため、反応が遅れた。

あたる…。いや、死ぬ…。そう思った。

その時

「桜ああああっ！！！」

識が桜を横に蹴り飛ばし、突きから救助した。

「識っ！ついてきたの！？」

「この馬鹿！今はそれだけだ！」

言い合いつつも二人の視線は熊に向いていた。

その熊は次の瞬間、衝撃の行動をとった。  
地面に爪をつき、そのまま地面につけた爪を桜たちに届かない位置でアップパーを繰り出し、大量の土をかけた。

二人は熊らしからぬ行動に驚き、反射的に目を腕で隠してしまった。  
それが熊の狙いであった。

視界を腕で遮ってしまい、次の攻撃を見ることができなかった。

識に爪が向かう。

目を遮っていた腕を即座にはずした識であったが、もうよけることはできないであろう場所に爪がきていた。

すると、熊の腕を蹴る影が一つ、…間宮であった。

識は間宮が軌道をそらしたおかげでギリギリのところまでよけることに成功した。

「間宮！あなたもきたの？」

「……お前たち二人では迷子になる。仕方ないから来てやった。」

こうして、桜・識・間宮 vs サーベルベアーの戦いの火蓋が切って落とされた。

次回、あなたに捧ぐ美しい花・急

10 あなたに捧ぐ美しき花・急

桜・識・間宮の三人は熊と少し距離を置いて対峙していた。

「さて、どう攻撃しようか？」

桜はやる気がまんまんであった。

「……………。まずは足でも狙ってダウンさせるか」

「待て、その前に言いたいことがある。」

識が一呼吸して、告げる。

「熊が出てくるなんて、…まさに“くまっ たな”」

核が流れる。

ポカン！

「こんなときに何馬鹿言ってるの！！天性の馬鹿ね！！」

「……………中嶋……………おとりになれ」

「あ、それ賛成」

「ちよっ！ごめんってー！」

「あ……………来るよ」

三人がコントをしていると、熊が攻撃をしてきた。まず真ん中にいた桜へと爪の突き刺しを一発。

桜は横へヒラリとかわす。

そのスキに間宮と識が熊の両サイドへと周りこむ。

「合わせる！間宮！」

「……」

間宮は何もしゃべらなかつたが、それが同意、または了解の合図であることは経験から識は知っていた。

二人はタイミングよく熊の膝の裏を蹴り、足カックンを狙う。

しかし、熊は少しピクツと動いただけで効き目はなさそうである。

「まじかよ！俺と間宮の蹴りでも駄目なのか！ってうあ！」

今度は識にひっかき。これもかわす。

さらに反対側にいた間宮に対し、体を180°回転させひっかく。これは間宮の上を通過した。

「この熊、かなり早い！つーか俺ら三人全員に対して常に攻撃できるような感じだ。」

そう言ったとき、熊は急に後ろへバック走し、小さな丸太を両手で持った。

「熊つて、丸太とか持てるんだっけ？」  
「今さら言いつこなしよ。」

熊は持った丸太を間宮へ投げる。

それをしゃがみながら避ける間宮。  
しゃがみながら間宮は叫んだ。

「中嶋、二人で蹴るぞ」

「蹴るつてさつきも蹴ったがダメだったじゃないか」

「二人で同じ足を蹴る。東海林は熊の体重を右にずらせ」

「それつてウチが一番危くない!？」

「.....」

「黙るなああ!!」

「桜、まかせた」

桜は熊の視線の前、識と間宮は熊の後ろへとスタンバイする。

「さて、どうするか。この3mもあるバケモンのひっかきを一発でも受けたら致命傷ね。」

熊はその場で立ち止まった。

桜は不審思った。

すると熊はおそらく空気を吸い出した

桜は直感した。これは大声を出す。かのモンの耳栓がないと困る攻撃のように。

「なら...、識!間宮!耳を塞いで!」

熊の後ろにいた識たちは、まったく意図がわからなかったが、とり



あえず言われたとおりに耳を塞ぐ。

桜も耳を塞ぐ、と同時に熊は口を大きく開け

グルルアアアアアアア！！！！！！！

激しい声で叫んだ。

木々が揺れ、いや森が揺れた。

目の前にいた桜は後ろへと飛ばされた。

すぐ後ろに木が生えており、それにぶつかつたことで、あまり後ろへ飛ばされることはなかった。

だが、身体にダメージは負っていた。

「ちよつときた…。けど、まだいけるう！せいっ！」

すぐに体勢を立て直した桜は速攻であきっぱなしであった熊の腹へと蹴りをいれる。

それが効かないことを承知で。

そのまま熊の右足下へ移動し、そこでとまる。

当然熊はすぐ近くにいる桜へとひっかきをする。左爪によるひっかきだ。

その時、後ろで構えていた二人が動く。身体の重心が右へとずれた。

それを見逃すことなく距離を一瞬で詰め、二人同時に右膝後ろへと足力ツクン蹴りをする。

熊は右膝を折らしてそのまま地面へと膝をつけた。

「「よっじゃー!!!!」」

桜と識の二人はガッツポーズ。

「まず一本。次はダウンを狙うか!」

膝をついた熊は、そのまま動かない。  
手をダラリとぶらさげている。  
すると

「な…なんだあれ…」

驚くことに熊の爪が半分ほど収納されていく。

そして、熊は四つんばいになるや、まるでバネをためるかのように、身をちぢ込ませた。

そして、そのバネは解き放たれた。

熊にとってはクラウチングスタートなのだろう。だが、桜たちからは、バネが解き放たれ、ものすごい速さで動いていた。

識に向かって熊は飛んでいった。

熊は四つんばいの状態で頭を先頭に突撃をした。

識は熊の頭と突撃する絵を見た。

「識!あぶ」

「つつ!!!」

桜が言い終わる前に識は宙を舞った。

桜たちから見た様子だと、あたると同時に熊は頭を上へあげる。闘  
牛の牛のように。

そして識は吹っ飛んだ。

軽い紙のように

(あれ?俺…今…)

飛ばされているとき、識は何が起きているのかわからなかった。

そして

地面へと

叩き落されはしなかった。

間宮が識を受け止めていた。

「間宮!識は!?!」

「……脈はある。……気絶もしてないようだ」

さらに再び、熊は四つんばいになり身を縮め、先ほどの体勢になった。

「くっ！！次にやられたら…でも、」

「熊！こちらに来なさい！！」

桜は熊に石を投げ注意を引き付けた。

驚いた間宮は思わず声を上げた

「東海林！お前！」

桜はニコツと笑い

「大丈夫…、根拠はないけど、大丈夫…。」

桜はスウツと息を吸った。

「やってみせる。ウチは信じる、自分を。さあ、やり合おう」

あと1秒もしたら戦闘が始まる。その瞬間

「タマ！！！！お待ち！！！！」

声がした。

その方向を見ると先ほど気絶をしていた老婆が元気よくなった。

「タマ！こつちにおいで！」

言われると熊は老婆の方へいった。

呆然とする三人。

熊は老婆を頭の上へのせた。

「おや、じょーチャン。どうしたんだい。そんな顔して。」

われを戻し、桜は聞いてみた。

「あの…襲われていたんじゃない？それで気絶していたんじゃない？」

老婆はニヤリと笑い話し出した。

「あれは違うよ。気絶したのはホレ、わしの浴衣、切れてるじゃろ。わし浴衣をすぐく大切にしているから、その木で誤って切ってしまったときに気絶しちまったよ。」

あはははは、と老婆は笑う。

話によると、熊は老婆になつており、桜たちは熊から見て、老婆に危害を加えようとする輩に見えていたらしい。普段は決して人を襲うことはない熊だとのこと。

老婆はあらかたの説明をすると、識を見た

「あゝ、そのボーヤ怪我してるね。ムソウのじじいのもとまで連れて行ってやるから、ついておいで。タマ、持ってやんな」

熊は片手で識を持ち上げ、歩き出した。

それに続いて桜と間宮も歩き出す。

次回、あなたに捧ぐ美しき花・焉

11 あなたに捧ぐ美しき花・焉

桜と間宮と熊に担がれた識は、老婆につれられ小さな小屋についた。

「じじいー！ムソウのじじいー！おらんのかー？」

老婆が大声でムソウを呼ぶが、なかなか返事が返ってこない。

「じじい！じじいー！…薪でもとりにいったか？」

すると後ろから声が聞こえた。

「砂かけのババじゃねえか。久しぶりじゃねえか」

「じじい、いたのか。タマ、あいさつしな」

熊はこくりと頭をおろしてあいさつをした。熊なのに…

「おお！タマ！しばらく見ないうちに3センチくらい大きくなったな。」

「それと、じじい。このボーヤなんだが、どうもタマとやりあっちまったようだ。手当てしてやっておくれ」

「タマと？バカか？こんな3mの熊とケンカするバカがまだいるとはな。よし部屋につれてこい」

桜たちは言われるがまま、ムソウに小屋の中へと案内された。

このムソウという人物は、体つきがよく・白髪・白髭・着物といった仙人のような容姿である。

老婆は着物を着用し、ながい灰色髪の持ち主である。

小屋のなかで、識はムソウに手当てをされた。

熊にひつかかれた傷口になにかすつごく染みる薬を塗られていた。

「ぎやややあああゝ」

「騒ぐな！！！」

ゴンツと殴られた。

「良薬、口に苦しというじゃろ。三時間もすれば傷口が完治するか  
らしばらくじっとしとれ」

話が終わったところで、桜が本題に移る。

「あの、ウチら氷柱に頼まれたて花を取りに着たんですが」

「おお、伝書鳩から手紙がきとったぞ。その二人、ついてこい。

花のどこまで案内してやる」

識を置いて桜と間宮はムソウの案内する花畑へといった。

案内された花畑は小屋から軽く十分歩いた場所にあった。

木々が並んでいてまったく道とは呼べない場所を歩いてつく場所であつた。

木の並びが終え、光が差す場所へとでるとそこは一面花が咲き誇っている場所であつた。



様々な色の花が並んでいる。

「ここは、あまり人をよせつけん。だが、氷柱ちゃんの友達なら別じゃ。いつか氷柱ちゃんにも見てほしいんじやがな。それはそうとこっちじゃ…って小娘！何しておる！」

桜は一本の花をむしろうとしていた。

「あ、ごめんなさい。たしかこの花って食べることができる花だから、つい食べようとしちゃった」

ムソウは驚いていた。

（馬鹿な。あの花は、ここ修羅山か“あの場所”でしか生えていないはず。だが“あの場所”はもう…）

「ムソウさん、どうしました？」

しばらく呆然と立っていたムソウに間宮は声をかけた。

「いや、なんでもない。それと小娘。ここの花は摘み取るな。」  
「へい」

かなり残念そうに桜はムソウの後に続いて目的場所に行った。

そして目的の花がある場所へとついた。  
といっても数メートル動いただけである。

「この花じゃ。名前はまだない。じゃが花言葉は“これからも続く”じゃ」

「花ことばだけつけたんですか」

「細かいことは気にするな」

その花はピンク色の花びらを持つパンジーのようなものであった。

「えっとこれは摘み取っていいんですよね」

「うむ。ワシも手伝うからとっととやるぞ。」

ムソウは背負っていたかごを下ろし、三人で作業を始めた。

小屋

「ボーヤ：見た限りだと、靈感があるね」

急に変なことを言われたものだから、少し返答するまでに時間が空いた。

「何を急に」

「以前：いや、最近ではないな。この感じだと、もっともっと昔、霊的な何かに触れたことが」

「そんなことない」

識は老婆の言葉を遮るかのように否定した。  
その顔は少し、俯いていた。

「そうかい。余計なことを聞いたね。」

そのまま二人は黙りこんでしまった。

その三十分後

ムソウと二人は帰ってきた。

「今帰ったぞ。」

「おや、ずいぶんと早かったね。」

「このガキどもが手早くやってくれてな。」

桜はピースをする。

「そっちのガキの怪我はどうだ？」

「お蔭様で完治しましたよ。」

「さすがの薬じゃな。それではもうすぐ暗くなるから早く下山するがよい。途中まで付き合ってやる。」

ムソウが言つと老婆は桜に話があるから先に行くように言った。

桜はなんだろうと思ひ話を聴いてみる

「ジョージャンは昔靈的なものに何か関わらなかつたかい？」

「靈的な？……」

桜は少し考える。

「わかんね」

「そうかい。じゃあタマから私を救おうとした心をたたえてお守りをあげよう」

すると老婆は袖下から小さな水晶のついたネックレスをとりだした。

「これは一回だけおぬしを守るじゃろつ。」

「はい？」

「まあお守りじゃつけとけ」

そのネックレスを桜に渡した。

「なんだかよくわからなけど、ありがと。」

「さて、降りようか」

こうして、桜たち三人は無事修羅山を後にすることができた。  
ムソウたちは電車を見送り山へと戻る。

「ムソウ、どうじゃった？あの三人は。気に入ったかい」

「うむ、三人ともよい精神を持つておった。ただ、あのうちの一人」

「わたしも感じたよ。体の半分が妖怪化しておった。あの気は五大妖怪の仕業だね」

「じゃが、しばらくは大丈夫であろつ。」

月曜日

生徒会室

「氷柱。花たくさんもってきたよ」

「あらご苦労様。」

「桜ちゃん。おかえり。」

「あ、桜。桜のことだから山で熊と戦ってきたんじゃないの？」

七海は冗談のつもりで言っていた。

「あははっはは…まさかまさか」

これ以上バケモノ扱いされるのはゴメンだったので嘘をついた。

「じゃあ、この花を卒業生の方たちの式に飾りにいきましょう」

「そうだね。」

「あなたたちがとってきてくれた美しき花をこれから未来へいく方々のために捧げましょう」

そして、卒業式は、その花もあり、華やかな式となった。

先輩は雲の上を後にした。

その花を捧げられながら……………

エピソード

トウルルルル……………

誰かの電話がなった。

「はい、桜です」

桜の電話であった。

『あ、桜ですか？先週もお話しましたが、恋継さんの結婚式ですけど、家でいっても桜答えださないから勝手に了承しちゃいますよ』  
「あゝ、そうね。うんいいでしょ、ウチでやっても。でいつやるの？」

『それが…先ほど電話しましたら、相手の都合で来週やりたいと』

次回予告

桜「長かった……………」

識「ああ、本当に長かった。」

桜「でもこれでなんとか山編が終わったわ」

識「けどよ、三月旅行編なんて章だけど、ここ4話旅行については

まったく触れてないぜ」

桜「あゝいいのよ、そこはもう気にしないって決めたらしいから。でも次から、やっと旅行始められるでしょ」

識「それもそうだな」

桜「つてことでまた次回！旅行準備編で！」

識「まだ行かねえのか！！」

12 旅行に行く前には前日もしっかりと準備をしましょう。(前書き)

今回は、今後の設定にあたり、東海林桜の家を少し紹介します。



## 12 旅行に行く前には前日によってしっかりと準備をしましょう。

三月の卒業式が終わり、各学年、それぞれ別の場所に旅行に行く。

三年生はフランス

二年生は中国

一年生は北海道

に行く。

桜は明日の旅行のために家で準備をしていた。

東海林桜家。かなりの豪邸である。横は広いが、縦は二階建てである。

真ん中に大きなドアがあり、そこを中心に左右対称な作りをしている。

庭も大きい。ドアの前に噴水があり円を描くように園芸で飾られている。

ドアから100m行った場所に大きな門がありそこが東海林家の敷地の範囲である。

その門から家を囲むように柵がならんでいる構造になっている

桜の両親は母が死に、父が音信不通であるため、この屋敷の主は桜となっている。

桜の部屋は家の二階にある。

「茜さん。防寒具しらない？」

“茜”というのは東海林家で働いているメイドである。

東海林家本家という桜のお爺がいるところで雇われ、今は桜のこ

ろにいる。

長い髪を綺麗に巻いており身長も170くらい。かなり若く見える。桜より少し上の20歳と本人は言う。

「防寒具ですか？普段使わないから黒井さんの倉庫にありますよ。」

「黒井さんね。今どこにいる？」

「たしか、黒井さんは地下で車の点検をしていますよ。」

「ありがと茜さん。」

桜は家のエレベーターを使い、屋敷の地下一階へと行った。

地下一階は主に車が数台ある。

そのうちの一台、黒いポルシャの点検をしていた。

「黒井さん、ウチの防寒具しらない？」

「お嬢、いらしたのですか。お嬢の防寒服はここです。」

黒井と呼ばれる男性は車から離れ、車とは反対側の場所に行き、その壁を触り、隠し扉を開けた。

そこには様々な服があった。

非常用の防弾チョッキから防寒具、スキューバダイビングの道具、パラシュートなど。

そこから、桜は防一番シンプルな防寒具を取り出した。

「お嬢、雪山にいかれるのですかっけ？」

「うん、北海道の小樽ってところ。」

「でしたらこのアンダースーツを着ていってください。保温性と対シヨック性に優れています。最近開発されたものでして、おじい様

からお嬢さま宛に届きました。」

「そんなの来てたの？ウチしらないよ。」

「お嬢が中身を見ないで倉庫にいれるよう行ったのですよ」

黒井はあきれるように言った。

“黒井”も茜同様東海林家本家に雇われている。

彼は自称年齢27。

顔には細い銀色の眼鏡をかけている、

髪は短髪の黒。

いつも黒いスーツを着ている。

「あれ？服のポケットに何か入っている？」

桜は防寒具のポケットに違和感を感じ探ったところ、一通の手紙が入っていた。

「誰からだろ？」

桜は中身をのぞいてみた。

『桜へ 12月10日

翌年3月28日に一族会議を開きます。

年度末報告をよろしく

by御春』

非常に簡単な文であったが、内容はとても理解できた。

「ちゃちゃちゃばいちゃばいよー！……！……！」

桜はものすごい取り乱した。

「お嬢、落ち着いてください。」

「これが落ち着けないよ！！！！」

この“年度末報告会”、そして“御春”について説明しよう。

“年度末報告会”とは、東海林家が数年に一回、本家に集う。数年間の出費、収益などの報告、活動報告などを手書きの文面で作成する。しかも、文面はその家の主、つまり桜が作成しなくてはならない。執事やメイドにやらせても、本家の審査で速攻ばれる。

“御春”とは、桜の母方の母。つまり祖母である。歳は80を越える。

東海林家本家は桜の母方の家である。

「年度末報告会なんて聞いてないよ！やばいつてこれ！今回下手な報告会やったら祖母ちゃんに殺されるって、今回はまずい！黒井さん！今後のウチのスケジュールどうなってる？」

「お嬢のスケジュールを確認します。明日から三泊四日のご旅行、帰ってこられて二日空きまして、恋継様の披露宴をこの屋敷で行います。そこから一日空きまして年度末報告会です」

「二日しかないか……」

「では、お譲がご旅行に行かれている間に資料を全てそろえておきますので」

「そうだね。黒井さんたちに書いてもらいたいけどばれたら殺されるからね」

桜は防寒具など、旅行の準備を整え終わり、晩御飯までゆっくりしようと思った。

「桜。旅行先でお祖母さまや親族の方のためにお土産を買ってきてもらえますか？」

「なるべく庶民的なものがいいかな？」

「そうですね。いつも皆さんお高いものを食べておられるので庶民的なものがいいですね」

「はい」

茜に言わた。それから、桜は家をでようとした。だが

「桜、資料作らないと間に合いませんよ」

桜は逃げる。

「旅行から帰ってきたらやる」

「待ちなさい桜！もう！」

茜は傍にあったレバーを5つほど引いた。

ガシャンっという音と共に桜の悲鳴声が聞こえた。

庭では四角の檻が地面からつきでていた。

その他、電磁式トラップ、ハンマートラップ、落とし穴など桜を捕らえるためのトラップが作動していた。

そのうちの落とし穴に落下していた。

その穴の上から、茜は顔だけのぞかせ、

「桜、今日はぜひ早く捕まりましたね。」

「…」

桜は捕獲された。

「何していんですか？僕のテリトリーで」

「あら白井くん、またこの野獣が逃げ出したものだから、ランクBのトラップを作動したのよ」

「おやおや、桜嬢がランクBで捕獲されるとは、何か悩みでもかかえていたんですかね。恋の悩みとか」

「それは天変地異がおきたとしても、神様がそんな奇跡起こしませんよ」

笑顔でひどく毒づく。

「すいませ〜ん、助けてくれませんか？」

穴の中で取り残された桜がポツリと呟いた。

彼は東海林家で働く庭師“白井”

白髪白スーツを着た真つ白な優男である。

彼は庭師であるが、基本的にはさみは使わない。竹箒に仕込んである刀で庭の手入れをする。

「桜、書類作るって約束しますか？」

「するから助けて〜」

「茜さんと桜嬢って時々主従関係無視してますよね」

こうして桜はその日ずっと部屋で書類作成をしていた。

時々ゲームをしようと思ひ、ゲーム機を見たらコンセントだけ茜に没収されていた。

翌日

「桜、起きてますか？」

「ZZZZZZ……」

桜はグッスリと眠っていた。

桜を起こすため茜は桜をゆする。

「ほら、今日から旅行ですよ。」

「……寝むい」

「仕方ありませんね」

茜はふとんのシーツを勢いよく引っ張り、ベッドから桜を転がし落とした。

「朝食できてますから、着替えて降りてくださいね。」

「ふあゝい、二度寝したらいきまゝす」

桜はベッドにまたころがる。

その桜を茜は蹴飛ばす。……主人を蹴飛ばすメイドである。

朝食をとり、桜は出かける準備を終え、家を後にする。

「それじゃあ、行ってきます。」

「気をつけてくださいね。」

「いつてらっしゃいませ、お嬢。」

「桜嬢、お気をつけていつてらっしゃいませ。」

茜、黒井、白井の三人に見送られて、屋敷を後にし、集合場所にま

で歩いていった。

#### 次回予告

桜「やっと次から学年旅行にいけるわね」

茜「あら、そうしたら私の出番なくなる？」

桜「茜さんにはお土産かって来るからそこは我慢してよ」

茜「そうですね。でも次の章あたりで、出番多いのでいいですわ」

桜「そんなわけで、今回は旅行バスで羽田まで編！」

茜「高校生の旅行ですか・・・懐かしいわ」

桜「それって何年前？」

茜「さくくら。それは禁句ですよ」

桜「痛い痛い！ほつぺたひつぱらないで！」



### 13 バスと恋話？（前書き）

今回からタイトルを

『雲の学園生徒会です!!』  
から

『雲の学園生徒会!!!!』  
に変更しました。

大きな違いは

“！”を一つ追加したところです。

### 13 バスと恋話？

雲の学園正門前。一年生の学年旅行の集合場所である。

すでに大勢の生徒たちがクラスごとに整列をして待っていた。列から外れているのは全員を誘導する係りである、生徒会の面々。そこには青筋を立てかねない氷柱がいた。

「あと一分ね……」

「南ー！氷柱が殺意のオーラを出してるー！」

「遅刻したら桜ちゃんか呪い殺されちゃうよー！」

南と七海は時間通り到着していたが、桜がまだ到着していないようだ。

氷柱は『絶対時間厳守』と生徒会のメンバーには言っている。もしこれを破るものならどえらい目にあう。

「あと三十秒。」

「桜…… 合掌」

「合掌」

二人は合掌をして未来の桜の安全を祈った。

「十」

九……八……七」

そこへ上から突如飛来する影が一つ。

「うおおおおおおお猫ちゃんああああん!!!!!!」

ズドーンとはいかないが、高いところから桜は氷柱の前に着地した。

「あら、桜。遅刻しなかったの？」

「何か遅刻しなくて残念そうね」

「遅刻したら桜の恥ずかしい写真をばら撒く用意していたのに無駄になったわ」

「っておい！それだぶん盗撮でしょ！」

氷柱と桜が会話していると、七海は桜の腕に抱えられた猫に注目をした。

「桜？その猫なに？」

三毛猫である。

「それがホラ、正門前に大きな木があるでしょ。」

雲の上学園正門前には樹齡何年かわからないが、大きく立派な木がある。

「木の頂上付近に子猫がいて、下りれなくなっていたから助けてた。」

「なんだ、結構早く集合場所にはいたんだね。ってかこっからよく

頂上付近の子猫みえるな」

頂上付近は普通の人間の目ではまず子猫など小さい生物は確認できない。

「ウチ視力6くらいあるから」

「『ギネス記録か！』」

三人が同時につっこむ。

桜は抱えていた子猫を放し、仕事である人数確認を始めた。

「氷柱さん。バスはもう行っても大丈夫だそうですよ」

識が氷柱に声をかけた。

「そうね、それじゃあ行きましようか。桜、七海、人数は大丈夫？」

「こっちは大丈夫！」

「こっちも平気だよ！」

一年生はそれぞれクラスごとに分けられたバスに乗車した。

ちなみにクラスはA～GそしてSがある。GとSクラスは特別クラスである。

Gは学年優等生のクラスである。学校に学費がいらぬ特待生や、成績の上位者、運動にて好成績を収めた者がいる。

Sとは超特待生。特待生とは違い、非常に優秀でいわゆる天才など

優等生で何かさらに成績を収めた人。持って生まれた何かを持つている人物が入るクラスである。人数は少ない。見方を変えると異常者クラス。このクラスは基本登校は自由、行事参加も自由である。そのため、このクラスのバスに人間は今は三人しかいない。時々、Gクラスと合同の授業をする。

桜、七海、南はFクラス。  
識、間宮、椿はGクラス。  
氷柱はSクラスである。

走って三十分がたった  
Sクラスバス中

「……………」

氷柱は特に話す人間がいないのでぼんやりと外の景色を見ていた。

（はぁ……、なんだかんだ言っても、学校では桜たちと一緒に  
きが一番ね）

そこへ一人の爽やかな青年が近づいてきた。

「やあ、氷柱さん。元気ないね。やっぱりSクラスの人間とは馬が  
合わないかな？」

「合う合わないの前に皆学校に来ないじゃない。それじゃあ合わせ  
ようがないわ。徳川君は仕方ないけど」

「ははは。僕も学校に行きたいけどね。僕の妹が同じ学校だったら  
きっと仲良くなっていたよ。妹は毎日学校に行っているからね。」

「徳川君に妹さんがいたのは初耳ね。おいくつ？」  
「双子さ。」

「雲の上ではないのよね？」

「大江戸大付属高校さ。生徒会長やってるよ」

「じゃあ、私近いうちに会うことになるかもしれないわね。」

そこで徳川なる青年は前の席に座っている少女に気がついた。

「千里さん。今日兄貴は？」

すると少女は勢いよく立ち上がり

「はい！千歳様は本日池袋にて仕事があるため休暇をしております。

」  
「ありがとう」

少女はスツと座った。

「あいかわらず礼儀正しいというか」

「ええ、私もうかつに話をかけづらいのよね」

Gクラスバス内

このクラスは30人くらいと普通の人数である。

「………だー！！！！しつけー！！！！」

「いけずね」

識が一番後ろの席に座り、眠っていたが、椿が寄ってきた。

「教えてくれてもいいじゃない？どうなの実際？桜とは？嫉妬しちやうわ」

「何もねー！ってさつきから言ってるだろ！っーかお前女子んどこ行けよ！」

「あなたも桜と同じでいじりがあるのよね」

椿が識の頬にそつと手を合わせる

「さささ触るな！間宮！なんとかしろ！お前椿と仲いいだろ！」

「………眠てるから邪魔するな」

「さつきからバツチリ目開けてただろ！あ、こら変なとこ触るな！」

Gクラスのバスはにぎわっていた。

Fクラスバス内

「第一回！暴露大会〜！いえー！！」

「イエー！」

「エー……！！！」

上から、七海、桜、南である。

「ではまず南から！」

「ええーやっぱりい〜……」

「お題はスリーサイズから！」

「………」

七海以外の二人は黙り込んだ。

「ちょっと七海！それアンタのバスト自慢しただけでしょ！」  
「何言ってるの。暴露といえは恋話が身体のことでしょ」  
「七海ちゃんは食べたものが全部おっぱいにいくからねえ。あとお腹！」

南は七海の腹をぐにゅとにぎる。

「ひゃーや、やめ」  
「ウチも触る」

ぐにゅと桜もつまむ

「やめてっぺってば！それに桜は食べたものが全部筋肉になるでしょ！」  
「うっ、」  
「アスリートとしては最適だよねえ」  
「ウチは女の子だよ！」

こうしてバスは羽田空港に到着した。

#### 次回予告

南「ロリッこでかわいい南ちゃんです。私ってすごいかわいいでしょ〜……もういい？」



七海「だめ」

南「私にかかれれば男の子なんてお茶の子さいさいですう。大人の男も私のかわいさにノックアウト！桃色光線」

南「次回！南ちゃん告白される！きゅるん お楽しみに」

南「うわあああ。もういいでしょこんな罰ゲーム。ひどいよ。」

七海「いや〜おもしろかった」

南「久しぶりにあの指を立てる“いつせのーせ”やったら罰ゲームつきなんて途中で言うのずるいよ」

七海「私が負けてる状態で言ったんだからいいじゃないか」

南「ううううう…」

七海「ってことで次回は羽田空港編！お楽しみに！」

南「次回は氷柱ちゃんとSクラスのあの人お！」

## 14 空へ羽ばたく

一年生一同は、羽田空港につき、離陸まで約二時間の時間がある。それぞれ、時間までは自由時間である。

生徒会メンバーはそれぞれの用事があるため別々に動いていた。

桜SIDE

モグモグ……

モグモグ……

桜は空港の中にある、いろんな地方のラーメンが置いてあるお店で食事を取っていた。

今は5杯目、九州ラーメンを食べている。

そこへ椿が近寄ってきた。

「相変わらずよく食べるわね」

「ぬは？うあい。おういえおおいいうお？（椿。どうしてここにいるの？）」

「飛んでる飛んでる……。少しはマナーを覚えなさい。」

ゴクリと麺を飲み込んだ。

「ぶは。椿？つかいたんだ。いつもイベントはサボるのに」

「いちや悪い？私はイベントはサボるけど、桜は授業をサボるわね。それ関係で旅行を台無しにするお知らせを持ってきたわ」

「……帰りの空港じゃだめ？」

「いやよ。桜に嫌がらせするのが趣味だもの。」

「わかつたよ。で、何？」

椿はバツクの中から一枚の封筒を出した。

「理事長から伝言を預かっているわ」

「あの人から？なんで椿が預かっているの？」

「たまたま昨日、理事長室に行ったからよ。それじゃ読むわね」

『東海林桜へ』

出席日数ギリギリなんだけど、この前私の視界を横切ったので私の特権で落第させます。

それが嫌なら、私に北海道名産ウルトラキャラメルを買ってきてなさい。』

手書きで書かれていた。

「あの災害発生装置何言ってるのぉ！ちょっとおかしいでしょ！出席日数足りてるよ！」

「過去に理事長に逆らって、学校を退学した人もいるらしいわよ。」

「うっ……」

「だから……、ね。」

いつの間にか桜の背後に回り、後ろから胸を触る。そして耳に息がかかるくらい顔を近づけ

「この身体を……わたしに……」

「きゃあああつかー!!!」

水平チョップで椿をどける。  
それを椿はヒラリとかわした。「

「それにしても相変わらず小さい胸ね」

「うつつうつつるさーい!」

「胸を触らせてくれたお礼にウルトラキャラメルが売っている場所  
教えてあげるわ。」

紙を一枚差し出した。

そこには住所と地図をパソコンからプリントアウトしたものが記さ  
れていた。

「ここに行けばあるわ。じゃあね〜」

椿は手をひらひらとふり、その場を後にした。

「やりたい放題やって・・・理事長といい勝負だわ・・・。おつと  
ラーメンがさめちゃっ」

桜は再びラーメンを食べ始めた。

氷柱SIDE

「ふう・・・」

氷柱は一人、空港のカフェにてコーヒーを飲みながら、読書をして  
いた。

♪♪♪♪♪

氷柱の携帯から着信音が鳴り、読書を中断してた。携帯画面を見ると、両親が働いている、北皇子総合病院からであった。

「はい、北皇子です。」

『氷柱ちゃん！怪我はない！？変な人に連れ去られていたりしない！？』

相手はかなり大きな声をだしていたので、氷柱は携帯から耳を放した。

周囲を見たかぎり、どうやら音が周りにかなりもれていたのか、こちらを見ていた。

恥ずかしそうに、ペコリと周りに一礼して、再び話し出した。

「パパ？お願いだから大きな声をださないで」

『でも、氷柱ちゃんが心配だったから』

「もう・・・大丈夫よ。危ない目にあってません」

『そう？ならよかった』

「これから飛行機に乗るから電話しないでくださいね」

『わかった。それと母さんがね・・・』

その後、時間ぎりぎりまで氷柱は父親と電話をするはめになった。

南SIDE

「かわあいい〜」

南はお土産コーナーにてストラップや人形を見ていた。

「これ今買っちゃおう」

「あ、これもあ」

「これもかわいい」

三十分後

「……………どうしよう。買いすぎた……………」

南は両手に八袋ほど抱えていた。  
全て人形やらストラップである。

「うーん。送ろうかな？」

そんな光景を離れたところで識が見ていた。

（このパターンだと荷物もちを頼まれそうだな。逃げよう）

識はその場から逃げるように去った。

「よいしょっと……、うーん持てないよあ」

南が困っていると、いかにもチャライ二人組みがやってきた。

「ねえねえ、何やってんの？」

「え？」

「君かわいいねえ。ちょっとお茶しない？」

「でもちよつと困るかなあ・・・」

「いいじゃんいいじゃん。いこいこ」

「ふえ？」

南はされるがまま手を引つ張られ、連れて行かれそうになる。

「ちよい待て、兄さん。ほら南。いくぞ。」

そこには南の荷物（八袋＋旅行鞆＋リュックサック）を持った識がいた。

「識くん・・・」

「んだてめえ！やんぞおら！」

識はふうとため息をつき、隣で売っていたりんごに手を伸ばした。

「まあまあ、平和的に平和的にっ！」

「パァン！」

“っに”のところで一気に入んごを握りつぶした。

一瞬でりんごが弾けた。

「平和的に解決しようではないか」

二人組みはバケモノだとか言いながら去っていった。取り残された南はポカンとしていた。

「まったく、そんなされるがままだと、海外行ったら、簡単に騙されるぞ。・・・海外行ったことないけど」

「うわああああん怖かったよぉ」

「いや、そんな怖くはないだろあの二人は・・・うわっ」

南はなきながら識に抱きついた。

抱きつきながらまだ南は泣いていた。

「困ったな・・・」

すると、ちよと離れたところで

ピロリン・カシャ!

シヤメの音がした。

「んな!」

犯人は椿であった。

「いいネタがとれたわ。これを新聞部の軽部さんに売ってくるわ。」

ピューツと椿は立ち去った。

「椿っ! てめ! 待て!」

「送信ボタンおしたら軽部さんに送られるわっオホホホ」



識は荷物を置いて椿を追いかけた。  
南は一人とりのこされ

「あれ？やっぱり荷物私が運ぶの？」

自分の荷物は自分でけりをつけましょう。

七海SIDE

七海は本屋にいた。

七海はファッション誌を立ち読みしていた。

(うーん、私もメガネの色変えようかな？)

「七海。立ち読みとは関心せんなあ」

そこには担任である紫部がたっていた。

紫部はわりといい加減な女教師であるが、それが生徒から人気の秘密でもある。

ちなみにかんりのヘビースモーカー。主に葉巻を使う。

「先生、タバコ吸ってると思った。」

「吸ってたなら、E組のヤローに怒られちまってよー、あとは立ち読みっきゃないだろ」

「いや、教師ならやることあるだろ。」

やれやれと思いつながら、七海は本屋をでた。

(あいつ本当に教員免許もってんのか?)

すると横から一人走ってきて、お互い余所見をしていたため、衝突してしまった。

「きゃっ!」「」

すてんと二人ともしりもちをついた。

「あら、ごめんなさい。ちょっとおふざけが過ぎてましたわ・・・  
あら」

ぶつかってきたのは椿であった。

一方の七海は転んだときにメガネを落としてしまい手探りでメガネを探していた。

「あれ、メガネメガネ・・・」

椿の後ろから識が追ってきた。

「七海。大丈夫か?」

「あれ? 識くん? 悪いけどメガネとつてくれる。」

「ああ」

「あ、七海さん。ちょっと私の携帯も落として、すぐ下にあるから  
ちよつとどいてくださる? メガネこれね」

椿がメガネを渡そうとした瞬間、七海の手が、椿の携帯のボタンに触れた。

「「あ」

椿の携帯にはシンプルに“送信”と書かれていた。

「……」

「……」

「え〜っと冗談のつもりだったんだけど……」

「おい！こら！」

「……っふふふ。」

突然椿は笑い出す。その態度に識は少しカチンときた。

「おい、これじゃあ南にまで迷惑かかるんだぞ！」

「大丈夫よ。実は送ったの空メールよ。画像は無事よ。でも私の携帯にちゃんと保存されているわ。ほらその画像」

「何の話？どれ？」

途中から話を聞いていた七海は気になって椿の携帯を見た。

七海は絶句した。

そして識を細い目を見た。

「ふ〜〜ん。そうかそうか、これは軽部に言った方がいいかもね。」

「ちょっと！誤解してるって！」

「いいえ私の方が誤解していたわ。」  
「そのゴミを見るような目やめて！」  
「別に貴様がだれと姦淫をしようが、カスほどにも興味がないし」  
「ちよいちよい！飛躍しすぎ！」

このあと識は必死に誤解を解いていた

#### 次回予告

氷柱「さて、徳川くん。次回予告して」  
徳川「そうだね、今回は飛行機の中でのお話さ。」  
氷柱「ありがとう。ではまた次回」

## 15 エア・バトル

待機時間が終わり、一年生一同は飛行機の自分の席に着座していた。

飛行機の座る場所はクラスごとではなく自由である。

桜たちは飛行機の三列にわかれている椅子の真ん中。

そこには椅子が四つある。

桜、氷柱、七海、南がそれぞれ座った。

その後ろに識、間宮が座っている。

ちなみに生徒会席というわけではない。

「こっからだいたい二時間ってとこかな？」

「そうね、国内線だから、ビデオとかないのが残念って顔してるわ」

「えっ！？顔に出てる？」

「南、お菓子ちょうだい！」

「あっ！これは宿にいたら食べるコ○ラのマーチなの……」

「北海道限定のがあったら買ってあげるから」

「うっうっ……約束だよ。七海ちゃんのことだから、勝負にかつたら買ってあげるとかいいだすんじゃないかな？」

「うっ……。そんな悪いことはしないって」

その後ろの席で識は震えていた。

間宮はうざったいと思っていたが、十分間ずっと震えていたのでいい加減、聞いてみた。

「どっした中嶋」

識はうつろな目をし、か細い小さな声で答えた。

「ひ、ひ、ひ、飛行機は鉄の固まりだ。こんな大きな鉄が浮くわけない浮く分けない浮く分けない……」

このまま放置しようかと思ったが、震え+ブツブツと呟き始めたので、鞆からあるものをとりだす。

「中嶋、今の飛行機はそう簡単に落ちない。99%落ちない。」

「百回あつたら一回落ちる……。今がその一回かもしれない」

「もうウザイからこれを飲め、気が楽になる。」

白い錠剤を識に渡した。

「これは睡眠薬だ。二時間だけ眠るよう調整してある。」

「本当か？じゃあこれを……」

その時、

「は、は、ハクシヨイ！」

識はタイミング悪く、くしゃみをしてしまい、受け取った錠剤をとりの席へ飛ばしてしまった。

「やべ！取りに行かないと！」

その時、ポオンと音が鳴り、席で閉めていた安全ベルトが固定されてしまった。

「とととととれねええ。つつつつかもう離陸すんのかあ!?!すまんもう一錠くれ!」

「残念だが、錠剤はあれで最後の一錠だ」

「落ちる落ちる落ちる空が落ちる」

「・・・空は落ちない」

「お客様申し訳ございませんが、離陸しますので座席に・・・」

「こここここれが落ち着いてっ!」

識はいきなり頭をカクンと下へおろした。

というより気絶をした。

となりで間宮が手刀で識を打ったようだ。

「すみません」

「・・・・・・・・え〜つと・・・・・・・・」

さすがにスチュワーデスも今の光景には困惑していた。

そして飛行機が離陸を開始した。

おおよそ機体が斜め45°のとき、識は目を覚ました。

「ん・・・俺はたしか・・・・・・・・つつ!」

目を覚ましたかと思えば、飛行機の傾きを感じ、ショックでまた気絶をした。

「何か後ろがうるさいな」

七海がチラリと後ろを向いた。七海の席の後ろは識や間宮ではなく別の人が座っていた。

「倉田さん？なんかあったの？」

「いえ、何もありませんよ。ね、村瀬さん？」

「はい、いたっていつも通りですよ」

また新キャラである。

“倉田”は一年G組の生徒である。

顔がかなり老けており60代に間違われる。

髪は白い。

ちなみに杖は必要ないのだがなぜか持っている。

“村瀬”は倉田の専属メイドである。一年G組の生徒である。

倉田とは違い若い容姿をしているが20代のような落ち着きをしているため、年齢を間違われる。そのたびに怒る。

長く綺麗な黒髪を持っている。顔は常にトロンとしたような顔をしている。

「いつも通り、間宮さんが識くんをボコっただけですよ。」

「それがいつも通り!？」

機内放送で、立ち上がり自由となり、何人かはトイレに行ったり、飲み物をもらいに席を立った。

桜たち4人は席に座ったままであった。

「暇だね」



「暇ね」

「暇だ」

「暇だねえ」

上から。桜、氷柱、七海、南である。

桜は席の前にあるモニターを隣にあるリモコンでいろいろいじっていた。

「あ、これ4人で対戦できるゲームがあるよ！」

「じゃあ、ゲームって苦手だけど、やろうかしら。」

「お！いいね！やろうやろう！」

「やっちゃんおう！」

桜が選んだゲームは、“ポリオレース”というこの世界では大ヒットゲームである。

このゲームは何度か生徒会のメンバーでやったことがあるので選んだ。

4人はそれぞれキャラクターを選んだ。

桜・ポリオトリックキータイプ（ノーマルタイプ）

氷柱・桃姫

七海・パツク（パワータイプ）

南・ヨツシャー（スピードタイプ）

4人のみのプレイヤーのみの対戦である。

コースはシンプルなポリオサーキットを選ぶ。

このコースは の字をしたコースである。

画面で赤黄青とランプが光り、それぞれスタートした。

先に前へ出たのは、ポリオを使う桜である。  
桜はこのゲームではかなりの勝率を誇る。当然スタートダッシュを使う。

その桜の少し後ろにいるのはパックこと七海。

七海もスタートダッシュを成功し、桜に並ぶが、キャラクターの性能の関係上、桜より少し遅れた。

氷柱の桃姫と、南ヨツシャーはスタートダッシュができず、ほぼ同じ位置にいる。

最初のアイテムポイントに桜がつく。

上位のキャラクターは大抵、あまり強力なアイテムが出ない。

桜がとつたのは“スカ”であった。

この“スカ”とは名前どおり、はずれである。何もとらないと同じである。

「スカかあ。まあ一位だしこんなもんか」

七海がアイテムをとる。

“ロケット”をとった。

これは前の相手をスリップさせる道具である。

画面でうまく操作し、相手に打つアイテムであるが、まっすぐにしか飛ばない。

「くらえ！桜！」

「見える！」

パック（七海）の打ったロケットは、ポリオ（桜）の右を過ぎさつた。

「見える、私にも敵が見える！」

「キャラクターが赤いからって3倍にはならんぞ！」

その後ろで、ヨッシャー（南）はアイテム“ミサイル”をとった。

“ミサイル”は前の相手をロックオンし、確実に相手をスリップさせる。

ヨッシャー（南）の前であるパックに向け発射！命中！

「ごめんね、七海ちゃん」

「南か！やったな！」

その間もポリオ（桜）は一人距離を広げる。

「ふふふ、そうやって足を引つ張っていたまえ。やってやる・・・やってやるぞ。シャ 少佐だって・・・」

「言ってることはよくわからないけど、桜。ごめんなさいね」

今まで沈黙を続けていた桃姫（氷柱）が動いた。アイテム“ホーミングミサイル”を使う。

これは選択した順位の相手をロックオンし、発射する。スリップ時間が長いのも特徴。

「くっ！氷柱！？」

スリップをし、4人はほぼ同じ位置に並んだ。  
ここで七海が口を空けた。

「ねえ、これ罰ゲームつけない？」

「罰ゲーム？」

「まったく七海は好きだよね、そういうの。」

「で、罰ゲームは1位の人は他の人になんでも一つずつ命令できる。」

「お！いいねそれでやろう。」

まず、三人の思考……

( )( )(これで氷柱に命令できる！)( )( )

氷柱の思考

(また脅迫のネタが増える！)

そして四人の思考は一つになる……

( )( )(絶対に負けられない！)( )( )( )

こうして飛行機の中、火花散る白熱したバトルの火蓋が切って落とされた。

次回予告

桜「ども！」

氷柱「こんばんは、かしら？」

桜「すぐに北海道スキー編をやりたかったんだけど、ゲーム編が意

外と長くなっちゃって・・・」

氷柱「そうね、こんな話間にちょっとやるつもりが、次回に続くな  
んてね」

桜「そういうことで、次回は決着編！誰が勝利者となるのかお楽し  
みに！」

氷柱「それと、次回は倉田さんと村瀬さんよ」

## 16 最後の勝利者

桜たちのレースも三周目、最後の一周となった。

順位は桜、七海、南、氷柱である。

まず、最初にしかけたのはパック（七海）であった。前の周でとったアイテム“ブースター”を使用。

“ブースター”は一定時間飛躍的に速度を上げる。

加速したパックは桜の後ろにつく。

このパックのパワータイプの特徴として、通常時の最高速度・加速は遅いが、アイテムを使ったとき、他のタイプよりも効果が強い。さらに体当たりしたときに他キャラを退ける重量キャラである。

そして、その特性をいかし、ポリオ（桜）をどかした。

「あ、七海！やらせん、やらせわせんぞ！ジ○ンの栄光を」

そこへ後ろから“ミサイル”による迎撃。ヨッシャー（南）からの攻撃であった。

「はい「うちそうさまあ」」

そのまま、ヨッシャー（南）にぬかれた。

「まだセリフが途中だったのに！」

そして、長いストレートにでた。七海はアイテム“ロケット”をとったが、前に相手がないので使えないでいた。一方の南は“ブースター”をとったが、まだ使い時ではないので、温存している。

桜が、アイテムをとる。“マルチロックミサイル”をとった  
“マルチミサイルロック”は前の相手全員をスリップさせる。

「いつつけええー！！！」

前の七海と南はスリップその隙にまた桜は一位にでた。

しばらくアイテムのない平坦なストレートなので、ここでは純粋なキャラクターの最高速度の差がでる。

パック（七海）は最高速度ではヨッシャー（南）には劣るので、南が二位となった。さらにここで先程とった“ブースター”を使い、桜とほぼ同位置についた。

そして、180。カーブ。

ここで、プレイヤーとしての力量の差がでた。

このゲームを得意とする桜のテクニクで、カーブの内側をとり、南は外側を走ることを余儀なくされ、桜が一位をキープする。

このゲームの特徴として、ゲームを盛り上げるため、後ろのキャラクターは前のキャラクターに比べ、いいアイテムがでたり、速度が速かったりする。

だが、テクニクでは桜には及ばないので、カーブではあまり、差

をつめることはできない。

最終ストレートにでる。

このストレートではアイテムが二箇所ある。

まず一箇所目で、桜はス力をとり、南は、ロケットをとった。

七海が“ブースターMK-?”をとった。いわゆる“ブースター”の強化版。

バック（七海）の性能もあり、ストレートで一気に前の二人、桜と南にならんだ。

だが、ブースターを使う前、いままで前に出てこなかった氷柱が動いていた。

氷柱は“マグネット”をとっていた。

“マグネット”は前のプレイヤーのすぐ後ろまで自動で加速する。

これを七海が使った直後に使った。

そして、結果、最終180°カーブで4人は並んだ。

正確な順位は、一位から、桜、南、七海、氷柱である。

やはりテクニクで勝る桜がコーナーの内側を走る。

コーナーへ入る直前、それぞれがアイテムをとる。

そこで南がブースターを使い、外側から桜を追う。

その南を桜が迎撃にでる。

桜は急にブレーキを使い減速をする。



すると南が一位になり、桜の前へとでる。

桜が“ロケット”を使い、南に攻撃。

桜ほどの腕なら、まっすぐにしか飛ばないロケットをプレイヤーに当てるなどで、簡単なことであつた。

南がスリップし、その間、他の二人に抜かれる、そして、桜は道の端つこにあるアイテムをとる、しかし、それは内側から少し外に外れなくてはならないので、とっている間に七海に並ばれた。しかし、まだ桜の一位は変わらない。

このカーブの終わりがゴールである。

カーブがもう少しで終わる所まできた。

「桜あ！これで終わりだ！」

バック（七海）が、アイテム“ミサイル”を使った。相手をゴールまで確実にスリップさせ、抜くつもりである。

だが、桜はそれを読んでいたからこそ、コースを外れて、アイテムをとつたのである。

そして、運よく狙い通りのアイテムが出ていた。

桜にミサイルが当たるその前にアイテム“ウイング”を使った。

“ウイング”はキャラクターに翼が一定時間生えロケットやミサイルなどの攻撃を避ける。ついでに少しだけ速度が上がる。

「戦いとはいつも二手三手を読むものだよ!」

七海は最後の手を使い、おそらく桜を抜くことは困難であろう。

最終コーナーを曲がり、ゴールが見えた。

南、七海が桜の一位を確信していた。

だが、氷柱だけが違った。

「桜。私はあなたの上、四手目を詰ませてもらっつわ。」

氷柱が、アイテム“プラズマ”を発動させる。

これは最下位のキャラクターにしか出ない。

おそらく、南を抜く直前にとり、全員が手を出し切るまで待っていた。

“プラズマ”の効果はキャラクター全員を小さくする。さらに速度を落とす。

「ごめんなさいね」

桃姫（氷柱）はご丁寧に前のパック（七海）とポリオ（桜）を踏み潰し、ゴールを決めた。

「それじゃあ、私の勝ちでいいわね」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「北海道についたらいろいろお願いしようかしら」  
「何卒穏便に」

そして北海道へついたら。

#### 次回予告

南「氷柱ちゃんが勝っちゃったよお」

七海「まあ氷柱も鬼の子じゃない．．．いや氷柱自体が鬼か．．．」

南「鬼だね」

氷柱「誰が鬼ですって？」

南「うわっ！！氷柱ちゃん」

七海「つつつ氷柱！このコーナーは二人以外でちゃいけないんだよ」  
氷柱「私にそんなルールはきかないわ。さて、次回はいろいろ飛ばしてスキー編よ」

七海「そ、そういうわけでお楽しみに。」

氷柱「二人ともあとでちよっとお話しましょうか？」

七海・南「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」



## 17 北海道小樽

北海道の空港に到着し、しばらくは札幌で自由時間をとり、その後、一年生たちは雲の上専用バスに乗り、そのまま宿泊先であるホテルまで行った。

ホテルについたころには、すでに午後五時近くであった。

ホテルでの食事は六時からなので、一時間は、部屋に荷物を置き整理する時間がある。

部屋はクラスごとに三人で一部屋である。

部屋はシングルベッドが三つあり、さらにとてもきれいなユニットバス、そしてなぜかキッチン。照明もシャンデリアを使っている。

一応金持ち高校なので、宿泊先はたいがい豪華なものである。

桜・七海・南部屋

「やっと着いた！」

「ZZZZZZZZ・・・」

「ZZZZZZ・・・」

桜以外の二人は寝てしまっている。

「ちよつとちよつと！外行つて雪合戦しようよ！」

「ん・・・桜は少年みたいなお心でいいね・・・」

「ZZZZZZZZ・・・」

「ぶ〜・・・」

桜はほっぺたを膨らませて怒った。

「もういいよ！誰かつれてやってくるから！」

そのまま、桜は部屋を出て行った。

識・間宮部屋

本来ここにはもう一人いたのだが、当日になってゲリになり休んだ。

「間宮はスキーやんのか？」

「……………」

間宮は本に没頭し識を無視する。

「雪合戦やらないか」

「……………」

「……………」

「……………」

会話がまったくないので、間が持たないので識は部屋を出た。

ロビー

氷柱はロビーの噴水があり、グランドピアノもあるカフェにいた。

「このコーヒーは美味しいわ。」

氷柱は洋書を読みながらコーヒーを飲んでいた。

そこへ徳川が通りかかった。

「あら？徳川君？鞆を持ってどこかへ行くの？」  
「ああ、氷柱さん」

徳川は一泊分ほどの鞆を持ち、防寒具を着て外へ出る途中であった。

「ちょっとこれから僕は学校とは別行動するんだ」

「別行動？」

「僕をご存知の通り病弱でね。ある病気に効く温泉が近くにあるから、今回学校行事に参加したもんなんだ」

「そうだったの。」

「外に知人を待たせているから、また明後日。」

「ええ、気をつけて」

「ふふふ、それはスキーをする君に言いたいよ」

そうして、徳川はホテルを出て知人の車に乗っていった。

次に桜が来た。

「氷柱じゃん。何してんの？」

「あら、桜。本を読んでいるのよ。この本読める？」

「英語・・・じゃないね。フランス語？」

「あら？わかるの？」

「ウチはだいたい20ヶ国語くらいは話せるから」

「それはとつても意外ね。ならなんで英語の成績があまりよくないのかしら？」

「いつも話すときはノリでしゃべっているから、文法とかわからないんだよね」

桜は英語の成績が“4”である。10段階評価で。

「ところで、氷柱！雪合戦やろう！」

「パスよ。私身体弱い知ってるでしょ。」

「う~~~~」

「というより、桜。あなたその格好で雪合戦やろうとしてるの？」

桜の格好はフリース・ジーパン。である。

「何か変？」

「馬鹿よ。」

するとそこへ識が通りかかる。

「何してるんだ？」

「あ、識！ちょうどいいところへ来た！雪合戦やろう！」

「何？雪合戦だと？」

「そう」

「お前、俺に勝てると思ってんのか？」

「は！？それはウチのセリフだよ！」

「「勝負だあ！」」

そのまま二人は外へと走っていった。

「あの二人、フリースにジーパンって同じ格好ね。それと雪合戦に勝敗ってあるの？」

三十分後・・・



七海と南は起き上がり、一回の氷柱がいたカフェへとやってきた。

「よ！氷柱！ご飯食べに行こう！」

「そうね。行きましようか。それと外に桜と中嶋君がいるわ。」

読んでいた本を閉じ、氷柱は外を見た。

そこで三人は不思議なを目にした。

桜と識が一定の距離をおき、両者後ろに大きな雪だるまの頭くらいの大きさの雪球を保持していた。

お互いそれを投げ合っていた。

大きさにあたれば怪我をする。それ以前にまず持つことすらおかしな大きさである。

「おらあ！」

「ちえいつ！」

識が投げた巨大雪球を桜が隠していた木刀で一閃。

雪球は縦に真っ二つに割れた。

「おい！いつの間にそんなもの隠していたんだよ！ずるいぞ！」

「知らないよ」。気づかない識が悪い。隙あり！」

今度は桜が巨大雪球を投げる。

「そんな攻撃！」

識は軸を固定し、それを元を上へと足を突き出す。

雪球はボォオンと弾ける。

桜は識の足元をみた。

「あ〜〜〜！識の足元雪ないじゃん！それでさっきから俊敏に動いてたんだあ〜！ズルイ！」

「地の利を生かすのは当然だろ！」

中で見ていた氷柱は丁度いいだろうと思い、二人を食事に誘う。

「はいはい。じゃあそろそろご飯にしましょう。」

「あ、氷柱。識ずるいよね」

「木刀を隠してる桜がずるいですよね」

「どうでもいいわよ。ご飯に行かないなら中から鍵閉めるわよ」

最後は氷柱が二人を脅して戦いの幕を閉じた。

晩飯を取り、雲の上学生は移動の疲れもあり、その日は早いうちに寝た。

翌日午前

「うわああああ。やっぱり綺麗だねえ」

「今日はスキー日和ね」

氷柱、桜、七海、南の四人は共に行動し、今はスキー場の山の頂上にいた。

今日は、丸一日自由行動であり、多くの生徒はこうしてスキーをしている。

ちなみに四人ともスノーボーである。

「氷柱は大丈夫か？これスポーツだけど」

「ええ、このくらいなら大丈夫よ。それにスノーボーはやったことあるわ」

七海は身体の弱い氷柱を気遣った。

「じゃあさ、まず写真とろーよ！今日は快晴だしさ！」

今日はまさに雲ひとつない快晴であった。

隣の山がよく見える。まさに頂上からの景色は絶景であった。

「ちょっと待ってて」

デジカメのタイマー機能を使い、四人で写真をとろうとした。スタンド代わりに近くの雪の積もった場所を使う。

「あれ？上手くいかないな？」

実際、雪山を使いカメラを水平にしたり、ちょうどよく映るように微調整するのはちょっと難しい。作者は経験済みである。

「よし、できた。いくよー！」

桜が三人の位置へ駆け寄った。すると

「うわっ！」

桜はこけた

その瞬間、カシャッと音が鳴った。

写真はこけた桜を三人が見ているものとなった。

#### 次回予告

倉田「こんにちは」

村瀬「こんばんわかもしれませんね」

倉田「前回ちよこつと出ただけの私が出てもいいのか心配ですね」

村瀬「それ以前に前回の内容を覚えている方がいらっしやるのか心配ですね」

倉田「厳しいですね、村瀬さん」

村瀬「では、次回ですが、スキーをしているみなさんの様子を見てみましょう」

倉田「私の役を見事に持っていきつてしまいましたね、村瀬さん」

村瀬「あら、私ったら、つい私のハートに情熱の炎が灯って、つい赤い欲情をだしてしまいましたわ。」

倉田「さすがです。村瀬さん。」

桜「・・・この学校変な奴ばかり・・・」  
氷柱「あなたも十分変な奴の一人よ」

## 18 白い丘の上で

桜たちは一度頂上から麓のレストハウス付近まで滑っていった。そこで、氷柱はそこで少し休むと言った。ついでに南も便乗して休むと言い出した。

「じゃあ何かあったら携帯に電話してね。」  
「ええ、わかったわ。」

桜は最近の山は電波が届いて便利だなと思いつつ、七海とリフトに乗った。

「桜はスノボーはやんの？」  
「ここ数年はやらないね。」  
「じゃあ、小さいころやってたの？」  
「だいたいそうね。小さいころ、冬になるとよく婆ちゃんに連れられて籠もってたから。」

七海はしばらく“籠もる”の意味がわからなかったが、あ！っと思いつ出した。

「籠もるってあれか。ペンションとかに泊まって働くやつか！」  
「いや、ちよつと違うかな。」  
「?」

桜は空ろな目になり、下を向いた。

「婆ちゃんがさ、雪山にテントたててそこでサバイバルしたよ。雪山だよ。凍死しかけたよ。最初は婆ちゃんいたからよかつたけど、

気づいたら一人になって、雪山で遭難したよ」

「また過酷なことを……。アンタの生命力のなぞが少しだけ解けたよ」

桜が暗い顔をしていた遙か後ろのリフト。そこにも何か気まずい顔をしている人物がいた。

「なぜこんなことに……」

識は暗い顔をしていた。

「昨日見たわよ。私を差し置いて、二人で雪合戦するなんて、冬ソのつもり？ ヨン様のつもり？ いろいろ舐めてんの？」

識のとなりには椿がいた。

識は友人と三人で滑っていた。二人が先にリフトに乗り、自分は一人で乗ろうとしたところ、椿が割り込んできたため、今は椿と識でリフトに乗っている。

「ねえヨン様？ チェジウ？ どっちがいい？」

「もう勘弁してくれ」

「次は私も誘いなさいよね。そうしないとあなたと南嶋さんが抱き合ってる写真を号外新聞の一面にしてばら撒くわよ」

「鬼だな。」

レストハウス

「はあ〜。」

レストハウスの喫煙所でタバコを吸っている女性がいる。

「先生？滑らないのぉ？」

タバコを吸っていたのは担任の紫部であった。

南はトイレに行くときに紫部を見つけ、尋ねた。

「一本滑って、もうだるくなった。あとは酒飲んでタバコ吸ってるつもりだ」

「お酒？」

「酒は嘘だ。とりあえず、あと一箱分吸って見回りにいかなきゃいかん。」

「先生は大変だねえ」

「だけど、タバコ吸いながら給料もらえる仕事なんてそうそうないからな。教師で満足してるよ」

また、タバコを吸う。今度は葉巻を出した。

白い丘。桜はジャンプ台を使い高く高くジャンプをしていた。

「いやっほー！ー！」

ふう、と止まり桜はうしろを見た。

今度は同じジャンプ台を七海が飛んだ。

「一回転ー！ー！ー！ー！」



七海は見事に一回転し、綺麗に着地した。

「七海はこういうのは上手いんだよね」

七海はスポーツ・運動全般すべて、ダメであった。

だが、その代わりに、自動車運転・バイク・自転車・ヘリ・ボートなど乗り物の運転はすべて異常な操作テクニクを持っている。

七海はスキーも乗り物の一種とされているようで、先ほどから様々なテクニクを披露する。

「桜より飛んだんじゃない？」

「一回転しただけだよ！ウチの方が飛んだよ！」

「じゃあ、こつからレースする？」

勝負をしたら絶対に七海に勝てないとわかっていたので、桜は戸惑っていた。

「い・い・い・い・い・い・い・い」

「やめよう。今日は楽しもう。」

内心桜はホッとしていた。

午前が終わり、午後。

桜たち4人はすべりをやめてある所に行った。

「いいの？ウチに付き合わなくてもいいよ。」

「大丈夫よ。私たちも雪の街を観光したかったし。」

「そうそう！こんなところ滅多に見れないんだからさあ！」

桜たちは、「ウルトラキャラメル」を買うために小樽の店に向かっていた。

「しっかし、理事長もひどいよな。買わなきゃ落第なんて。」

「まあ慣れたけどね。・・・慣れたくないことだけど。」

「わたしはあ、理事長さんとあまりあったことないけど、どんな人なのお？」

「あ！アタシもあまり話さないな？」

氷柱はどこか難しい顔をし、桜は憂鬱な顔をした。

「あの人は・・・災害や迷惑以外に何ももたらさない竜巻だよ。」

「そうね、私と桜は生徒会に入る前から目をつけられていたのよね・・・。」

そこから、小火事件や、その他様々な事件を語っていたら、目的地に着いた。

「ここかな？椿の情報では“伽羅女琉”って店なんだけど・・・」

「見当たらないな」

「どこお？」

「ちよつと地図見せて」

氷柱が桜から地図をとると、うんと少し悩み、

「桜・・・道三本くらい間違えてる」

「今度は大丈夫。ほら見つけた。」

目の前には伽羅女琉という店がある

「私が案内して何自分の手柄みたいに言ってんのよ。」

「ばか桜」

「ばかちんちゃん」

「うつうつするさ〜い!さっさと行いっしょ。」

ガラツとドアを開けると、お店というより、製造する場所ではないかというイメージが強い店であった。カウンターやレジもない。

「すみませ〜ん。誰かいませんか?」

大声を出して、呼んでみた。

しかし誰も出てこない。

「いないか?」

「すみませ〜ん」

桜は奥へと歩き出し、再び呼んでみた。

「ずびばぜ〜ん!!!!!!」

奥からドタドタと足音が聞こえてきた。



「へい、ボインさん、キャラメルですか？こちらが種類になります。」  
「ちよちよちよ！態度違くない！？・・・ウルトラキャラメル買いにきたんだけど」  
「何？ウルトラだと」

その瞬間、店主の一変した。

「あれは貴重な貴重なキャラメルだ。一口食べれば、口の中で甘さがふんわりと広がり、その者の気持ちを一気に落ち着かせる。どんなに機嫌が悪い人物でもそれを食べれば一瞬で気分が落ち着くまさに究極のキャラメル。高いぜ」  
「いくら？」

店主は電卓をだし、数字を打った。

「1ダース10万だ。一切負けねえ！」

ニヤリと笑い、電卓を置いた。

「はい、10ダース買うから100万ね。」

桜はポンツと100万を置いた。  
それを見て店主は

「おおおおおいおい、ひゃひゃは¥100万ってお前そんな簡単に！」

「100万なら安いよ、先月買った壺なんか1億したからね」

店主は急に態度を変え

「いや、やっぱりダメだ！これから出す試練に合格しなきゃ売らねえ！」

次回予告

桜「今回、急ではあるが、キャラの名前設定について話します

東西南北

東海林

西園寺

南嶋

北皇子

で、

春夏秋冬の季節を感じるものを名前に入れて

桜

七海

木葉

氷柱

だよ。

ちなみに 中嶋識 だけど

東西南北でネタがないから “東西南北中央不  
” というガンダムネ  
タより中をとって

中嶋

で春夏秋冬は四季だから変換して  
識

なのよ。ではまた次回！！

19 雪を駆ける（前編）

桜たちは“ウルトラキャラメル”を買うため伽羅女流という店にいる。

「で、買うために試練をクリアしろって？」

「そうだ。これは非常に貴重なものだ。10ダースだと？ふざけんな。欲しいならそれなりに条件を満たしてもらおう」

「キャラメルでも作れっていの？」

「いや、違う。おもしれーことをしてもらおう。おいエヴァ！」

店主は大声で呼んだ。すると奥から一人でできた。

「んだよ。でけー声だすな、ここの機械でミンチにすんぞ」

出てきたのは長い金髪をし、目にはサングラスをかけたアメリカ系女性。

シユガースティックを加えながら、肩にヘッドホンをかけている。

見かけは綺麗な女性であるが、言葉使いはかなり下品。

「エヴァ、別報酬の仕事だ。例のアレやんぞ。」

「アレか……。誰がやんだ？」

「その……。オレンジの髪だ」

“オレンジ髪”とは桜のことであった。

ペチャだと南を指すことにもなるので言わなかった。

「な・る・ほ・ど？」



エヴァは桜を下から上へと舐めるように見た。  
おそらく体系などを確認していたのだろう。

「猿か」

「だあれが猿だあ！！」

猿と言われた桜は顔を真っ赤にし、反撃した。

「これ見えるか？」

エヴァは大きなわっか型のペンダントを見せた。

「一時間。それまでにこれをアタシからとりな」

「奪えってこと？」

「奪うなら何してもいい。ここにある小道具でも使え」

そう言うとガラツトと引き戸を開けた。

中には弓矢、拳銃、槍、薙、木刀があった。

「これって、本物？」

「偽者だ、カス。本物だったら銃刀法違反でお縄だ。とはいえ今から街中でこれを振り回してもらおうわけだがな」

「ちょ！それって」

「街のイベントだ。警官含め、住人は協力してくれる。いくぞ」

どうやら今から外へ出て街を使ったリングの取り試合をするようだ。

「住人はこのイベントを楽しみにしてんだ」

「このタコが言うとおりの。ライブ中継もされる。準備しろ、10分後にスタートだ」

そういうと、エヴァは拳銃をとった。

「スタン弾だ。あたれば痺れる。まあ一時間は痺れがとれないだろうな」

「まったく……。じゃあウチは……」

選んでいると、エヴァはとっとと外へ出て行ってしまった。

「ちょっと、ウチの武器見なくていいの？」

「テーマが何を選ぶのがアタシは負けねえ。それだけだ。」

「絶対に負かす。」

桜は倉庫を漁っていると、ふと目につくものを発見した。

「これは？何？」

桜は木刀をとった。

その木刀をみた店主は驚いた。

「おい、それは辞めとけ。危ねえから」

「？なんで？」

「信じねえと思うが、いわゆる妖刀“村雨”だ」

桜以外の三人は胡散臭そうに店主を見た。

だが、桜はまじまじと刀を見た。

「うん、何かわかる。重い？いや凄みがある？」

「信じんのか？こんな妖怪じみた話。」

「まあね」

「まあ、桜が妖怪じみた人間だからね。」  
「ちよつと！」

そして桜はその木刀“村雨”を選んだ。

時間になった。

外に出ると、外出している人物は誰一人いなかった。  
これからおきることのため、巻き添えを食らうのは、ゴメンと言っ  
たところだろう。

遙か先にあつた時計台の上にエヴァが立っていた。

「おい、猿！今からスタートだ！一時間後にここの時計台の金がな  
つたら終わりだ！」

そう言い、エヴァは消えていった。  
街のいたるところにはカメラが設置しており、住人に見られている  
ようだった。

こうして二人の雪を駆ける戦いが始まった。

## 20 雪を駆ける（後編）

エヴァは建物の上から上へと飛ぶ。

靴は対雪用の滑らない靴を履いていたため、跳ねることができる。

しばらくして止まり、あたりを見渡した。

「来ねえ・・・か・・・」

そう言い、ポケットにしまったシュガースティックを口に加えると

「とおおおりや！」

エヴァの後ろから影が一つ。

当然桜であった。木刀を構えた格好でエヴァの背後をとり、斬撃を一閃。

「甘めえ！」

とつさに察知し、エヴァは前転をし避けた。そのまま、額へ向け銃を発砲。出たのはBB弾のような丸い物であったが、電気を帯びている。

桜はそれを見た。頭を後ろへと折り、ギリギリで避ける。

そのまま、バク転。

お互い、顔を合わせる。

「驚いた。今の一発で、マグロ状態にするつもりだった。」

「マグロ？はよくわからないけど、あまり舐めっているとタンコブじや済まないよ」

エヴァは後ろへ飛び屋根上から落ちる。

そのまま開いた窓から民家の中へと入る。

桜も追いかける。

その民家は無人で、かなり荒らされている部屋であり、生活感がまるでなかった。

その静かな感じ。桜は耳を澄ました。

・

・

・

僅かな洋服の擦れる音がした。

「そこか！」

近くにあつた椅子を投げ飛ばした。

すると反対方向から影が飛び出した。

「それはオトリだよ！クソが！」

カモフラージュしていた毛布を盾にし、飛びながら銃を構え、発砲した。

「んなこと、わかっているよ！」

飛んできた弾丸を左手で持っていた木刀で上へと弾き飛ばす。

さらに右手に持っていた雪球を飛ばす。

「ちっ！」

エヴァは持っていた毛布を盾にし、雪球を弾く。だが、目を隠さず、桜を見続ける。

「思ったより、できるじゃねえか！楽しくなってきたよ！」

「ウチも同感！久しぶりだよ！こんな刺激的なのはっ！」

エヴァは外へと跳躍。

桜もそれを追い外へと出る。

その後、エヴァが逃げながら打つ。桜が避ける。の連続であった。そして時間もあと少しとなった。

(このままじゃ、時間切れになる！雪の上での追いかっこじゃ、ホームグラウンドであるあっちに部がある)

先ほどから追ってはいるが、向こうがこちらと戦つたためにわざと少し遅く動いている感じがしていた。

(できるか？あれを・・・？)

エヴァはわざとらしく時計台の天辺屋根へと立つ。

「さあ〜っどつするもう時間がないぜえ〜っどつすんだあ〜っ」

桜は無言でエヴァの直線上に立つ。

腕をだらりと下げている。木刀を逆手に構える。指は木刀の下を掴む。

「なんだ？降参のポーズか？じゃあな」

エヴァは打つ。

その発砲を凝視していた桜は球の軌道を読む。

目を見開く。

前へと進み球を避けつつ右足を軸に回転する。

一周したところで、逆手に持っていた木刀を投げる。

あまりにも素早い動きだったのでエヴァは反応できなかった

その木刀はエヴァの銃を弾く。

エヴァの右手が衝撃で後ろへ跳ねる。

体勢をくずした瞬間を見逃さなかった。

一気に間合いをつめる。

首にかかっているリングに手を伸ばす。

だが、エヴァは笑いながら

「アタシは二丁銃なんだよっ！！！」

隠していた銃を取り出した。発砲。

その球を腹へあたる直前右手のひらでかばう。

そして、桜は少しよろめいた。

「スタン弾だよ！！痺れは全身にくる！！お前は終わりだあ！！！」

「残念。“ゴム手袋”だよ」

桜は手のひらを見せ、掴んだ球をパツと落とした。

「き、汚ね！」

「うりやあぁあ！」

桜はリングをとった。

その瞬間、時計台が鳴った。

ゴォーオーン、ゴォーオーン。

ウチの勝ち！と言わんばかりのポーズ。高々と拳を上げた。

「ふざけんなあ！！！」

桜はエヴァに殴られた。



「ゴム手袋だと！反則だろテメー！！」  
ゴン！

「あの倉庫にあったんだからいいだろ！」  
バシ！

「はあ、武器二種類とかおかしいだろ！」  
ゴス！

「あんたも武器二個！隠していたでしょ！」  
ドス！

言葉をいうたびにお互い殴りあっていた。  
この殴り合いは店主が止めるまで続いていた。

「いやあ〜、エヴァが負けるとはな！」  
「じゃあ、キャラメルちょうだい」  
「しょうがねえ。」

桜は10ダースほど買った。

「おい猿！今回はたまたまゴム手袋があったから勝てただ。覚え  
てる猿」

「このメスゴリラ。負け惜しみいわない！あと顔はれた！」

桜たちは店を後にした。

「あれ？桜？その木刀いいの？」

桜は借りていた木刀を所持したままであった。

「あ、どうしよ？」

「桜ちゃん。どろぼー？」

「いけない子ね。」

「わかったって。返してくるよ。」

次回雪山編本編

## 21 極寒の遭難

その日の晩。

「あ、木刀返さなかったの？」

桜は“妖刀・村雨”を七海に見せていた。

「それがさあ……」

時を遡ること、エヴァとの対戦後、木刀を返しに行った時。

「木刀か？それがだな……。ちょっと木刀を俺に貸してみる」

店主が木刀を持つ。

ジュウウウウウ！！！！！！

「ぎゃああああああつあ！！！！」

木刀から発した高熱により店主は木刀をはなした。

店主の手には木刀の後の火傷がクッキリと残っていた。

「こういうわけだ。つまり」

店主は桜をビシッと指す。

「この“妖刀・村雨”はお前を主人として認めた。他の者が触るとこうなる。」

「え……つまり……？」  
「お前が面倒みる。やる。」

というわけだが、七海には店主にもらったとしか言わなかった。

それと店主はもう一つこう言っていた。

「この村雨は願えば主人の想いに応えるそうだ」

「はい？」

「一応覚えておけ。」

桜は特に深くは考えなかった。

風呂

こここのホテルは露天風呂がある。

「ふい〜〜。生き返ったって感じだね〜〜」

「ごもつとも〜〜」

「はあ〜〜」

桜たち三人は露天風呂に浸かっていた。

「氷柱も来ればよかったのに。」

「本当だよ」

氷柱も誘ったのだが、用事があるとかで断られたのである。

一方その風呂の壁を隔てた一枚向こう。つまり男風呂

「中嶋君・・・何をしてるの？」

男子Aは識に言った。

「何ってお決まりだろ。なあ？」

「その通りだ！」

識と男子Bは言った。

二人はいわゆる覗きをしようとしていた。

「これはな、やらなきゃ女性にむしろ失礼だぜ。なあB」

「まっただくだ！」

男女を隔てている壁を必死に調べ、どこかに穴がないか調べている。壁は竹製なのでもしかしたらと思っていた。

「このクソ寒いのによくやるな」

当然露天風呂の外は雪が積もっている。それを気にすることなく識は覗き穴探しに没頭していた。

「あつた。」

識は小さい声でBに告げた。さっそく穴を覗く。

「湯煙で・・・見えないな・・・？」

小さい穴を目を細め必死に見る。

すると、先ほどまであっち側の湯煙が見えたが急に真っ暗になった。

「？」

なんだこれは？と思った。おそらくこちら側から塞がれたか。ならば

「Bよ。こうなったら特攻するしかない！」

「同志よ！よく言った！」

「死ならばもろとも！！！」

竹の上を手で掴み、顔を上へと上げる。

その瞬間

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

向こうに人影。すごい近距離なので直ぐにその人物が誰なのかわかった。

桜であった。

「何してんの」

声がハモった。

「・・・・・・・・」

再び沈黙になる。

「穴塞いだのお前か？」  
あなた

「なんでお前が覗きをする？」

「いやノリ」

カポン……  
その晩も雪がパラパラと降っていた。

翌日、午前中は雲の上生徒全員で、北海道の旭山動物園に行くなど、クラスのグループ行動をした。

ここでのアクションはないので午後に飛ばす。

午後、は自由行動だったので、皆はスキーをしていた。

「氷柱？大丈夫？」

「ええ……大丈夫よ。」

氷柱はちよつとフラフラとしていた。  
そのせいで今日は数回リフト乗り場でトラブルを起こしリフトを停止させた。

「リフトから落ちなかったからよかったけど……、なんで頂上まで来たかったの？こんなに吹雪いてるのに……」

今は、氷柱の要求で頂上まで来ていた。

「もう一回、頂上の風景を見たかったのよ。たぶん……もつしはらくは雪山なんてこれないから。」

「そう……」

氷柱は身体が弱いのでそう何度も雪山にはこれない。今回は事前に様々な準備をし、身体の調整をしてきたので来れた。

「じゃあ、今日はちよつと吹雪いてるけど、また写真を撮ろう!」

「いいねえ」

「よし、じゃあまた桜!こける!」

「いやに決まってるでしょ!」

桜を省いた三人は並んで待っていた。

風景の都合で少し危ない場所に立っていた。

少し後ろへ足を踏み外せば落下してかなり麓までノンストップで滑り落ちてしまうであろう崖があった。

落ちないようにするためのポールは昨日誰かに壊されたのかそこにはなかった。

「いくよー!はい!」

桜は走る。

「うわっ」

またこけた。

タイマー機能のついたカメラがカシャッと鳴った。

その時、

「っ……っ」

全員がカメラレンズを見ていたのでしばらく反応できなかった。



氷柱が後ろへ倒れる。

それに一番最初に気がついたのは隣にいた七海であった。  
氷柱の手を掴むが、支えきれない。

七海も落下。

その七海の足を南が掴む。だが、二人分の重さを引っ張ることはできず、一瞬で落下。

桜は起き上がったとき、南が落下するところを見た。

「っ！！間に合わない！！！」

今からでは、間に合わない。そう直感した。

だから、引き上げることより、怪我をさせないことを考えた。

目の前にボードが二つあった。

それを片手に一本ずつ持ち、一本を崖になげ、一本は手に抱え桜も落下する。

桜が見たのは、氷柱を先頭に三人で落下する姿。雪は力チ力チに凍っており、勢いよく滑る。

少し行くと、雪からはみ出た石などが見える。

このまま行くと氷柱は石に衝突する、そう察知した。

桜は低姿勢になり、なるべく空気抵抗をなくし速度を上げた。

七海のいる位置にまでつく。

「ナナ！これ使って南をお！」

「うわかったあ！」

七海は桜からボードをとり即座に装着。南を背負う。

同時に桜は氷柱を掴み、ポンッと上へ投げ、後ろへ背負う。

「危な！」

石を避けるように飛ぶ。さらに飛ぶ。そして石を避けるように回る。

そのまま二人は石を避けながら、崖なので止まることができず、急降下していった。

雪が吹雪いている。

桜たちは崖を登ることはできず、迂回してホテルへといこうと考えていた。

だが、氷柱と南は気を失っており移動はどうしても時間がかかる。

午後4時過ぎ。雪山はこの時間寒さが厳しくなる。

しかも、吹雪、そして霧まで出てきた。

いわゆる“ホワイト・アウト”

周りが真っ白、3メートル先くらいしか道を確認できない。

「これは・・・」

桜は焦っていた。

自分は昔の経験により、この寒さをしのげる。

だが、他の三人、特に氷柱は危険である。身体が弱い氷柱がこれ以上体温が低下すると命が危ない。

かぶっている帽子が凍ってきた。

ビバークをするか？

ダメだ。緩やかな斜面しかないから、雪を掘ることはできない。

先ほどから、七海のペースが遅れている。

当然だ。桜と違い、七海は元々体力はない。それなのに南を背負っている。

すると、先に何かが見えた。

小屋がある。

「ナナ！小屋がある！」

七海はしゃべらず、桜が指を指した方向を見ただけであった。

そして小屋へと入った。

中は予想以上にしっかりとしていた。

寒さをしのげるのももちろん、暖房設備、絨毯、毛布まであった。

氷柱と南を絨毯の上で毛布にくるませた。

暖房は古い者だった。薪をいれるタイプである。

桜は木をこすり火をつけた。

「こつちには缶があったよ！」

七海は台所の引き出しから缶詰があった。  
それを食べながら、二人でこれからのことを話し合った。

「桜。これからどうする？」

「まず、今晚はここで休もう。暖房も毛布もあるし。翌朝。太陽が出たらここをでしょう。」

「わかった。アタシもちよっと・・・疲れた・・・から、寝る。」

そのまま、七海は深い眠りに入った。

桜はまだ、寝ようとしなかった。

「生活するための物はある。けど生活観がまったくない。」

物はある。だが、暮らしている物がない。

おそらく定期的に誰かが使っているのだろうと思った。

ここで、待っていればそのうち誰か来るか？

いや、それは期待できない。いつになるか？

そんなことを考えていると、

「？誰か・・・来る？」

その瞬間、ドアが勢いよく開かれた。

そとの吹雪が外から中へと流れ込んでくる。

桜はその寒さを忘れるほど、そこにいる女性に夢中だった。

そして、そこには女性が立っていた。

薄い青の長い髪の女性  
白い着物を着ている。

こんな場所にこのような格好。

人間ではない。

（そうか、）

桜は経験からわかった。

（この人は……、妖怪か……）

桜は再び、人ではない……妖怪と対面するのであった。

次回 『その女、笑う』

## 22 その女、笑う

桜たちは遭難し、寒さを凌ぐため小屋の中にいた。

その小屋に着物を着た女性が現れる。

長い髪で顔は確認できない。

(この人・・・妖怪だ・・・)

桜は経験から感じていた。

開けられたドアから外の吹雪が入ってくる。

いや、その女性本体からも風・吹雪を発しているかもそれない。

女性が動く。それと同時に桜も警戒する。

中へと入る。まず一歩・・・

「きゃあー！」

ドアにつまづいてドン！と前からモロにこけた。

「いた〜い・・・」

ムクリと起き上がる。そして口を開く

「ちっちちちち寒いー寒いでしょー！早くドア閉じましょー！」

女は急いでドアを閉じた。

「あ、暖房つけてくださったのですか。ありがとうございます。」  
ペコリと桜に頭を下げた。

「あの、勝手にあがりこんですみません」

「え？ああ、いいですよ。ゆっくりしてください」

女は髪をかき上げ、笑顔になった。

顔はトロンとした目をし、瞳は紫であった。子顔でかわいいといった顔。

どこか、元気がないような顔である。

顔から察するに年齢は少し上か同年齢といったところ

「寒いですね。あ、暖房の近くにいいですか？」

「え、どうぞ」

女は暖房の近くに行き暖まる。

「あの、こんな雪山で着物でいるあなたは・・・？」

「私ですか？私は“雪女種”の雪音です。」

妖怪であることが決定した。

「雪女？ってこと」

「そうです。寒い・・・」

雪女のわりに非常に寒がりである。

「雪女種って言ってたけど・・・」

「はい。雪女って言ってもけっこういるんですよ。でも私はその中でも特殊で非常に寒がりなので、こうして暖房がないと辛いんですよ。」

「他の雪女さんはどこにいるの？」

「皆さんもつと奥の山にいますよ。あ、人間の方がいくとあの場所にはたぶん凍死しますよ。」

雪女の生態について興味を持ったのかももう少し聞いてみた。

「夏はどうするの？」

「夏はですね、まず冬のうちに洞穴をつくります。で、春くらいですかね、結界を張って洞穴を塞ぎます。いわゆる冬眠ですね。」

「で、雪音さんも？」

「私はずっとここに住んでいます。森の精霊と遊んでいます。」

「・・・だれ？」

「夏になると出るんですよ。」

どつやら桜の常識はこの一日でずいぶんと更新されそうである。

「えっと・・・お名前・・・」

「ああ、ごめんなさい。まだウチの自己紹介まだでしたね。東海林桜です。」

「雪音です。よろしくおねがいします」

こうして握手をした。

その手を触り桜は手を急に引っ込めた。

「あ、ごめんなさい」



すると雪音は急に暗い顔となり、目が虚ろになった。

「いえ、ごめんなさい。私、雪女ですから・・・迷惑かけてごめんなさい」

すると急に室内の温度が急低下した。0 より下であろう

「ささ・・・さ・・・寒・・・い」

「ごめんなさいごめんなさい・・・」

「だ・・・だ・・・大丈夫・・・ですよ」

「本当ですか？私・・・ご迷惑・・・」

「気に・・・しません」

今度はパアツと明るい顔になり、室内温度も元に戻った。

どうやら気分で周りの温度を変化させてしまつらしい。

「桜さん？」

「はい？」

雪音が桜の顔を覗き込むように見た。

ちよつとかわいかったので少し桜は頬を赤くし

「な、なんです？」

「昔、妖怪と会ってます？」

「・・・いえ、会ってませんよ。」

「本当ですか？」

じりじりと顔を近づける。

「そうですか。」

ちよつと残念そうに顔を離していった。

「そうですか……。急にごめんなさい。私たち妖怪には妖力というものがあるんですけど、人間でも持つている人はいるんですよ。」  
「妖力ってあるとどんなことができるんですか？」

「そうですね。私たちにも詳しくはわかりませんが、私の場合、吹雪を起こしたり、氷柱を飛ばしたりできます。」

「へー。なるほど。」

「私の兄ですと、氷をまとうことができます。私と違って、兄や父や母はちゃんとした雪種族ですから。でも、私はあまり妖力がないし、寒さに弱いし、グズだし……。だし……。だし……。」

再び、室内の温度が氷点下に突入した。

「ゆゆゆ！雪音さん！大丈夫ですから！雪音さんもいいところありますよ！氷柱を飛ばせるなんて、夏には力キ氷食べ放題じゃないですか！」

「え！本当ですか！私役に立てるんですか！」

室内温度は再び元に戻った。

桜は先ほどから気になっていたものがあつた。天井の氷柱である。あぶん雪音さんが落ち込んだときにできたのだろう。

「私、家族がいるんですけど、一緒に暮らせないんです。寒がりなんで。それどころか、雪種族の恥さらしって、勘当されてしまっても今は楽しく暮らしてますよ。」

桜は気づいた。雪音が笑顔になってもどこかさびしそうな顔が残っていたわけを。

彼女はいつも一人である。

夏は森の精霊とやらと遊んでいる。

だが、冬は？

「雪音さん。さっきはどこまで行ったの」

その質問をすると体をビクツとさせた。

「えっと、その、そう川に芝刈りに」

「それは山ですよ。」

「え・・・そっそっそっですね。山です！山に芝を・・・刈に。」

しばらくお互い沈黙してしまった。

「桜さん。明日・・・朝一番にここを離れてください。」

「え？そのつもりだけど？」

「そっですか。よかったです。ではもう寝ましょう。」

そう言うと、雪音は部屋の明かりを消して絨毯の上で寝てしまった。桜は何か聞いてはいけないことを聞いてしまったという罪悪感を抱えていた。

午前五時。

キイツと音がなった。

人よりも五感が優れている桜はその音で目が覚めて、ドアを見た。

雪音が外へと出た。

「雪音さん？」

雪音は応えず部屋を出て行った。

桜は気になったが、桜は妖怪に関する用事なのかな、と思い特に気にしないでおこうと思った。

だが、

(ッ!!!殺気!!!)

桜は昔の戦闘訓練により、殺気を感じるくらいはできるようだ。

桜は雪音を追いかけた。

ドアを開けたとき、七海が起きてしまった。

「・・・桜？どうした？」

外は何か危険な感じがする。七海には寝てもらわないと困る。

「便所。」

「・・・下品。」

そう言い、また七海は寝てしまった。

今度こそ、ドアを出て、雪音を追いかけた。

外は当たり前だが暗い。月の光が唯一の明かりである。外の吹雪は止んでいたため、よく見えた。

小屋の少し先に雪音が立っていた。

こちらに背を向けた状態で、何かを見ているようだ。

その視線の先、大きな影が立っていた。

#### 次回予告

茜「こんにちは。茜です。」

黒井「黒井です。いいんですか？僕ら本編に出てないのにこんなことやって」

茜「桜たちは忙しいので私たちがやりましょう。」

黒井「そうですか。では何をします？」

茜「そうですね。実際やることないので、次章予告しましょうか」

黒井「お嬢に内緒でいいんですか？」

茜「かまいませんよ。さて、次章は“東海林家の一族”ですよ。でもこの章はまだ続きますよ。」

### 23 銀色に舞う風

キャラメル店・伽羅女流

「おい！タコ！あの木刀いいのかよ！」

店でエヴァと店主が言い合っていた。

「かまわね。俺が持っていててももう仕方ない。」

「それに！あの木刀狙われてるんだろ！」

「大丈夫だろ。一応封印してある。」

「ずいぶん無責任だな。天下の五大妖怪一人、海坊主よ。」

店主はタバコを出し、すい始めた。

「そついえば、前に狼男のあれ、えっと、何だった？」

「鬼火狼だ。あの狼男種のしつこい奴だ。」

雪山

雪音の視線の先、大型の影。

「雪女種の出来損ない。雪音。さっきはしとめ損ねたが、依頼を達成させてもらおう」

「誰の依頼ですか？兄ですか？」

「それはいえねえ。とにかくこれはビジネスだ。とつとと死んでもらう。」

「狼種も落ちたものね。依頼で殺しをするなんて。精霊が言っていたけど、狼種は誇り高いと聞いていたわ」

「どの種族にみ、はぐれ者とかいる。お前とかな。」

「そう……。でも私とあなたは違う。」

影は大きく笑う。

下品にガッハッハッハッハと笑う。

「何が違っつて？」

「貴方は自ら落ちたのよ。」

「言ってくれるぜっ！！」

影が月に照らされた。姿は二足歩行する青白い狼。

かなり大きな格好をしており、突き出ている牙。後ろには長い青白い髪。

「鬼火狼。私もタダではやられない。」

雪音は両手をクロスさせた。恐らく戦闘の構えであろう。

桜は少しづつ近づく。

雪音と狼の戦闘が始まった。

桜にも会話は聞こえていたのでこれから恐らく常識を超えた戦いをするだろうと思った。

雪音はクロスしていた両手を広げた。それと同時に袖から氷柱が数本飛び出た。

氷柱は狼へと飛んでいく。

狼は避ける。避けつつ、近づいていく。

狼は恐らく近接攻撃が得意なのだろう。必死に避けながら近づいていく。

雪音の氷柱はすぐに弾切れとなった。

次は両手指で大きく輪を作り、その輪に向かって息を吹く。すると、そこから大型の氷柱が出現する。

先ほどの氷柱とは段違いのスピードで飛んでいく。

今度は狼が避けることはできない。そう思った。

狼はよける。だが、完璧には避けることはできず、わずかにかする。

「・・・まさか、テメエ相手に傷を負うとはな。仕方ねえ。」

狼は両手のひらを上へと上げた。

両手のひらから、青白い炎が出てきた。

その炎をお手玉のように、転がすと炎が三つになった。

「三つぐらいでいいな。」

その炎がどんどん形を変える。

一度、丸くなり、所々が出っ張ってき、最終的に四本足の小さな狼の形になった。

見た目は、青白い目がない狼になった。

その狼は一斉に雪音に向かって走り出す。



雪音は迎撃にでる。

数を打とうと思い、両手を広げ、小さい氷柱をたくさん飛ばす。そのうちの数本が三匹のうちの一匹にあたる。一匹は炎に戻り消滅する。

だが、他の二匹の迎撃はできなかった。

(間に合わないっ！)

狼の牙が雪音を襲う。

ポオン！ポオン！

狼が雪音に届く前に、狼の口に雪球が投げ込まれる。

二匹は炎となり消滅した。

雪音は後ろを向いた。

そこには桜が立っていた。

「ども。」

「桜さん！なんでこんなところに！」

雪音は心底驚いた顔をしていた。

「私、ここに来れないようにドアに結界をはったんですよ！」

「ん〜、どうしてだろ？」

「まさか・・・妖力が・・・？」

「はっはは！見られちゃったからには、テメエを殺さないといけね

えな！」

狼は大きく笑う。殺す相手が増え、喜んでいるようだ。

「桜さん……。巻き込んでしまいましたね……。すみません」

「いや、私が望んでなったことだし。気にしないでよ。」

桜は狼に向かって構える。

狼は再び炎を出す。今度は5つ出した。

その炎は狼の形を形成し、襲ってきた。

「今度のは、雪玉くらいじゃあ、どうにもならないぜ！」

桜は手刀を構え、狼に振りかざす。

直撃し、狼は地面へ叩きつけられる。だが、狼は再び体勢を立て直し、襲ってきた。

(ダメだ！踏み込みが！)

桜は雪に足をとられ、うまく力をいれられない。さらに厚着をしているせいで、うまく腕が動かない。

足場さえしつかりとしていれば、おそらく一撃で炎に戻せただろう。

先ほどの一匹ともう一匹が襲ってきた。

桜は着ていたジャンパーを脱ぎ、それを狼の歯に噛ませた。

ジャンパーを自分の元へと引っ張り、それに食い込んだ狼も引き寄せ、今度は肘打ちをする。この動きならあまり踏み込まないので、

大きなダメージを負わせることができた。

もう一匹にもどうように肘打ち。

二匹は炎となり消えた。

他の三匹も桜に向かってきたので、同様に片付けた。そのせいでジャンパーはボロボロとなった。今は上はフリースである。

「やっぱり、これは厚すぎだよね。・・・でも寒っ！」  
「桜さん。私になんとかします」

雪音が桜に息をかけた。

「あれ？寒さが？」

桜の感じる温度が寒くなくなった。

「やるようだな。だが、悪いな。」

狼が指を上へとあげた。

その時、雪音の後ろで音がなった。

青白い炎が飛び出し、雪音に直撃した。

「かつ！！！！」

雪音は少し避けたが、ほぼ直撃。横に吹き飛んだ。

「雪音さん！！！」

桜がかけよる。

だが、狼は攻撃の手を止めなかった。

再び、青白い狼が二人を襲う。

（くっ！またさっきのを！）

桜の近くまで狼が襲ってきたところで、狼は炎となり、炎だけが桜を襲う。

（不味い！ここで避けたら、雪音さんにあたる！）

桜は雪音の盾となり、両腕を盾にしながら五発の炎をくらった。あたった時、爆破をした。

「あっはははは！死んだか！人間！・・・何っ！」

煙がはれたとき、桜は立っていた。

「人間！貴様なぜ立っていられる！防御したといえ、人間がくらえば・・・」

「ウチは鍛えてるからね。それより、そろそろ子分じゃなくて、直接やらない？」

狼は黙る。いままでの人間とは明らかに違う。そう思っていた。だから、近づくのは危険と思っていた。

「いやだね！」

再び、炎をだし、今度は狼の形にならず、直接桜に向けて飛ばす。

「桜さん！どいて！」

雪音が立ち上がり、手を広げ、氷柱を飛ばす。  
炎にあたり、爆破を起こす。

「桜さん！今です！」

その声を聞き、桜は狼へと走る。  
桜の制空圏に入った。

「人間があ！」

狼は爪を立て桜をかこうと振りかざす。

（見える！）

桜は完璧なまでに避ける。  
狼との距離はほぼない。だが、桜は狼の動きを見て、避け、時には腕を掴む。  
そして、

「せいっ！」  
ポオオンツと音が鳴った。

桜は隙を見つけ、重心を安定させ、正拳突きを一発。

狼は飛ぶ。

背中から地面に落ち、まだ勢いがあり擦りながら後ろへと飛ぶ。

まだ、戦う気があるらしく、狼は起き上がる。

「こんな人間……なんかに……。ふううざけるなあああ……!!」

狼は怒りだした。

妖怪ならまだしも、人間にこうも押されるのでは、プライドが許さないようだ。

狼は天に向かって吠え出した。

そして、狼は燃え出した。

まるでオーラをまとうように青白い炎が狼から出ている。

「さあ、仕切りなおしだ。いくぜ！」

狼が動く。桜は一切視線をそらすことなくそれに反応する。狼の膝蹴り。それを防御するが

「爆ぜろ」

小さな爆発が膝から起きた。

爆発が小さかったのであまりダメージは負わなかったが、桜は怯む。そこへ、狼はひっかく

さつきとは違い、少し遅れたため、桜は直撃をしなかったが、少し引掻かれた。

桜の脇から少量の血が出る。

その垂れた血は下の白い雪をポツポツ汚していく。

「桜さん！」

「大丈夫！かすっただけ。」

さらに狼の攻撃は続く。

一度、大きく跳躍して桜から離れた。

「もう終わりにしてやんよ。」

燃えた狼は自分の炎を解放し、いくつかの光線となって桜へと向かっていった。

「させません！“氷塊壁”」

桜の近くにいた雪音は氷の壁を建造した。

それにより光線を防ぐ。

だが、壁が次第に解けていく。光線が桜たち二人へと近づく。

「はっは！無駄だぜ！これは俺の体力をけっこう使うからな！それなりに強力だぜ！」

「やっぱり、今の私では・・・」

桜は今になって気づいた。

雪音の背中が血で汚れている。白い着物が血で汚れている。

さっき、攻撃を受けたときの傷だ。

雪音の作った壁が崩壊しかけている。

そして

青白い光は氷を突き破り、大きな爆発が起こった。

次回、決着編



## 24 銀色に舞う刀

雪音の作った大きな壁が爆発し、付近に粉雪が舞い上がる。

粉雪がはれ、二人の姿が見え、爆破の中心地には雪音一人が倒れていた。

いや、たしかに二人いたのだが、雪音が上にかぶさり、桜を爆破の衝撃からかばっていた。

「雪音さん……？」

雪音は応えない。

桜は雪音をどかし、雪音の顔を確かめた。  
目をつぶったままであった。

「雪音さん？……ねえ雪音さん！返事して！雪音さん！」

桜は涙を流しながら必死に雪音を揺らす。だが、雪音は返事をしない。

「うそ……。うそでしょ……。わたしは……。また……」

桜の目は大きく開かれひたすら涙をながしていた。

その先で、狼は笑っていた。

「はっは！お仕事一つ完了だあ！人間！次はテメエだぜ！」

「「黙れ」」

桜はただ一言、それだけを言った。

狼はその一言に圧倒され後ろへと後退させられた。

（な、なんだ？この威圧は？動けないだど！？）

そこから、狼は見た。

桜の身体から発せられる黒い何かを

悪魔・・・鬼・・・

そのたぐいの像をしたオーラのようなものを見た。

（これが？人間？確かに奴は人間だ。それは間違いない。だがこれは？人間が持つ妖力にしては異常だ。）

「くそおおおお！！！！人間！！！！」

狼はやけになり、炎を飛ばした。  
何個も何個も

だが、その炎は桜にあたる前に弾けてなくなる。  
桜は細く冷たい目を狼へと向ける。  
そして、ゆっくりと、狼に口をあけて告げた。

「今、お前をここで殺しても、雪音さんはもどらない。だが・・・」  
その一言一言が、狼を威嚇する。

「　　“わたしはお前を許さない！！！！”　　」

ついに狼はしりもちをついた。  
圧倒され、膝の力がなくなった。  
そして桜が一步踏み出したとき、

「・・・くらさん。」

桜の後ろからかすかに声がした。

「雪音さん！」

すぐさま雪音の元に向けより、安否を確かめる。

雪音は生きていた。かすかに息をしている。

「ダメです……。そのままでは……。桜さん……。自分を見失わないで」

「わかりました。大丈夫です。ウチはウチのまま戦います。」

桜は立ち上がり、狼を見た。

その時、桜の後ろから太陽が昇り、桜を照らす。

桜の後ろにはさきほどのオーラはなくなっていた。

そして、伽羅女流で店主が言っていたことを思い出した。

望みをかなえる。

そういつていた。

今の願いは……………

「こい！村雨！！！！ウチのところへこい！！！！」

すると遙か彼方から何かが飛んできた。

村雨である。

桜の手に向けて高速で飛んできた。

その村雨をつかみ、桜はかまえた。

「ウチは殴る蹴るよりも、木刀使うほうが強いよ！」

「人間、お前は不思議なヤローだぜ。」

狼は再び燃え出した。

そこから、青白い炎を飛ばす  
桜は木刀をふり、それを真つ二つに切る。  
すると、炎は爆発することなく、消えていった。

「これはどうだ！」

次は十個の炎をだし、全部狼の形となり、桜を襲う。

狼は桜を中心に円を描くよう陣を組み、一斉に襲い掛かる。

「どおおおおりやああ!!！」

桜は木刀を高速で振り回し、次々を狼を消す。  
桜の周りに青白い炎がちらちらと散る。

「十匹はアンタきついでしょ？」

そのとおり、狼は息遣いが荒くなっていた。

「に・・・人間。お前を！」

今度は接近してきた。助走をつけた膝蹴り。  
桜はそれを木刀で防御する。

小さな爆発をおこすが、今度怯まない。  
狼の爪をしゃがんで避け、そこから顎に向かって木刀を振る。

上手くあたり、狼は上へと飛ぶ。

地面に落ちる前に桜は追撃として横一閃でさらに吹き飛ばす。

すぐに起き上がり、炎を連続で飛ばす。

桜はそれを切ることなく華麗に避けながら近づくと

狼は恐れを感じ逃げた。

だが、逃げた先が問題であった。

小屋の近くへと逃げ出した。

「まずい！あそこには氷柱たちが！」

「はっは！その様子だと、小屋の中には人間がいるようだな！なら  
！」

狼は大きく息を吸い、口をあけようとした。

「させるかあああ！！！」

だが、ほぼ同時であった。

狼の吹いた巨大な炎は小屋を燃やした。

そして、桜は狼の頭を木刀で殴り、地面へと叩き落とした。

小屋が燃える。

その瞬間、桜のポロポロになったジャンパーが光った。

「なに！？！」

ポケットを突き破り、中から小瓶が出てきた。

以前、修羅山で砂かけババからもらったお守りであった。

小瓶が燃えている小屋へと飛んでいき、中から、考えられないほどの砂が出てきた。

量は莫大な砂であった。

その砂は炎の上へと落ち、火を鎮火した。

「ば……か……な……」

そして狼は気を失った。

その後、小屋の中にいる氷柱たちを確かめたらまったくの無傷であった。

外の戦闘で氷柱たちが起きなかったのは、雪音の張った結界によるためであつたらしい。

それを確認して、外へとでると、不思議なことに狼の姿はなかった。

雪音は心配ないといっていたが、桜はここにいればまた襲われるのではないかと心配だった。

次回、エピソード編



## 25 銀色に舞う雪

「桜さん。ありがとうございます。私一人でしたら今頃は・・・」  
「いいっていいって、そんな。それに私だって、あの光線から雪音さんがかばってくれなかったら、木刀使ってあんなふうになんか戦えなかったよ。」

二人は夜明けの外で話している。  
太陽の光を雪が上反射し、周りは光り輝いている。

桜は先ほどから思っていたことを言ってみた。

「そのさ・・・、ここにいたらまた襲われるんじゃない？さつきみたいに」

「確かに、また襲われるかもしれない。おそらくあの狼を雇ったのは兄です。」

「どうして？」

雪音は一度天を見て悲しそうに告げた。

「兄は、私の存在が邪魔なんです。私という妖怪が存在するという事実。これがある事情があって邪魔なので亡き者にしよう」と

「雪音さん。」

桜は言葉が見つからなかった。

そんなことを実体験したことがないから不用意なことを言ってしまうことを考えていた。

「大丈夫です。妖怪では肉親の殺し合いはよくある話です。ですか

ら、その、人間である桜さんには少し考えがたいことなんです。」「そう……ですか。」「ですから、いいんです。私は兄と戦うと、桜さんに助けられ決めましたから。」「

桜は思い切って言うてみた。

「雪音さんはここにいちゃいけない！あなたは殺されていい人じゃない！」「

すると、後ろでドオオオオンっと大きな音があった。

その後、

桜たち四人は無事、ホテルまで帰ることができ、先生にこっぴどく説教された。

普段やる気のない紫部だが、生徒のことは大事に思っているのだから、本気で説教をした。

そして今日は桜たちは帰宅する日である。

今日は小樽と札幌の観光をする。

クラス行動なので、桜と七海と南の三人で話していると、

「あら？桜？昨日遭難したんですって？」

椿が話しかけてきた。

「アンタ別クラスなのにいいの？まあ遭難したよ」

「そう。それでこの傷は？」

椿は服の上から桜の腕をなぞった。

「いたっ！何で服の上からわかる？」

「私と桜の関係だからと言っておくわ。」

「さっくらちゃん、七海ちゃん。アイス食べよ。」

「アイス？すげ！六色アイスだって！六色だ！」

「七海！こっちもすごいよ！かにアイスだって！」

南は六色アイス、七海も、六色アイス、桜はかにアイスを選んだ。

「……（か……かに！）」

「桜？どうした？何か顔が？」

「よし、ジンギスカンキャラメル一斉に食べよう！」

「よし、せーの！」

三人の顔が一瞬で変わった。

「（に・・・肉！ただの肉の味！！）」

「は・・・はいたら罰ゲームだかね・・・」

「七海ひゃん・・・」

こうして、雲の上学園一年生の楽しい三月旅行は無事に終わった。

「じゃあ、桜ちゃんも氷柱ちゃんも七海ちゃんも気をつけてね！」

羽田空港についたら、自由解散だったので、南は迎えの車で帰っていった。

続いて、氷柱も迎えのリムジンで帰宅。

七海も迎えが来たといい、トコトコと帰っていった。

雲の上学生は金持ち学生が大半なので、迎えが来ている。

桜も例外ではないのだが、札幌の空港で電話し、迎えはいらないと言った。

桜もお嬢様なので、普通は心配するが、茜は何かあっても桜なら大丈夫とわかっているので、承諾した。

桜は一つ考える時間がほしかった。



」

そして、時間は戻る。

東海林家では

今では黒井と茜がお茶をしていた。

「茜さん。本日お譲が戻られるのですよね」

「ええ、そうですよ。今回は何も拾ってこなきやいいですが。いくら言っても聞かないのよ。」

「前は、キツネ。その前は鷹を拾ってきましたね」

「ええ・・・、それから、呪いの盾なんてのも」

「それから呪いの鎧もありましたね。」

「あの子・・・、呪われているの知っていて、持ってくるのよ。持ち主が不幸にならないために、うちでお払いするって。動物を拾ってくるのも、基本的にあの子優しいのよ。」

「そうですね」

「今回も何か拾ってくると思うと心配だわ・・・。」

茜がため息をつく

「ただいまーーーー！！！！！」

元気のいい声が聞こえた。

「あら、桜よ。出迎えなきゃ。」

玄關に行くと……

「人拾ってきた。東海林家のメイドさんにしていい？」

「人は拾ってくるなああああ！……！！！」

ゴオオン！！！！

「いた~~~~~い！！！」

雪音はオロオロとしていた。

こうして、なんだかんだで雪音は東海林家のメイドとなった。

次回予告

茜「まったく桜は・・・」

桜「へへ、ごめんなさい」

茜「さて、次回は桜の従兄弟が登場します。」

桜「それとメイドとなった雪音さんの活躍にもご注目！」

茜「では、短いけどまた次回ですわ。」

桜「あ、ちなみに雪音さん茜さんより歳下ですよ絶対」

茜「な〜に〜が〜言いたいんですか〜」

桜「ごごごめんなひゃい、痛いよ〜ほっぺたやめて〜」



26 三章『東海林家の一族・前』（前書き）

今回から新章です。

学園とはしばらく離れますが、桜の家関係の話を楽しんでください。

“前”というのは、もちろん“後”もやりますが、それはしばらく後です。

ではではん

## 26 三章『東海林家の一族・前』

桜の三月旅行が終わり、学生はそれぞれ進級するまでの間、休養をとることになっている。

東海林家

ジリリリリといかにも古そうな電話の音が鳴り、東海林家のメイドである茜が受話器を取った。

「東海林家使用人茜でございます。」

二階に桜の部屋があるが、今はそこに桜の姿はない。

三日後に行われる“年度末報告会”という親族行事に提出する資料を作成するため、現在は図書部屋にいる。

この図書部屋は大きさは普通の部屋であるが、壁一面に本が埋まっており、部屋の真ん中に机がある。

この部屋を使うのは、主に茜と黒井そして、まだ紹介をしていない田中だけだ。

「桜!!!!大変ですよ!!!!」

図書部屋に茜がバタバタとあわてた様子で入ってきた。

「どうしたの？」

「理事長からお電話が入ってますよ。何やらかしたんですか？」

桜は“ウルトラキャラメル”の件を思い出す。そのことで電話が来たのだらうと思ひ、電話に出た。

茜から子機を受け取り、茜は部屋から出て行った。

「はい、桜です。」

『コングラッチレイション!!!よくキャラメルを買ってきた。』

「理事長が退学とか脅すからです」

『私の視線に気づかず、私の前を素通りしたお前が悪い。』

「で、いつ渡せばいいんですか?」

桜はとつと話を終わらせたかったので、本題に入ることにした。

『今。といたいたいところだが、私は今パリにいる。お前に来てもらいたいが、私はあいにく暇ではない。だから、入学式に私の第二理事長室に来い。』

「あの・・・、第二理事長室ってありましたっけ?」

桜の言うとおり、第二理事長室などは聞いたことはない。

『いわば私のプレイルーム。お遊び部屋だ』

桜の脳内に電撃が走った。

(コイツ、ウチで遊ぶつもりだ!!!!!!!!!!!!!!)

『では、see you again』

理事長からの電話はきれた。

桜の入学式はとても憂鬱なものとなった。

それは今は置いておくとして、今は資料作成しなくてはと思い、再び机に向かった。

桜の書いている書類は、まず収入出費一覧である。

領収書を見ながら出費を書いている。  
その後、活動報告なども待っている。

「田中さん。いらっしやいますか？」

茜は執事長室の扉をあけた。

部屋には一人の老人が椅子に座っていた。

白髪、そして顔には片方の眼鏡（執事がつけてるアレ）。そして穏やかな目をした方である。

今は鼻に風船を膨らませている。

「田中さん！起きてください！」

茜は両手を合わせパン！と音を鳴らす。

「っ！茜？いたのですか。」

「明後日の恋継様の披露宴のことで、屋敷のセキュリティをレベルEにまで落とさなければならぬのですが。」

「かまいませんよ。というか任せます。ぐう」

田中は再び眠った。

「ということなんですが、人員の配置について、このようにしようかと」

「そうですね。この日なら、お嬢も脱走しないと思いますし、問題ないのでは」

「私の庭に入ってこなければ問題ありませんよ」

今度は居間で茜・黒井・白井の三人で話し合っていた。

「あ！それと、今日からここで働くことになった方の紹介をしますね。雪音さん、入ってきてください。」

扉から白い着物姿の雪音がはいつてきた。

「あの・・・その・・・雪音です。よろしくおねがいします。」

雪音は人見知りするタイプのように、オドオドとしていた。

一通り自己紹介をした後、明後日のことについて再び話合った。

「では、私の美を皆様にごらんいただくよう、今日より庭の手入れを徹底しますので、近づくのはご遠慮いただきます。」

「不知火と大鷲はどうします？」

「あの二匹はおとなしいから、問題ありませんよ。いつも通り放し飼いでいいですよ。」

雪音がここで疑問に思ったことを聞いてみる。

「あの・・・大鷲と不知火とは何ですか？」

「雪音さんにはまだ説明してませんでしたね。不知火は我が家で飼っている“狐”です。大鷲は“鷹”です。桜が拾ってきたんですよ。不知火はたしかカチカチ山でしたっけ？」

「ええ、大鷲はシンデレラ城です。」

なんだか、よくわからない地名であったが、そこはスルーする。

要するに桜が死に掛けの二匹を看病したらついてきたらしい。

「どついつわけか、二匹とも頭がいいので、私たちは困らないんですよ。後で二匹を呼びますね。」

というわけで、話が終わり、茜と雪音は外へと出た。

「不知火く大鷲くきなさくい」

すると、空から大きな鷹が飛んできた。

普通の鷹より大きく、人を運べる大きさの鷹であった。

もう一匹の不知火も走ってきた。

こちらは普通の狐であった。子犬くらいの大きさである。

「じゃあ、二匹とちょっと戯れてください。私工サを持ってきますから。」

茜は屋敷へともどり、雪音は一人になった。

「あのく、不知火さん？大鷲さん？」

「お前雪女種だな。」

狐は口を開けて話し出した。

「やっぱり、妖怪ですか。わたしも雪女ですけど。」

「俺はまあちよつとした妖怪だ。だが、大鷲は違う。普通の鷹だ。」

「そうなんですか。でもなぜか私たちの会話に反応してますよ。」

大鷲はずっとこちらを見る。

「俺の近くにいたから、妖力が移っちまった。話ごとくらしいはできる。」

「そういことです。僕は震驚です。よろしく雪音さん。」

「あらあら、本当に桜さんは変わった環境ですんでいるんですね。話せることは皆さん知ってるんですあ？」

「いや、知らない。俺はお前が妖怪だから話した。みんなに言うなよ。」

「雪音さん。エサを持ってきましたよ。あら？」

雪音と動物二匹はすでに仲良くなっていたので、茜は意外そうな顔をしていた。

「では、仲良くなったことですし、ご飯係りお任せしますね。」

一方の桜は、

「鬼のいぬまにつてやつかな？」

桜は図書部屋の窓から脱出を試みた。

「たぶん赤外線防犯装置がしかけてあるから・・・」

桜は本棚の上にある本をとった。

その本は実は本ではなく、本の形をした箱であった。

そこから、赤外線ゴーグルを取り出し、装着し、窓の赤外線をみた。次にその赤外線を避けるように窓から出る。

白井は……

「フンフン フンフフ」

白井は箒の形をした、仕込み刀でズバンズバン！と庭の手入れをする。

手入れをしていると、遙か上空で鳥が飛んでいた。

ヒュ！つと糞を庭に向けて落とす。

庭の草木に落ちる間際、

「させん！」

一気に跳躍して、着く前に刀で弾く。

「我が美の領域を汚そうとするとは、万死に値する！！あのクソ鳥があー！！」

白井は糞を落とした鳥を追いかけていった。

戻って、桜。

窓の赤外線をきわどい体勢で避けていた。すると遠くから何か白いものあ飛んできた。

先ほど、白井が飛ばした糞である。

「ちよ！え〜！！！！」

さすがにこのままでは、糞にクリーンヒットしてしまうので、避



けようとしたが、今の体勢で避けるのはほぼ不可能。  
やむおえず、桜は赤外線に触れ避けた。  
触れた時、警報などは一切ならなかった。だが、下の草木からまず  
ネットが飛んできた。

「いやっ!!」

桜は飛んで下の草に着地する。  
すると、両サイドから麻酔弾が飛んできた。  
それをまた飛んでかわす。

森の中へと進む。すると草の中から銃が出てきた。

「セントリーガンだと!」

セントリーガンとは動く標的を狙撃する自動銃である。  
桜はそれを木の上にするなど、木を立てにするなどをしてかわす。  
そしてセントリーガンのエリアを脱出する。

その後、電磁トラップ・ハンマートラップ・催涙弾エリアを突破し、  
屋敷を囲っている壁が見えてきた。

そのまま前進して、家を脱出しようとする。  
カチッと音が鳴る。

「とう!」

鳴った瞬間とび、近くの木へと捕まった。  
その場所に大きな穴ができていた。  
だが、桜の掴んだ木。それはトラップであった。

「何これ！？離れない！あ！しかも上から煙が！」

「対桜用トラップですよ。」

茜が近づいてきた。

「桜なら、あの落とし穴トラップかわすのは当然ですからね。」  
「・・・茜さん。これどうすれば・・・」

「一晩このままでも私は問題ありませんけど？でもここらへん、蜂が飛んできますよ」

「ごめんなさいごめんなさい！！！助けて！！！！」

それやりとりを雪音は離れたところで観察していた。

桜は図書部屋で茜の監視つきで作業することになった。

「茜さん？」

「なんです？」

「兄貴の結婚式明後日だっけ？」

「ええそうですよ。」

「じゃあウチお祝いの言葉を言いに行く！」

茜は少し考えていた。

明後日の桜の服や、お祝いの言葉はもうすでに用意してある。

そのことはないが、報告会で資料ができてないと桜が半殺しに合っつ。  
一応桜が書くことは用意してある。

まあいいかと思った。

「仕方ありませんね。それじゃあ、恋継さんの家に行きましよう。」  
「やった！」

#### 次回予告

桜「ってことで、今回は“恋継という男”だよ」

茜「くれぐれも恋継様を殴ってはいけませんよ」

桜「な、何を……」

茜「この前だって胸のこと言われて、ぶっ飛ばしたじゃないですか。」

「

桜「う・・確かに」

茜「まあ気をつけてくださいよ」

## 27 三度目の愛

「しっかし、あの兄貴本当に結婚できるのかな？」

「不吉なこといっちゃダメですよ！」

二人は恋継の家に行く準備をしながら話していた。

桜がこんなこというのには理由があった。

結婚式一回目、三年前。

「はっはっは！見たか桜！俺もついに結婚だぞ！いつもバカバカ言いやがって、

そんな俺もついに！」

礼服に身を包んだ恋継はよほど嬉しいのか、控え室で桜に自慢しながら泣いていた。

「でも兄さんバカだから愛想尽かされるんじゃない？」

「ばっ！何を言うか！一葉さんは俺のバカなところも、あの人そっくりで好きだ

って、どこか遠い方を見ながら言っていたぞ！」

桜は白けた。

「その…あの人って誰？」

恋継は幸せの絶頂で、躍りながら話し出した。

「そんなのどうでもいいじゃないか たしか友達って言ってたけど。たまたまに食事

するなかだつて」

「へ〜…（ドラマチックな展開が起きなきゃいいけど）」

「汝は妻を最愛の…」

と言った瞬間…

「一葉！！！！！！」

バンツとドアを勢いよく開けた一人の男性。

「俺と…今まで言えなかったけど俺と結婚しよう！！」一葉は走りだし…

「一朗！！」

と抱きついた。

「もう、二度と話さない。ずっと一緒だ！！」

「ええずっと永久に」

「さあ二人の門出だ！」

と言いつ場を出ていった。

残された恋継は立ったまま気絶をしていた。

二回目、一年前。  
同じく控え室で

「今度は大丈夫なの？」

「桜よ…。手痛い同じことを二回やるのはバカだぜ。」

「バカじゃん」

クールに決めた恋継にクールに桜が答えた。

「今度の二葉さんは大丈夫だ！浮いた話なんて周りから一切聞かない！」

「へ〜」

「今時珍しいねとても清楚な方で…。あなたといると疲れるしけど、楽しい時もあると…」

そこまで話した時

コンコン

ドアを叩く音

その日雇った、ボーイが入ってきた

「新郎様宛に新婦様からお手紙を…」

桜は恋継よりも早く手紙を奪った。

「恋継さんへ

あなたについていけません。

「二葉」

ふらふらとよるめき、恋継は椅子へと座った。

「桜よ・・・燃え尽きちまったぜ・・・」

それから数カ月は真っ白に燃えつきていた。

そして時間は現在に戻る。

「次は金目当てで結婚しようとして捕まるパターンかな」

「もう、桜。そんな不吉なことってはいけません。」

桜は紅茶を飲み一息ついて。

「さて、私はバカを笑いに行こうかな。じゃあ行こう！」

と席を立った桜に

「あ、それと桜の友人も式に呼びましたよ。西園寺さんと、南嶋さんと、北皇子

さん。中嶋君はつかまらなかつたから、三人ね。」

「識はどうせバイトだろうし仕方ないよ。じゃあ、兄貴の家に行ってくるから

、へり出して。」

東海林家ではへり移動が普通らしい。

「今は移送用が結婚式の準備で使ってるので、ハイヤーしかないですけどいいですか？」

「ん。ハイヤーは使いにくいけどいいか。黒井君補助運転お願い。」

「はい。かしこまりました。」

桜の執事黒井は30分ほどハイヤーを操作し、東海林恋継の屋敷に行った。

桜の屋敷ほど大きくはないが、明らかに金持ちの家である大きさだ。屋上にはヘリポートがあるが、恋継宅にはヘリはない。主に親戚の為に作ったものだった。

桜はヘリポートに着陸した。

そこに出迎えのメイド、執事がいた。

「お久しぶりです。桜お嬢様。」

落ち着いた声、容姿の執事。不破（65歳）が一番に声をかけた。

「不破さんもお久しぶり。兄貴は？」

「若は、服を選別中です。自室にいます。」

「ありがとう。黒井君は不破さんと話でもしてて。私はバカと話してくる。」

「バカは・・・ではなく、若は今回の結婚はいつもとは気合いが違います。見ていただくとわかりますが。」

恋継の部屋からは、喜びの歌が聞こえる。桜はこれを破滅へのワルツと読んでい



る。

「兄貴、バカ面見に来たぞ。」

「マイシスターか。と言つても従兄弟だがな。マイシスターよ、俺は今日から生

まれ変わる。いや、変革する！」

「俺がガ ダムだ！を見ただろ。」

「ぬ！さすがマイシスター。みと…」

「赤い人の名言を言うな。それにアンタはもう若くない！」

「ガ~~~~ン。だが俺はまだまだ、若いとか青いなど三葉さんが言つてたぞ

！」

桜はここで結婚相手の名前を知った。

机を見たら、恋継と誰かが写っている写真があった。

（これが三葉さんか…。なかなか美人だ。しかも…）

「三葉さんはお前と違って、おっぱいが大きいんだ！…！」

ブチッ！！

何かが切れた。

「誰が貧乳だああ！！」

そして、桜たちは家へと戻った。

「で、ボコボコにして帰ってきたんですか？」  
家に戻った桜は事を知った茜は呆れた顔をしながら言った。

「だって…乙女の…」

「どうせ胸のことを言われたんでしょ。まったく…」

そして、運命の結婚式を向かえる。

#### 次回予告

桜「今回は時間の都合で短く・・・次回からタイトルがああ愛の歌になります。」

恋継「桜が愛？・・・ぷっ！！」

桜「どおおりやああ！！」

恋継「ひでぶー！！！！！！！！」

## 28 レスキューガール

結婚式当日。

「黒井さん、白井さん。そちらの準備はいいですか？」

「こちらは大丈夫です。」

「私の美の庭は既に準備万端さ。」

「あの茜さん。これはどちらに……？」

桜邸庭では恋継の結婚式の準備が進められ、ほぼ完成していた。四人の使用人が準備をしていると主である桜がやってきた。

「ウチも何かやるのか？」

「いえ、桜はお祝いの言葉の練習をしておいてください。」

桜は手元に持っていた紙をもう一度見た。

それにはビッシリとお祝いの言葉の文が埋め尽くされていた。

「これを嘔まずにすらすらとだよね。」

「そうですね。今日は、東海林薔薇都一家のご夫婦がいらっしやいますから。」

「うそっ！！えっ！そんなこと言っただけ？」

茜はため息をつき、

「昨日言いましたよ。まったく……。」

桜は眉間にしわを寄せ、真剣に文の朗読を始めた。

「あの薔薇都の親父と叔母さんは、失敗するとネチネチうるさいからなあ〜」

「ですから、桜はそれを頑張ってください。会場とかは私たちでやりますから。」

「わかったよ。茜さん。」

桜は文章を朗読しながら戻っていった。

そのころ、恋継邸。

「不破！出発まであとどのくらいだ！」

「10分を切っております！」

「愛歌と恋美はどうしてる!?!」

「すでに桜様家付近にあります。」

「三葉さんは!?!」

「同様に桜様家付近におられます。とありますが、恋継様が一番遅れています。自分の心配をしてください。」

恋継家ではバタバタと準備をしていた。

「それにしても、若。桜様から受けた傷よくなおりましたね。」

「ああ、あの猿からは、猿が中学の時から殴られているから、俺の治癒力も上がっている。」

「骨折ですよ？若もバケモノですよね。」

恋継邸には本家から、レンタルをしたヘリが待機をしていた。中にいるのは本家から派遣された使用人がいる。

「恋継様！お急ぎください！本家の方が待つております。」  
「今いく！それと母さんはどうしてる！」

するとへりから顔だけだす女性がいた。

恋継の母である“東海林瞳”である。

この人は桜の母の姉にあたる。

「急ぎなさい。薔薇都のお兄様に叱られますよ」  
「母さん！わかってますよ！」

そして桜家付近の八王子駅。

そこにはバイト終わりの識が歩いていた。

駐輪場から自転車を取り出し、今から家へと帰ろうとしていた。  
その識に向かい二人歩く人がいた。

「おい、貧乏人。」

いきなりわけわからない二人に貧乏人と言われさすがに腹が立った。

「おい初対面に向かってそれはないだろ。つーかお前何者だ？」  
「道教える。」

あくまで最低限のことだけを伝える二人。

一人は赤い髪をした同年代の女の子

もう一人は青い髪をした同年代の女の子

顔はかなり違う。赤い髪は目が大きく活発的なイメージが強かった。

青い髪の方は、暗い目をし消極的な女の子であった。

識に話をかけているのは、赤い髪の方であった。

「おいガキ、お前な」

「東海林桜の家を教えろ」

桜の名前が出て、この二人は桜邸に行く人間であることを知った。二人を見ると、高級品を身につけていて、いかにも桜の親戚のような感じがしていた。

「桜の家か？タクシーで東海林邸って言えば行ける。」

「タクシーに乗って誘拐されたことがある。怖い。」

金持ちだと確かに知らない人間の車に乗るのは怖いかもしれないと思った。

だが、その時不思議に思ったことがあった。

「・・・付き人とかいるだろ？どうした？」

「誘拐犯にノックアウトされた。」

その瞬間、全身黒い服に身を包んだ人が二人現れた。

「いたぞ！あの二人だ！応援を呼べ！！」

識は見た。その手には携帯電話と黒いL字型のアレ。

やくざ用語でハジキというアレ。

そして識は女の子二人をそれぞれ自転車の後部座席とサドルに座らせ、自分は立ち乗りをし、

「にににににに逃げるぞおおおお！！！！！！」

猛ダッシュでその場を後にした。

丁度その時、恋継の乗ったヘリの中で。

「不破。恋美と愛歌についていったのは誰だっけ？」

「弱久です。あいつが運転しています。若が弱久がつくよう言ったのですよ。私は反対したのに」

「あら、弱久さん運転なんてしてましたっけ？」

「ペーパーですよ。奥様。あいつは家事は完璧ですが、他のことは・・・」

「ま、さすがに事故を起こして、その隙に誘拐犯に恋美たちが追いかけられることはないだろう」

三人は笑いながら談笑をしていた。

まさに現実はその通りであるとは知らずに。

八王子市街。

裏道を激走する自転車があった。

「おいガキ！そのノックアウトされた使用人はいいいのか！！」

「アイツは死なないから問題ない。貧乏人。このまま桜家のとこまで頼む。」

「クソツ！おれはタクシーか！！」

それまでずっと黙っていた青い髪の少女が口を空けた。

「後ろ来た。」

「何っ！！」

後ろを見ると、黒いベンツが三台。そして助手席の窓から手を出して、その手にはし字のハジキが握られていた。  
裏路地なので、一台ずつ縦にならんで追いかけてきていた。

「おいガキ！こっから飛んだりするからしっぴかり捕まれ！」

二人は言われたとおり、前の識の腰にしっぴかりと掴んだ。

識は右折左折とし、昇り階段の道に出た。

端っこの方は段差ではなく坂道であったので、そこを上ろうとした。斜度は45度。驚異的な脚力でススつと昇った。

下のベンツはさすがに階段を昇ることができず、助手席の男が窓から顔をだした。

「まずい！！」

識はとつさに予感した。

そしてグリップに力を入れて。

バァン！！

黒服の発砲。

識は自転車でジャンプする。

まさかの行動に弾丸はそれた。

そのまま階段を昇りきり、識は広い道へと出た。



「おもしろい！もう一回あそこではねて！」  
「アホか！」

黒いベンツから一人の女性が出てきた。  
全身黒づくめで、顔は黒い帽子で隠されている。  
二人を逃し悔しそうに歯軋りをしていた。

そして、識たち。

「そうだ！桜の家に電話しろ！助けを呼ぶんだ！」

「さっきのジャンプで携帯落とした。」

「何い！じゃあ青髪の携帯は？」

「青髪じゃない！恋実だ！私は愛歌だ！」

識は初めて二人の名前を知った。

「そういえば自己紹介どころじゃなかったからまだ、言ってなかったな。俺は……」  
「中嶋識でしょ。桜の家の写真で見たことある。たしか生徒会の人でしょ。」

自分のことを知っていたのに驚いた。

同時にこの二人が桜とどういふ関係なのかも気になった。

「桜とは親戚か？知り合いか？」  
「従兄弟だよ。今日私の兄貴が桜の家で結婚式すんだ。だから遅刻しないように急げ貧乏人。」  
「名前知ってんなら名前でいえ！」

識はなぜ自分を訪ねたか理解した。  
桜の知り合いで生徒会の人間なら信頼できると思ったのだろうと思  
う。

「ここを突っ切れば、桜の家だ。」

識は角を曲がり、大通りにでた。  
三人はあともう少しで桜の家につくと思いきや安堵していた。

だが、

大通りにでた瞬間。猛スピードでベントツが突っ込んできた。  
当たる寸前の所で急ブレーキをし、さらに別方向からも来て、識た  
ちは四方ベントツに囲まれた。

ベントツからは男が出てきて、銃を片手に話かけてきた。

「小僧。ずいぶん逃げてくれたな。この件に関わった以上。ここで  
・・・」

識は銃を向けられる。

その時、空から大きな音が近づいてきた。  
バラバラとヘリの音であった。

同時にそのヘリからロープが垂らされた。

「そこお！！私の親戚に何をしている！！全員そこを動かすなあ！  
！」

空に浮いていたヘリから垂らされたロープを伝い、特殊部隊のよう  
な集団が降りてきた。手にはマシンガン、体に防弾チョッキを着用

していた。

その後、三人は無事に保護され、ベンツの集団は全員逮捕された。三人はそのへりに拾われた。へりの中には年配の男性と女性がいた。

「薔薇都おじさん！」

愛歌がそう叫んで薔薇都に抱きついた。

「大きくなったな！愛歌。それに恋美もな！」

はっははは。と笑い。ハグをしていく。そこで識に気づいた。

「君は？」

「桜の友人の中嶋識です。」

すると恋美は識の服の裾を掴み

「恩人……、私たちを助けてくれた。」

「そうかそうか！これは何かお礼をしなくてはいけないな！この後結婚式があるのだが、来るかい？」

「いえ、そんな……できれば家に帰してください。」

「遠慮するな！さあ来い！」

こうして識は桜の家に連れられた。

そして、恋継も同時に桜の家に着し、ついに結婚式が始まること  
していた。

「で、何で識がいるの？」

ここは桜家の控え室。

部屋の中には、桜、識、恋美、愛歌がいた。

私服であった識も強制的に着替えさせられ、今はスーツ姿になっていた。

桜も恋美、愛歌も披露宴なので、ドレス姿になっていた。

「仕方ないだろ、お前の叔父さんか？薔薇都さんつーのにつれてこられたんだよ。」

「で、その後ろに引っ付いている愛歌とはどういう関係？」

桜はあからさまにイラつきながら質問をしていた。

識の後ろには愛歌が識の服の裾を引っ張りくっついていていた。

「知らねえよ。」

「何顔赤くしてんのよ。」

「いや知らないって！」

「ちよつと貧乏人！愛歌から離れなさいよ！」

「俺に言うな！」

三人で話しをしているとドアが開き、雪音が入ってきた。

「あの・・・準備ができましたから、庭へと・・・」

「あ、雪音さん。ありがと。」

「その人誰？」

たびたび桜の家へと行く恋美は雪音は知らない顔だったので聞いてみた。

「この人は雪音さん。先日ウチのメイドさんになった。」

「そうなんだ。私は恋美、であっちが愛歌。二人とも桜の従兄弟よ。」

「よ、よろしくお願いします。」

そして四人は庭へと行く。

その途中、

「それにしても桜のドレス姿って……にあわ」

「似合わないって言ったら殺すわよ」

そのころ控え室。恋継の部屋。

「……三葉さんはいるか！」

「ご安心を。三葉様は先ほどこちらに着かれ、今は控え室におります。」

恋継はウロウロとしていた。

過去に二回も結婚を失敗しているので、さすがに不安そうにしている。

「今は何をしている！？まさか脱走を！？」

「ご安心を。茜様が見張っております。何かありましたら、こちらに連絡が入ってきます。」

「そ、そうか。」

三葉控え室。

「三葉さん。ご準備の方はどうでしょうか？」

「はい、もう大丈夫です。」

三葉は笑顔で答える。

純白のドレスに身を包んだ三葉は、うれしそうに何度も鏡を見ていた。

「では、時間になりましたら、もう一度来ますから。では。」

茜は部屋から出て行った。

「大きい家ね。うらやましい限りだわ。恋継さんの家より大きいかしら？」

庭

「桜じゃないか！久しいではないか！」

「ば、薔薇都おじさん……」

桜は気まずい顔をしながら薔薇都にはぐされていた。

薔薇都の横から女性が一人でてきた。

「あら、桜さん。お久しぶりです。今日は前のように公然の前でへたな真似だけはしないでくださいね。我が家の品位に関わりますから。」

「はっはっは。まさか、以前のあの品の欠片もないような真似はしないさ。なあ桜。」

桜はプレッシャーをかけられた。  
薔薇都の妻の“君枝”である。

(この夫婦は！相変わらず！)

薔薇都は東海林家の長男であり、この中で一番権力が強い。  
そして長女にあたるのが、恋継・恋美・愛歌の母にあたる瞳である。

「あらお兄様。お久しぶりにございます。」

「瞳か。」

「あら、瞳さん。ご機嫌麗しゅうございます。ヴァレンタインの旦那様は今日は？」

“ヴァレンタイン”とは瞳の旦那である。

「ヴァレンタインは明後日のため、今日は欠席いたします。」

「あゝら。自分の息子の結婚式にも来ないなんて……」

その後、瞳と君枝は延々とネチネチといい合いをしていた。

そのころ識は焦っていた。

決して、同世代の愛歌にずっとなつかれているからではない。  
周りを見るといかにも富豪や貴族といった人間ばかりであった。  
あらためて桜は大富豪のお嬢様なんだなと思った。

そして自分が場違いな場所にいると思っていた。

「なあ、桜。」



「何？」

「すぐく居ずらい」

「我慢してよ」

桜は急に内緒話を始めた。

「薔薇都の叔父さん。逆らったらすっごい逆恨みすんだよ。アンタが消えたら、不機嫌になってアンタに何をするかわかったものじゃないよ。家焼かれるよ」

「マジかよ！！それだけは困る！唯一の財産と言ってもいいものだから！」

「桜？」

「ほえ！？」

急に恋美に声をかけられ、まぬけな声を出す桜。

「兄貴大丈夫かな？だって、いつも間際でフラれるから……。」

いつも恋実は恋継のことをバカにしているが、やはり、心配らしい。桜が励まそうとしたが、それより先に愛歌が口を開けた。

「たぶん……、兄様は大丈夫……. . . . .じゃない」

「……じゃないのかよっ！！！！」

三人同時につっこんだ。

時間がたち、あと少しで披露宴が始まる時間になった。

恋継の部屋。

「では、行ってくる。不破。」

「なんでしよう。」

「いままで、二回。済まなかったな。」

「いえ、若の苦しみに比べれば」

「今度は、大丈夫。行ってくる。」

恋継はドアを開け、式場である庭へと向かった。

三葉の部屋。

「三葉さん。お時間ですよ。・・・あら？」

茜は時間になったので、三葉を呼びに言ったが、部屋には誰もいなかった。

「トイレにいったのかしら？」

茜は各ドアに監視カメラを設置しており、三葉が出たら、アラームが鳴るように設定してあるので、外にいるとは考えなかった。

「少し、探してきましたよ。念のため、桜には報告をしておきますよ。」

『いない！？』

「はい、部屋を訪ねたら、いなくなってます。黒井さんにもお願いして捜索しますが。」

『このことは兄貴には？』

「まだ言ってますん。」

『そうだね。シヨック受けるかもしれないから、まだ言わないでおう。茜さんは屋敷内をお願い。私と識で外を探すから。』

「わかりました。」

東海林家裏庭。

ここ裏庭には草木が生えており、会場などではない。そこに、黒服に身を包んだ人が二人いた。

「ねずみの兄貴！大丈夫なんですか？こんな屋敷入って・・・」

「ちちちちち、問題ねえ。協力者曰く、今日は親族がいるから、家内の警備システムはレベルを落としているらしい。ちちちち。おつと電話だ。」

一人は背が小さく、一人はながいネズミのような髭を生やしていた。

東海林家。トイレ。

三葉は携帯片手に電話をしていた。

「そういうことだから、睨んだとおり、この屋敷の物を盗るわ。私は披露宴してるから、その隙にやってちょうだい。例の“東海林家遺産相続順位表”を盗るのよ。あれを盗れば、私たちは・・・」

トントントン

「三葉さん？いらっしやいますか。」

茜の声が聞こえ、すぐに電話を切った。

「はい、ごめんなさい。今行きます。」

そして、披露宴が始まる。

庭では新郎新婦入場の音楽が鳴る。

庭の中央噴水前に台が用意しており、そこで誓いを立てる仕組みになっている。

すでに台の上には恋継が立っており、新婦の入場となった。

三葉を探しに言った、桜と識はまだ庭に戻ってきてはいなかった。

「あの二人帰ってこないな。」

「桜姉さま・・・いない」

二人がいないまま、どんどん段取りは進んでしまっている。

二人が心配していると、携帯を片手に走ってくる桜と、引っ張られている識がいた。

「ごめんごめん。茜さんから、三葉さんが見つかったって報告がきたんだけど、識のバカが携帯持っていないから探してたよ。」

「俺は携帯に縛られたくないんだよ。」

「それはそうと、もう始まっているよ！三葉さん出てくるよ。」

屋敷入り口から、ウエディングに身を包んだ、三葉が出てきた。胸には白い薔薇がつけられていた。

三葉自体かなり綺麗な容姿をしているので、回りからはオオ！と歓声が上がった。

「ふん！まずまずね。一応東海林家の女としてはギリギリ合格ラインね」

「はははは。厳しいな。」

薔薇都夫婦が言った。

桜たちの後ろから一人の女性が近づいてきた。

「桜ちゃん。お久しぶり。」

「瞳さん！お久しぶりです。」

東海林瞳。恋美と愛歌の母である。

「あら、そちらの紳士は・・・桜ちゃんの彼氏？」

「ち、違いますよ。」

「俺は、中嶋識といいます。今日は・・・」

「お母様。この方が私たちを助けてくれた。」

愛歌が先に言葉を出した。

「あらあら・・・それはありがとう。また誘拐されそうになったの？」

「またですか・・・」

「そうなのよ。あら三葉さんが通るわ。」

桜たちの前をウェディング姿の三葉が通った。

そして、恋継のいる台の上へと上がる階段を昇る。  
その時。

ガキイイイイイン！！！！

ポオン！！！！

なにやら謎の大きな音がした。

周囲の人は何事かとざわめいて、式が一時中断した。だが、桜家の人たちは何の音か理解していた。

「これは！トラップの音！」

10分前・・・

三葉は控え室をでて、まずコントロールルームへと向かった。そして、少し、その機械をいじり、ポケットからUSBを取り出した。

「これを差し込めば・・・、」

パソコンモニターには現在のセキュリティレベルが表示された。現在はレベルDとなっていた。

「これを最低レベルまで下げ・・・ん？」

レベル設定欄にA B C D Eの他、“お嬢様用”というものがあつた。

「これなら安全そうね。タイマーは10分後に設定。10分後にねずみたちを侵入させれば大丈夫ね。」

だが、この“お嬢様用”とは桜捕獲用罠であつた。

そして現在。屋敷廊下。

「兄貴く、助けてください〜」

「子分よ。お前の死は無駄にしねえ！」

「兄貴！死んでませんよ！」

ねずみは子分を見捨てて、屋敷の奥へと進んだ。

「しかし、この屋敷はどうなってるんだ？罨だらけだ。あの女しくじったな。ちちちち！」

そして庭では・・・

庭で待機していた茜が叫びだした。

「皆さん！！その場から絶対に動かないでください！！恐らくハツキングされ桜捕獲用のレベルBの罨が作動しています！！下手したら死にます！！」

余計騒がしくなった。だが、東海林家親族は違った。

「っはっはっは。まったく桜は猿よりすばしっこいからな！」

「それに下品ですから」

「桜ちゃん変わらないわね。」

親族は爆笑していた。

「とにかく・・・桜いますか？」

「はい、ここにいますよー！」



桜は呼ばれたので手を上げた。

「レベルBなら突破できると思いますから、  
「やれやれ……。識、これ持ってた。」

桜は識に食べかけのチキンを渡す。

「じゃ、行ってくる！」

桜は飛び跳ね屋敷へと向かう。

途中、桜が踏んだ所檻が飛び出す。  
それより早く桜はその場を離れる。

地面に立ち止まると恐らくトラップに捕まる。

桜は門の横にある柱に捕まり、窓を割って、屋敷内へと入った。

三葉は焦っていた。

（このままでは……。アレを入手できない。何とかしなきゃ。この  
式をぶち壊してでも！）

コントロールルームは一階にある。

地面を踏まないよう壁にしがみついて進んでいった。

途中警備ロボが現れたが踏み台にし、先へと進む。  
そしてコントロールルームへと到着した。

ドアを開けたとき、そこには誰かがいた。

桜が見たところ、ハゲていて鼠のような髭を生やした人物であった。

「ちちっ！誰だ！」

「いや、アンタが誰だよドロボウさんか？」

「俺は“ねずみ男”さ。ちちちち」

「トラップにかからないで、ここまでここに来れたね。」

「ちちち、俺の妖術の一つ、“忍び”がある。これは足跡を残さず、浮いて歩くことができる技さ。」

「なるほど、ウチの警備システムも強化しないとね。で、今は何を。」

「ちちちち、俺の力には限界があるからな。警備システムをレベルダウンしなきゃいけねえ。このスイッチを押せばレベルを変更できる。あ……。」

ねずみは後ろから何かを落とした。

ポトツと太い巻紙、巻物であった。

その巻物を桜は見たことがなかった。

「いけね！これは“東海林家遺産相続” あー！」

ねずみはうつかり口を滑らせた。

桜は東海林家遺産相続と聞いて驚いた顔をした。

聞いたことすらない。以前本家に行ったときもそんなことは聞いてない。

だが、なぜこのこそ泥が知っているのか。

今はそんなことを考えるより、東海林家関わるものである以上取り替えそつと思つた。

ねずみは急いで巻物を鞆へとしまい、コンピューターに触る。

「とにかく、返してもらおうよ。」

「そうは・・・いかねえ!!!」

ねずみはEnterキーを押し、それと同時に懐に隠していた、閃光弾を取り出し、発光させた。

さすがの桜閃光に対しては怯んだ。

その隙にねずみは桜を抜き倒し、廊下へと出、まっすぐに走り出した。

桜は怯みから直り、ねずみを追いかけて、廊下へと出た。

「くっ！ウチとしたことが・・・あれか！」

廊下を見渡したところ、ドアが閉じる音がし、正面ドアから出たのがわかった。

追いかけてながら考えていた。

なぜおそらく入ってきた裏門からではなく、正面なのか。

桜はとにかく、正面玄関へと進んだ。

角を曲がると、そこにいたのは、突き飛ばされたのか、三葉が倒れていた。

「三葉さん！大丈夫ですか!？」

「私は大丈夫です。変な人が私を突き飛ばして・・・」

「でも、なんでこんなところに?」

「その・・・女の子の桜さんが飛び出して・・・心配で・・・」

「三葉さん……」

桜は少し、感動していた。

まだ、会って間もないの心配してくれて、まだ、トラップがあるかもしれないのここまですが身を省みず来るなんて。

桜は同時に安心した。

こない人が、恋継の奥さんになる。なんだかんだで、結婚を失敗している恋継のことが心配であったが、三葉さんなら大丈夫と思っただ。

「それと、巻物を抱えたねずみなら向こうにいったわ。」

「ありがと！三葉さんも気をつけて！」

ねずみが進んだ先は、パーティー会場であった。

桜は三葉に指された方向を見て焦った。

(まずい。変装して紛れ込んでいる可能性が高い。)

正面ドアを出たら、そこはもうパーティー会場なので、ねずみが逃げるとしたら、会場しかない。

すると会場から、恋継がやってきた。

「桜！三葉さん見なかったか！？桜が心配だからって、まだトラッ

プがかかっているかもしれないのに、動き出して……」

「三葉さんなら、そのドアに……」

桜は自分の大きな失態に気づいた。

三葉はこういつていた。

『それと、巻物を抱えたねずみなら向こうにいったわ。』

なぜ“ねずみ”という名前を知っていたのか。

それにねずみは鞆に巻物を入れていたのになぜ“巻物”を知っていたのか。

桜は愕然とした。そして悲しくなった。

三葉はこそ泥とグルである。

今は、それを恋継にいうのはやめよう。

悲しむのはやめよう。

今は・・・追いかけてよう。そう思った。

まずは恋継をなんとかしないと。

「み、三葉さん二階の方に行ったよ。」

「・・・そうか、わかった。」

恋継は二階へと歩いていった。

桜は、ドア付近を見渡し、何かないか探す。

すると、ドアを出ずに右に曲がる通路に、三葉のウェディングの装飾品が落ちていた。白い薔薇である。

先ほど、三葉とあったときは、薔薇をつけていた。

ならば、逃走するときに落としたものであるうと思ひ、追いかけて

る。

「ねずみ！首尾はどう？」

「姉御！ブツはこちらに！後は脱出するために、屋上に“黒鳥”を待機させています。」

「よし、これを売れば、私たちは、“鏡恭介”の奴に・・・」  
「姉御！急ぎましょうや！ちちちち！」

二人は、通路で落ち合ってから、屋上へと向かった。

同時刻、桜

（このままじゃあ、見つからない・・・よし！）

桜は地面に耳をつけ、集中するため目を閉じた。

（・・・・・・・・）

様々な音が聞こえる。そのうち、二人で歩いている音を聞く。

（・・・これは兄貴の音・・・これだ！）

桜は二人で歩いている音を見つけ、その足が階段を上ったことを確認した。

屋上にいった！そう思い、桜は屋上へと走り出した。

次回決着編

### 31 My Girl

屋上。

桜がついた時には、ねずみと三葉は空中から垂らされている紐にしがみついていた。

「アンタこんな移動手段しか用意できなかったのかい！」  
「これしか雇えないんですよ。姉御がケチるから。」

しがみついている紐は上で五羽のカラスが足でつかんでいる。ねずみが桜に気づいた。

「やべえ！あのヤローだ！おいカラス！急げ！」  
「桜ちゃん。そういうことだから、ごめんなさいね」

そしてカラスは飛び出して、紐にしがみついていたねずみと三葉も浮き出した。

「させるかあああ！！！」

桜は飛びだつ紐をギリギリ端を掴んだ。  
そのとき、恋継も屋上へ現れた。

「三葉さん！桜！」

恋継は桜の足にしがみつく。

「ちよつと！兄貴何してんの！？言っとくけど、今高いよ！高所恐怖症でしょー！」

今は屋上を少しはなれて、今紐を話したら、死ぬかもしれない高さである。

高所恐怖症である、恋継は目をまわして桜の足から手を離してしま  
った。

「きゅっ~~~~」

「恋継さん!!」

「“きゅっ”じゃねー!!バカヤロ!!」

三葉は思わず声を出してしまった自分に驚いた。

桜はなんとか手を伸ばして、救済できた。

「姉御!そいつら落とせませんか?」

「え.....」

三葉は悩んでいた。

この高さから落としたら、確実に死んでしまう。

恋継を殺してしまう。

そう悩んでいた。

「姉御!ヤバイです!早く“軽く”してください!」

上で飛んでいるカラスが予定異常の重量で苦しそうに飛んでいた。

そして五羽のカラスがひそひそと話し合っていた。

「やつら裏切ります!」

「は?」



カラスは口を開けて告げた。

「安い賃金で雇われてるのにこれ以上やってられねえよ！あばよ！」  
カラスは紐を放した。

4人はそのまま高度から下へと落下した。

「「「あ~~~~~！！！」」」

ドオオオオオン

4人は落下したが、偶然下がボロ家がありクッションとなり助かった。

何重にも重ねられて天井を突き破り、ボロ家の中へと入っていった。

「いった~~~~。兄貴？無事？」

恋継は桜の隣で気絶していた。

桜がいたのは居間付近であった。

居間の中は机とタンスしかなかった。

そこから、キッチンが見え、そこにねずみと三葉が倒れていた。

「三葉さん。・・・」

三葉は目を覚まし、桜と恋継を見て話し出した。

「そうよ。私はコイツと同じ、泥棒稼業よ。恋継さんに近づいたの

は恋継さんの財産目当て。」  
「そう……。」

桜は悲しそうに言った。

「でもね、私たちはある人に東海林家のことを聞いたの。遺産相続に関することをね。」

「遺産相続？」

「あなたにはまだ、その遺産相続に関する本当の価値がわからないでしょうけど。」

「どういうこと？」

「いずれわかるわ。それとどうして私がここまで話すと思う？」

三葉は笑い、ポケットから大き目のカプセルを出した。

「これはね、睡眠カプセルよ。事前に対抗物質を撃ってるなら効かないものよ。半径10mってとこね。握りつぶせば……よ。」  
「もう逃げられるってわけね。」

「ごめんなさいね。……にしても何かくさいわね……。」

よく嗅いでみるとガスくさかった。

桜はキッチンを見た。

コンロが落ちた衝撃で壊れていて、ガスが部屋に充満していた。

「ちよ！まずくない！？」

「そうね。眠らせた後、外に避難させてあげるわ。殺したくはないから！」



ボロ家跡地には、誰も立っていないかった。  
瓦礫の中から、桜が出てきた。

「兄貴。生きてる？」

桜があたりを見回すと、恋継の足があった。  
足を引き上げ恋継の顔を確認した。

「さくら？何が起きたんだ？」

「アンタが家を爆破した。そんだけ。」

「三葉さんたちは？」

「生きてるよ。あっち。」

桜の指した方では気絶をしたまま、倒れている二人がいた。

「家いいのか？」

「アンタが爆発させたんでしょ。」

その後、三葉とねずみは警察に捕まり、巻物は無事桜家に帰ってき  
た。

当然、恋継の結婚式は中止。恋継は笑いながら帰っていった。

「じゃあ、桜。またね。」

「識様・・・さよなら。」

二人も恋継と帰っていった。

「識？まさか愛歌に！」

「いやいや！やってないよ！手を出してねえよ！」

#### 後日談

次の日、休日ではあったが、生徒会メンバーは午前中だけ用事があり、集合した。

識がかなり落ち込んでやってきた。

「はあ~~~~~」

「どうしたの？中嶋くん？」

「昨日・・・、家が“爆発”して木っ端微塵になった。」

全員固まった。特に桜は固まりついでに冷や汗がどつとでた。

「なんだか、爆破後からは泥棒が捕まったらしいから、泥棒がうちを爆発させたんだろうって。」

桜は、恐らく、東海林家の力で桜たちはあの場にいなかったことになったことを察した。

「おかげで、今日は川原で野宿・・・まあこのまま寝ただけだな。」

誰も何も言えなかった。

「家がないとバイトもできないだろうなあ。」

場の空気が暗くなる。

「あ、いやごめんごめん！大丈夫さ。俺けっこうサバイバルやってるから！」

氷柱が心配そうな顔をしながら、かつ気まずい顔をしながら

「あのね……。家がないと……。在校もむずかしいかも……。ほらうち特別な学校だから。」

識は卒倒した。

「中嶋くん！！しっかりして！！！」

その様子を見て桜はあることを決めた。

東海林桜邸

「っつということで、“また”人拾ってきました」

桜は識を連れて東海林家にやってきていた。目の前には“超”笑顔で立っていた。

「っつことば、こいつを“執事”にし……」  
「さ〜く〜ら〜！！！！！」

「ぎゃあああああああ〜！！！」

こうして、あらたに識は、桜の家で住み込みの仕事をする事になった。

#### 次回予告

桜「つてことで、識が執事になりました！」

識「いいのか？本当に。」

桜「いいつていいつて。・・・実は爆破したの・・・ウチにも責任があるし」

識「はあ！？お前かあ！？」

桜「さて、それは置いておいて、次回から“東海林家の一族”本編。じいちゃんの家に行きます！」

識「置いておくつてな・・・。」

### 32 いざ東海林家へ！！（前書き）

新年あけましておめでとございます。

最近はずいぶん忙しくてなかなかアップできませんでした。すんません。

さて、東海林家本家編です！



### 32 いざ東海林家へ！！

年度末報告会当日

「え〜っと、では雪音さんと識くんは申し訳ないのですが、今回はお留守番をお願いします。」

「はい、茜さんもお気をつけて。」  
「いつてらっしゃいませ。」

午前6時。

東海林家本家へと行くため、桜と茜と黒井が本家に行く準備をしていた。

屋上では、本家からやってきたジェット機が待機している。

黒井と茜は準備ができているが、桜がまだ来ていなかった。

「桜遅いですね。識くん、見てきてくれますか？」

「はい」

識は桜の部屋へと行った。

「で、茜さん。あの中嶋はどうなんですか。使えそうですか？」

「昨日軽くテストをしたのですが・・・」

昨日

「では、識くん。何ができるか見たいので、とりあえず掃除をしてもらえますか？」

「はい、わかりました。」

「大丈夫ですよ、そんな緊張しなくても。使えなかつたら、路上に捨てるだけですから」

「全身全霊をかけて頑張ります!!!!」

識は食事部屋の掃除を頼まれた。

これが初の仕事となるので、緊張をしていたが、今の言葉で余計緊張した。

10分後。

「識くん、できましたか？」

「茜さん。はい、バッチリです！こう見えても、昔、宮殿の掃除をやらされたり、漁船の掃除とかもやりましたから、掃除は得意です！」

「あらあら、それは奴隷……じゃなくて下僕……じゃなくてお仕事仲間として期待できますわ」

「茜さん、ツッコミしていいんですか？」

次はキッチンに案内された。

「では、お料理お願いします。」

「では、出雲の山で身に着けた包丁捌きを！」

識は魚を空中に投げ、包丁でスパパッ！と切り、刺身の造りが完成。

「包丁捌きでは桜並ですね。正直バケモノですよ」

「あまり褒められて気がしないのはなぜ……？」

そして現在。

「っという具合に、結構できる子ですよ。」

「そうですか。あとは執事としての心得を叩き込むだけですね。」

話していると、あわただしく桜と識が屋上へとやってきた。

「ひく、何とか間に合ったか？」

「いや遅れてるからな。」

桜が来たのを知り、ジェット機からパイロットが出てきた。

「桜お嬢様。おはようございます。」

「あ、おはよう。今日はよろしく。」

「はっ！」

本家の人間に挨拶をすると、時間が推しているのか、さっそくジェット機に乗った。

空いた窓から茜が残る雪音と識に言った。

「では、大鷲と不知火のことと、火元はお願いしますね。」

「はい、いつてらっしゃいませ。」

桜、茜、黒井の三人は遥か彼方へと飛んでいった。

屋上では雪音と識が残されていた。

調理場

「お料理 お料理 今日は洋食にしようかな？」

識は調理場で野菜を切っていた。

「今日は、三人分・・・じゃなくて四人分か？」

識、雪音、白井、あと忘れがちだが、執事長である田中の四人が今、桜邸にいる。

「そうだ。時間があるから、何か嫌いな食べ物がないか聞いてくるか。」

庭

「・・・そういえば、まだまともに自己紹介してませんでしたね。」  
「そういえば、昨日はバタバタとしてましたからね。」

お互い自己紹介して、雪音はペットの餌に、識は朝食作りに行った。

「今日も寒いですね〜。」

「お前雪女だろ。本当に珍しい奴だな。」

庭で話していたのは、雪音とペット狐である不知火である。  
不知火は妖怪の一種なので話せるらしい。

同じ妖怪なので、雪音とはたびたび話している。

逆に人間である、桜や茜には話せることすら知られていない。

「で、昨日ちらっと見たが、新しい奴入ったらしいな。」

「ええ、中嶋さんですが・・・なんだか私より・・・いろいろと

できちゃう人で・・・私なんか・・・」

目が虚ろになり、あたりが吹雪いた。

「うお！寒い！やめろ！やめてくれ！寒いって寒い！！そのうちいいことあるから！」

「本当ですか！」

顔がパアッと晴れ、あたりの吹雪が止んだ。

(コイツ本当に怖いな。気分で吹雪を無自覚で起こすからな。)

「で、さっさと飯よこせ。」

「あ、忘れてた。今日は、うにご飯ですよ。」

ご飯にうにご飯が混ぜられている。

「これ・・・まさか」

「はい、私が作りました。それに特製ドレッシングをかけておきましたからね。」

(死ぬかもしれない。)

不知火は以前、この“特製ドレッシング”を舐め、全身麻痺した。

「私が一人で住んでいたときに、よく使っていたドレッシングですよ。どうも人間の方には合うかまだ試してませんが。」

「・・・今日は・・・草を食ったから、おなかいっぱいだよ。」

「あ、ダメですよ。ちゃんとご飯食べなきゃ！もう！」

「草って意外と栄養あるんだぜ。」

「雪音さん。嫌いな食べ物・・・?????」

識がやってきた。

そして固まった。

(狐が話している。普通に話をしている?????)

識は頭の中で情報を整理していた。

ここに雪音さんがいて狐がいて話していた。

いたってシンプルな答えであった。

「あのあのあのあのあのあのあのね、しししししくらめんくん!!!!」

「いや“しくらめん”って誰だよ?ってかパニくり過ぎだろ。」

「狐がツツコミ!?!」

そして雪音が説明をする。

時々パニくって何を言っているのかわからなくなったら、狐こと不知火がフオローをする。

「なるほど、二人・・・いや雪音さんと不知火は妖怪だったということか。」

「隠すつもりはありませんでしたが・・・」

「まあ、妖怪は基本的に身分を隠すものだからな。雪音もヘタレ妖怪だが、妖怪ってだけで、人間から差別される歴史があんだよ。」

「いや、怒るつもりもないし、差別なんかしないさ。ちよつと驚いたただけだ。妖怪だろうが人間だろうが、俺はかまわないさ。」

「……時代つてのは変わるもんだな」

識は不知火が言ってる“時代”ということがよくわからなかったが、今は聞くときではないと思い、あえて聞くことはしなかった。

桜がいない間にそんなことが起きていた東海林家であった。

#### 次回予告

識「次回からは東海林家編だから出番ないそうですよ」

雪音「あら？じゃあ今回で私たちしばらく退場ですか？」

識「まあそうですね。そろそろ東海林家について触れておかなきゃいけないらしいんで」

雪音「私たちも東海林家関係者のはずですけど……やっぱり……私が……仕事できないから呼ばれないんですよね……わたしなにか……」

識「雪音さん！！なんだかすつごく寒い！！これ雪音さんのせいでしょう!?!」

雪音「わたしなんか……わたしなんか……」

識「死ぬー！ー！ー！！」

不知火（あのバカ二人は何やってんだ？）

### 33 東海林家という島

さて、物語を始める前に少し説明をしましょう。

【東海林家について】  
桜から見て・・・

東海林世界（祖父）  
東海林御春（祖母）

薔薇都（叔父・東海林家長男）  
君枝（叔母）  
葉（従兄弟）

瞳（叔母・東海林家長女）  
ヴァレンタイン（叔父）  
恋継（従兄弟）  
恋美（従兄弟）  
愛歌（従兄弟）

勇氣（叔父・東海林家次男）  
光子（叔母）  
心（従兄弟）

花（母）  
天津（父）

です。本編でも一応説明しますが、一応書いておきます。



## 東海林本家

ジェット機で10時間飛ばした無人島に存在する。

島の大きさは普通の無人島と同じくらい大きさである。

この島は東海林家が買い取った島であり、島には東海林家関係者、  
と言っても使

用人と本家の人間しか住んでいない。

来島者は月に一度近くの国から食料の運輸があり、その作業員がほとんどものである。

島の作りは、中央の山の頂上にドデカイ城があり、近くに飛行機の滑走路がある

。あとは森がほとんどで、隅っこに、発電所やらがある。

桜たちのジェット機は島の中央の城、本家のヘリポートに離陸した。

10時間ジェット機に乗って窮屈でいたので、降りると同時に、背筋を伸ばし、大きく深呼吸をした。

そんな桜たち三人を出迎える、本家使用人たちの列が綺麗に並んでいた。

その列の、中から、一番年輩のような白髪の男性が出てきた。

「桜様。お久しぶりでございます。お待ちしておりました。」

「来栖さん、お久しぶり。叔父さんたちは来てるの？」

「はい、薔薇都様、瞳様、勇気様、の御家族様がすでに、到着されております。」

「

自分が一番最後の到着であったことを知り、少しづつが悪いと思っ  
た。

「では、そろそろ御春様が親族会議室にいられますので、お着替え  
をしていただ

きます。」

「じいちゃんは？」

「主様は、本日欠席でございます。」

そして、桜は着替え部屋へと通された。

部屋では茜と二人で着替えていた。と言っても、茜は桜の着替えの  
手伝いをして  
いるだけである。

茜は普段と違い、心配そうな顔をし、桜を見ていた。

「桜、こんなこと今言うべきではないですが…」

「わかってるよ。…お母さんの分まで、頑張るって決めたから。」

しばらく静寂が流れる。

桜が着替えているのは、東海林家の正装と言われる服である。東海  
林の者は皆こ

れを着て親族会議を行う。

女性はドレスであるが、桜はまだ未成年なので、ドレスではなく、学校の制服の

ような物を着る。

女性ワイシャツに、ネクタイをし、黒ジャケットを羽織る。

下はスカート。

黒ジャケットには、右肩部分に黄金の鳳凰の刺繍がされている。

東海林家の正装には、全て鳳凰の刺繍がされている。

桜は準備を整え、後はジャケットを羽織るだけとなった。

「親父は生きてるかさえも、わからない、ってかどうでもいい。お母さんは…死

んじゃってるから、ウチが頑張らないと、お母さんが残してくれた物が、本当に

なくなっちゃうからね。」桜…。後で花様のお墓にお参りに行きましようね。

「うん。桜家当主として恥かかないようにしなきゃ。」

桜は持っていたジャケットを回すように振り回し、着る。

「じゃ！行ってくるよ！」

「はい。おきをつけていつてらっしゃいませ」

茜は笑顔で、桜は真剣な顔をし、部屋を出た。

親族会議室へは、使用人である茜や黒井は入ることができない。

本当に桜は一人であった。

従兄弟にあたる、恋継、恋美、愛歌とは仲がいいが、彼らは、東海林瞳の家族。

また別である。

親族会議室の扉を開ける。

「桜あ！遅いよ！」

開けたと同時に声を出したのは、赤い髪をした恋美であった。服装は桜とにているが、紫色のジャケットを来ていた。

「ごめんごめん。でも婆ちゃんまだでしょ？」

「居たら、桜半殺しにあってるよ。」

「確かに…、兄貴は？」

兄貴…とは従兄弟の恋継のことである。恋美と恋継の妹である。

「ほら…、あそこに…」

指を指した方向では、真つ白に燃え尽きた何かがあった。“何か”と恋継さ何か  
ブツブツと呟いていた。

「……もう結婚なんかしないもう結婚なんかしないもう結婚なんかしない……」

……」

前回、結婚が失敗に終わり、トータル三回目の結婚式失恋をし、恋継は、真つ白

に燃え尽きていた。

二人が話していると、

「桜やないか！おひさしゅうな！」

「勇気叔父さん！」

ふとつちよのメタボ叔父さんが話をかけてきた。

彼は、東海林勇気。

桜たちの中では一番話しやす人気ものである。別に関西人ではない。

「桜さん、お久しぶりね」

「光子さんもお久しぶりです。」

スーツを着た、スマートな女性。

東海林光子。

外見ではキャリアウーマンを想像させる。勇気とは体系的にはまるで逆である。しかも若い。まだ20代後半くらいである。

彼女は知的な感じを出しているが、基本的にやさしい女性なので彼女も好かれている。

「おほほほ、桜おひさしゅ」

「だからやめなさいって！」

ポカンと殴られた。

殴られた女の子は二人の娘、東海林心である。

まだ、小学生であるが、どこで覚えたのか、やたらヘンな言葉を喋るので、そのたび指導が入る。

桜たちが話をしていると、

「ほら、桜も早く座りなさい。そろそろ御母様が参られる。」

薔薇都が注意をした。

「あ、ごめんなさい。ウチの席は…。」

「桜は孫だから、私たちの隣だ。」

ここで席順を説明しよう。今は、薔薇都家、瞳家、勇気家、桜家の四家族がいる。

席は

世界（祖父） - 御春（祖母）

薔薇都（叔父） - 瞳（叔母）

勇気（叔父） - 空席

葉（従兄弟） - 恋継（従兄弟）

美（従兄弟） - 桜

愛歌（従兄弟） - 心（従兄弟）

君枝（叔母） - ヴァレンタイン（叔父）

光子（叔母） - 空席

である。

“-”の部分は机があると思っていたきたい。

つまり、“世界と御春は机をはさんで、向き合っている”状態である。

順番は、直系 その子供 配偶者という順番である。

桜たち、全員席に着座し、あとは世界と御春を待つのみである。

時間を余しているのです。君枝（薔薇都妻）が話し出した。

「ところで、さっき気になったけど……、ねえ？あなた？」

君枝はアイコンタクトを薔薇都にする。

「う……うむ。」

薔薇都は何かきまづそうである。

「まさか。まだ桜ちゃんが自分のことを“ウチ”って呼んでいるなんてね。笑っちゃうわあ！」

その瞬間、いままで真っ白に燃え尽きていた、恋継が復活し、声を荒げた。

「君枝さん！……！」

だが、君枝は一切怯むことなく続けた。

「だって本当のことじゃない。恋継君の結婚式の時からウスウスは思っていたけど、まさか、“まだ”そう言ったとは、私面白くて」「君枝さん！！やめないと」「あなたたちだっと思ってるはずよ……！」

恋継と言い合いをしている。

だが、

当の桜は、

これが、何の会話かまったくわからなかった。

(ウチって?????昔からそう言ってたと思ったけど????でもそんな重要なこと????)

「君枝さん」

桜が質問する。

「あら、桜ちゃん。何かしら?」

「ウチは」

「さつきからやかまし!!!!!!!!!!!!!!」

大きな声で会話が途切れた。

その声は、入り口から聞こえた。

全員その声が誰の声なのか既に察していた。

「まったく、わたしのことを黙って待つことすらできんのかの?。」  
「ってやつよ」

この言葉の最後に“ってやつよ”とつける癖がある人物。



「またせたな、御春ちゃんの登場じゃよ。ってやつよ。」

#### 次回予告

茜「ついに出演がなくなりますわ。」

黒井「そうですね、特に私なんか今回もセリフありませんでしたよ」

茜「あら？私だって桜の着替え手伝ったきりですよ」

黒井「私たちは、今回蚊帳の外ですから。」

茜「悲しいですわ。」

黒井「でも、私たちは基本、全ての話で蚊帳の外ですよね」

茜「それは禁句ですわ〜〜」

### 34 年度末報告会

扉には東海林御春。白銀の着物を着た桜の祖母が立っていた。

この人は、東海林家では、祖父の次に権力が高い。

なので、誰もこの人には逆らえないので、先ほどまで、言い合っていた君枝は黙り、席に座り込んだ。

「ふむふむ・・・、全員いるようじゃな。」

御春は全員の顔を一瞥し、自分の席に座った。

「今日は、世界の爺いはこない。」

「お父さんが欠席ですか!？」

薔薇都たち、御春の子供組は驚いていた。

「あの、何よりも、この会議を大事にされているお父さんが欠席とは・・・。」

「あら、でもその分少し気が楽になったんじゃない？」

「そらそうや!ほな、お母さん。お願いします。」

「そうじゃな、では・・・。」

御春は席に座ったまま、真剣な顔になり

「これより、東海林家親族会議を始める。まず、各家の新規報告から」

薔薇都が立ちあがる。

この会議は年齢順、薔薇都・瞳・勇気・桜の順で報告をするようだ。

薔薇都が説明をしている間、桜はかまないように、口を動かし練習していた。

緊張はあまりしていない。今回が初めてではないので、ごもることはないと思う。

だが、噛むなどの失態に対しては、ペナルティーがつく。ずっと前、桜は途中頭の中が真っ白となり、ペナルティーがついた。そのペナルティーは桜個人にかされるものではあった。

内容は、ヘリから突き落とす。ドッキリであった。浮輪も落とされたが、鮫に襲われ死にかけた。

「……以上で、私からの報告を終わります。」

「うむ、ごころう。次は瞳。報告せよ。」

「はい、お母様。」

続いて、瞳が話し出した。

その間も桜は練習をしていた。

桜の報告する内容は主に二つであった。

使用人が増えたこと。そして、生徒会に入ったこと。

簡単なことだ。今回は非常に運がいい。

「……私からは以上です。」

「次は勇気。」

「ほないきまつせ。」

桜は考えていた。

もし、今回失敗したらどうなるだろう？

過去の出来事を思い出していた。

あれは、中学校2年生だったか・・・

アマゾンに行ったときだった。

桜と御春は、崖の上にあった

「おばあちゃん。なんで、肉を後ろにつけてるの？これ外れないよ？？」

「これも修行だよ。ってやつ。頑張ってこい！」

桜の後ろには虎がいた。

「ぎゃあああああああ！！！！！喰われるうつつうう！！！！」

桜は無我夢中で飛び出した。

そして崖から飛び出した先は・・・空だった。

「みぎゃああ！！！！??？」

落下。

下の木々に引っかかり、致命傷は避けられた。

「・・・死ぬ・・・。はっ！！！」

殺気と視線を感じた。

虎の群れが落ちた木を囲っていた。

「……………！！！！」

無言で木の頂上まで登り、猿のように木を移動し始めた。

そのまま、桜は三日間不眠不休で遭難していた。

「……………以上や。」

そこで桜は意識を戻した。

「次は、桜。」

「はい。では……………」

桜は息をすうつと吸った。

「私の家では昨日から……………」

桜はすらすらと答える。

口ごもってしまうと、次は危ない取引現場に連れて行かれるかもしれない……………本気で思っていた。

桜は必死……………字の通り、“必死”であった。

「……………であり、現在、我が邸には使用人五人住んでおります。そして私は、雲の上高等学校に進学し、生徒会役員として活動をし

てます。」

その瞬間、場の空気が固まった。

「ば・・・馬鹿な・・・。あの雲の上の生徒会だ!？」

「桜ちゃん?この場で冗談はなくてよ。」

「ほんまかい?雲の上の生徒会といえば、エリート集団で、希望してもなれへん話やで?」

「勇气さんは、たしか希望したけど、なれなかったんですっけ?」

「いたいところつくやないか?」

周りが騒がしくなった。

桜は親族から見て、非常によろしくない印象を持っている。

学業面では下。東海林家は基本的に学業はかなり優秀であるので、薔薇都夫婦から軽蔑されている。

薔薇都夫婦はインテルの塊である。

息子である葉にも勉強をかなり教養していた。

おかげで、彼は企業の若手社長をしている。

「桜。それは本当なのか?」

ずっと黙っていた、東海林葉が声をだした。

「うちもわからないけど、理事長にこいって言われた。」

「そうか・・・。」

少し、間を置いて、

「おめでとう、という所かな。誰も言わないから言わせてもらったよ。母さんたちもいいなよ。東海林家にとって榮譽あることだよ」「  
薔薇都夫婦はかなり悔しそうである。

いままで小馬鹿にしていた桜が、エリート高の生徒会役員であったことが、非常に悔しい。

「ま・・・まあ、そうだな。おめでとう。」  
「そうね、」

その途中、御春が咳払いをした。

「そろそろいいかな。というやつだ。」  
「あ、お母さん。申し訳ありません。」

そうして、収入報告などの報告会を始めるのであった。

午後2時。

この日の報告会や会議は終わった。

桜たち孫グループは砂浜に遊びに、大人たちは、家に残り、昔話で  
もしようと言っていた。使用人たちは、半分に分かれた。

「桜・・・」

「ん？何、愛歌？」

桜に話をかけてきたのは、青い髪をした、愛歌であった。

「識様・・・元気？」

どつやら、愛歌は、結婚式のために助けられた識になつたようだ。

「そうね・・・今は、うちで執事やってるよ。今度会いに気なよ。」

愛歌は顔を赤く染め、ニコリと笑った。

(これは・・・まさかのまさか??)

「青い海のばかやろー！！！！！！！！！！」

そんな声が聞こえてきた。

これはあの有名な失恋したときのセリフだ。

その方向を見ないでも、誰が言ってるのかは検討がついていた。だが、とりあえず、という気持ち程度に見た。

やはり恋継であった。

「青い海のっ！！！！」

「その辺にしないか、恋継。」

恋継を励ましたのは、葉であった。

東海林家の孫グループでは、一番年上なので、こういった役はよく



やるほうである。  
それにイケメン種である。

「葉の兄貴……」

「結婚式にはいけなかったが、話は聞いたよ。……辛かったな。」  
「兄貴……」

このとき、恋継には、波の音がとても心地よく聞こえたそうだし、しばらく、男二人で海を見ていた。

「兄貴は結婚しないのかよ？」

「俺か？おれはそうだな……。まだこれといって一人に決めてないからな。」

それは……つまり……

「いや、会社で愛人を作りすぎてな。困っているんだ。俺は自由人だからな。誰かに縛られたくないんだけど、ついつい昔の悪いクセで愛人を作っちゃうんだ。」

恋継は正直な殺意が沸いてきた。

### 35 人の欲、人の業

屋敷内

大人たちは、会議室を離れ、食堂にて会話をしていた。

「噂では、薔薇都お兄様に似て、葉君は女遊びがひどいそうじゃないですか。」

「はっはっは。血は争えんな！」

そんな薔薇都の妻である君枝は何も言わず見ず、ただコーヒーを飲んでいた。

「あら？君枝さん？何を冷静ぶっているのかしら？」

光子が君枝を挑発した。明らかな悪意ある発言であった。

「何を言ってるのかわかりかねます。」

「あくまで、仮面をかぶるのね。」

「……あなたこそ、偽っていることがあるのではなくて？」

君枝は鷹のような鋭い眼光で光子を睨み付けた。

周りは、“また始まった”と思い、黙って見ていた。

東海林家では、この君枝vs光子の戦いは恒例行事であるらしい。

「な……何を……」

「心ちゃん……かわいそうね。」

「……」

光子は黙ってきく。

「いつも構ってもらえないって言ってるわよ。」

「う……嘘よ……。」

「ある日……、一人でお留守番していると、あなたは……」

「いい加減なこと言わないで……!」

光子は机を殴り、声を荒げた。

しかし、誰一人として驚くことはなかった。

いつもの展開である。

どちらかが暴露話をし、片方が怒る。

親族がそろつとかならずとっていいほど起こる修羅場である。

「君枝さんこそ!」

「何かしら?」

「この“仮面夫婦があ……!”」

「っ……!この……!」

「お互いがお互いを見てない。それどころか息子さえ!笑っちゃう

わ!お互いに愛人……」

そこで二人はつかみあいの喧嘩になった。

それを仲裁すべくお互いの旦那が入る。

この暴露を聞いても二人の旦那は冷静であった。おおよそ、知っていたのである。

「お二人とも、いい加減にしてください。」

怒りを出していない唯一の女性である瞳が言った。

だが、それは余計な一言であった。

二人の矛先が瞳へ向けて刃をむき出した。

「「黙れ！」」

瞳は今度は驚いた。

君枝と光子が交代交代で言う。

「お前は何だ！！」

「恋美ちゃんには言ったのかしら？」

「お前の腹は……」

「もう産めないことを」

「愛歌ちゃんに言ったのかしら？」

「三人どうしても欲しいから……」

「やめないかあ！……！！！」

雷が落ちた。

怒鳴ったのは薔薇都だった。

「お互いのことを言い合うならまだよし！ 勇気も納得をしている！  
だが、今のはなんだ！ 自分より身分が上の相手に対して大変無礼で  
ある！！ 東海林家長男が命ずる！ 二人ともしばらく頭を冷やしなさい！！！」

「ですが、薔薇都様……」

「ここから出て行きなさい！！！」

薔薇都は君枝の言い訳を一切聞こうとはしなかった。

妻である自分に“身分が下”といったようなものだ。

そのことが悲しくなり、君枝は泣きながら部屋を飛び出した。  
涙を誰にも見せないよう隠しながら。

光子も泣きはしないが、悪態ついて部屋を出て行った。

「瞳……すまなかつたな。」

「いいえ、いいのです。愛歌は“養子”であることは事実ですし、私がもう産めないのも事実です。でも私はどうしても三人子供が欲しかった。いつかは言わなきゃいけないと思っっているけど……」

その場が静まる。

「さて、二人かけたが、今日の本題に入ろう……」

「せやな。」

「ええ。」

場の空気が冷めた空気から、ピリツと張り詰めた空気が変わる。

直系親族三人が鋭い目で同時に口を開けた。

「……遺産相続について」「」

そしてビーチでは桜たちがビーチボールで遊んでいた。

「桜？」

「……あ！ごめん！ごめん！あいたつ！」

桜は少しぼくっとしていたため、頭にポンっとボールがあたった。ボールが当たったでこを摩りながら桜はあたりを見渡した。

「桜？？さっきからどうしたの？」  
「いや・・・ごめん。」

桜は少し、どこか上の空であった。

無理もない。明日は桜の母、“東海林花”の命日である。

「桜・・・」

恋美が桜を心配そうに見つめる。

そんな桜に近づいてきたのは恋継であった。

「桜。」

「兄貴。」

「・・・」

「・・・」

「こまねちっ！！！！！！！」

核が流れる。

星の流星が流れる。

どれだけ時がたったのだろうか。

「こんのぶあかあぁっあぁ！！！！」

「ひ~~~~でぶ~~~~でぶ~~~~でぶ~~~~」

恋継は遙か海の彼方までふっ飛ばされた。

しかし、桜も一応はわかっていた。

恋継が桜が元気がないことを察し、元気付けようとしていたこと

だが、多少むかついたので、とりあえず殴っておいた。わりと本気で。でもおかげで、スッキリとしていた。

東海林家本家

ここからは、権力者上位の薔薇都、瞳、勇気が話し出す。

「お父様の遺産を継ぐのは誰か・・・だが」

「私は・・・“あの人”につがせるのは・・・」

「わいも同意見や。」

「だが、お父様は一人にしか継がせないと言っておられる。」

「私たちは、もう“あの事件”があつて、一度相続権を放棄せざるを得ない状況にあつた。」

「せやから、今の相続人第一候補者は、あいつの繰越で・・・」

全員が息を飲む

「「「桜”であると」「」」

東海林家の遺産相続は祖父、東海林世界の命令により、一人にしか継がせないようだ。

そして、第一候補者として、直系家族である

薔薇都

瞳

勇気

花

の4人が上げられた。

このうち、功績を上げ、認められたならば、その者に遺産を渡すという。

しかし、

「あのと時、花は死んだ。」

「そうね、私たちのやましい欲の犠牲者でもあるわ。」

「あのと時、わいら全員相続を子供にたくそうと思っただんやがな。」

「花が、いなくなり、天津が行方不明。」

「そうね・・・、天津さんはきっと私たちに愛想がつきたのでしょう。」

「わいもそう思う。だから、わいらとは縁を切るように、蒸発したという感じだったな。」

薔薇都も勇気も葉巻に火をつけた。

そして瞳はコーヒーを一口。

そして、一人、瞳の旦那である、東海林ヴァレンタインは、話し合いいに入ることが許されず、一人でタバコをすっていた。

「遺産相続の条件・・・最後まで読んだか？」

「ええ、もちろんよ。お兄様。」

薔薇都は懐から、紙を一枚取り出した。

そこには文字がずらりと書かれていた。



それは遺産相続の条件・順番が書かれた紙であり、下に、東海林世界の押印が押されてあった。

「最後から二番目の欄に、相続権を放棄した場合、その一家に相続権が得られない。」

「そうや、わいら全員それを読み落としていたんや。しっかし、なぜやろうな？三人も見落とすなんて普通やないで？」

「たしかに。ですが、いまさらな話ですわ。」

「そのとおり、そして、最後の欄だが。」

全員不適な笑みをこぼしている。

「遺産相続候補が全員いなくなった場合は、放棄したものの相続権が復活すると。」

「あら、やはり、お兄様？桜ちゃんを殺そうとしているのかしら？」

「何をいう。」

「でも、お兄様は、桜ちゃんが死んだら、相続人候補第一位でしょう？動機は充分ですわ。」

「たしかにそうだが、桜は遺産を四等分するといっている。犯罪を犯してまで、自分の持分を増やそうと思わないさ。」

「兄さん。嘘はいけませんな？」

「何!？」

急に勇気に変なことを言われたので、少しカチンときて、薔薇都は勇気をにらみつけた。

「兄さんが会社でどんな汚いことをしてるか知ってますで。」

「貴様……!」

「桜ちゃんに何かあったら、お兄様が関係していると思った方がよ

「さそうね。」

瞳は邪悪な笑みを浮かべる。

「ふん。だがな。私が警察に捕まるようなことがあれば、相続権を失い、瞳。お前に相続権が移る。私が手にかけてたかのように、細工や汚いマネは、瞳の得意分野であろう。」

「言ってくれますね。汚いマネは勇氣さんですよ。」  
「なんやてっ！！」

喧嘩の矛先がいきなり勇氣に向けられ、勇氣は冷や汗をかいた。

「大阪で、お行儀が悪い方と仲がいいってお話ですよ。」  
「いろんなところに耳を持っているんやな。」

三人がお互いの傷を探しあっていると、ドアから、御春が入ってきた。

「お前たち、何かを勘違いしているようじゃな。」  
「「「お母様？」「「「

御春は電話を取り出し、スピーカーボタンを押した。

『わが息子たちよ。』

その声を聞き、三人の血の気が一気に引いた。

「「「お、お父様」「」」

その声の人物こそ、東海林家当主、東海林世界である。

『遺産のことで、もめているようだな。』

「桜に遺産を全てというのは私たちから見てもどうかと・・・」

『たしかに、貴様らの言うこともわからんでもない。だが!』

全員が息を飲む。

『桜を亡き者にし、遺産を手に入れようなど、浅ましい考え。恥に値する!!!!ゆえに、条件を変える。』

『現在桜に相続の権利があることは変えん。だが、その先のことを変える。』

全員、電話に凝視をし、聞き逃すまいとする。  
そして、電話口から、声が出る。

『それは・・・』

### 36 花びら舞う桜の木（前書き）

最近更新スピードがバラバラです。

すみません。

せっかく読者を増やしていたのに、申し訳ありません。

では、東海林家編最終回スタート！！

### 36 花びら舞う桜の木

翌日、

今日の夜には全員帰宅する予定である。

午前中に報告などは全て終わらせていたので午後は自由である。

桜は、ある用事があり、茜、黒井の三人で島の端っこの岬に来ていた。

森を抜けた岬には花畑がある。その先に十字架の墓があった。

桜は花束を持っており、その墓へと近づいていった。

先に誰かが、来ていたのか、酒瓶が一升置いてあった。

「母さん。お久しぶり。」

その墓には、“HANA SYOZUI”と書かれていた。つまり、桜の母の墓である。

「最近は楽しい毎日だよ。使用人も増えて・・・、生徒会に入って友達も増えて、いろんなことやって・・・でも」

下を向き、涙を流さぬよう、我慢する。

「・・・お母さんがいてほしかったかな。」

しばらく、桜は黙って、下を向き、考え事をしていた。

「ごめん、少し弱音を吐いたね。お母さんがいなくても、ウチは元気に、親父の分も含めて生きていくよ。」

そこで、後ろから茜が声をかける。

「桜・・・、私たちは少しあたりを見てきます。」  
「わかった。」

お祈りを済ませた茜と黒井は桜に母の墓と二人きりにさせてあげようと、その場を離れた。

桜は立ち上がり、そこから見える海を見た。

「母さんはこの景色が好きだったな。よく連れてこられてたものだ。」

桜は感傷に浸る。  
すると後ろから音がした。

ガサガサっと。

「誰？兄貴？恋美？」

この島には東海林家の人間しかいない。なので顔見知りなので警戒はしなかった。

その者は近くの大きな桜の木の後ろに隠れている。

木からは、腕と肩しか出ていないので顔がわからない。

桜が近づこうとしたとき、その人物は声だした。

「桜。」

「っ！！（知ってる声じゃない！！）」

東海林家の人間ではない。

親族の声ならわかる。

もし、今回来ていない祖父でも声くらいはわかる。

「誰！！」

先ほどとは違い、警戒心のある声をだした。

「大きくなったな。これも花のおかげだな。」

「まさかっ！！！！」

あまり、接したことがないので、今まで、思い出せなかった。  
その声の正体。

まだ、木に隠れた状態であったが、その人物が誰なのか理解した。

「親父・・・生きてたのか。」

「おいおい、勝手に父親を殺すもんじゃないぜ。」

その人物は桜の父、天津であった。

「その、ウチに対するふざけた口調。いつもそうだ。」

「悪いな、昔つからだから、いまさらだ。」  
「なぜ、今になって出てきたの？」

桜はあくまで落ち着いて話をしようと試みている。  
内心かなり動揺している。今、行方不明であった父と話しているのだから仕方ない。

「今日は、花の命日だ。夫として当然だろ？」  
「じゃあ、なぜウチを残して・・・残して・・・」

桜は突然、悲しくなった。  
昔を思い出していた。

母が死に、その翌日急に父がいなくなり、一人ぼっちになった。

「今は話せない。」  
「なに!？」

「実のところ、今桜と話しているだけでも少し危険なんだ。だから俺はもう行く。今日は話せてよかった。」  
「待て!!!」

桜は木に向かって走る。相手の肩へと手を伸ばす。

そして、肩を掴む。  
すると

パッと、まるで空気に素振りをするかのような感触、何もつかめなかった。  
それどころか、触る直前、姿が消えた。



桜は呆然と立ち尽くす。

桜は考える。

「あれは、……そうね、親父がこんなところにくるわけないよ。きつと、母さんのことを思い出していたから、幻でも見ちゃったんだろう。」

周りを見渡すが、とても、一瞬で隠れることができる場所ではない。

桜は一度、墓を振り返る、屋敷へと戻っていった。

墓の上には、桜の木から落ちた花びらが一枚乗っかっていた。

「桜、帰りますよ。」

「うん。今いく。」

夕方。桜たち全員帰宅するためジェット機に乗っていた。

大人たちは、なぜか皆重い表情をしていたが、特に気にしなかった。

「さっくらー!!」

「うわ!!」

後ろから抱き着いてきたのは、恋美であった。

「なにになに??」

「ちよつと、頼みがあるんだけど、」

「何?」

恋美は誰にも話を聞かれまいと、あたりをキョロキョロと見渡す。

「じ・・・じつは」

「桜姉さま」

「はっわあああ!!!」

恋美は飛び跳ねた。

あれだけ周りを警戒していたのに軽々警戒ゾーンを突破した人物に。

愛歌であった。

「桜姉さま」

「なに?」

愛歌はポケットからポケベルをだした。

「識様にこれを渡してください」

「ぼ・・・ぼけ」

あまりに懐かしすぎる物を見たのでかなり動揺したが、受け取った。

「では・・・」

そして愛歌が自分のジェット機に乗った。

「あれ恋美??」

恋美と話をしようと思ったが、いなかった。

「何を話そうとしたんだろう?」

桜も帰ろうとジェット機に乗る。

だが、

「おい桜。」

「ばばば婆ちゃんっ!!!!!!」

「お前はまだ返さないよ。ほら」

御春はどこからか、鎖を取り出す。

「いやあああああああああ」

「観念しいー!!!!つてやつよ!!!!」

鎖でグルグル巻きにし、桜は付近の森へと消え去った。

そこに茜と黒井は残された。

「仕方ありませんね」

桜たちはもう一泊（桜は森のなかで徹夜でトレーニング）をしてい

た。

### 次回予告

桜「あのババア・・・、猪に徹夜で追わせやがって・・・、途中から追ってくる動物増やしやがって・・・」

茜「まあまあ、桜。」

桜「とにかく生きて帰ることができてよかった。」

茜「そうですね。では明日から学校ですよ。」

桜「あっ！！そうだ！！忘れてた。」

茜「さて、次回からは“新学期編”ですわ」

桜「あの理事長に会うのか・・・憂鬱だ・・・」

### 37 四章『雲の上学園のお遊び』

新学期。桜は二年生となり、今日は初登校の日である。  
先日、桜家の執事となった、中嶋識と一緒に登校している。

校門をくぐり、高等部棟まで、校内電車にて移動する。  
今は登校時間なので、ほぼ満員状態であり、座らず立っていた。

「・・・眠いよお」

桜は目をこすりながら、ぼやいた。

それは、今日はたたき起こされた識へ向けた言葉であった。

「仕方ないだろ。今日は遅刻したら理事長に何されるか・・・。し  
それとさっき言ってた理事長へのお土産持ってきたのか？」

「それはもちろん。忘れたら、一年生にゲットバッククヒアーされる  
よ。あの理事長だから

」。

桜は理事長に散々な目に合わされているので、すでにおおよそ何を  
されるのか、検討がついている。

「あ、ついた。」

校内電車は、高等部棟につき、乗車していた学生は一斉に下車した。

「クラス分けのボードはっつと」

今日は初登校の日なので、学年ごとにクラス分けを行われている。このクラス分けはA～F組までは区別なくランダムに振り分けられる。

だが、G組とS組は別である。

G組は“特別クラス”といわれている。

理事長が認めた、何か特別であったり、成績優秀者であったりすると、このクラスになる。

S組は、悪く言

えば“異常者クラス”よく言えば“超人・エリートクラス”である。かなり特別な才能を持っていたり、常人では到底なしえないことができる人物が該当するクラスである。

このクラスの者は基本的に登校の義務はない。テストも自宅で受けることができる。たまに登校しなくてはいけない日があるだけで、ほぼ自由である。

ちなみに氷柱はこのクラスの人間である。

なので、このクラス分けはS組から外れる者もいればS組に昇格する者もいるので、この日をまちわびている生徒もいるのが事実。

桜はとくに気にしてはいない。

「ウチは・・・Fかな？」

一年生のときは、Fクラスであったため、なんとなくFかと思い、2年F組の生徒ボードを見た。

しかい、自分の名前はなく、友人の名前もなかった。

A～Eを見た。

「七海も南の名前もないな。つてことは……」

まさかと思い、G組を見た。

「あつた。」

「何？」

「ウチG組だ。」

桜は特別クラスの生徒になった。

「おい、桜。西園寺（七海）や、南嶋（木葉）もG組だぞ」

「あれま。生徒会メンバーがたくさんいるクラスになったわね。」

「ピンポンパンポーン」

チャイムではなく、人の声による放送のチャイム音であつた。

識は何事かと思っていたが、桜にはこの声に聞き覚えがあつた。

「この声の主は……」

「生徒諸君。私は理事長こと“黒雛理事長”である」

桜はやっぱりと思い、肩を落とす。

「まず、今日は、新入生に対し、我が校を理解してもらおうと思い、レクリエーションを用意した。11時に説明をし、12時から始める。全員強制参加である。サボるものは退学処分に処する。」

周りがざわめく。

ふぎけるなーなどの声上がる。

おそらく、理事長のことを知らない、一年生であろう。

二年生以降のものなら『またか』と思い、ほぼあきらめムードになる。

「以上である。それと、東海林桜。スリーサイズを公表されたくなければ、今すぐ私の下へこい。ちなみに東海林桜の胸はA・・・」

「わああああああああー」

「などと言われたくなければこい。」

「すでに大事なこと言っただんじゃねーかつ!!!!!!」

顔を真っ赤にしながら、理事長室へと走る。

「くおおおー!!理事長!!」

桜は、扉を蹴破り、理事長室へと入った。

「あら、桜じゃない。」

ソファーに座っていたのは、椿であった。

コーヒーを片手に、先ほどまで、理事長と会話をしていたようである。

「あ、椿!!!ウチのスリーサイズを教えたのアンタだろつ!!!」

「そのとおりよ、さすが私と以心伝心。心も身体もつながっている仲だわ。」



「そんな仲、鈍女を呼んで、否定させてやる。」  
「むちゃくちゃなツッコミね。」

「東海林桜っ！！私を無視するとは、いい度胸だ！！」

理事長は無視されることが、非常に嫌いなので、怒りだした。

「沢症候群をばら撒いてやろうかあ！！かなかな？」

「最後の部分がキモイです。40代。」

「ぶちまけられてえかあっ！！！」

「理事長、ぐらしネタはそろそろにして、本題に入りましょう。」  
「む、そうだな。」

理事長は持っていたスタンガンを机において、落ち着きを取り戻した。

「東海林桜よ。放送は聴いたな。」

「あ、よくもウチのカップを！！！」

「そこではない！私にツッコミをさせるとはやるな。レクリエーションのことだ。」

理事長は、紙を一枚取り出し、桜に見せた。

「いいんですか？その後で配る紙ですよね。」

「かまわないさ。貴様らには一つ特別ルールがある。それを該当するものに伝えてもらうために見せた。」

「は！？」

紙にはルールの他“ ”で追加ルールが書いてあった。

( Gクラスの者はハンデとして、最初から持たないものとする )

「なんですか？持たないって？」

「見せられるのはここまでだ。このことをGクラスの連中に伝えておけ。」

「まったく……。わかりました。では」

「待て。」

「なんですか？」

「お土産。」

始業式を始め、桜たちはクラスにてホームルームを始めていた。クラスには一年F組の友人がたくさんいた。

クラスメートは、七海・南・識・間宮・村瀬・倉田・椿などなど。

「そういえば、椿は何で理事長室にいたの？」

「私？そうね。ひ・み・つ」

椿はよく理事長とコンタクトをとっている。

一応だめもとで聞いてみたがやはり、ダメであった。

「よ！桜！」

「桜ちゃん」

南と七海が近づいてきた。

「二人もGクラスなんでね。」

「私たちも驚いたよ。」

「わたしたち基本サボりだからあゝ、Gなんて考えてもなかったよ  
お。」

この三人も成績はだいたい下の下。

桜は英語だけは上の上

七海は社会は上の上。

南は数学が上の上。

これだけ飛びぬけて成績がよいが、他が終わってる。

「おいおい、お前らこの教室のテスト大丈夫かよ。ヘタな点数とつ  
たら補修だぜ。」

このクラスの住人である、識がやってきた。

「そつえば、識くんって、今」

「ん、なんの話？」

「わあああああ！！！！」

識と桜が南の言葉を遮った。

どうやら、南は識が桜の屋敷で執事をしていることは知っているらしい。

一応念のため、周りには識が桜邸で住んでいることは秘密にするこ  
とにしているので、口止めに入る。

「何さゝ気になるよー」

何のことかわからない七海が桜を揺さぶってきた。

「いやゝなんだろなゝ・・・」

「嘘がヘタすぎだろ。中嶋くん？何があったのかな？」

「え〜つと。あ！先生来た！」  
「あ、コラー！」

識は言い訳を作り、席へと着席した。

担任教師は、紫部であった。

「おーし、席につけ。出席とるぞー」

「あれ、紫部先生。Fクラス担任だよね。」

「あー、Gクラス担当の芦辺が入院したから、私がG組の教師になった。」

出席をとり、時刻は10:50。皆11時に何かがあることを知っているので、理事長からの伝言を伝え、全員何があるかわからない精神状態で、座っていた。

時間をもてあまし、識と椿が雑談をしていた。

「椿。理事長が何をやるうとしているのか、本当にしらないのか？」

「知らないわよ。」

「じゃあ、何をしそうだ？」

「そうきたのね。そうね……。あの方のことだから、最初から死にそうになることはしないとわ。まあ桜単体ならワニと戦わせられるくらいはしたと思うけど。」

「そうか。まあ一年生もいるしな。」

すると、校内放送がなる。

これから、理事長が何をいうのか、全校生徒が緊張し、聞く。

## 次回予告

南「私たち久しぶりの登場だね」

七海「東海林家編つて桜メインじゃないのよ！」

南「何気にい三章では識くん出てたからねえ。」

七海「今回は活躍できそうね。」

南「それから、情報では今回、あの久しぶりのキャラが出てくるぞうだよお！」

七海「つとということ、今回は『理事長の発言！』だ！」

南「お楽しみにい」

### 38 ロシアン水鉄砲ゲーム

『諸君。理事長である。』

全員が黙って聞く。

聞き逃すようなことがあったら、大きな痛手になるからである。

『では、今日行つのは、“ロシアン水鉄砲ゲーム”』

水鉄砲を使うゲームくらいしかまだわからない。

『このゲームは特殊な鉄砲と玉を使う。鉄砲は6連リボルバー式で玉は黒墨玉を使う。が、ルールとして、打ちきり、装填するとき、六個のうち一つセーフ玉である透明玉を入れる。これで諸君に戦ってもらふ。銃を撃ち合い、黒墨が身体にあたると、失格である。監視カメラで様子を確認しているので、あつた者はこちらで名前を放送する。透明玉にあつても失格にならない。ゲームの範囲は、高等部・中等部である。教室の中など自由に使ってよいが、後半になると、生徒の所在地がモニターのGPSの位置が表示される。スタート地点は、担任に聞け。以上だ。』

周りが騒がしくなった。

『最後の一人となった者は報酬として、私のできる範囲で何でもしてあげよう。』

周りが一気に喚起めいた。

理事長の権限はでかい。

“何でも”なら学園内のことなら何でもできる。

しかし、理事長の放送はまだ続く。

『なお、Gクラスの者にはハンデを与える。』

「「「「「なにー！ー！！！！」「」」」」

報酬で盛り上がっていた分クレームはひどかった。

『Gクラスの者は初期装備はなしだ。武器は学内の至る所に隠してある。銃と玉だ。以上健闘を・・・いや。罰ゲームもある。一位ではなくい二位のものは罰ゲームがある。終了後理事長室に来てもらう。以上健闘を祈る』

そして放送が終わった。

全員“二位”の罰ゲームは大してきにしていないようである。

Gクラスでは、武器の支給がないときた。

それだけ、他クラスとは体力面などで大きくかけ離れているハンデである。

「ってことで、Gクラスはこの教室からスタートらしい。じゃあ私は、終わるまでタバコ吸ってるからあとよろしく。」

「桜、どうする？」

「罰ゲームにならなきゃいいかな？って私は思っなあ」

南と七海はあまりやる気がないらしい。

「ならさならさ！ウチのサポートに回ってよ！」

「ん〜まあいいかな。南は？」

「私もやる気ないからいいよお」

よし！つと桜はガッツポーズを取り、

「あとは、氷柱さえ仲間に来たら・・・」

「でも氷柱ちゃんとはスタート地点が違うから、最初から組めないよお〜」

「う〜ん、氷柱は授業中携帯の電源切ってるからな。いや、氷柱なら、最初に生徒会室に行くと思うから、そこで仲間にしよう。」

桜は作戦を立て、待機。

「中嶋さんはどうするつもりで？」

「なんだよ椿。どうするって？」

「やる気の話よ。」

しばらく識は考えた。

「特に理事長にお願いしたいこともないし、ないかな。」

「じゃあ、組みましょう。」

「は？」

「私は優勝したいけど、今日は生憎ハイヒールにドレス。桜とやりあつたら瞬殺だわ。」

たしかに椿の格好を見ると、制服ではなく黒いドレスに靴はハイヒール（雲の上は外履）である。



「組むって、どうすんだよ。」

「私がこの学校のセキユリティ室に入るから、貴方たちに情報を送るわ。」

「“たち”って後だれいるんだよ？」

椿がチラリと見た。

その方向には、間宮がいた。

「そう言えば、椿と間宮って仲いいよな。話してはないけど、よく一緒にいる。もし・・・」

「別に付き合ってるわけじゃないわよ。」

「そういう仲じゃないわよ。私たちは。」

椿は特に感情をこめることなく言っていた。

その教室の奥で・・・

「村瀬さんはどうしますか？」

「倉田さんのご指示のままに。」

倉田と村瀬である。

おじさん顔の倉田とそのメイドである村瀬。詳しくは15話を見よう！

「私は特に興味はありませんが、いい機会です。私のことはいいので、村瀬さんちよつと頑張ってみてください。」

「はい、わかりました。では、数人手駒として扱いますわ。」

Gクラスでは、桜組・椿組・村瀬組の3グループにわかれた。

Sクラス

「あら、めずらしい。鏡博さんじゃない。」

「イエ〜〜〜〜ス。今日は〜〜〜理事長が面白いことをやる〜  
とってたので、きま〜〜〜したあ。」

「研究の資料集めですか？」

「い〜〜〜〜えす」

氷柱はSクラスで洋書を読んでいると珍しい顔があったので声をかけていた。

彼は、鏡博。白衣を着、丸眼鏡、高身長 of 研究者である。髪は切るのが面倒らしく、後ろで結んでいる。研究中の事故で、髪は真っ白である。

彼も、研究といい、あまり学校にはこない。

「今日は〜〜〜徳川〜〜〜も来るそうですよ〜〜〜」

「徳川君が!？」

「あと千里兄弟も〜〜〜す。」

「っ!?!?!?!どうして!?!?!なんで、今日はそんなエリートがくるの??!?」

周りの生徒も驚いていた。

同じSクラスでも、“徳川”そして“千里”が登校するのは稀である。

この二人が同じ日に登校するとなると、このクラスでは事件である。

(これじゃあ・・・桜は優勝できないっ!?!?!?!?)

「でも、まだ来てないのよね？」

「12時までには来るらしいで〜〜す。」

(遅刻してくれれば・・・なんとか・・・)

時刻は、12時を回る5分前。

氷柱たちのスタート地点は、中央時計台の下、時計台の中にある生徒会室の下でもある。

「はい、皆さん。では、あと少して始まりますよ。」

担任が時計を見る。

担任の教師に氷柱は聞いてみる。

「あの先生。徳川君たちは、きてますか？」

「まだ来てないわよ。」

氷柱は安心した。

恐らく、この学校での脅威である徳川がいないのならば、桜の優勝もありうる。

だが、少し遠くから、声がした。

「千里。どうやら間に合ったようだよ。」

「そのようだな、徳川。」

「お兄様。あと30秒で1200時であります。」

その姿は、千里千歳・徳川空・千里命の三人であった。

教師が、出席名簿に名前を書き込むと同時に、12時のチャイムがなった。

### 39 賽は投げられた

12時のチャイムが鳴り、ゲームがスタートした。

桜たち3人はまず時計台の生徒室に向かい、氷柱を仲間にしようと考える。

最初、スタートしたときは武器を持っていないので、迅速な行動が求められる。

武器の所持している相手に遭遇したならば、防戦一方になってしまうので、なるべくA〜Fクラスの者に遭遇したくない。

このゲームの範囲は雲の上中学・高校の敷地を使うので、かなりの広さになる。幸運にも桜たちGクラスは、時計台まですぐの距離なので、誰にも会うことなく生徒会室にいけるであろう。

桜たちは周りに誰もいないことを祈りながら、時計台の下にまで行った。

周りで、パンツパンツと音がする。

恐らく、銃を持っている者同志で打ち合いをしているのであろう。

勝負がついて、こちらにこられてはまずいと思い、桜たち三人は一層早く行動する。

誰にも気づかれず、どうにか時計台下にまでたどり着いた。

エレベーターを使い、生徒会室にまで行く。

チンツと音が鳴り、ドアが開かれると、そこには、いつもの光景、氷柱が生徒会長の椅子に座って、新聞を読んでいる姿があった。

「あ、やっぱり来たのね。」

「ウチらも氷柱ならここにいると思ったよ。ここは生徒会メンバーしか入れないしね。」

そうして、氷柱に近づくと、衝撃の事実がわかった。

「つ……氷柱……。」

「ごめんなさい。私打たれちゃったの。」

氷柱の腹部に、黒い後。打たれた後があった。

「やっぱり……氷柱って腹黒いから血が黒いのね」

「ぶっころすわよ。」

あくまで笑顔で殴る。

「でも、ゲームに負けた後でも、自由に動いていらしいから、助かったわ。」

「あ、いいの？」

「ええ、通信役とかはやっていらしいわ。」

「じゃあさ、ウチらと組もう。」

「ええ、いいわよ。それと、拳銃一個あったわよ。玉は六発。大事に使ってね。」

そして、役割分担をした。

イヤホン型の通信機を桜に渡し、

通信兵 南

戦術予報士 氷柱

移動手段 七海

戦闘員 桜

といった風になった。

「私は通信役だから安全だねえ」

「そうね。それに生徒会室にいれば、攻撃は受けないわ。」

「外の様子はどうか？」

南は外の様子を伺おうと、生徒会室の大きな窓から外を覗く。時計台の最上階に生徒会室があるので、そこからの景色は絶景であるし、周りがよく見える。

だが、顔をだした南に

一弾の黒墨が飛んできた。

「きゃあっ!!」

その場で後ろへところんだ。

「南っ!!!!」

全員が駆け寄る。

南の顔は墨だらけになっていた。

「馬鹿な、銃では、こんな高さまで玉が届くはずが・・・」

「違うわ。恐らく、理事長が隠していた、“スナイパーライフル”  
よ。」

「スナイパー!?」

桜たちは、まさかそんなものがあるとは思えず、まぬけな声で反応した。

「武器を隠しているって言うていたけど、まさか、銃だけでなく、そんなものまで用意していたとは、理事長恐るべし……。」  
「確かに、スナイパーライフルなら、この距離の説明がつかない。氷柱。対策は？」

氷柱は身を乗り出さず、大きな窓を見て、考える。

「この方角、南が打たれた方向角度から考えると、時計台の1階エレベーターの前に隠れている感じね。」

時計台エレベーターは1階にあり、そこから生徒会室にまで行く設計である。

階段もあるが、最終的に、エレベーター前に下りることになるので、結局は狙い撃ちされる。

「これは、あきらかに私たち生徒会を狙った行動。やられたわね。エレベーター門から前の茂みまで50m。私たちは武器なし。絶望的ね。」

そこで、南が目を覚ました。

「むきー！ー！！やられたよおー！！！！」

「あ、やっと起きた。」

「仕返ししてやるう~~~~」

南は生徒会室のパソコンへと向かった。

「南？何を……」

「私のパソコンでハッキングをかけて、相手の正確な場所、生徒情



報を丸裸にしてやるうゝゝゝ」

南のキーボードを叩くスピードは尋常ではなかった。キーボードが壊れるくらい強く、早く、正確に叩く。

「出たよおー!!」

パソコン画面には、生徒の写真名前と、現在位置が出ていた。

名前は、××椿

現在位置は、氷柱の予想通りのところであった。

「相手は椿か!?!」

「確かに、椿さんは移動しながら戦うのは格好的に不利。だから待ち伏せてわけか。」

さらにデータを見ると、現在の撃破数が20人となっていた。待ち伏せで倒した数であろう。

「氷柱ちゃん。これスナイパーライフルのデータだよ!」

「……これじゃあ、ロシアンリボルバーってのじゃないわね。だけど見て。これは一発ごとにリロードが必要よ。」

スナイパーライフルでは、打った後に玉を装填しなきゃいけないよ  
うになっている。

玉を取り出す 玉を入れる レバーを引く  
などの手順がある。

それにライフルを持っているのは素人なので、時間がかかることが  
予測される。

そこで、四人は作戦を立てた。

（南と氷柱を当てたから、後は七海と桜ね。桜さえ倒せば、一気にこのゲームはチェックメイトをかけるものだわ）

椿は茂みに隠れて、銃を構えていた。その先にはエレベーター門。

スコープを覗き、時に生徒会室の窓を見、椿は辛抱強く待つ。

ふと、エレベーターの階表示のランプが生徒会室から下へと移動している。

これは、覚悟を決めて、特攻を決めたのかと思い、スコープでエレベーターから出てきたところを狙い撃ちすることにした。

チンと音がなり、ドアが開く。

椿はトリガーに力をこめようとする。

だが、ドアが開き、中は無人であった。

（フェイク!?）

椿は生徒会室窓を見る。

これをオトリに別方向からの攻撃を予測した。

だが、何も・・・

と思ったとき

ギョルルル！！！！

何かが回る音が聞こえる。

そこでは、七海が自転車に乗り、後輪部分に桜が乗っていた。

そのまま、突撃。

乗り物の運転が神レベルの七海が操縦しているので、加速が早い。

遅れて、椿が銃を構える。

これなら間に合う距離であると思った。

トリガーを・・・

「とりやああああ！！！！」

七海は自転車でジャンプをした。

だが、椿は動じることなく脅威である、後ろに乗っている桜に照準を合わせる。

(二人は無理でも、桜だけなら・・・さよなら！)

トリガーに力をこめる。

銃弾が飛び出る。

それより、一瞬前であった。

後部に乗っていた桜は七海を踏み台にし、もう一段ジャンプをした。

椿は桜のジャンプまで反応することができず、後部座席の位置に射撃し、はずした。



『今の場所だと、近くにだれもいないわ。とりあえず、今いくつかの勢力があるわ。そのうちの小さい勢力から潰していきましょう。』  
「わかった。」

そして、椿は……

「やられたわ。けど……」

椿は時計台の隠れ扉をカードで開く。  
地下階段をくだり、薄暗い部屋に入る。  
そこはセキュリティルームであった。

「椿嬢！お疲れ様です！」

「ありがとう、じゃあ……さっそく……」

椿はコントロールパネルをいじり、トランシーバーで連絡をとる。

「中嶋くん。間宮……間宮千。聞こえて？」

『こちら中嶋。聞こえる』

『こちら間宮。良好』

「では、狩を始めるわよ。」

椿は不適な笑みを浮かべ、モニターを見ていた。

## 次回予告

椿「桜に負けたわ……」

間宮「……………」

椿「きいいいーくやしー！！！！」

間宮「……………」

椿「桜を黒墨だらけにして、あられもない姿にしたかったわぁ」

間宮「……………」

椿「アンタいい加減喋りなさいよ！！！！」

間宮「次回、椿チーム編」

椿「そこだけ!?!」

## 40 乱入者？

中嶋識は現在、森エリア（雲の上は敷地がドデカイので、森林エリアなど、多彩なエリアがある。）でうろついていた。

識の無線がなり、樫から連絡が入った。

『中嶋君。聞こえて？』

「ああ、聞こえる。」

『今のエリアから、中等部の校舎棟エリアにいくと、巨大勢力と鉢合わせするわ。』

「巨大勢力？」

『ええ、村瀬さんと倉田さんよ。』

「はあ？」

まさか、村瀬と倉田が出てくるとは正直驚きだった。

『村瀬さんが主に指揮をとっているわ。』

「めずらしいな。」

村瀬という人物は、いつも倉田の後ろで隠れているだけの人であったため、驚いていた。

倉田も目立つタイプではなく、先陣をきって何かをするタイプではない。

『村瀬さんが、色仕掛けで数人引っ張って、人数を増やしていったのよ。』

「なるほど。たしかに色気はあるし、胸は大きいし、尻もキュッとしまっていて、さらに・・・」

『それを女である私にまだ言う気？』

「ごめんなさい。」

『とにかく、団体戦をしたくなきゃ、そこから食堂棟のほうに向かってちようだい。そこなら、一人でうるついている人がいるわ。』

「わかった。向かってみる。」

識は無線をきり、食堂棟に向かった。

食堂棟の前についた。

食堂棟の前は広く、見通しがよいので、誰がいるのかよくわかる。食堂前にテラスがあり、その先が食堂への入り口となっている。情報では、誰かうるついているというが、生徒は誰もいない。テラスに教師が一人ティータイムをしている。

「すみません。」

識は教師に誰かいなかったか、聞いてみることにした。

「何かしら？」

その教師は、女性であり、とても綺麗な大人な顔立ちをし、綺麗に整った金髪の長い髪を持ち主であった。

歳はだいたい20代後半であろうか。

さらに識はスタイルを見た。まだに“パーフェクト”。ボン！キュッ！ボン！といったボディをしていた。

格好を見ると、おそらく科学先生であろうか。白衣を着ていた。ナース服ではない。

「あ……」



識はその身体に見とれていて、しばらく我を失っていた。

「はっ！すみません。え〜っと・・・」

「君はこの生徒ね。」

こちらが質問しようとする、先に質問をされた。

「はい、二年の中嶋です。」

「あら、よろしく。中嶋くん。私は“鏡レイナ”。保健室兼科学教師よ」

「レイナさん。よろしくお願いします。・・・ってそうだ！」

自己紹介をしたところで、やっと本題に入る。

「こちらへんで、生徒が一人うろついていませんでしたか？」

「さあ？さつきからここには誰もいないけど？」

「そうですか。」

識は、礼をいい、無線で、もう一度椿に連絡を試してみた。

「椿か？誰もここには来てないってよ。」

『何言ってるの！？今後ろにいるじゃない！参加してるのは“生徒だけじゃないのよ！！”』

「へ???」

まぬけな声をだし、後ろを見たらその場にはレイナの姿はなかった。そこには影が一つ。上を見ると、高くと飛び上がり銃を構え識に照準を合わせていた。

「?????」

「あ~~~~ら、ごめんなさいねえ」

「うぎゃああ!?!」

バババババ!?!と連射。

識は必死に横飛びでかわし、テラスにあった机を盾に銃弾を回避する。

「あああああなたっ!!参加者だったのか!?!」

レイナはオーツホホホと笑い上げ

「そうよ。参加資格は希望すれば教師でも参加できるわ。もちろん優勝すれば理事長になんでもお願いできるわ。」

「ちなみにあなたは何を願うんだ!?!」

戦う前にまったくの気まぐれであったが、とりあえず聞いてみた。

「給料アップよ!?!」

「まったく、ありがちな理由だな!?!」

識は銃を取り出す。

銃はリボルバー式なので、両手を使うので、机を盾に攻めることはできない。

先ほど、レイナは銃を連射したが、おそろしい速さで撃鉄を引き、もう一つの手でトリガーをひいていた。

レイナもタダ者の人間ではないことが容易にわかった。

「ねえ〜。中嶋くん?もし私に勝たせてくれたら・・・お姉さんが、

い・い・こ・と・お・し・え・て・あ・げ・る

「え、まじ」

『中嶋くん。バカなこと考えてんじゃないわよ。』

「うおっ！！！！」

今の会話を全て聞かれていたようだ。

識は一瞬、レイナの脳殺攻撃に負けそうになったが、樁の一声で我を取り戻した。

「よし、一丁やるか。」

識は飛び出し銃を構える。そして識は見た。

レイナは今手に持っているのは、銃ではない。

注射器を指の間に4本両手持ちしていた。

「あの・・・それなんですか??？」

「硫酸お注射よお　これなら机だろうが溶けるわ！！！！」

レイナは器用に一本だけ識に向けて投げる。

識はよけ、注射は後ろの机に刺さる。その注射の針が刺さった部分が溶ける。

「こここここれ！！！！当たったら死ぬでしょ！！！！」

「あら～そんなの関係ねえって一昨年の流行語よ！！！！」

「変なボケすんなあ！！」

レイナはさらに投げる投げる。流れ弾がたくさんさんの机に当たり、机がたくさん溶け始める。

識も抵抗をしようと思うが、一発でもあたれば溶ける「ヤバイ。こんなゲームで溶けるのはごめんである。」

「避けちゃいやよ。私のために当たって頂戴」  
「おことわりっ！……！」

識はまだ形をまともに保っている机の上に乗る。  
そこからレイナとは逆方向に跳躍する。

跳躍中、身体を縦に半回転し頭を下にしながら、銃を構え、発砲。

レイナもその攻撃は予測していたので、簡単にヒラリとよける。

レイナが避けて、攻撃の手が休んだ隙に飛んだ先にある大きな机を  
転がし盾にした。

「盾は無駄だつてわかってるでしょう……！」

レイナは硫酸注射器を投げ、大きな机を溶かし始めた。

「さあさあさあ……出てらっしゃい……！」

予備の注射器を取り出し、まだまだ投げつける。  
いきおいよく投げつけるので、机を貫通して、地面に注射が突き刺  
さる。

レイナは片手に4本持ち、それを一斉に投げる。  
なくなれば、どこからか補充をしている。

「くそ……！」

たまらず識はその盾を放棄し、逃げだす。

「まだまだまだまだよ……！」

「そうかな？」

識は反転し、近くにあったカーテンを掴み破る。さらに近くにあった机を蹴り飛ばし目隠しに使う。

「そんな目隠しごとき!!!」

レイナは飛んできた机を手で払いのけ、識に向けて注射器を投げようとする。

だが、それより早く識は行動していた。

持っていたカーテンを広げていた。あくまで目隠しであった。

レイナの注射器はそのカーテンをも貫通する。それは机を貫通させたのを見ればわかることであった。

ブスブス!!

つと貫通する。

貫通する前に、識はさらにスライディングをし、避ける。

「何度も同じ手は効かないわよ！」

それを読んでいたレイナはカーテンの下に注射器を投げようとした。

先ほどから、識の連続フェイントにより、今手元にある注射器は一本だけであった。

補充をしようとするが、恐らく、今からでは識のスピードには追いつけない。

一本に集中し、投げる。

眉間にめがけて一閃。

一本なら識の動体視力・運動神経を持つてすれば、取ることは容易であった。

今のレイナは何も持っていない。

識は手に持っている銃でレイナを狙う。

「もらった!!!」

一方、桜。

桜は中等部エリアの中庭にいた。

「ふんふんふん!!!」

桜はそこで、銃を撃ちまくっていた。

かれこれ30人撃破を達成したところであった。

次元並みの高速連射を習得し、今は三人同時に撃破した。

「ふう……。やっぱり一人で歩いているとカモられるよね。」

先ほどまで七海は先ほど、疲れたから休むといって、自転車から降りた瞬間撃たれた。

「それにしても、まだGとSクラスの連中には遭遇しないわね。」

桜が先ほどから戦っているのは、A〜Fクラスの人達であった。なので、まったく苦戦することなく、勝利を収めてきた。

「今、どうなっているのだろうか？」

桜は状況確認するため、一度氷柱たち作戦本部と連絡をとることにした。

『そうね、そこにいるとかなり危ないわ。』

「どういうこと？」

『村瀬勢力つてかなり大きい勢力が近くにいます。早めに逃げて。』

「そうね……。ウチはリボルバーしかないから大多数相手はまずいわね。」

桜は中等部を離れようとした……が

ピキーン！！！（ユータイプ音）

「危な！！！」

桜は何かを予知し、避ける。

それは壁にあたった。その壁を見ると黒く染まっていた。恐らくスナイパーがいる。

さらに玉が飛んでくるが、まったく的外れな所に玉が飛んでいった。おそらくドヘタなスナイパーであることを察し、特攻してさっそく撃破。

「まったく……っ！また！」

撃破した地点でまた狙撃された。

桜は簡単に玉の軌道を読み、狙撃ポイントを察知し、再び撃破。

「つまた！」

同じことがまた続き、撃破。

そこで、桜は思った。

（あれ？まさかウチ誘導されてない？）

危険を察知し、氷柱に連絡をとってみることにした。だが、携帯を無線をとるとノイズが聞こえるだけで、連絡がとれない。

「まさかジャミング！？」

「その通りよ、東海林さん。」

声がした。

まさか、と思い声がした方向を確認すると、一人の女性と多くの男性集団30人ほどがいた。

「あなたは・・・たしか村瀬さん？」

「会話するのは始めてですね。私は村瀬サリサです。倉田様のメイドをしつつ、学校に通学させていただいております。」

「ごく丁寧な挨拶どうも。」

会話をしながらも桜は周囲を警戒観察していた。

周りの包囲網はまだ完成していない。

今なら、逃げられる。



「東海林さん。逃げようとしてるわね？」

「なっ！」

「逃がしません。皆さんよろしくお願いします。」

「」「」「サー、イエッサー」「」「」

村瀬の後ろにいた男性集団が一斉に襲い掛かってきた。

桜の見た目では、A〜Fクラスの人間がほとんどで、Gクラスの人  
もわずかにいるような感じであった。

たくさんの玉が飛んでくる。

セーフである水玉も多いが、ほとんどが黒墨玉である。

「こんなのに負けたくないな……。つか……」

桜は必死に走る。

それを男集団が追いかける。

「これは多すぎだろ！！！！」

逃げる桜。果たしてこの集団を負かすことはできるのか？

次回、「桜無双」

41 東海林桜 vs 村瀬サリサ

「ぎゃあああー！ー！！！」

桜は逃げ回るが、中等部の校舎をグルグルと回っていたのがまずかった。

回っているうちに桜包囲網が完成しつつある。

「まずい……。何とか撃破しないと……。氷柱に連絡をとろう。」

桜はまずジャミング装置をどうにかしようと思えるが、どこにあるのかもまったくわからない。

だが、幸い今は校舎付近にいる。校内に忍び込んで放送室で生徒会室と放送をとろうと考えた。

さっそく窓から忍び込む。

中には誰もいないので、早々と放送室まで行く。

「つらえもん、たっすけてっす。」

「だれが、“つらえもん”よ。」

「逃げられないよおっ。」

「厳しいわね。南、何か銃とか隠されていない？」

先ほどからスナイパーライフルなどが、出てくるが、これらはいたところに隠されている。

「銃はないけど一つだけ方法があるよおっ。」

そして桜は指示を聞き、屋上にへと来た。  
桜はスウッと大きく息を吸い

「東海林桜はここにいるぞー！ー！！！！！！」

校舎屋上から、大声で自分のいるところをアピールした。  
徘徊していた村瀬兵士は屋上へと駆けつける。

「ウチを討ち取りたいやつはかかってこー！ーい！！！！！！！！！！」

さらに挑発し、兵士全員を集めようとする。

一分もしないうちに兵士全員が屋上へと集まった。  
雲の上の屋上なら、30人ほど簡単に入る。

全員が集ったところで、桜は屋上の貯水タンクへと登る。

「一つ聞いておく！！なぜ村瀬につく？」

集団の中からリーダーと思わしき、デブ眼鏡の人物が出てきた。

「ぼぼぼ・・・僕は村瀬団リーダーの油伊であります。お前を倒せばむむむ村瀬さんに、ご褒美をもらえますであります。」

「なるほど。」

村瀬は色気でこいつらを手駒にしたのかと納得した。

あの大人の色気ムンムンとフェロモンを放出している村瀬なら、こ

んなことは簡単にできると思う。

「なら、残念だね。村瀬さんにおしおきされな!!! 来い村雨え!!!」

空から木刀・村雨が舞い降り、桜の手元に飛んできた。

「うおおおおおお!!!!!!」

まるでバットをフルスイングするように、振り、貯水タンクに大きなひびを入れた。

「くらいな、MAP兵器。」

ひびの入った部分を木刀でチョンとつく。するとひびの入った部分は崩壊し、中から水が爆発的に一斉に溢れ出す。

そこから出る水はただの水ではなかった。

“黒墨”の水が貯水タンクの中に入っていた。

桜は南からそのデータをもらい、一斉に撃破しようとして全員屋上へと集めたのだった。

「うわあああ!!!」

屋上にいた人、桜以外の人は全員墨だらけになり、失格となった。失格となったものは、通信以外の行動は禁止されるため、桜の障害ではない。

失格となったものを一瞥する。

そこには男性しかおらず、村瀬がいなかった。

屋上入り口から、靴の音がカツンカツンと聞こえてくる。

まだ姿は見えないが、今からくる人物は容易に想像できた。その想像通り、やってきた。

「わたくしの下僕……もとい協力者を……。簡単には殺しませんよ。」

「来なよ。メイドさん。」

村瀬は制服の中から、六本の小さな棒を取り出し、それを全てくっつけて、2 mほどの棍棒にした。

「銃撃戦ってわけじゃないの……?」

「簡単には殺しませんと、……言っただけです!!!!」

屋上入り口から、破壊された貯水タンクの上にいる桜の元まで跳躍。そして桜めがけて棍棒を一閃。それを桜は木刀で防御

(っ！意外と重い！？ただのメイドではないね。)

そして村瀬は舞うように貯水タンク下へと着地。

「こちらにおいでませ？怖がらずともよろしくてよ?」

それはあきらかな挑発であった。

桜はその挑発に乗ってしまい、貯水タンクを飛び降りて、村瀬へと襲い掛かる。

縦一閃

村瀬は桜の力量を測るためにわざと受けた。

(！？さすが、理事長のお気に入りね！！)

攻撃を凌ぎ、村瀬は後ろへ下がる。

お互いは一定距離を保つ。

先に動いたのは桜であった。

(相手の方がリーチが長い。それをどうにかしないと・・・)

お互いの武器がぶつかる。

「東海林さん。ちょっと侮ってましたよ。」

「それはウチもだよ。ただの女王様かと思ってたよ。」

力押し合戦になった。

わずかに桜が押す。それを察知した村瀬は、一瞬で棒を地面につけ、棒高跳びをするかのように跳躍する。

予想外の行動に桜の動きが流れた。

それを見逃さず、村瀬は攻撃にでる。

桜も攻撃される予感はしたが、今は距離がある。

お互いの武器では届かないはずであった。

村瀬は空中で棍棒を桜へと向ける。

そこから、棍棒の先端部分が飛び出た。

飛び出た棍棒は本体とワイヤーで繋がっていた。

それを避けることができず、桜はダメージを負う。

(っ！！重い！！)

先端部分とはいえ、見た目以上の重量ある武器であった。

桜はバランスを保つことができず転倒。

村瀬は地面に着地し、桜を追撃しようと、飛び出た部分とは逆方向の棍棒を桜に向ける。

再び発射。

転倒しながらも桜はその行動をしっかりと見ており、すぐに立ち上がり、木刀で叩き落とす。

叩き落した棍棒はすぐに本体の棍棒へと戻る。

( 遠距離もできる・・・。けど、叩き落すのは簡単だ。 )

桜は何もしかけがない木刀。対する村瀬はしかけ棍棒である。

桜はまだ何かあると思い警戒をするが、考えても仕方ないと思い、また先に行動する。

村瀬は、リーチを生かすべく、突きをする。

かなり正確な突きであったため、桜は急停止し、後ろへ下がる。そのまま村瀬は突きを繰り出しながら前進。

「東海林さん。どうしましたか？怖気づきましたか？」  
「な……わ……け……ないっしょ!!」

桜は村瀬の棍棒が下がる一瞬を狙い、しゃがみながら一回転し足を狙う。

だが、リーチの差もあって、桜はしゃがみながら少し、村瀬に接近しなくてはいけなかったため、わずかに村瀬が逃げる時間を与えてしまう。

そして村瀬は後ろへと跳躍。

後ろへ飛ぶことを読んでいた桜も同時に跳躍。

村瀬との距離は近い。

棍棒が如何に長かろうが関係ない距離だ。

飛んでいる間、二人の激しい打ち合いが起こる。

二人が地面に着地。

村瀬は横へと一閃。桜はそれを受けず、状態を異常なほど、マリツクスのように避ける。

そこから、腰の反動を使い、木刀で突き攻撃。目標は村瀬の棍棒、しかも連結部分であった。

「いつけええええ!!」

桜の異常な筋肉があればこそその威力であった。

村瀬を後ろの壁へと吹き飛ばし、壁に背中がつくと同時に、棍棒が真っ二つに折れた。

「まだ終わっていません!!」



だが、村瀬はあきらめてなかった。  
二つになった棍棒を両手に持ち、先端部分を桜へむける。  
そし一つを発射。  
時間差でもう片方も発射。

最初の棍棒は叩き落すが、もう片方はワイヤーが木刀に絡んだ。

「これには仕掛けがありまして、電撃を流せる仕掛けになっておりますよ」

「ちよつと、まずいかも・・・」

村瀬はスイッチと思われるものを押す。

「ポチツと・・・」

桜は木刀を離そうとした、だがその時。

「おやおや、これはこれは。タンクが壊れてるではありませんか」  
後ろから呑気な声が聞こえてきた。

「倉田様」

戦闘時の顔とは違い、満面の笑みを浮かべる。  
その隙に桜は

「今だ！そおれ！」

木刀を引き上げ、ワイヤーごと村瀬の棍棒を宙に上げた。

「ああっ!!」

「もじつよ!!」

桜は後ろから銃を取り出し発砲。

「きゃあ!!」

見事ヒット。

村瀬は失格となる。

「悔しいですが、私の負けですわ。」

「そうですね。でも楽しめましたか？村瀬さん。」

「ええ、東海林さんとはまた戦いたいと思います。」

楽しそうに、村瀬と倉田は会話している。  
ラブラブだなあと桜は見る。

(ウチ勝ったのに、何か悔しい・・・)

次回「間宮編」

## 42 間宮千 vs 徳川空

間宮千・・・彼は椿と識とチームを組んではいるが、椿と最低限の連絡をとるくらいしか連携をとっていない。

その彼が、一時間ぶりに椿から連絡が入り、無線をとる。

「こちら間宮。」

『間宮ね。今の状況だけど、識君が20人討ち取ったわ。で、間宮がさっきので20人。そこをまっすぐ北へ行くと無勢力でバラバラのやつらがたくさんいるから狩れるわ。』

「了解。」

最低限の会話をし、間宮は通信を終わらせた。

間宮も、識たちと同様一人で歩いているので、先ほどからたびたび勢力を持っている者に狙われているが、簡単に振り返り討ちにしている。

この学校で、間宮と対等に戦えるのは、おそらく識や桜。それからSクラスの間宮くらいであろう。

だが、Sクラスはあまり登校していないので、今日は10人くらいしかない。だいたいはやる気がなく開始と同時にリザルトしている。

間宮は北へと進み、教会エリアに出た。教会エリアとは、雲の学園中等部から高等部をつなぐ道にある。

「うちとっ!」

「くらいや!」

バンバン！

二人ほど間宮を見つけ飛び掛ってきたが、背中を向けたまま射撃し簡単に撃退をした。

「.....」

勝利後も相変わらず無言で歩く。

その姿を見ていたものが一人。

「そこの方！お待ちください！」

背後から声が聞こえ、振り返った。

ベレー帽をかぶり、迷彩の服を着た女の子であった。

こんな超特殊な人間であったが、間宮は今まで見たことがない。

恐らく、新入生、又はSクラスの人であろうと間宮は思った。

その女の子は続いていた。

「私は千里命軍曹であります！」

背をピンと伸ばし、敬礼をしていた。

軍事オタクかと間宮は思う。

相手にしないで間宮は先に進もうと思い、再び歩き出した。

背後から撃とうとすば殺気が生じるので問題ないと思っていた。

「お待ちください！あなた様にご紹介したい人物がございます！」

その言葉に興味を持ち、再び女の子を見た。

だが、そこにいるのは女の子一人であった。不思議に思い、間宮は珍しく声をだした。

「そいつは何処にいる？」

「は！あなた様の前にいらっしやいます！」

間宮は急いで前を見る。

するとそこに二人の男子が立っていた。

先ほどまで前を向いて歩いていたが、人影一つなかった。

いつの間の前に現れたのか。間宮は理解できず、警戒の態勢をとり、距離を開けた。

千里命となのる女子はその人物を紹介しようと、話し出した。

「そちらの二人。間宮殿から見て左から、“千里大和”様二年生。

“徳川空”様二年生であります！」

千里大和という人物は恐らく命の兄弟であろう。

容姿は190以上の高身長であり、かなりいいルックスの持ち主である。

アフロといった目につきやすいヘアースタイルをしており、これもまた命同様めずらしい。

命と違い、服装はいたって普通の私服であった。

その隣、徳川空。

大和よりは身長が低く、普通の170mくらいの高さである。

髪はパーマをかけてるだけで、大和とくらべると普通といえる。

容姿スタイルはモデルレベルといえる。何かやさしい印象を受ける人物である。

「さっきの戦い見てたよ。」

先に喋ったのは徳川空であった。

「それを見てな、徳川がお前と勝負したいって言ってるんだ。」

大和は笑いながら言った。

間宮としては断る理由はなかった。

喋る代わりに、銃をとりだし、合意の合図をした。

「やってくれるようだね。ありがとう。あ、自分から自己紹介しなきゃいけないね。僕は徳川空。」

「俺は千里大和だ。そうそうあっちの命と三人はSクラスにいるんだ。」

大和と命は道の外れにそれた。

間宮は構える。

徳川は銃を取り出しただけで、一切構えていない。

「いいのか？」

「ん？何が？」

あまりに無防備であったため、間宮はたまらず問いかけてみた。

「ああ、大丈夫だよ。」

「そうか……。」

間宮は考えていた。

こいつはタダものではない。

今までの雑魚どうよう余裕こいて射撃していたら、返り討ちにあう。そう思い、最初から全力近くを出すことにしていた。

しばらくお互い動かぬまま時間が流れる。

その間、命も大和も一歩どころか、ピクリとも動かない。

どこからか、パァーンと音がした。

「っー」

その瞬間、間宮が動いた。

徳川へと向けて、ジグザグにフェイントしながら移動する。かなりの早さで移動している。

今だ徳川は構えすらしない。

接近中、一度発砲してみた。

顔面を狙う。

徳川は何事もなかったかのように、首をそらしてかわす。

（余裕か。）

次は胴体へと射撃すると同時に高速連射で足も狙う。

まず胴体の玉。それをちよつと横を向き、かわし、足の玉も同時に横を向きかわす。

間宮は徳川と距離が近くなり、少し危険を感じたため、飛び跳ね距離をとる。

「君、足早いね。」

徳川は嫌味などまったくなく、純粹に感想を述べていた。それに関する回答もせず、間宮は次の行動に出た。

間宮は徳川を中心に円を描くように走る。かなりの早いスピードで走る。

そこから連射して徳川を狙う。

玉は正確に徳川に照準を定めていた。

だが、徳川は決して自分の周りを回っている間宮を見よつともせず、銃を胸のあたりまであげ、間宮が撃った玉を全て玉で迎撃していた。

さすがの間宮も驚いた。

玉を補充する目的もあったが、危険を感じ、再び距離を開ける。

「うん。僕を正確にとらえている。そろそろ、僕も動こうかな？」

徳川はここにきて、始めてその場を動いた。

間宮は何か威圧力を感じ、後ろへ一歩引いた。



間宮は自分の意思で動いたわけではなかった。本能的に一歩引いてしまった。

「すごいよ！君！僕が“威圧”してるのに一歩しか動かないなんて、大和以来だよ。けど」

徳川は間宮へと真つ直ぐダツシユした。

間宮はそれに合わせ、横へとダツシユした。

「追いかけてこかい？受けて立つよ。」

それから一般人なら姿が認識できないほどの早さで縦横へと激しく動いた。

間宮が逃げ、それを徳川が追うような形であった。

それを見ていた大和が感想を漏らした。

「おお、あの少年できるな。俺もやりあいたくなつたな。あの時間違って自分に玉を出しちまったから、できないのが残念だな。」

「兄上。私もそれにつられ自血したのを少し、後悔しております。」

ガシツと空中で徳川は足をつかんだ。

「ほら、捕まえた。」

まだ、余裕といった感じだった。

「次は俺が鬼だ。」

間宮は足を振りほどもぎ、近くの電灯に足をつけ、さらに倍速で動く。

徳川は地面に足をつけた。

その瞬間、倍速で動いていた間宮に背後をとられた。

間宮は徳川の背中に銃をつきつけ、発砲しようとする。

そして、トリガーを引いた。

バンツと乾いた音が宙に響く。

静かな場所であったので、よく響いた。

徳川は動かず、背中に間宮の銃撃を受けていた。

「それ、水玉だよ。」

徳川の背中は水でぬれたただけであった。

「で、君。のお腹黒いよ。」

間宮は自分の腹部を見て驚いた。

自分は打たれていた。

いつ撃たれたのかまったくわからなかった。

まったく覚えがない。

「僕はけっこう強いからね。ごめんよ、間宮千君」

「.....」

「……負けた。」

『そうね。映像見てたわ。』

負けた間宮は椿に結果報告をした。

『正直映像を見ても、すごい早い射撃だったわ。あなたが速度をあげて、徳川さんにとどめをさそうとした刹那だったわ。後ろを向きながらの射撃だったわ。』

「そうか」

そして間宮は無線をきった。

「自分で負けた瞬間がわからないとは……」

間宮は椿のいるセキュリティルームへと歩き出した。

43 東海林桜 vs 中嶋識

そして一時間の時が流れた。

ここは雲の上学園、教会エリア。  
そこには桜がいた。

「うざーい!!!」

桜は銃を連射して三人ほど倒していた。

「ふう……。連絡とってみるか。」

桜は無線で氷柱たちに連絡をとることにした。

「氷柱。今、状況は？」

「今は……。残りが4人よ。」

「誰？」

「んてねえ。わたしがあ、調べた限りだと、識くんとおく徳川つて人とく鈴木つて人だよ。鈴木つてのはねえ、大勢力のトップだったんだよ。」

「そう。で近くに誰か……！」

桜は会話を止めた。

「ごめん、また後で。」

そして、桜は銃を構える。

その先には、一人の少年。中嶋識がいた。あちらも桜に気がついたようだ。識も銃を構えながら、歩き近づいてきた。

「よお、桜。」

「おいっす識。」

「やっぱりお前も残っていたか。」

「そっちもね。」

そして、識は歩くのを止める。

「なんだか、お前とは戦う気がしてたんだよな。」

「ウチもそんな気がしてた。あんたと戦うのは二度目？」

「どうだな、旧校舎で一回やりあったな。あれは俺の勝ちだったけど。」

桜はあからさまな不機嫌な顔をし、はあ？っといった風に口を開けた。

「何言ってるの！？馬鹿ですか？ウチの勝ちでしょ？いい加減なことを言うと、そんな大人修正してやる！って殴るよ！」

「これが若さか・・・っていや俺の勝ちだろ！」

「「じゃあ、勝ったほうが正しいってことだえ！！！」」

二人が同時に叫び戦闘体制になる。

「おい桜！俺はお前の執事だからって、今回は主従関係はなしだぜ！！！」

「あんたいつもウチに執事らしい態度とってないでしょ！！！」

そして二人の戦いが始まった。

理事長室

「ええ、・・・ええ、その通りだ。ではよろしく頼む。」

理事長は電話を終え、モニターを見た。

「ふふふ、やっとおもしろくなってきた。・・・む、茶が切れた。

おい！青汁切れたぞ！イルカ！いるか！」

「はいです！た・ただいま！」

理事長室のドアを開けて、メイド女子が一人はいつてきた。タドタドしく理事長のコップに青汁をつぐ。

「はづはづ・・・」

「うむ、下がってよいぞ。」

「は・・・はいです！」

そしてメイドは下がっていった。

「さて、桜に1億かけている私としては、勝って欲しいが。どうなるか・・・」

理事長はモニターに釘付けになり眺めていた。

教会エリア教会前

「……………」

「……………」

識と桜はお互い一定の距離を保ち、円を描くように回り、相手の状況をうかがう。

視線は相手の動きを一切逃すまいと必死に凝視している。

すると、教会の鐘がゴーンと鳴る。

それを合図に二人は動き出した。

お互い同時に銃を構え、発砲しはじめる。

飛んでくる玉を最低限の動きで、交わしながらお互い真っ直ぐ相手に向かって走り出す。

そして、

お互い4発撃ったところで、ダイビングショットをする。

そしてさらに連射する。

お互いが地面に着地し、お互いの眉間に銃を突きつけた。

「……………残弾数ゼロだろ。」

「それはお互い様ね。」

そして、同時に銃を引き、玉を補充。

装填完了し、至近距離から相手を撃つ。

桜が識の胸に銃を突きつけると、発砲する前にそれを識がそれを裁き、逆に桜に照準を合わせる。

それを桜が裁くといった、行動をお互い連続で行う。

再び、お互いが全弾撃ちつくしたところで、一度再度装填しているところで、桜は行動に出た。

装填する途中、桜は識に蹴りをくりだし、体勢を崩す。

「っのやるー！」

桜は識よりも先に装填を終えていたので、識に発砲。それを識はバク転しながら連続回避。

その途中で、玉をいれ、バク転しながら撃つ。

「バク転しながらっ！やるじゃない！」

桜も玉を回避しながら撃つ。

お互い、距離を保ったまま、走りながら撃ち合いをする。

そのまま、桜と識は教会まで走りながら、教会のドアをぶち壊し、中へと入る。

そして、教会の椅子影にお互いが隠れる。

雲の上教会。長い椅子がいくつも並んでいるごく普通の教会である。少々薄暗い。

お互い、玉を装填しながら、休憩をいれる。

「やっぱりやるじゃないか！少し、燃えてきたぜ！」



「あつたり前よ！伊達に、たくさん修羅場をくぐってないよ！」

桜が銃を識のいるところに向けると、識は驚きの行動に出ていた。

隠れていた長椅子を持ち上げ、桜に向けて投げていた。

「ぎゃあああ！！！！つてふん！！」

飛んできた椅子を桜は見事にキャッチ。

「返す！」

桜はお返しと言わんばかりに投げる。

識はそれを避けて、交わすが、もう一個椅子が飛んできた。

「お返しは二倍ってしらない？」

「っこのー！」

飛んできた椅子を識は避けることなく、今度は片手で掴み、後ろへと捨てた。

その後も、教会の椅子がなくなるまで、お互い椅子の投げあいをしていった。

「オラオラオラオラ！！」

「ドラララララ！！！！」

識と桜の間で、椅子と椅子がぶつかり、壊れ、落ちてゆく。

全ての椅子が投げ終え、識と桜の間には、壊れた椅子の山ができて

おり、お互いの視認が難しい状態になっていた。

「ハアハアあ……」

「このお……バケモノ……」

さすがに疲労しており、次の手に移る前に少し休んでいた。

「識……アンタは理事長に何を願うの？」

「俺か、俺はな……」

そこで、識は止まった。

(あれ……？何か願い事あったっけ？俺ってたしか、やる気がなくて、椿にそそのかされて戦っているけど……？勝った後どうするか椿も特に言っていないからな……？)

おそらく何も無いのだろうと、桜は悟った。

「ないんでしょ！！そんなアンタにウチは負けられないね！！」

「じゃあお前は何を願うんだよ！！」

「授業サボって単位ゲット！！！！」

「やっぱりそれかあ！！」

「当然でしょ。授業サボり魔のウチなんだから」

「そうか……なら。」

識は相手が見えないながらも桜の方向に指を指した。

「なら俺は桜の執事として、学校に行かせるためにも、この勝負負

けるわけにわいかないな！！！つか、そんなこと許したら俺が茜  
さんに何言われるかわかったもんじゃない！！」

「そう・・・、ならお互い、勝つ理由は決まったね。」

「ああ。もう手加減はなしだ。」

桜は手を広げ、

「こい！村雨え！！」

桜の手元に木刀・村雨が飛んできた。

そして、識は背中から手甲を取り出し、両手に装着した。

識が持っている手甲は、いつかくるであろう、対桜用にゴミ山から  
調達した武器である。

「じゃあ、やるか・・・。」

一瞬その場が完全に静まる。

「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

お互いが、閃光のように走る。

間には壊れた椅子山がある。

二人の距離が近づき、間にあつた壊れた椅子の山が、桜の一閃・識  
の拳で一瞬にして吹き飛んだ。

そして桜と識が顔を合わせ、木刀と識の拳が衝突した。

## 次回予告

桜「なんか今回の編はここがメインだから、2話ひっぱるらしいわね」

識「らしいな。でもあと3話か2話はやるらしい。」

桜「で。次はどんな章なの？」

識「“未定”だ。」

桜「はあ？」

識「それがな、どうにもやろうと思っていた話はあるらしいが、ここで出しているのか悩んでいてな。」

桜「まったく……。まあどうにかなってくれませんか。」

識「そうだな。では次回、」

桜「決着編!!!お楽しみに!!!」

#### 44 木刀 vs 拳

識と桜が衝突し、あたりの木屑が反動で吹き飛ぶ。

桜の木刀を、識が両手の手甲ではさみこんでいる。

お互い同時に離れる。

そして、先に識が動いた。

閃光のように走り、桜へと右ストレートを繰り出す。

桜は木刀の上下を両手で持ち、防御の構えをとった。

予想以上の衝撃であったため、桜は少し、後ろへと下げられた。

その機を逃さず、識は左ジャブを連続で繰り出す。

桜も完全に防御に回ったと思い、まずは防御に専念する。

一撃一撃見極め確実に防御する。

連続で攻撃を受けているが、そのうち、桜は次にくる軌道を読んだ。

そして、攻撃に合わせて、身体を動かし、素早い突きを出す。

これを手甲にまともに受けても、手にダメージを負うと考え、避けることにした。

わずかに避けそこね、かすり傷を負う。

これ以上ここにいたら、追撃をくらうと感じ、識は一気に引き下がる。

それを追うように桜は構えながらダッシュする。

そして、木刀を一振り。これもどうにか避ける。  
桜は振り下ろした木刀をそのまま上げる。  
今度は避けることをせず、裏拳で受け止める。

一瞬で桜は木刀をずらし、横切りをする。

再び、受け止める。

「けっこう・・・痛いじゃねーか！」

識は蹴りを入れて強制的に離れさせる。

「うわっ！」

バランスを崩した桜へと識が近づく。

それを感じた桜はジャンプして、近くにあった銅像に着地する。

「逃がさねえ！！」

識は銅像まで飛び、桜にとび蹴りを繰り返す。

桜はそれに応えるように、木刀をフルスイングする。

蹴りと木刀が衝突するが、着地している桜が有利であったため、識が飛ばされた。

宙に舞い上がっている識を桜が木刀で切り上げながら突撃する。  
識は防御して凌ぐ。

そこから、桜は連続で切りつける。

それと同じように識も木刀に拳をぶつけてはじく。

「っ！！今っ！」

桜が一瞬をつき、上から兜割りのような攻撃をし、防御した識を宙から下へと叩き落す。

「ぐあっ！！」

そのまま背中から地面へと落ちる。

マンションの二階ほどの高さから叩き落されたので、地面にひびが入った。

さすがに大きなダメージを負った。

「やるお！これは痛いぞ！」

落ちてくる桜を向かえつつため、身構える。

桜は、また兜割りをするため、上段に構えながら落下。

互いが衝突する刹那。識は行動を変えた。

今いた位置から、高速で桜を中心に半円を描くように周りこみ、完全に桜の背中を捕らえた。

「やばっ！」

「遅いぜ！」

識は両手を広げ、突き飛ばす。

桜はその位置から離れた壁にまで吹き飛ばされた。

そして壁にほこりを上げながら、壁に埋められた。

もともと、もろい壁であったので、埋もれたのであろう。

しばらくして、手をピクツと動かし、壁を壊して、歩き出した。

「いやゝさすがに今のはかなり痛いよ。」

「お前だって、さっき上から叩き落したじゃないか。俺じゃなかったら入院してるぞ。」

「ウチも本気だったからね。」

桜は木刀を握り締める。

識は拳を握り締める。

「いくぜ！」

跳躍して一気に近づいてきた。

勢いをつけた右ストレートを桜へと向ける。

木刀で払う。

そして、桜は攻撃をだすが、識が飛んで避ける。

そして背後へと周り、手刀を出す。

桜はそちらを一切見ず、木刀を後ろへ回し、凌ぐ。

「おいおい・・・嘘だろ・・・後ろに目でもついてんのか？」

「単純な行動だったことよ。」

識の着地と桜が振り向くのは同時であった。

二人は同時に攻撃。

今度は武器と武器がぶつかることはなかった。

お互いの脇に直撃した。



「っ！！！！」

「っ！！」

二人はその場で耐えた。

識は反動で動けない。

だが、桜は違った。

「せいや！！！！」

「でっ！！！！！！」

識は桜の攻撃により、横へと飛ばされる。が、転ぶことなく、受身をとる。

その間、わずかに桜から目を離したのが、過ちであった。

識を攻撃した後、

「今だ！！！！！！」

桜は目つきを変えた。それは鋭く、冷たい目であった。

「秘儀・流巻ノ太刀」

少し走り、足を曲げ、跳躍。うねるように身体を回転させながら木刀を両手で持ち、勢いをつける。

そして、識へと勢いを殺さず刀を叩きつける。

ドオオオン！！！！と大きな音と、煙が上がる。

識のわずか右の地面を綺麗に切っていた。

「おいおい、先に聞かせてもらおうか。」

「何？」

「さっき脇腹をお互いぶつけただろ。なににどうして・・・」

桜は服をめくり、脇腹を見せた。

「あ！それは！」

そこには聖書があった。

「地形を把握して上手く利用しなきゃね」

バンという音が教会の中に響いた。

「これで、ウチの方が強いってことだよね」

「くっ・・・」

言い返す言葉もなく、黙ってしまった。

桜は満面の笑みで、銃をクルクル回している。

「じゃあ、アンタはウチの優勝でも祈っててね〜バイビ〜」

手のひらをヒラヒラと動かし、桜は去っていった。

教会から、100m離れた通り

「うわっ！」

一人の青年が真っ黒になっていた。

その人物を見つめているのは、徳川空であった。勝負の様子を見ていたのは、大和・命であった。

「ごめんごめん。ついついやりすぎちゃったよ。」

「徳川様。その人物は鈴木太郎です。残る相手は……たった今、残る相手は、東海林桜二年生のみとなりました。」

「東海林桜……？あゝたしか生徒会だっけ？」

「じゃあ、行こうか。」

徳川、大和、命の三人が歩き出す先には教会があった。

### 次回予告

氷柱「ところで、七海？あなたいつアウトになったのか、一行で書かれてただけだったわね。」

七海「作者曰く、忘れていたらしいよ。だから、とっさに一行でパツと済ませたらしい」

氷柱「はあゝ。さて次回だけど、ついに決勝戦ね」

七海「桜と、えゝつと徳川って人？私はよく知らないんだけどね。」

氷柱「そうね……。Sクラスの中でもよりエリート集団というのがいて、その中でも、ナンバー1、2を争う人よ。」

七海「それって……。雲の上で一番すごい人だよ……。」

氷柱「そうね。でも数学なら私のほうが成績上よ。」

七海「氷柱もバケ・・・」

氷柱「最近ムチを発注したのよね。誰で試そうかしら？で何七海？」

七海「いや〜さすが氷柱だなあ〜」

氷柱「ありがと。ではまた来週。」

45 【決勝戦】 東海林桜 vs 徳川空

中嶋識から勝利を収め、桜は教会から出て、氷柱たち本部と連絡をとっていた。

「氷柱？後は何人なの？」

『あとは、一人。だけど・・・、私は逃げることを推奨するわ』

いつにない弱気な氷柱であることに疑問を持った。

「その一人ってどんな人？」

『徳川空っていう人なんだけど、Sクラスの中でも1、2位を争う人よ。』

「何をもつての1位なの？」

『総合点よ。実技も含めた総合得点』

「そんなすごいんだ！それは楽しみだなあ」

『そうね・・・。気をつけてね』

「はいよ！」

無線を切ると同時に、人影が見えた。

見える限り三人。

視力7の桜には顔がバツチリわかるが、見たことのない顔であった。

「徳川様！距離100に東海林桜二年生がおります。」

「そうか。挨拶でもしにしよう。」

徳川は桜に向かって歩き出す。

その様子に気づいた桜も徳川に向けて歩き出す。

二人の声が聞こえるくらいの位置にまで近づいた。

「やあ、こんにちは。僕は徳川空。」

「どうも、こんにちは。ウチは東海林桜。」

「君が最後の相手かな？」

「そうね。これに勝ったほうが優勝者ってことだけど・・・」

「そうだね。」

二人は銃を取り出し、

「じゃあ！挨拶もまずまずだけど！」

「そうだね。やるつか。」

まず、桜が威嚇も含めた射撃をくりだす。

徳川が最低限の動きで避ける。

カウンターで、徳川も射撃。

桜も軌道を読み、避ける。

付近には遮蔽物がないため、わずかな油断が命取りとなる。

だが、何もしなければ、何も起こらない。

桜は一度、徳川に接近戦をしかけてみることにした。

まず、目くらましの目的で、近くにあったゴミ箱を蹴り飛ばす。

ゴミ箱に続くように、桜は徳川に接近する。ただ、接近するのではなく、あえて、相手の横へと飛び込む。

徳川の横へとついたとき、驚いた。

徳川は既に横に銃を向けていた。しかも桜が来る前に。

横についた桜はその銃の射線上にいた。

「ごめんよ。それは悪手だよ。」

バンっの一発。

「あっ！」

このままではあたると思い、状態を逆し字に反り交わす。そして、転がるように逃げる。

「危ない危ない。今は読まれるね……。」

反省しながら、次の手を考える。

「って思わせて！」

銃を片手で持っていたが、もう片方の手で、背中に隠していた識から奪った銃を取り出し、発砲。

玉が、徳川へと向かう。

「それは水玉（セーフ玉）だよ」

徳川は玉を手ではじく。

「銃をもう一つ隠していたとはね。リボルバーだから、一二丁使う人はいなかったな。」

「奇襲用ってやつよ。でも、水玉だったなんてね。」

「ふふふ。じゃあ、次はこっちから。」

徳川は連続で発砲。

それは異様な軌道であった。

「!・・・!?!?・・・!?!?」

一発目は普通に避けることができたが、二発以降、桜の避ける位置を確実に先読みして狙ってきた。

これから行こうとする場所に発砲される連続である。

「あんた先読みの天才?将棋とか強いでしょ!」

「そうだね。でも僕がやるのはチェスさ。」

「そうかい!」

「次は僕に向けて、特攻かい?」

「っ!!!!!!!」

まさにその通りのことをしようとしていた。

(読まれている?)

「君の行動パターンを分析したのさ。」

「・・・そう。じゃあ、これはどう!?!」

桜は、背中から銃を取り出す。一丁ではない、三丁とりだした。それを全て上へと投げ出した。



「何を？」

徳川にもそれは予想不能であった。

「じつするのよー！」

桜も上へとジャンプする。

「周りには足場がないよ。」

徳川は銃を桜に合わせようとする。  
その時、気づいた。

（そうか、やるね。）

桜は徳川に対して、太陽を背に。

徳川が、桜を見れば、太陽を直視するような形になった。

さらに宙に上げた銃、桜の持つ銃を含めた五丁。

それを両手で連続で五発、撃鉄を引くことなく連続で撃つ。

「うおおおおおー！！！」

ババババン！！！！と撃つ。

玉は徳川からは、太陽で見えない。

「僕は逃げないよ。君をここで討つ。」

徳川は下を向いたまま、そう告げた。

桜の玉二発が、徳川にあたり、桜の最後の五発目が徳川をとらえた。  
・・・ように見えた。感じた。

桜から見えたのは玉が当たると同時に、徳川がそこにいたはずであったが、霧のように消えた。

「な・・・何が?????」

桜が着地する前に、何かが桜の頭にゴツンと当たった。

「あれ???(何も感じなかった???)」

「チエックメイト」

着地し、桜のわずかな硬直時間を狙い、バンッと撃たれた。

393

頭からは、透明な水が流れていた

「残念。セーフ玉だったね。」

桜はセーフ玉だったと知り、とっさに動いた。

撃鉄を引き、後ろを向きながら、徳川の身体に銃を当て発砲。

するかのように、見せかけた。

そして、桜は逆方向に銃を向ける。

そこには銃を構えた徳川がいた。

その銃に銃を突きつける。

「すごいな。君の友達と同じ手は通じないか。」

「残念だね。」

「だから、もう一手残しておいたよ。」

「!？」

ビチャッと桜の頭に何かが落ちてきた。

桜は銃を持っていない手で、頭を触る。

手が、黒い。

「あり？」

その瞬間校内放送になった。

『 たった今————!!!!!!勝者が決まったあ!!!!優勝者、徳川空  
ああ!!!!!!』

## 46 これから・・・

決勝戦での勝敗が決して、一時間の時が流れる。

「ふむ、徳川空。貴様が参戦するとは予想外であったため、ベットしそこねたぞ。」

「それは、申し訳ないことをしました。理事長。」

ここは理事長室。

優勝した徳川空は、理事長に呼ばれて、理事長室に来ていた。

「して、徳川空よ。貴様は何を願う？」

「そうですね。これといって特にありませんので、この権利は放棄します。」

「何？貴様本当にそれでいいのか？それでは示しがつかん。できれば願いを言ってもらいたいのだが」

「そうですね、それじゃあ・・・」

そして、その30分後。

同じく理事長室。

「あの、理事長・・・？そろそろどうにかありませんか？」

「ならん。」

「いえ・・・これ教育委員会に訴えることができますよ。」

桜は理事長室で、ワイヤーにぐるぐる巻きにされ、逆を吊りにされ

ていた。

理事長室に呼ばれた桜は、入ると同時にトラップが作動し、ワイヤ―で巻かれていた。

「貴様・・・、私が貴様にいくら賭けたと思っっている。」

「生徒使って賭けすんなっ!!!」

「10億だ。まったく、貴様どうしてくれる!」

「しるか! ってかウチを解放しろ!」

理事長は桜の言葉などまったく聞かず。紅茶を飲んでいた。

「うっ・・・教育委員会に訴えてやる・・・」

「安心しろ、教育委員会など、私の手で躍らせるなど、朝飯前だ。」

教職員らしからぬ発言である。

「そういうわけで、貴様には罰を与える!」

「理不尽!」

「来月行われる“六学校対抗スポーツ大会”に出場してもらっ。」

「何それ?」

ちなみに桜は今も逆さ吊りにされている。

「雲の上学園は六学校と姉妹校として関係を持っている。その学校間の交友を深める目的として年に一回大会が行われている。それに出場しろという話だ。」

「てか、それって生徒会として強制だよね・・・?」

「問題はここからだ。参加人数は最低10人いる。」

「ちよっとちよっと! 生徒会は今七人でしょ! っーか一人は入院中

だし！」

桜は吊らされたまま、ブラブラと揺れて話す。

それを気にせず、理事長は紅茶を飲みながら話を続行するが、紅茶を飲み干してしまった。

「む、紅茶が……。イルカ！シルカ！紅茶と大会の資料をもってこい！」

呼んでから、3秒もしないうちにメイド女子二人が入ってきた。

「は・・・はいです！」

「黒雛様、お待たせしましたなり〜」

おどおどとしてる方が、イルカであり、

“なり〜”と語尾をつけているのがシルカである。

「くくるっ」

二人は紅茶と資料を理事長に渡し、部屋を出た。

「だから、東海林桜！貴様がチームのリーダーだ。だから、あと4人そろえろという話だ。」

（これ罰でなくても適当に脅してやらせるともりだっただろうな・・・）

桜は資料をを目の前に置かれた。

「来月って5月3月・・・ゴールデンウィーク中か・・・。ってちよっと！！雲の上の人ってほしいゴールデンウィーク中はだいた

い海外旅行行くから、つかまらないって!」

ちなみに雲の上学園のゴールデンウィークは5月5日まで一週間ほど休みが与えられる。

「だからこそ罰である。ま、がんばれ。」

そう言い、桜を巻いているワイヤーに書類を挟み、机のボタンを押した。

天井の一部分が開き、桜を上へと引っ張っていった。

「うわああ!!」

ヒュツと一瞬で消えた。

生徒会室

「ということなんだけど……。」

生徒会室には、氷柱と七海と南がいた。

「困ったわね。」

「参ったな。」

「困るね〜」

三人は困った顔をしていた。

「桜も知ってると思うけど、」

「私たち三人は」

「スポーツなんてまったくできない」

桜はため息をつき、改めて書類を見た。

#### 参加者概要

- 1．生徒会の者は全員参加しなくてはならない。
- 2．人数は最低10名用意しておかなくてはならない。
- 3．参加者リストは4月28日までに大会事務所まで送ること。
- 4．一名のみリーダーと同年齢の人なら、学校外の者でも参加が可能である。

やれやれと思いながら、桜は書類を閉じた。

10人・・・運動ができる人で、ゴールデンウィーク中都合をつけることができる人。

かなり絞られてくる。

改めてやれやれと思いながら、桜は思い腰を上げた。

とりあえず、今日のところは、家に帰ることにした。



明日から、やることが増えた……。

その反面、苦勞する分、いい思い出になるって偉い人が言ってた気がする。

まあがんばるかな？

理事長室

ガチャリと音になる。

「黒雛様。書類が届いてるなり〜」

「……ほう貴様が、あの有名な海坊主の……どれ」

男は、理事長に書類を渡す。

「ほう……、転入試験の点数が合格点にギリギリといったところか。」

理事長は書類に判子を押し、それを送付するようについた。北海道の伽羅女流に……。

## 次回予告

桜「さて、次回から新章開始だ！」

識「今回はだいぶバトル色強い章だったな。」

桜「次回もだいたいそんなもんだよ。」

識「なんだかなあ」

桜「まあ、今回はチーム戦的な感じだからね。今回とはちよい違うからいいっしょ！」

識「では、今回は人集めからだな。」

桜「お楽しみに！」

## 47 番外編 『中嶋識の朝?』

……………中嶋識。

彼は今東海林桜の屋敷で執事として働きながら、名門雲の学園に通っている。

彼の朝は早い。

朝5時に起床。

「…顔洗お…」

最初にするのは洗顔。そして、前日支給された執事服を着る。

「やっぱり、格好ができると気合いも入るなあ！」

一階に降りて朝食をとる。

「あら、識君。おはよう」

「茜さん。おはようございます。」

「いつ見ても、執事服が似合いますね。」

「いやあ、それは茜さんがこの服を作ってくれたからかもしれないよ。」

などと軽い談笑を交わし、手早く茜の料理を食する。

食べ終わったら、掃除を始める。

識の主な仕事として、屋敷すべての掃除を任されている。

「よし、自作マイ箒をセット。掃除機を装着。ファイア！」

両手に箒と掃除機。背中には大型掃除機を背負い走り出す。足には特性雑巾ブーツをはき、摺り足で走る。

猛ダツシユをしていると、小柄な女性と、そのペットとすれ違った。

「あ、中嶋さん。おはようございます。」

「雪音さん！おはよ！不知火もオマケで」

「誰がオマケだ！噛み殺すぞ貧乏人！」

すれ違ったのは、メイド雪音とペット狐である不知火。

この一人と一匹は両方とも妖怪である。さらに不知火は言葉をしゃべる。

一言だけ挨拶をして、識はさっさと通り過ぎていった。

識は庭へと出て、花壇エリアを掃除しながら花に水をやる。

すると、そこへ

「なあああかじまあ！！！」

識の元へ、薔薇が数本飛んできた。

まさに投擲用といった感じの薔薇で、ダーツのように識へと向かって飛んでいく。

「うおー！」

手に持っていたホースを手放し、転がりながら回避する。

自分の元のいた場所を見て、薔薇が刺さっていたことを知り、それを誰が投げたのかを察した。

「白井さんか!!」

「貴様ああああ!!俺の神聖なるガーデンの掃除は許したがぁ!水を与えすぎだああぁ!」

庭師である白井であった。

彼は自分の聖域である庭を心底愛しており、何人もふれることを許さない。

しかし、識に仕事を与えるように茜に言われたため、しぶしぶ花壇の水やりと掃除を許したが

「貴様ぁ!水の量が100ml多いだろうがああぁ!」

少しミスをすると思昂する。

「死ねええええええ!」

「ぎゃああぁ!!」

今度は持っていた仕込み箒から、ポン刀をとり出し、振り回し、識を追いかけた。

「はぁ…はぁ…」

どうにか逃げ切り、屋敷内で少し休んでいた。

だが、再び識に魔の手が襲う。

「中嶋。」

「ひっ！」

驚いてビクツと震えた。

声の先には、黒井が立っていた。

「予定より10分遅れている。休んでいる時間はないぞ。ほらいけ」

“いけ”と言ったと同時に黒井は何かを投げた。

それは黒く光る物だった。

識はそれを一瞬で判別した。

手裏剣だった。

「つてぎゃああ!!!刺さってる!!!」

午前7時。屋敷の掃除を全て終了させ、二階の自室で学校へ行く仕度をしていた。

「はあ…、今日は手裏剣二個の傷で済んだか。」

識は傷口に絆創膏を張りながら、着替えをしていた。  
鞆には、今日必要な教科書を入れる。

ドアの外からドタドタと音がする。

何事かと思い、識はドアの方を見る。  
すると

バーンっといきおいよくドアが開かれ不知火が入ってきた。

「おい、不知火！？何だ？」

「少しかくまえ！」

「は！？」

不知火は識のベッドの下へと身を隠した。

「どうしたんだよ？」

「いや…それがな……」

不知火が続きを話そうとしたとき、再び廊下で足音がした。これも走っているような音であった。

「不知火！早く私の作ったご飯食べてください……………」  
「……………」

今、ある構図を説明しよう。

ドアにいるのは雪音。

中にいるのは、着替え真っ最中の識。

とたんに雪音は顔を真っ赤にした。

「……………いやああ……………識さん……………ばか……………」

雪音は目を瞑り、両手を前に出して……………巨大な氷塊を出現させた。

「ちょ！雪音さん！？？？」

そのまま氷塊は識へと一直線で飛んでいった。

「はぶっ……………」

パリンつと音がなり、識は二階から外へと落下した。

そして、落下した先は

「いてて……………雪音さんめ……………。ってここは……………」

殺気

まさに“殺す”“気配”といえるだろうものを識は感じた。

識は何かを押しつぶしていた。

下を見ると赤い汁……………

何かよくないときに出る汗を大量に流しながら識は脳をフル回転させながら考えていた。

（ああ、これは上から読んでも下から読んでも“トマト”ってやつ



だな。たしかこのまるっこい“トマト”ってやつはたしか、この家の裏の主、茜さんが毎日朝早く起きてルンルン気分でも水を与えていたっけな…。茜さんのトマト料理上手いんだよな。それは置いておいてえ〜っつとだいたい今の状況を確認しようかな…。えっとこれがもし万が一だけど、茜さんに見つかったらまずいな。うん。では1・2・3で周りの状況を確認してみよう。よし、ではせ〜の1・2・3!)

この間2秒。

ぐるりと一周見渡した。

識の後ろには鬼がいた。

茜は識の肩にポンっと手を置いた。

「なかじまくん」

「……………はい……………」

どこからだろう。いわゆる暗殺者が相手を殺すときに手のひらを開いてボキボキつとならすけど、その音がするな…？

ああ……………、なぜだろう。昔の記憶がフラッシュバックしてるし、なぜか時間がゆっくり流れっていく…。

そして識の意識は消失した。

## 次回予告

桜「今回ウチの出番ないんだけど？」

識「この時間はまだ寝てるだろ。だからいつも遅刻するんだよ」  
桜「うゝ、」

識「さて、今回は完全に番外編だったな。次回からは新章だな」  
桜「次回は学校対抗大会編だね。お楽しみに！」

48 五章 『the six school』

ここは雲の上学園生徒会室。

この部屋には今は桜一人しかいない。

というのも今は授業中であるので、単に桜が授業をサボって生徒会室にいるから一人なのである。

しかし、今回はタダサボッているわけではない。

桜にはやることがあった。

それは

「あと3人…いや4人かな…。ゴールデンウィーク中に誰が出てくれるんだよ。」

桜たち生徒会プラス数名は5月3日に六学校対抗大会が行われる。

その人数集めをするため桜は誰が来てくれそうか、生徒会にある生徒名簿を見て考えていた。

「これもダメこいつはフランス…」

雲の上学園は休日中、学校に海外旅行に行くことを申請すれば割引券がもらえるので、誰がどこへいくかはだいたいわかる。

(南のハッキングで教師のPCにハッキングしたデータ。)

すると、エレベーターがゴウンと重い音を鳴らして、誰かが生徒会室にやってきた。

今の時間は、授業中なので、普通は誰もこないはず。

南か七海なら授業をさぼってくる可能性は十分にある。  
ドアが開いて現れた人物は意外な人物であった。

「む、桜しかおらんのか？おぬしまったサボりか？」

「あ、浦島。珍しいね。学校に来るなんて。ケガはいいの？」

「うむ。良好じゃ。」

このじじくさい話し方をする人物。

彼は“浦島太郎”。

頭の上にちょんまげを立てており、江戸時代の人間のような格好である。

普段から江戸時代の人間が着ているような服を着ている。

クラスはSクラス。どうも病弱らしいので、たまにしか学校に現れない。

「ところで桜よ。先刻氷柱より文が届けられて知ったのだが、どうやら運動大会があるらしいな。」

「ええ、そう。5月3日にやるんだけどいける？」

「わしは大丈夫じゃ。」

これで、あと必要な人数は3人となった。

昼休み。

正直あまり頼りたくないが、この際四の五の言ってられないと思い、桜は学校一の情報屋に聞くことにした。

その人物は、昼休みになると、所属部活である美術部の部室である

アトリエで絵を描いている。

美術部のアトリエは校舎エリアの裏、部活動エリアにある。

桜はため息をつきながら、重い足を引きずるような気分でアトリエの前まで歩いた。

一呼吸いれる。

意を決して扉を開け、その人物の名を呼ぶ。

「椿？いる？」

アトリエは全面窓張りで、鳥かごのような構造をしている。中央には二階へ行く

ためのエレベーターがある。

窓からは、園芸部が育てている花が見える。

椿は、花を描いている最中であった。

桜に呼ばれ、首だけ桜に向けた。

「あら、桜。珍しいこともあるものね。何かしら？」

「頼み……」

「無理よ。」

即答であった。

「私、ゴールデンウィーク中は海外で会合があるから」

「じゃあ、代わりに」  
「タダじゃないわよ。」

即答であった。

まるで、ここに来るのがわかっていたような感じだった。

「今回は何が欲しいの？」

「そうね…。貴女の身体でもいいけど」

「かんべんして」

桜は頭を軽く下げた。

とは言え、これはいつものパターン。時々本当に身体を差し出す羽目になるが。

「そうね…。大会の優勝商品である、“赤羽の剣”がいいわ。」

「何それ？」

「もう、大会の要項をちゃんと見なさいよね。チューするわよ。」

椿はどこからか、大会に関する紙を取り出した。

「え〜っと？最後のページだね？」

『今大会も、素晴らしい商品をご用意しております。』

1位、最上大業物・白桜。

2位、大業物・赤羽刀。

『

「ってなんで両方刀なの？」

「六つの高校を締める、総理事長が刀好きなのよ。」

こんなマメ知識までしってるとはさすがだと、桜は素直に思った。これで、レズ気がなければ、とても頼れるのだが。

「そういうことだから、よろしくね。」

「その赤羽刀つてのを家に飾るの？」

「ふふふ。そうね、私の母が“上級色刀”をコレクションしたいとおっしゃるのよ。」

“色刀”とは、桜にさ聞き覚えのない単語であった。

その考えがあまりにも顔に出ているのであろう。

椿は“色刀”について説明を始めた。

「色刀というのは、まあ単純に刀の名前に色がついているものよ。だからレプリカも多いのよ。本物の色刀は上級下級と二種類存在するわ。まあ中にはいわゆる妖刀というのも混ざっているらしいわ。」

「へ〜、で赤羽刀は本物？」

「間違いないわ。総理事長の眼力は本物よ。その理事長が出した商品なら当然本物よ。」

桜はその時、自分の刀である“村雨”について考えていた。

あれは、北海道でもらった妖刀である。

色はついていなが、あれも立派な刀であることは振っていればわかる。

「ま、そういうわけだから、よろしく。」

「ちよ、ちよっと待ってよ。ウチたちに協力してくれそうな人は？」

椿はさっぱり忘れていたようだ。

「ああ、そうね。二人ほどあてがあるわ。」  
「誰？」

「わ・た・し」

「いやいやいやいや！！ちょっとちょっと！！アンタ？？」  
「出てあげるって言ってるのよ。」  
「でもアンタ大事な会合があるって……」  
「面白そうだからサボるわ。」

ずいぶんと簡単に言うと桜は思う。

「それなら礼をいうわ。あともう一人は？」  
「明日、Gクラスに転校生がくるわ。その人に頼みなさい。転校生はゴールデンウィーク中何も予定がないことは調査済みよ。」  
「そう、まああとはウチでどうにかするわ。」

桜は美術部のアトリエを後にした。

五限目の授業。

さすがに授業にでないといけないと思い、桜は教室に顔を出した。

「なあ、桜？」



「ん？」

授業中、となりの席に座っていた中嶋識が声をかけていた。桜も別に授業を聞いているわけではなく、寝ようとしていたので、識の言葉に耳を傾けた。

「人数は決まったのか？」

「あと二人。」

「そうか、俺の方もあたっているが、ダメだ。三年生の人とかどうだ？」

「ああ、ダメね。薬師寺さんに聞いてみたけど、断られた。」

「くおおら、テメエら授業中話しているんじゃないね！二日酔いなんだあ！」

機嫌が悪い教師紫部にゴングンッと殴られた。

## 49 ノース・ウーマン

翌日。

桜は昨日とは違い、しっかりと登校していた。

椿いわく、今日転校生が来るらしいので、どんな人物なのか見たいという好奇心もあった。

もう一つは、五月に行われる大会に出場してくれる可能性があるということだ。

交流を深めるためなど、と言い説得しようと考えている。

クラスの中でも、つい先ほど椿が転校生がくると言ったので、がやがやと転校生についての話をしていた。

桜は七海と南の三人で話をしていた。

「新しくくるのは男かな？女かな？」

「私がかあいいく女の子がいいなあ。」

「桜はどっちだと思う？」

「う〜ん…運動するから、男の方がいいかな。」

「は??？」

二人には何のことかさっぱりであった。

二人が頭に“？”を浮かべていると、教室のドアをガラガラと開け、教師が入ってきた。

朝のホームルームが始まると思い、全員それぞれの席についた。

桜の席は一番後ろの窓際より一つ隣である。

一番窓際が空席なので、おそらく転校生はそこに座るのだろうと思  
っていた。

「おし、席つけ。三秒以内にすわんねーと殺すぞ、3…って  
もう座ってんのか。」

お決まりのセリフを言い、教卓に手をつき、出席をとった。

「で、今日は転入生がいんぞ。入れ。」

クラスの全員が教室のドアに注目した。  
いったいどのような人物なのか。

ちなみにGクラスに入るということは、それなりに特別な人間であ  
る。

それも込みで、皆楽しみにしていた。

先生の合図を一拍おいて、転入生は入ってきた。

スタスタと物怖じせず、転入生は歩く。

まず、わかったのは、女子であるということであった。

その次は、その女子が金髪の長い持ち主であるということ。

桜たち以外はそこで思考が止まっていた。

桜は、金髪であることがわかると、その顔を見て、どんどん顔が変わった。

そして、思い出していた。あの三月北海道での出来事。

『伽羅女流』という店にいた、ハゲおっさんとグラサンの女エヴァ。だが、今いる人物はサングラスをかけてはいないが、北海道で闘ったエヴァ本人である。

思いだしていると、エヴァと思われる人物は自己紹介を始めた。桜はあの汚い言葉遣いをまた聞かされるのだろうと思った。

「エヴァ・マリアンヌです。よろしくお願いします。」

エヴァは満面の笑み、しかも聖母のような美しい優しい笑顔であった。

クラスの皆は「おおっ！」と歓声を上げた。

桜は以前との違いぶりに驚愕し、目の瞳孔が開いて驚いていた。

「はい、え〜っと質問とかは休み時間にしろ。席は一番窓際奥、オレンジ髪の隣だ。おい桜、教科書見せてやれ。」

そうして、エヴァは指定された席へと歩き出した。

桜の席の前まで行くと、他の皆には顔が見えないポジションをとり、桜に顔を近づけ桜にしか聞こえないような小声で話し出した。

「このクソ貧乳… テメエいつかゴミ屑にしてやんからな。」

ドスの効いた声、そして他には見せられないような顔をしていた。

そして、再び笑顔に戻り、机をくつつけた。

「桜さん 教科書見せてくださいね」

桜はシクシクと泣いていた。

(なんで、コイツが… ウチの学校生活が…。 つかコイツに頼むの???)

昼休み。

学食にいく者もいれば、弁当を持ってきている者もいる。

桜たち三人は、通常弁当を持ってきて屋上か外で食べている。

だが、今日はエヴァと話をしなくてないけないので、南たちに今日は無理と言い、エヴァを探した。

エヴァは教室を出て行くこととしていた。

そこで、廊下に出たエヴァに声をかけた。

無理矢理に笑顔を作り、かなり引きつった表情で肩を叩いた。

「エヴァさん、一緒にごはんを食べないい？」

対するエヴァも周りに人がいたので、笑顔で答える。

「ええ、構いませんよお、桜さん」

そこから、50m先。

「はっ！」

そこには薬師寺神社巫女、“薬師寺良子”がいた。

「何？このドス黒いオーラは？近くにいたらオーラが視認できるくらい邪悪なパワー。」

桜とエヴァは誰もいない屋上へと行った。  
念のため、鍵を外から閉めた（桜が以前改造した。）

「で、なんだ？やりてーのか？それともどうしてここに来たか聞きてーのか？」

作り笑顔をやめ、ポケットからシュガースティックを取り出し口に  
くわえた。

それに対し、桜は自販で買ったお茶を飲んだ。

「そうね、やり合いたくはないから、どうして雲の上に来たの？」

桜としても、最初から頼みごとをするのは避けたかった。まずはジャブから攻めていこうという戦法である。ということだ。世間話をとということだ。

「いえねー。」

会話が終わった。

ここで、深入りするとエヴァの機嫌を損ねると思った。おそらく損ねるといきなり戦闘になると思った。

そう考えていたら、もう戦略とか考えるのが面倒になってきた。

「おい、うちのジジイから伝言があるんだ。」

何を話そうか考えていたら、エヴァの方から話をかけてきた。内心話することができて助かった気分である。

「お前の木刀、“村雨”だったか。うちのジジイがオメーにあげた木刀は。」

「ああ、そうよ。」

「説明している時間がないまま、あげたけど、実はあれ“色刀”の上級業らしいぜ。」

飲んでいたお茶をブツと噴出した。

「ちょ！上級??？」

「ああ、だから今後刀を狙うやつらが出てくるだろうから気をつけろってよ。…でよ。」

何か続きがあるようだ。  
すごく言いにくそうにしている。

「説明なしに渡して、悪かったとかでよ…、その、アタシがジジイの代わりに責任とるっつーんだよ。クソが！」

「それが責任をとる態度かは置いておいて、責任ってウチは別にそんな」

「アタシが何かしねーとジジイが何かでかい恩返ししかねないから言っただよ。わかるか？」

向こうも困っているらしい。  
なら、

「わかったよ。で何をやるっつというの？」

「だから、一回だけ何か手を貸してやるってことだ。」

桜はそれならちょうど都合がいいと思った。

そして、大会の説明をし、仕方がないという感じでした。

これであと一人となった。





## 50 ラスト・パーティー

エヴァが転入してから、一週間ほどたった。

四限目の授業が終わると同時に桜、七海、南の三人は、スークのごとく隠れながら、校舎を出ようと行動していた。

「こちら桜、異常なし。どうぞ。」

「こちら七海、異常なしどうぞー。」

「こちら南、異常なしい〜どうぞ〜。」

別に三人は離れた場所にいるわけでもなく、携帯を使っているわけでもなく、すぐ隣にいるのだが、完全な“ノリ”で無線機ごっこをしていた。

「氷柱はいないね…。」

「油断はできない。」

「うっ、会議出たくないよおお〜」

三人は、放課後の会議のため、こんな真似をして帰宅しようとしていた。

サボり常連の三人組は、いつも氷柱に見つかり、強制的に会議に参加せられる。

今日も、サボろうとしていた。

今は、校舎出口にいる。

三人は隠れながら、周囲を見渡し氷柱の他、生徒会男子がいないかをじっくり観察している。

しばらくじっと見て、桜がないことに確信を持ち、行動にでた。

「よし！今だ！」

「七海了解！」

「南了解！」

「氷柱了解。」

何か一人多い気がした。

それは三人とも感じたことであり、同時に自分たちの死角である背後をグルリと見た。

ある人がいないことを祈りながら。

だが、現実には桜たちの祈りをきいてはくれなかった。

「げっ！氷柱！えっつとこれは…！」

桜があわてて言い訳を考える。

そんな桜をよそに、七海は言い訳を桜より早く考えつき、口に出した。

「桜が首謀者！私たちは桜に乗せられて…シクシク…」

はああっ！???つという顔で桜は七海を凝視した。

それに便乗する人物が一人、

「会議なんてかつたり〜ぜ〜って桜ちゃんが…シクシク…会議に参加しようとする私たちを巻き込んだのよ。」

「くおら！何いってんの??」

そんなやりとりを氷柱は氷の如く冷たい眼で見下しながら見る。

「じゃあ、磔にしようかしら？」

「賛成！！」

「うおい！磔ってヤバイからね？？前にされたとき、カラスにつつかれて大変だったからね??」

以前、桜は氷柱の大切なアンティークを生徒会室で野球をしていたところ、見事に破壊し、十字架に磔にされた。

「三人で磔よ　それがいやなら、早いところ、会議室にきてちょうだい。」

それだけ言うとサッと氷柱は生徒会室へと歩き出した。

しぶしぶ三人は氷柱についていった。

生徒会室

生徒会室にはすでに男性陣である、

中嶋識

間宮千

浦島太郎

の三人が席に座っていた。

「のう識、これどつじゃろつか？」

「ん？」

浦島が持っていたのは、東京ウォー〇ー。

話し方はじじ臭いのだが、意外とこういう若者向け雑誌は読んでいる。

その絵はなんとも笑えると識はいつも思っていた。

「識、お前今失礼なことを思ったじゃろ？」

するどい奴だと思った。

「で、どうじゃ？」

「なにになに？…夜の夜景スポット…まさか俺と…？」

「アホ、違うにきまつとるじゃろ。今度おなごと逢引するのじゃ。」

「ああ、この前は佐々木さんとデートしてとんでもないことになったらしいがな。」

急に浦島は顔を真っ赤にした。

「んな！？いずこからそのようなことを??？」

「それは秘密のアツ〇ちゃ〜ん」

「くっ！」

浦島はまだ顔を真っ赤にしている。

こんな状態で、識にデートの話をするのは少々引けた。

もう一人いる間宮に聞いてみようと考えた。

「のう、千よ。どうじゃろつかこは？」

「……」

「……のう千よ??？」

「……」

完全に興味がないようだ。

本を一度だけチラッと見て、先ほどまで読んでいた小説を再び読み始めた。

「浦島の恋愛なんて、興味ないってさ。」

「ぐぬぬぬぬ！」

浦島が悔しがっていると、氷柱たち四人がやってきた。

「あ、氷柱殿。」

「みんな揃っているわね。じゃあ早速会議をしましょう。」

「めずらしい。桜たち三馬鹿が予定時刻に会議に来てる。」

三馬鹿という言葉に桜は少しカチンときたが、まあ流そうと思った。

全員がそれぞれ座席に座ると、氷柱が司会進行となり、議題について話し始めた。

「今日はまず、五月に行う大会についてだけど。生徒会は強制参加だけど大丈夫。」

「はい、私いゝ用事が」

「嘘はバレるわよ。」

「ごめんなさい」

いきなり釘を刺しておいた。

「椿さんとエヴァさんだっけ？この二人は参加してくれるという話なのね？」

「うん、直接お願いした。」

「あと最低一人ね、できれば代えの効くように2〜3人欲しいけど。」

全員首を斜め45°に傾け、その一人を考える。  
交友関係が広いことで有名な識でも、誰も思いつかない。

「こうなると、校外の人でも大丈夫って書いてあるから、学校外の人に頼もうと思うのですが。」

「そうね、でも年齢制限があるわ。」

氷柱は大会の要旨を取り出した。

そこには、学校外の人間の場合、年齢は15〜18と書いてある。つまり、高校生ということだ。

「なら、話は簡単ね。たしか、桜の家のメイドさん、茜さんはどう？ 私年齢しらないけど？」

「ああ、無理無理。茜さん意外と歳くってるから」

桜はケラケラと笑いながら話した。

桜自身も詳しい年齢はわからないが、桜は確実に20代以上であることは知っている。

そして桜の後ろで笑う影が一つ。

「歳が何ですって？」

「はう!!!??？」

桜の後ろには茜がなぜか立っていた。

殺気。それを感じ桜はとっさにその場から離れようと席をたった。しかし、逃げるより先に桜は茜に頭をホールドされる。

「あ…茜さん??どうしてごごおおおお!!」

こめかみに拳骨をセット。そこからグリグリをし始める。  
しかも半端ではない力で。

「メイドのスキルには神出鬼没というものがデフォルトでついているんですよ。でえ?誰が歳くってるですってえ?」

「茜さんは美人でかわいくて肌がツヤツヤのピチピチの若々しい女性であり、まさに永遠の17歳でえええええ!!」

「あら そんな本当のことを言われると照れるわ」

そうしてやっと開放された。

桜のHPは瀕死だ。

「でも、私は今回出場はできませんわ。お仕事がありますし。」

「そうですか。残念です。」

「茜さん、実際はなぜ生徒会室にいるんですか?」

全員が思っていた謎。

「桜がお弁当を忘れていたので、届けに来たのですが、桜が余計なことを言っていたのでつい。」

少々やりすぎたかなという感じで、茜は軽く反省していた。  
桜の机に置いた弁当箱は重箱が三段重なったものであった。

すると、再びエレベーターが生徒会室まで上がってきた。

茜が忘れていたかのような仕草をし、エレベーターまで走っていく。



「では、ちゃんと渡しましたよ。残さないで食べてくださいね。」  
言い終わると同時にエレベーターの扉が開き、一人の人物が出てきた。  
たどたどと、おぼつかない足で、歩き出す。

「あゝかゝねゝさゝんゝ。置いていかないでくださいよゝゝ」  
雪音であった。

半べそをかきながら、茜の元に向けて小走りをする。

エレベーターを出るとき、僅かな段差があった。  
その段差に奇跡的に雪音は足をひっかけた。

「あゝ!」

べチン!と顔面からもろに地面へとぶつかる。

周りは何者だ…という空気に覆われた。

自分が注目されているとは知らず、半べそのまま、ムクリと起き上がる。

そして桜と識はこの後の展開を察知した。

(おい桜、このパターンは!)

(いつもの冷凍パターン!)

雪音はネガティブになると、たとえ室内であろうと、周囲に吹雪を

吹かせる雪女である。

ここでされては、氷柱や浦島といった身体の弱い人の体調を一気に崩させる。

桜と識はアイコンタクトをとり、識は鞆からあるものを取り出した。識が鞆からブツをとっている間に、桜は識と雪音の中継地点に一瞬で飛ぶ。

そして識は桜に向けブツを投げ、桜はそのブツを雪音の元へ転がした。

「あっ！」

雪音は桜が転がしたものに気づいたようだ。それは“おしるこ”の缶であった。

急に満面の笑みとなり、夢中でおしるこを飲み始めた。

「あんたたち何をやってるの？」

つつこんだのは、七海であった。

「あ、いやな“うち”のメイドの雪音さんがさ。」

「まあ略すと、おしるこ好きでさー！」

「全然言ってることがわからないよ。」

全員何を言っているのかまだ、全然理解ができていない。

だが、それほど気にすることでもないので、話を続けようとした。

「あら？…その方、着物を着てる方は桜のメイドさん？」

着物を着ている人物というのは、雪音のことである。  
ちなみに茜はメイド服である。

「そうだけど。」

「ちなみに名前は雪音さんだ。先日から桜の家で働いている。」  
「ちよつと待って。」

話を停止させたのは七海であった。  
それに南が頷く。

「わたしもおく気になったのだ。」

「ん〜つと…。何か、中嶋君さ、桜の家のこと知りすぎっーか、さつき“うち”のって言ったよね。どついうこと？」

ちなみに『どついうこと』と言つた部分はかなりドスを効かせた声であった。

さらに黒いオーラを出させ、かけている眼鏡は光り、長い髪を上へとゆらゆらとなびかせている。

「ちよ！ちよ！それは…それは…。」

（しくじつた…）

「中嶋は三月より、東海林家で執事をしている。」

七海は話した人物へ、ぶわつと音がなるくらい、勢いよく首をふつた。

話したのは間宮であった。

「何で間宮が知ってるんだよ!」

「.....」

「つてもう無視か!」

間宮はたまにこのようなどこからか仕入れたかわからない情報を持っている。

もう少し情報を聞き出そうと七海が口を開けるが、それよりも早く氷柱が声を出した。

「まあ、それは後で中嶋君をつるし上げにでもして聴きだすとして  
「するなっ!」

「で、え〜つと雪音さん?」

「は...はい?」

氷柱はおしるこを飲んでいた雪音へと話をかけた。  
激しく人見知りをするので、かなりオドオドとし、識の後ろへと隠れた。

「な.....なんです...?」

「えつと、年齢はおいくつですか?」

「...16」

「氷柱殿、まさか。」

「ええ、雪音さん。5月3日に運動大会があるんですが、出ませんか?」

雪音は茜をチラリと見る。

まだ雪音は先の予定はわからないので茜に聞いてみた。

茜は一瞬考え、コクリと了承の合図を送った。

「だ…大丈夫です…。」

「ゆー！雪音さん！ちよっと！大丈夫なんですか？」

「ええ…運動は得意です。」

それならいいかなと桜は思う。

こうして、メンバーが全員そろった。

After episode

「で、雪音さんでしたっけ…？」

「はい…」

七海話し、一拍空く。

「いつまで中嶋にくっついていいのかしらあ…？」

雪音は識の後ろにビッシリとくっついていてた。

「は…はっ…」

急に顔を真っ赤にして、離れた。

識もあまり意識はしていなかったが、言われてみればかなり抱きつかれていた。

そして、雪音は七海を見ると、何か怖いものを見たかのように、桜にすがりつく。

七海は、ニコニコと満面の笑みを浮かべていた。眼鏡を光らせ、髪を上へと逆立せ、黒いオーラを出す。

「桜さん！あそこに“妖怪般若

”がいます！」

「だあれが鬼女だあ！！！」

「さ、桜さん〜」

「あっはっはっは……」

桜はこの先の大会がひどく不安でしかたがないと思った。

## 51 ファースト・コンタクト

最終メンバーも決まり、桜は一安心して、翌日の授業をサボっていた。

今日は一人でサボっているわけではなく、七海と南の三人で五限目の授業を抜け出し、隣町のショッピングモールに来ていた。

雲の上駅から二つはなれた“七王子”に来ていた。

ちなみに八王子とは別である。

今桜たちが歩いているのは、オシャレなショッピングモール街。

気分的には青山に近い感じである。

「いや〜こういう時のために、私服を生徒会室に隠しておいて正解だったな。」

「ほんとほんと！氷柱に唯一ばれない屋根裏に隠してよかったよ。」

「氷柱ちゃん汚いところは見ないからね〜」

桜たちはサボりように、私服を生徒会室の屋根裏にビニール袋に入れて隠してある。

「今日は目的があるんだっけ？」

今日は、七海がサボりを提案していた。

普段は桜がサボろうとメールを送り、二人が乗るといふ感じである。たまに南が人形を買いたいなど甘いものが食べたいなど言い出し、サボる。

七海からの提案はゴクゴク稀な話である。

「今日は眼鏡を買い替えたのと、ちょっと置物を注文しに行きたいのだけど、置物の店が、昼間しか開かない店でさ。物が物だから、親には頼めなくてさ。」

「エロ本？」

「置物だつつの。しかも女のくせにエロ本とかいうな！」

「にはははは…あれ？」

三人の前を横切った人物がいた。

「桜ちゃん、アレって…」

桜には見覚えのある人物であった。

「あれって、確かSクラスの徳川。氷柱が言うには病院に通っている人だつて言ってたから、病院に行くんじゃない？」

「それよりついたよ。」

三人は徳川とはあまり面識がないので、それほど話題にはならなかった。

そしてついた先、まずは眼鏡屋であった。

普通の眼鏡屋ではなかった。

外見は、オシャレなアンティークを扱う店のような高級感あふれる所であった。

中身も同じように赤絨毯がしかれた室内。そして、店の中では、グランドピアノによる演奏を行っていた。

店に入る前に職員に会員カードを見せる。

南と桜はカードを持っていなかったが、七海が少し電話をすると通れるようになった。



「どこに電話したの？つーか…ここ本当に眼鏡屋？」  
「まず一つずつ説明すると、この店長は私の知り合いでね。カードがない二人を通してくれるようにお願いしたの。で、ここは付近では一番高価な眼鏡屋ってところかな。」

普通の眼鏡屋同様に、机の上に眼鏡が置いてある。値段を見た。

「ふうん、これ普通の方？」

「そうね、この店じゃあ普通の方。」

値札には“1,000,000”と書かれていた。

「十万か。まずまずだね。」

「私が買うのは二百万の眼鏡だけだね。」

「あっはっは。眼鏡にしてはけっこうな物だね。」

ここに識がいたら良識なツツコミがあつたであろう。

多彩なデザインの眼鏡を見てみると、他の職員とはまるっきりオーラが違う人がこちらに向かって歩いてきた。

「西園寺七海様。おまたせいたしました。」

「ああ、どうも店長。じゃあいつも見せてくれる？桜、南行くよ。」

二人はそのまま七海についていく。周りを見ると、スーツを着たサラリーマン、など金持ちの連中しかない。

エレベーターで四階に上がると、一階と同様眼鏡売り場であった。だが、一階にくらべ売り場面積が小さい。

眼鏡の値札を見ると、どれも百万単位の物であった。

「七海様、本日はどうなさいますか？」

店長は七海に眼鏡を紹介している。

そこからは、七海的眼鏡ファッションショーであった。

「うわー」

「すごい」

「かわいい」

「きれい」

桜と南は次々と七海的眼鏡を見せられる。

それを全て棒読みで感想を述べる。

「どつれにしようかな」

本当に楽しそうだ。

七海の趣味として、“眼鏡集め”というものがあつた。

桜たちは、買い物につきあうことが、始めてではない。

以前眼鏡が何個あるか聞いたところ、百は超えているらしい。

「桜ちゃん、もう三十分だよ」

「この時の七海は無双状態だから、ウチではどうにもできないよ。あとでパフェ奢ってもらおう。」

「これに決めた」

最終的に決めたのは、赤いふちのオシャレな眼鏡であった。メーカーは桜の知らない“ルイベルトン”というものだった。

「いくらした？」

「三百万。今日は奮発しちゃった」

眼鏡屋を後にし、次は置物を注文しに行くことになった。だが、

「悪いんだけどさ、ちょっと私だけで行きたいから、二人はここで何か食べていてくれない？」

「え？」

「いやさ、そのその店員が気難しい人で、常連以外店に入れようとしなんだよ。その店の代金奢るからさ、ね。」

その条件なら、と言い桜と南は店へと入っていった。

七海が若干店に来てほしくないと言っているようにも感じた。

水臭いぞくなどと言い、ついていこうとすればできたが、七海が自分の家のことを話さないと同様に、知られたくないことがあるのかもしれないと思った。

三人は仲がいい。だが、お互いこいつたプライベートには足を踏み入れてはいない。

桜は少しそのことを考えていたらあつという間に頼んだパフェが来

た。5つも。

「さあ！食べよう！ 食べよう！」

「桜ちゃんってよく食べるよねえ〜。というかよく太らないね〜」  
「ウチは食べた分、筋肉になるし、家で激しく運動してるからね」

桜の家では、桜用トラップのせいで、否応にも運動させられる。  
最近トラップの種類が増えている。

実家に帰ったときに、祖母である御春が茜になにやらリストを渡し  
ていた。

おそらく、トラップリストであろうと思う。

あの有名な丸いピンクの生物のごとく、桜はパフェやらケーキを食  
べ始めた。

その隣の席のテーブルで、男性四人がパソコンを見ながら小さな声  
で話をしていた。

その話を桜は聞こうと思えば聞けたが、今はそれどころではない。  
パフェの山をいかに早く食べるかを考え手を動かしていた。

その四人の一人が携帯で話しており、話が終わると四人はその席を  
立ち、走ってその場を離れた。

桜の横を通りすぎるとき、桜は反応した。

「っー!!」

「どうしたのお〜?」

ふいに桜はスプーンを止め、その四人を見た。  
何が起きたのかわからない南は頭に？を浮かべていた。

「ごめん、七海が来たら、先帰ってて。」

「え？あ、桜ちゃん？」

桜はフェンスを飛び、四人の男を追いかけた。

男が通り過ぎるときに、わずかに臭いがした。  
それと、胸のあたりがわずかに膨らんでいた。  
おそろう拳銃であろうと思われる。  
一人しか確認していないが、四人とも持っていると思われる。

七王子のはずれの裏路地。

薄暗く、夜は不良のたまり場となる。

昼間は、誰もいない。

そこに男四人が入っていった。

桜も裏路地に入り、男を見たとき、男たちは女の子一人を囲っていた。

「徳川海だな？」

「違うと言っても、聞いてくれるのかしら？」

「やれ。」

合図をすると同時に男達は足を一步前に踏み出した。

すると一人の男の頭にパフェグラスがコオンと当たった。

「つてえね！誰だ！！」

コツコツと足音が聞こえる。

当然桜である。

「あゝ、小さいころ女の子をいじめちゃダメって教わりませんでしたか？」

無駄に格好をつけて登場した。

桜は手に持っていたパフェを飲み込むように食べる。

「理由はわからないけど、大人数でナンパってわけじゃないわね。」  
「かまわねえ、見られた以上殺せ。」

男の中のリーダーと思われる人物が再び合図を送る。

二人の男は銃を取り出し、桜に向ける。

それと同時に桜は相手に向かって走り出す。

銃声が鳴る前に桜が喋る。

「村雨」

手元に木刀村雨が現れる。

男が発砲する。

完全に射線を見切っていた桜は走りながら、木刀を一閃。弾丸を弾き落とす。

「撃ちや当たると思ってたんのかい？」

そのまま、男二人をなぎ払う。

あわてて、残りのうち一人の男が女の子の手を掴み、車にいれようとする。

「ふっ」

女の子は一瞬手を振り、男をいつの間にか宙へと投げ飛ばした。

さすがにリーダーも作戦不可能と思い、後ずさりながら銃を取りさそうとする。

桜は木刀を構え、投げようとした。

だが、不思議な現象が起きた。

男は、スタンガンでもくらったかのように一瞬痙攣し、その場に倒れてしまった。

桜は何が起きたのかまったくわからず、呆然と立ち尽くした。

「持病の発作？…あ、それより大丈夫？」

「それはこちらのセリフだ。ですが一応お礼はしておきます。ありがとうございます」

「そ…そう。」

すると、路地に再び男性が現れた。

「徳川！無事…であるか。」

髭を生やした男性が走ってきた。

「織田。どうした？」

「どうしたではない。うぬが勝手に消えたからどうしたかと」

「ああ、誘拐犯がいたから片付けていた。」

ここで桜はいらぬ世話をしたこと気づいた。

「あ、でも助かったのは事実だぞ？」

「そうかい。」

「私は徳川海。」

徳川海は握手を求めた。

「ウチは東海林桜。」

「余は織田…」

「いくぞ」

自己紹介をすると織田のことなど、無視するかのよう歩き出した。



「徳川よ…。」

「さよなら、東海林さん。また会えるといいわね。」

「ああ、お元気で」

桜はため息をついて、後ろを振り返る。

「こいつらどうしよ…。っかあいつらウチにこの場を任せやがったな…」

肩を落とす。

徳川海は裏路地を出るとある人物と会った。

「お兄様。お待たせしました。」

「海。怪我はないかい？」

「お兄様。海はあんなチンピラどうということはない。」

「そうか、織田君もいつも迷惑をかける。」

「いえ。」

雲の上学園・徳川空は笑った。

「それより、海は五月の大会にでるのかい？」

「ええ、海と織田は“大江戸大付属高校”の生徒会だから出場する。それに海は生徒会長だから」

## 次回予告

七海「あれ？桜は？」

南「よくわからないけど、先に帰ってだつてさ」

七海「何か困った人でも見つけたのかな？ま、いつものことだし、私たちが予告しちゃうおう。」

南「よし。では、今回は一気に時を進めて、大会編！」

七海「まあ長々とやるのは作者の趣味ではないから、さっさとこの章も加速させちゃうおうってことね。」

南「今回は、『開催高校へ！』だよ。お楽しみに！」

七海「開催高校で南があんな破廉恥なことを……」

南「みゃ〜！何をやらせるのぉ〜七海ちゃん！！！」

## 52 京都へ行くころ

5月2日、大会前日

桜たち雲の上学園の代表10人は、大会の会場である大江戸大付属高校のある京都へ行くため、七王子の三つ隣、下野から新幹線に乗って移動するところであった。

下野駅

「雪音さん！そっちトイレ！どうやってたら電車入り口と間違えるんですか！」

雪音は今までずっと山で暮らしていたので、自ら電車に乗るのは初めてである。

桜家の執事として、本来は桜の身边にいないてはいけない識だが、今日は雪音の

世話もしなくてはいけないので、大忙しである。

「雪音さん！新幹線ならどれ乗ってもいいってわけじゃないんですよ！これチケ

ットに電車の番号とか書いてありますから。」

「え〜っど〜？」

やはり、初めてなのでピンとこないようだ。

たむらこ

「って桜！言ってるそばから違う新幹線に乗るな！」  
「え？いつもの電車みたいにとれでもいいんじゃないの？」

桜は各駅電車になら度々乗るが、新幹線は初であった。

お嬢様なので、遠くに行くときは、ジェット機か、車のどちらかだ。

「西園寺や南嶋はどこにいるんだ？あの二人なら新幹線に乗るだろう。」

「ん、まあいるんだけど、朝早いから二人ともベンチで寝てるんだよね。紫部先

生がいるから問題ないと思うけどさ。」

「氷柱さんは？」

「さつきからずっと電話してる。」

どこも行くところがないから、俺と雪音さんのところをウロチョロしてたのか。

識としては、この移動では、桜のことは南や七海に任せる気でした。友人同士でわいわいなんとかするだろうと思っていたのだが、思わぬところで計算が狂った。

まさか寝てるとは思わなかったし、氷柱まで手がはなせない状態になるとは、考ええていなかった。

だが、苦勞するのもあと数分。

新幹線に乗りさえすれば、それほどのアクシデントは起こさないとわろつ。

識は時間が過ぎるのを強く願った。

「へい、貧乳。お前ジャパニーズのくせに新幹線の乗り方すらしらねーのかよ。」

「エヴァ、今日始めて見た気がする。ウチは基本車移動なんだよ。」

今日のエヴァは制服に縁の細い眼鏡で、容姿は優等生であるが、今の言葉使いはチンピラである。

「まったく、セレブは常識に疎いってやつか？どうせ新幹線のチケットの買い方も知らねーんだろ？」

その言葉に少しカチンときた桜は、悔しいので知ったかぶりをすることにした。

「し、知ってるよ！緑色のカードを使って、タッチ・アンドゴーでしよー！」

「それはSuocaだ！つーか買い方の説明になってねーぞ！」

つい横にいた識がツッコんでしまった。

「だっはっは！クレイジーな答えだな、貧乳。新幹線ってのは、駅構内の緑色の

自販機で500円くらい……」

「それはグリーン券だ！500円で新幹線が乗れるか！」

素で間違えたエヴァは顔を真っ赤にし、平静を装つかのよう  
に眼鏡をくいつと上げ  
る。

「じよ…じよじよ…冗談だ…」

「顔真っ赤にして、そっぽむいて言う言葉がそれか！」

ますます、エヴァの顔が赤くなった。

「くそっ！そこの色男！テメエいつか風穴ぶちあけっからな！」

それだけ言うとエヴァはどこかへ行ってしまった。

「俺ターゲットにされた？」

「ウチと同じだよ。」

新幹線が出発する時間となり、何事もなく全員新幹線に乗ることができた。

座席は、

氷柱・七海・南

識・桜・雪音

椿・間宮

浦島・エヴァ

の順番で座っている。

朝早い集合なので、だいたいの人は座席で寝ていた。  
今起きているのは桜と識くらいである。

桜はPOPを、識もそれにつきあいPOPをやっていた。

そのまま一時間がたった。

「あ、電車が止まった。」

「ここじゃないぞ。」

「んなことわかってるわよ。ちょっとトイレ」

そうして桜は席を立った。

「んあ、桜さん？」

「あ、ごめん。起こしちゃった？ちょっとごめんなさいね」

席を立ったときに、雪音を起こしてしまったようだ。

そのまま、桜はトイレへと行く。

「識さん、もうすぐ着きますか？」

「いえ、まだ時間がかかるので、寝て大丈夫ですよ。」

「では…、…あれ？」

再び寝ようとした雪音は何かを発見したようだ。

「あれ…？桜さん？」

「はい？」

言われて、識は雪音が向いている窓の方を見た。

そこには、駅構内の自販機でジュースを買う桜がいた。

「ば！あのバカ！電車がすぐに出るぞ！」

識が言い終わると同時に、発車の放送が流れた。それが意味することは、一つ。

今からではどうやっても間に合わないが、識は急いでドアへと駆け込んだ。

未だに桜はジューズを選んでいる。

識と雪音以外は誰も気づいていないようだ。

桜が知らぬ駅で一人ぼっちになった場合、非常に危険である。サバイバルの得意な桜ならある程度問題はないが、電車に乗るとなると話は別である。

電車のことをまったく知らない桜が自分を信じて電車に乗りまくったら、取り返しのつかない迷子になる。

それプラス、識は桜を迷子にさせたら黒井に殺される。

無常にも電車の入り口が閉じる。

識は手を伸ばす。到底届かないのだが。

桜も電車の入り口が閉じるところを見て、驚いたようだ。

これは間に合わない二人は思った。

だが、

「あー!」



扉を掴む人がいた。

識ではない。

桜にとつては少しからみずらい人であった。  
なぜなら、一度勝負に負けているからである。

「徳川…空。」

「やあ、東海林さん。それから中嶋君。それより早く中に入ってくれないかな？」

桜は言わた通り、まず電車の中に入る。

「徳川って大会にはこれないって話じゃなかった？氷柱がいったけど？病院に行くところ？」

徳川は病弱なので、様々な病院に通院していると聞く。

「いや、今日は妹が大江戸に通っているからさ。」

どうやら応援で大江戸高校に行くらしい。

そして、桜たちは大江戸大付属高校のある京都に着いた。

### 53 大江戸大付属高校

京都駅から数駅離れた場所にある“大江戸大付属高校前駅”という駅で下車する。

駅からすぐ歩いた場所に大江戸大付属高校がある。

高校に行く前に、各高校の選手たちは、それぞれの指定された宿へと向かう。

“宿”というのは、一流ホテルである。

ホテルの場所は駅の裏にある15F立ての立派なホテルである。

雲の学園の生徒と教師はそれぞれの部屋に荷物を置く。

その後は明日まで自由行動となる。

だいたい学生は大江戸高校で開催している文化祭に行くか、観光名所を歩くといったことをしている。

桜・七海・南・氷柱の四人は学園祭へ

識・浦島は京都散策へ

エヴァはどこかへと

椿と間宮は学園祭へ行くと思っただが、大江戸高校の校舎へと入っていった。

桜たちは……

「おいふい〜（美味しい）」

「桜…アンタそれ何個目？」

桜はフランクフルトやらたこ焼きやらを両手に持ち、口いっぱいも含んでいた。

「ちょ！桜ちゃん口から飛んでるよぉ」

まさに女の子とは思えない食いつぶりである。

「学校でやるだけあって、大江戸の生徒が屋台を出しているのね。」

出ている屋台は全て学生が出しているものである。

大江戸高校で大会が開催されるので、その学生にとってはお祭りも同然である。

「お祭りだけでなく、この高校は校舎も一工夫されているから開放しているのね。」

「まるで、江戸時代のお城だよねぇ」

「ほら、桜！城の方行ってくて！」

「むがふあい」

四人は屋台が出ている中庭らしきところから、校舎である城へと歩く。

校舎はまさに江戸時代の城そのものである。

「パンフレットには……。」

氷柱は入り口で貰ったパンフレットを開いた。

「頂上の天守以外は行けそうね。それから、中には鎧があつて……。戦国シヨ―もやるらしいわ。」

「えっ！本当！私見る見る！」

社会関係のものが好きな七海はうれしそうに言った。  
七海はいわゆる歴女である。

「まだ時間があるから、あの城からの景色でもみましよう」

「賛成〜」

「むがふ〜」

「まだ食ってるの!？」

所変わって、城の最上階より一つ下の階。

「うちの生徒会室よりいい眺めだねえ〜」

そこからの眺めはまた特別であった。

今日は天気がよかったので京都の芸術が一望できた。

しばらく時間が流れるのを忘れ、風景に見入ってしまった。

「あ！いけない！戦国ショー始まる！」

「うわ！」

時間を忘れていたせいで、次の予定までの時間が押してしまった。  
四人は急いで城を降りて、中庭の野外ステージへと走る。

「はあはあ、私たちいつも走るなんてことしないから…、つかれた

…」

「でもどうにか間に合ったわね…」

「あれ？桜ちゃんは？」

肩で息をしている三人は桜を探した。

「あれ？」

三人はしばらく考える。

「……桜ちゃんなら大丈夫か。」「」

桜は一人で迷子になっていた。  
走っている最中、混雑の中三人を見失って適当に走ったら離れら  
しき場所にたどり着いた。

「ここは……」

周りは森、どうしてか森の中にいる。  
そして目の前には道場が一軒。

「ん……、まずは場所でも聞くな？」

桜は道場の中へと足を運ぶ。

「すいませ〜ん……」

「うりゃー!!」

「だりゃー!!」

どうやら剣道場らしい。

木刀を持った人たちが、打ち合っていた。

「その女。体験入部だな。」  
「はっ？」

桜の後ろには、体格のよい男性がいつの間にか立っていた。

「よし、近藤。実力を見る。」

「あ、ちよっと！」

「安心しろ、使うのはチャンバラ刀だ。当たっても怪我はしない。」

雰囲気的に、この人物は部長らしい。

桜は言われるがままに、チャンバラ刀を持った。

このチャンバラ刀は振っても曲がらないが、当たっても怪我はしないものであった。

「動きも見たいから、防具はつけん。」

ザッと全員が道場の端へどく。

近藤という人物が正座をして、待っている。

どうやらやるしかないと思った。

「よし…（でもあまり本気でやると後々面倒だな…）」

桜も位置に立つ。

近藤も立ち、刀を構える。

部長が二人の間にあたつ。

「では、今回は特別仕様。体に刀を当てればよし。では始め！」

合図と同時に近藤は刀を振る。

桜は反射的に防御をとる。

近藤も防御をとりやすいように緩く仕掛けていた。

続いてさらに打ち続ける。

(もう！こんな緩いことしてると…)

正直桜はお遊戯をやっている気分であり、少タイラついていた。

そして、近藤は大きく振る。

まさにそれは大きく隙を見せているので、打ち込んでくださいとい  
つてるようなものであった。

(っ!!)

つい打ち込んでしまった。

しかもつい、調子に乗って、本気目で。

近藤は宙に舞った。

ドスンという大きな音と共に、近藤は床に背中から落ちた。

当然周りは驚いている。

素人かと思った人物がベテランを吹き飛ばしたのだから。

(や…：やっちやった~~~~)

あわあわとしている桜。

部長が近づいてきた。

「女。只者ではないな。俺と勝負しろ。」  
「織田部長！」

どうやら部長の名前な織田というらしい。

(織田…織田…どこかで…?)

「女、位置につけ。」

織田の目は本気であった。

「う…、仕方ない。」

桜も構える。

織田の構えを見て、桜は只者ではないことを悟る。

「近藤！合図を！」

「は…はい！始め！」

合図をすると、織田は一瞬で桜との距離をつめる。

「うっ！」

「遅い！」

織田の一閃。どうにか防ぐ。

だが、直ぐに次の攻撃が来る。

「ちっ！」

今度も防ぐ。



「むっ。ならばー！」  
（こっちもー！）

恐らく周りでは一回の攻撃にしか見えなかっただろう。

だが、実際は違う。

一瞬で上下二撃。超高速の斬撃である。

斬撃がくる。上段は防ぐ。だが、下段が空き、一撃を貰う。

「ぐっ！」

「なっ！」

織田の下段が入ると同時に桜は織田の頭に刀を命中させていた。

しばらく静寂の時が流れる。

やがて、口を開いたのは織田であった。

「相打ち…か。」

「そうね…。」

すると、道場の引き戸を勢いよく開けて中へ入ってくる人物が一人。

「織田君。何をしている…ん？」

その人物は桜を見て反応した。

桜もその人物を見て、少し前のことを思い出した。

「たしか…、この前…」

「東海林桜さん…だったな。」

桜が以前街中で助けた少女であった。

「その格好を見る限りだと、雲の上の代表選手のようなね。織田君は馬鹿だから服にはまったく気づかなかったのね。」

「む…」

織田はどうやら、桜の服は一切気にしていなかったようだ。

普通に考えれば、桜の服を見れば、大江戸の学生ではないことが一目瞭然なのだが。

「私の自己紹介がまだだったな、東海林桜。私は徳川海。」

「徳川！！！」

「雲の上に通っている空兄様の妹だ。」

なるほど、どうにもこの人物からは独特なオーラのようなものを感じるわけだ。

徳川空のような、普通とはことなる感じがする。

桜は野生の感に似たアンテナで考えていた。

「と、いうわけで、織田君。これからミーティングをするから来なさい。それと東海林桜。こんな所にいるということは迷子かな。案内しよう」

「ばれてたのね。それと、あなた達二人が大江戸高校の代表選手？」

「ああ。自分で言うのも何だが、私は生徒会長。織田君が副会長だ。」

「

そして桜は自分の宿まで案内され別れを告げた。

一人桜はボーっとしていた。

（徳川空の妹か…。それから織田だけ。あいつまだ本気ではなかったかな？）

やれやれと頭をかきながら桜は部屋へと戻っていった。

そして一方識と浦島は…

次回へ続く…

## 54 京都観光記

桜達が大江戸の文化祭を見ている時、中嶋識と浦島太郎の二人は京都の街を散策していた。

歴史物を好む浦島による提案であって識としては、文化祭を見たかったようだ。

男二人は、金閣寺を見た後、今は京都の街を食べ歩きしている。

「男二人旅って寂しの〜」

「発案者が言うな。俺だって本来なら今頃大江戸のかわいい子と…」

「……」

「ん…？」

識は背後から視線を感じる。

微妙に冷たい視線だ。

振り返ると雪音が一人でポツンと立っていた。

「…雪音さん。あなたはここで何を…？」

「それが…」

遡ること数分。

「京都というのはお話に聞いてましたが、綺麗な所ですね。」

「…ああ。そうだが…」

「私いつか、京都に行きたいって思っていました。」

「…ああ。それはよかったな…。」

宿の喫茶店にて、偶然出くわした、雪音と紫部は話していた。

紫部としては、早くタバコを吸いたいのだが、雪音を見るとかなりか細く病弱に

見えるので、さすがに目の前での喫煙は遠慮した。

だが、ヘビースモーカーの紫部はすぐに禁断症状に陥った。

(早く吸いたい吸いたい吸いたい吸いたい………)

そんな様子にまっつたく気づかない雪音。

すると、風が吹いた。

「あっ」

雪音の巻いていたストールが風で飛ばされて、外へと飛ばされていた。

「あゝ待ってえ〜」

そのまま、飛んでいったストールを追いかけ、雪音は一人外へと出て行った。

「という事で、ストール見てません？」

「いえ、俺らは…っ」と

応えている識を引っ張り、浦島はヒソヒソと話し出した。

「おい、あのべらぼつなベッピンさん、ここに来る時から気になっ  
とつたがどなたじゃ。」

「ああ、雪音さんか。俺の仕事仲間だ。」

「紹介…し」

「やだ。」

「頼む。」

「やだ。」

「今生の頼みじゃ」

「それでも…」

「あの…」

「うお！」

二人がいつまでも話しているので、雪音が声をかけてきた。  
あまりにも驚いた浦島はしりもちまでついた。

「忙しそうですから、私行きますね。」

「あ、そうですか」

「ちよつと待つのがじゃー！」

ストール探しを続けようとした雪音を呼び止めたのは浦島であった。

「わしらも探そう。」

浦島は今日一番の輝きを目に宿しながら言った。

「おいおい、浦島。」

「いいじゃろ！困っている女性を助けるのは日本男子として当然じ  
ゃ！うつけもの！」

「おまつ！うつけて馬鹿って…、」

「雪音さん」

浦島は雪音の手を握り、目を雪音へと真っ直ぐ向ける。対する、雪音は少し…いやかなりいやそうに引きつった笑顔をしている。

「では、雪音さん！いつしよに探しましょう！」

「は…はい」

そのまま、浦島は手を握り、歩き出した。

雪音は顔を赤くするどころか、青くなっていた。

そんな様子にはまったく気づかない浦島。

浦島は、ナンパをことあるごとにする。が、大抵失敗する。それは相手をあまり見ないからだと思っている。

「っ…！」

「あ、雪音さん？」

たまらず雪音は手を振りほどき走りだす。

走り出す先は識の元であった。

「なっ…！」

雪音は識に抱きついていてた。

しかも両手をつしりと回して。

「あ…そうか。おぬしらは…そういう関係であったか…」

「いや！違う！これはだな！」

「なら…おぬし…今の雪音さんの顔を見るがよい…」

雪音の顔はいかにもここが安全であるというように安らかな笑顔でいた。

「いやいやいや！これはだな！雪音さんは男性にあまり耐性がなくてな！だから浦島に手を握られて急にどうしたらいいかわからないから、一緒に住んでいる俺に助けを求めな！で耐性のある俺のところにいるとこう安全地帯だという…」

「識よ…一つボロを出したな。」

「何？」

識は弁明のため、あわてて話していたので、自分が何を言ったのかあまり覚えていなかった。

「一緒に住んでいる」とは…どどどどど…」

識は一気に青ざめた

「そうじゃったか…お主はすでに同棲を…」

「ちちち違うつて！それはだな、えっと…。まず雪音さん！離れてください。」

そこで雪音は自分が何をしたのか初めて気づいたようだ。

顔を赤くし、「何をしてるんですか」と言いながら、識を突き飛ばした。

そんな理不尽な目に会いつつも弁護を続ける。

「泊まりがある仕事だな。だからよく一緒にいるんだよ。」

浦島はそこで同棲していることが勘違いであることに気づいた。



識がいろいろな仕事をしているのは、知っているし、最近の家も爆破されたとか  
で、住み込みの仕事を見つけたのだと思っていた。

「そうであったか。ワシは勘違いしとった。とはいえ、困っている女性は見過ご

せん。ストール探しを手伝おう。」

こうして、三人でストール探しをすることになった。

「ってか、風で飛んだんですよね？明らかに宿からここまでとぶはずないですよ

ね？」

もっともな疑問である。

ここから宿までは一キロはある。

今日は快晴で風も決して強くない。

常識的に考えれば、どう考えても変な話だ。

「それが…、ストールは体の大きな方の鞆にスポツと入ってしまいまして…」

「そんな面倒な奇跡よく起こりましたね…。」

そして、三人で雪音のストールを探すついでに観光をすることにした。

まず、清水寺に行くことにした。

「まさに絶景だなあ」

「綺麗な眺めですね。」

「清水から飛び込むようになって言葉があるけど、アレってここから飛び込んで死ぬ勢いってことか。」

今いるのは清水寺の写真で見たときに出てくる“あの”場所だ。

「でも、こんなところにストールが飛んでくるわけないよな…」

「そうじゃな…、でも雪音さん自身もんだかストールのことは忘れてるようじゃしな…。」

その雪音はまったくの見たことのない場所からの絶景に目を輝かせていた。

雪音は桜家に来るまではずっと、雪山にいたのだから仕方がない。

「識さん！次いきましよう！さっき観光案内の紙をとってききましたから、どこ行くか決めましよう！」

「本当にどうでもよさそうじゃな。」

キヤピキヤピ騒いでいる雪音。

識の元へ歩くと、ドンっと大男にぶつかった。

「あ、ごめんなさ…」

「のけ、うつけ」

学ランを着た大男から片手で払われた。

その大きな手で雪音は飛ばされ、地面に身体をつけた。

大男はそんな様子を気にするまでもなく、その場を離れる。

「雪音さん！」

識と浦島は雪音に近づく。

その様子を一瞥し、大男はその場から離れようとする。

雪音はたいした怪我もなく、少し手をすりむいただけであった。

雪音が無事であることを確認すると、浦島に雪音を預け、識は立ち上がった。

あまりにも大男が傍若無人であり、怒りを覚えた。

「おい、デクの棒。」

「おい、小僧なんだと!」

応えたのは大男ではなく、その後ろにいた舎弟であろう小さな男であった。

「この方をどなただと思っている!」

「デクの棒ってことくらいしか知らないな。」

「小僧!てめえ!」

そのやりとりを、大男が冷たい目で見ている。

それはまったく、興味がない。そう言っている眼であった。

「野猿。」

「はい!」

「ゆくぞ。」

「はい!“秀吉”様!」

その大男こと秀吉は何事もなかったかのように、歩き出した。

どうやら秀吉とやらは、俺らのことを小石がゴミくずにしか思っていないらしい。

これでは言葉では秀吉を止めることをできないらしい。

そう思い識は秀吉の歩く道を先回りした。

秀吉の目の前に識は立った。

「小僧。我が道を塞ぐか。」

「お前、雪音さんに何をしたかわからないのか？」

「何？余が愚民に何をしたかだと？貴様は蹴った小石のことを覚えてるか？」

「どうやら勘違いの大馬鹿野郎らしいな。」

識の見解では、この人物は自分のことを王様が大統領のように思っているらしい。

「のけ、小僧。」

やはり先に手を出したのは、秀吉であった。

識もそれを見越しての行動であったため、その大きな手を払いのける。

それは、自分が王である秀吉にとって『拒絶』。あるいは『敵対』を意味していた。

「ほう、反乱するか。よかろう！」

大男はポケットから手袋を取り出す。

あらためて識は秀吉を見た。

よくみると、かの戦国大名、豊臣秀吉の通り、猿顔かと思ったが、普通の猿というより“大猿”。そして格好は学ラン。体格を含めまるで番長である。

「逝け。」

秀吉は簡単な右ストレートを出した。

大きな拳による攻撃。そして、手馴れているのか、早い拳。

識はそれに合わせて、拳に向けて識も拳を合わせる。

ガツンつと音になる。

そこから、お互いが拳を離すことなく力比べが始まった。

秀吉と識は只者ではないことを察し、力を入れやすくするために足を開き肩を入れた。

「秀吉様と張り合うなんて！」

舎弟の男も驚いているようだ。

秀吉も識の身体のどこから自分と張り合う力が出るのか謎であった。

「ぐぐぐ…」

「ぬ、ぬう…！」

二人はどちらもまったく引かない。

「おい、猿！こりゃ力比べじゃ決着つかねーな！」

「ほう！貴様のその反乱！潰させてもらおう…！」

お互いくっつけていた手を離し、もう片方の手を使い、殴り合おうとした。

その時…

「やめてくださいい!!!」

その言葉に二人は拳を止めた。叫んだのは雪音であった。その眼には涙を浮かべている。

雪音も女の子である。争いごとが嫌いなのはわかる。その場の全員がそう察した。

雪音を愚民のように思っていた秀吉でさえもそう思い、拳を止めた。秀吉としても泣く女を無碍にはできなかった。周囲の眼を気にして。

だが、ただ雪音は争いが嫌いで泣いていたわけではなかった。

「…ひ…、ひぐ…。」

「すまなかった。雪音さん。」

「…」

泣く雪音をなだめ、その場を離れる。その時、後ろから

「小僧。」

「なんだよ。」

「責様、名は。」

「中嶋識。雲の上学園生徒会役員だ。」

「そうか、我が名は“豊臣秀吉”。大江戸大付属高校生徒会役員だ。」

「

「何？お前が!？」

「楽しみにしている。」

#### 次回予告

識「最近更新の速度遅くね？」

桜「最近就職活動してるし、バイトもあるから遅いのよ。」

識「やれやれ、大丈夫なのか？」

桜「アップしてないけど、大体次の話の構想も考えてあるから問題ないと思ってるらしいわ。」

識「でもよ。最近次回予告も適当になってきてないか？」

桜「あく忙しいからって手を抜いている部分もあるわね。それは書く以上ちゃんとしてほしいわね。」

識「次回からはちゃんとやるかな？」

桜「それを期待して、ではまた次回！」

## 55 大会の始まり

今回の大会の参加高校は六校。

雲の上学園

大江戸大付属

橘

サントアンヌ

山之上

海王

どれも超がつくお金持ち学校。

どれも全国に散らばっている。例えば大江戸は大阪。雲の上が東京。それに小学校からでなくては入校するのは困難であるほど偏差値が高い。

ちなみに海王が一番偏差値が高い。

橘には恋美と愛歌が通っている。

彼女らも生徒会役員なので、今回の大会に出場している。

桜の知り合いで、この大会に来ている他校の人は恋美たちだけである。

大会当日。

桜たちは全員学校の制服に着替え、開会式のため大江戸の体育館に集合していた。

出場者自体は“最低10人”なので雲の上以外の学校の生徒は20人ほどいる。

選手よりも各高校からの観客人数が多い。高校OBも来ている。

ちなみに雲の上からの観客はいない。なぜなら、桜が広報活動を怠



ったことと、理事長がこの大会のことを一月前までまったく忘れて言わなかったことが原因である。

桜たちは開会式が始まるまで、しばらく時間があるので時間まで少しトイレ休憩にいたりする時間をとった。

桜と識は橘高校に通っている恋美と愛歌に会いにいった。

「桜〜！と識〜！」

橘高校の人が集まっている付近で二人を探していると、声をかけられた。

「あ、恋美。それに愛歌。」

恋美と愛歌が近づいてきた。

橘の制服は基本濃い緑色が基調である。

それに対し、雲の上は白である。というかスタンダードである。

実は、桜は橘の制服を初めて見る。

少しかわいいなあ〜などと、羨ましがっていた。

「あ、そうそう。客席に兄貴がいるよ。」

「恋継の兄貴が？失恋から立ち直ったの？」

「いや…微妙なところかな。普段は元気なバカだけど、女性と話すことに少し拒絶反応が出ちゃうらしくて。」

「あの女好きの兄貴がねえ〜。」

恋美と桜がわいわい話していると、愛歌はそそっと識へと近づいてた。

「識様…。」

「お、愛歌さん。こんにちは。制服姿始めてみるけど、けっこう似合ってるな。」

「っ!！」

それを聞いて愛歌は顔を真っ赤にし、恋美にトイレに行くと言え走っていった。

桜たちが話していると、別の橘の生徒が近づいてきた。

「東海林。そちらの方は？」

「あ、橘さん。従姉妹の桜です。雲の上学園の生徒会役員ですよ。」

「へえ。雲の上の…。桜氏、俺の名前は橘祐介。偶然にも高校の名前と姓さ。橘高校で生徒会会長をしている。」

スツと慣れた手つきで手を出した。

それに応じるように桜も手をだし、握手をした。

「どうも、ウチは東海林桜。ウチは生徒会の雑用ですよ。」

「お互い、全力を尽くして頑張ろう。」

視線を識へと移し、識に向けて手を出した。

識も、握手をする。

「中嶋識です。俺も生徒会で雑用っす。」

「そうそう、君たち二人の噂は聞いたことがあるよ。桜氏と識氏。」

「俺らっ?」

二人の悪行が雲の上学園で広まるならわかるが、遠く離れた橘高校にまで聞こえるとは、思えなかった。

「たしか、先月そちらの理事長が行ったレクリエーションのベスト3に入る人物だとか。」

「そんな情報がどうして橋高校に？」

「うちの学校の理事長が他校の二ユースを記事にするのが好きでな。それで知ったわけさ。」

いわゆる校内新聞というやつらしい。

識と桜はこの人物と話してまだ数分だが、生徒会長の名に恥じないとてもしっかりとした好青年である印象を持っていた。髪も坊主より少しながい清潔感あふれる印象を持つ。

そこへ一人の女性が歩いてくる。

「お兄ちゃん。そろそろ始まるよお。」

「ああ佐江子。今行く。」

少し離れたところから声をかけてきた人物は橋祐介の妹、橋佐江子らしい。

「あら、お知り合いの方…きゃ！」

歩いていると、何もないとところで何故かつまづいて転ぶ。

その光景を見た瞬間。今まで好青年であった橋祐介の顔が一変。本気の顔になった。

「さあえこおお！！！大丈夫かあ！！！」

絶対にたいした怪我ではないのに、超ダッシュで駆け寄る兄。

特に激しく転んだわけではないので、橘生徒が駆け寄る祐介の進路を不意に妨害してしまった。

「あ、会長悪い……」

「邪魔だああああ！！」

ゴオオン！と激しくアップパーを繰り出す。

橘生徒は宙へと飛ばされた。

好青年の印象を持っていただけに桜たちは口をポカンと空けたまま何をしているかわからなかった。

横から説明するために恋美が声をかける。

「あのね……この人普段は生徒会長の鏡のような人なんだけど、妹のことになると鬼にでもなる。極度の“シスコン”なの。」

人の株価が大暴落するといった気分であろうか、とにかく見る眼が変わった。

その一方で、そんなことを言われていることに気づかない祐介は佐江子の様態を大げさに心配する。

殴られた橘生徒は痙攣を起こしている。

「あっちの人のほうが何倍も重症ね。」

そうこうしている間に時間は過ぎ、開会式が始まった。

開会宣言は大江戸の生徒会長が行う。

その人物は、徳川海であった。

その後、台の上では大江戸大付属高校の理事長である赤井理事長が開会の言葉を話している。

格高校の生徒会の人物のことだけあって、誰一人おしゃべりしている人物はいない。

かと言つて、真面目に話を聞いているわけでもない。

話が終わり、大会のルール説明が始まる。

出てきたのは、雲の上学園理事長である黒雛理事長であった。

「今大会は二ブロックに分けて、総当たり戦を行い、格ブロックの優勝校同士で決勝戦を行う。なお、決勝以外はどの競技を行うかはランダムに決められる。頭脳を使うもの、身体を使うものなど様々ある。商品は急遽変更となり、優勝者及び順優勝者にもみ付与される。諸君らの検討を祈る。以上。」

そして、各高校の生徒会長が台の上にあがり、四角い箱の中から玉をとるよう指示された。

よくある抽選のやりかたである。

雲の上からは当然氷柱が出た。

箱に手を入れ玉をとり、雲の上は第一ブロックに決まった。

結果はこうである。

・第一ブロック

雲の上学園

橋

大江戸

第二ブロック

サントアンヌ

山之上  
海王

事情をしる人物から見ても、海王とあたらなかったことは幸いであつた。

海王は学力だけでなく、スポーツまで全国区である。

「では、試合順を発表します。第一ブロック第一試合…  
雲の上学園 vs 橘。

第二ブロック第一試合サントアンヌ vs 山之上。」

桜たちはさっそく試合だ。

「一時間後にはじめます。第一ブロックはA広場。第二ブロックはこの体育館で行います。では解散。」

周りがさわがしくなる。

中でも、海王と同じブロックになったことを嘆いている声も少なくない。

桜はその海王のことを知らないので、氷柱に聞いてみることにした。

「ねえ氷柱。海王ってそんなにスゴイの？」

「そうね、海王は超エリート校中のエリート校。部活動もほとんどが全国決勝にまで進む

わ。そして、生徒会なんだけど。」

氷柱は目線を恐らく海王と思われる生徒たちに向ける。

海王の生徒の中でもものすごく目立つ人物が二人いた。

「あの目立つ人わかる？」

「長すぎる金髪…っ！かちよつとテカってる人と、これまた微妙に長い銀髪の人？」

男性としては、いや女性としても長すぎるくらい金の髪をした、少し恐持ての人物。

そして、銀髪の女性とも受け取れる顔たちをした人物。顔で言えば真逆といえよう。

「金髪の人が、“金獅子”さん。銀髪が“銀河”さん。二人は、この六校を取り締まる、“総理事長”と“副総理事長”の息子よ。」

「知らなくても無理はないわ。…あら？」

遠くから手を挙げ近づいてくる人物。徳川空がいた。

「徳川君。あなた病院行くから参加できないって…」

「京都の病院でね。明日ちよつと検査があるんだ。まさか君たちも京都でやってるなんて知らなかったから。」

「そう。」

「僕の妹が参加するって聞いてきたんだ。」

「あの“海”って子？」

顔を出すように氷柱の肩からヒョイっとして出て来た。

「ああ、知っていたのか。そうだよ。大江戸大付属高校生徒会長徳川海。二年生さ。」

「あら、私たちと同一年ね。」

「妹とあたることがあったら、気をつけたほうが…、いや彼女は決勝まで出ないだろう。」

「どっしって？」

「金獅子君と戦う時まで温存しておきたいのさ。」

敵に自分の情報を一切公開しないということらしい。

それは『予選は勝って当たり前』と喋っているような物であった。

「なかなか言ってくれね。ウチらをあまり舐めない方が学校のためだよって伝言頼める？」

「さ…桜。」

「ははは、わかったよ。ん？」

また一人の男性が近づく。

今度は縁の細い眼鏡をし、黒髪でいかにも真面目そうな人であった。青い制服：桜にはどこの生徒かわからなかった。

「徳川。久しいな。」

「九条じゃないか。出てたのか。」

二人は再会を喜ぶように握手をした。

「あ、紹介するよ。彼は九条貴怜。サントアンヌの会長さ。」

桜は内心、（また会長クラスか、これで四人の生徒会長を知っちゃったよ。）と思った。

その九条の後ろに二人の小さな女の子がいた。

なんだか表情が読めない無の表情をした双子らしき女の子であった。

「ああ、たしかフェイさんとファイさん。ええっとメイドさんだったけ？」

「徳川様。お久しぶりでございます。」



二人は合図なくまったく同時に喋った。

「彼女らは私の専属メイドだ。」

桜にとって茜のようなものか。

歳は茜よりだいぶ若いがっと思つ。

九条は氷柱を見て、少し考え告げる。

「あなたは、たしか北皇子総合病院の…」

「はい、娘の氷柱です。」

「お会い出来て光栄です。」

“生徒会長”としてではなく、病院の娘として知られていた。

九条は時計を見ると、次の試合の準備があると言ひ、別れを告げた。桜たちも同様に試合の前にやることがあつたため、参加選手でミーティングを開いた。

ミーティングをやるための部屋はあらかじめ用意されていた。

中は和式の会議室。畳の部屋で、座布団がしいてあつた。

ホワイトボードも用意されていた。

「では、第一試合のオーダーを決めます。」

「試合内容は？」

「ここに封筒があります。先ほど渡され、ここに試合内容が書かれているそうです。」

そう言い、司会である氷柱は封筒を開封する。

「試合は…“走って書いての大レース（仮）”……」  
「……」

一同は静まり返る。

「つ…つまり、何か頭を使ったりするレースかしらね…。」  
「まあ（仮）が気になるけど…。」

封筒の中にはもう一枚、オーダー用紙が入っていた。

- 1 . 早ときドリル！
- 2 . ????
- 3 . 数学早とき！
- 4 . ドリルでバイク
- 5 . ????

「????が気になるけど、誰か立候補者いる？」  
「そうだねえ…。」  
「はいはい」

南が元気よく両手を振る。

「ん？南、出る？」

「私が出たらアウトだよお。」

「「「確かに…」」」

「ひどいよお〜、でね、まず早ときドリルは氷柱ちゃんが適任だ  
と思うなあ」

「確かに氷柱なら適任だね。」

「あとは私が早ときバイクだっけ？あれがいいな。」

乗り物関係なら七海は超人的な動きができるので、立候補した。

「よし、わしは2番目の????にしよう。」

立候補したのは浦島であった。

「なら私が数学に出ようかしら？」

「椿数学得意なの？」

「いいえ、誰もやらないなら私がとっと決めるってことよ。」

「…いや、数学なら南がいい。」

残るは最後の????のみ。

「どじする？」

「抽選でいいか？」

とということ、くじで決めることになった。

そして、一時間後のA広場。

「愛歌と恋美と一回戦からやりあうなんてね。」

「ふっふっふ。手加減しないよ。」

そして第一回戦、雲の上vs橋の試合が始まった。

## 56 一回戦と二回戦

一回戦は早ときドリル。

使う場所は、普通のグラウンドである。

選手はジャージに着替え、スタート位置につく。サポートとして、桜と識とついでに雪音がつく。

「氷柱…大丈夫なの？」

「え？」

「氷柱さん、体力がまっつっくかないと思いましたが。」

「だ、大丈夫よ！100mくらい走れるわよ！」

「100mって…」

「えっと、あなたは、雪音さんでしたよね？」

「は、はい！あああアイシングならできます！」

「ふふ、ありがと。じゃあ、試合後をお願いするわ。」

二人の仲は良好らしい。

コースは400mトラックを使う。

スタート地点から100mごとに机とドリルが用意されており、それを解いて走るといふ作りだ。

「相手は…あ、恋美だ。」

「そっちの生徒会長さんか。これは厳しい戦いになりそうね。」

実は恋美も優等生である。

たまに桜も勉強を教えてもらっている。

時間が来た。

「じゃ、頑張つてね。」

「ええ。」

スタート位置につく。

と言っても、スタート地点から問題を解くので、椅子に座っているだけである。

「よーい……」

パン！と乾いた音になる。

二人は同時に問題用紙をめくる。

問題はまず、世界史問題であった。

恋美はスラスラと鉛筆を動かす。

（世界史なら私の得意科目。スタートダッシュはいただきね。）

恋美は余裕な表情で氷柱の様子を横目で見る。

そこには驚愕の光景が写った。

氷柱は鉛筆を滑らせてはいない。

鉛筆を通していているというのか、まるでロールを上から下へゆっくり転がしていく勢いである。

その調子で素早く3枚の問題用紙を片付けて言った。  
その間、恋美は1枚も終えていなかった。

(くっ、これは…)

桜たちは、勝利をほぼ確信していた。

氷柱に不得意科目はない。世界史が得意ということもまったくない。  
他のどんな問題がきても問題なく、今と同じペースでいけるだろう  
と思った。

だが、悲劇が起こった。

氷柱が90m走ったところで…

氷柱は倒れた。

「ゼー…ハアハアハア…もう…ダメ…」

その後、ホフクしながら氷柱は机にたどり着くも椅子に座ることが  
できず、負けた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」  
「いって、仕方ないよ。」

みんなで励ましあいながら、雪音はアイシングをしている。  
氷柱は病んでいた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

第二試合。???である。

「浦島頑張れ！」

「おう！」

「ごめんなさいごめんなさい……」

「ほら！氷柱！浦島がやるよ！応援しなきゃ！」

氷柱はまだ引きずっていた。

「よし、種目は何だ！」

相手は先ほど祐介会長に殴られた生徒であった。

「さっきは殴つてすまなかつたな！頑張れ！」

「何回僕殴られてると思ってるんですか。」

そして試合内容が発表される。

「さて、試合内容は」

ダダダダダン！

「“ギャルゲー” 対決！」

全員何を言っているのかわからなかった。

「え〜つと……桜？今なんて……」

「ぎゃるげー」

「いやなん…」

「ギャルゲ」

「…桜が選ばれればよかったのに」

「そ！そんなウチは別にSchool O a y sをプレイしたり、O e yのソフトを大量購入したりなんか！」

「私の圏外だわ。」

「ルールを説明します。用意されたギャルゲーをプレイしていただき、どちらがよりよいハッピーエンドを向かえるかを競っていただきます。」

普通にゲームをするようだ。

「うむう…」

「浦島？」

「わしはげーむなど、チャラついたものせん。」

「向こうはどうだ？」

対戦相手の橘高校を見る。

「たしか次は会長ですよね。」

「…東海林。」

「はい？」

「ぎゃるげとは何だ？」

お互い知らないようだ。

お互い平等な対決に見えるが、浦島は恋愛を全敗無双中である。それに比べ、相手の祐介は見た目はスポーツマンである。これはもてるだろうと識は見ていた。



一方相手チームは

「会長…。相手が誰かわかりませんが、会長はロリコンですからかなり不利ですよ。近親相〇は犯罪ですし…」

恋美が肩を落とし、今回は負けたなと思った。

「じゃ、浦島。頑張ってこいよ。」

「うむ、わしは応用力はなかなかのものだから、どうにかする。識よアドバイスはあるか？」

「桜、アドバイスを。」

「へ？ウチ？」

いきなり話を振られた桜は驚いた。

適当に頑張れーと言おうとしたところであった。

「このメンバーだと、桜しかギャルゲーやエ〇ゲーをやってないんだから。」

「そうそう、今あの娘をどう落とそうか…ってこら！！暴露すんな！！」

「桜…」

「氷柱？？何そのゴミを見る眼は？それに識！それだったらあなたのベット下の…」

「わああああ！！！！！！」

すると七海の眼鏡が怪しく光る。

「っーか…、なんで桜が中嶋君のベット事情を知ってるのかしら？」

「はづっ！！（しまった！！）」

そこでまた一騒動おき、結局アドバイスをもらうことなく浦島は試合をする席に行った。

「あの大うつけども…」

浦島は恨み言をポツリと呟いた。

二人は席につき、司会から浦島に手渡されたのは、コントローラー。一般的なモデルである。

「ふむ…」

浦島はコントローラーを触ったことがない。まるで未知の生物を丁寧に扱うかのように触る。

「これで、そのげーむをやるのか…」

「浦島ー！コントローラー逆さー！」

「む…」

あわててひっくり返す。

その様子を見て、対戦相手である祐介は相手がゲーム素人であることを確信した。

「さーて、ではルールは先ほど説明した通り。どちらがハッピーエンドを迎えるか！スタート！」

地味な対決が始まった。

二人のプレイ状況は、グランドの特製モニターで映し出される。

「浦島はどうなると思う？」

「ウチの予想では、まあ浦島だから、ハッピーエンドは難しいだろうね。」

浦島は女の子にフラれまくり常習犯である。

10分後

「なにー!!!妹が二人!!!どどどどちらを選べば!!!」

「あー…うちの会長が馬鹿してる」

「む!女に手を出しすぎて修羅場化しとる!」

「あいつ…二人のヒロインを同時攻略しようとしてる…」

二人は混迷していた。

20分後…

二人はゲームを終え、エンディングを迎えることができた。

「ふう、わしも全力を尽くした。」

「俺の妹ハーレムの完成だ。」

片方は問題ある発言だが、そこはスルーして、二人のエンディングが順番にモニターに流れる。

橘祐介ED

主人公「ははは、待てよ。」

妹A「こつちよ〜お兄ちゃん〜これ買って!」

主人公「おいおい引っ張るなよ。」

妹B「次はあつち行こう!あとこれ買って!」

たかられている。

だが、どうやらハッピーエンドの部類に入るようだ。

「これは、浦島がまともなハッピーエンドを向かえないと負けるな。」

浦島ED

主人公「」

女A「」

二人は手をつなぎながら歩道橋を歩いている。前から別の女が二人に向かって近づいてくる

女B「こんにちは」

主人公「あ…、ああ」

主人公はあきらかに動揺している。

眼が黒くなっている女B。

すると、右手に持っていた鉈を女Aの首へ…

女A「死んじゃえ。」

女B「え」

モニターが真っ黒になり、“鮮血の結果”という文字が浮かび出た。

「ヤンデレバットエンドか!！」

雲の上は現在0勝2敗となった。

## 57 三四五回戦目

「申し訳ございません。」

浦島は皆の前に帰ってくるなり土下座をした。

「ちよ、浦島君。」

「わしの失態で雲の上全体に危機を与えてしまつとは……わしは……切腹ものじゃあ！」

懐から小太刀を取り出した。

鞘から身を抜き出し、それを腹に……

「命を粗末にするんじゃない!!」

言葉と一緒に識の拳が飛ぶ。

ほっぺたを拳で殴り飛ばした。10mほど。

「きゅっ」

「やべ!強すぎた。」

浦島は気絶をし、医務室へと運ばれた。

「次は南だっけ?」

「わたしだけどお、ちよつと不安かなあ……。」

「桜、何で数学早解きに南嶋を選んだんだ?」

「それは試合が始まればわかるよ。」

意味深な言葉を残し、試合会場へと向かう。

試合する場所はグラウンドに設営された特製ステージ。

まるでクイズ番組のようなステージで机が二個並べられ、各机には専用モニターがついている。点数ボードが立っていたり、大型モニターがあつたりする。

「さあ次の勝負は名前の通り、計算対決です！それぞれ個別のモニターに出る数字を全てたして計算していただきます。」

「昔インド式計算術が流行った時に、よく出ていた問題だな。」

ステージに緊張しながら南が上がる。

「うわあ、今回はギャラリーが多いよあ。というか相手の高校の応援団、今回は気合がおかしいよあ。」

橋には今回応援団が駆けつけている。

弾幕には“LOVE SONG”と。直訳すると“愛歌”。その通り、愛歌がステージに上がってきた。

「愛歌って高校では人気があるのね。」

従姉妹である桜もそこまでは知らなかったので驚いた。

「うおおおおお！！！！あ・い・か・ちゃ〜ん！！！！」

「…恥ずかしい。」

応援されている愛歌は顔を真っ赤にしている。

「愛歌　！緊張しないでねー！」  
「大丈夫…。」

「南　！負けたら今後メイドさんで登校だからねー！！」  
「うわ！それはいやだなあ。」

お互い緊張したまま、椅子に座る。

机には、クイズ番組で使われる電子ペンとモニターがあった。

「それにしても、そろそろ教えてくれないか？」

「ん？何を？」

「とぼけるな。お前と一緒に成績最下層の南嶋をどうして推薦したんだ？」

「それはね…。お！始まる。」

桜は途中で言うのをやめ、南の試合を見た。

「では、モニターをご覧ください。ここに数字が出ます。どちらが素早く全問書けるかを競います。よいスタート！」

開始と同時にすさまじい対決が始まった。

「南はパソコンと計算問題だけは、尋常じゃないくらい得意なのよ。」

南は数字を見て、一秒以内に計算をし、解答していく。  
それがどんな位の数字計算でも。

「愛歌さんもやるな。」



愛歌も南ほどではないが、素早く計算していく。

南があと一問というところで、まだ愛歌は四分の三ほど問題を解いたところであった。

だが、ハプニングが起こった。

ボキッとペンが折れた。

「ッ!!」

折れたことを知り、司会があわてて変えのペンを用意する。だが、確実に時間のロスであった。

「まずい!このままじゃあ、愛歌が勝つ。どうすれば…。そうか!」

桜は“何か”に気づき、行動を起こす。

「識!歯を食いしばって!」

「へ?」

「村雨えっ!」

桜は手元に木刀・村雨を召還した。

そして、大きく振りかぶって…識を弾丸のように打った。

そのまま宙に放物線を描き、ある地点へと落下した。愛歌の目の前である。

「…識さま…。」

桜の狙いとしては、とりあえず、知人が目の前に振ってくれば動揺するという狙いであった。

愛歌は顔を朱色に染め完全に手が止まった。

その間にペンが届き、一瞬で南が答えを書く。

その瞬間ブザーが鳴り、大型モニターには勝者雲の上学園という文字が出た。

これで1勝2敗。

まだ、ここから2連勝しないと勝利ではない。

次の試合まで休憩をとることになったので、全員で会議室に集まった。

ちなみに、間宮・椿・エヴァは消息不明になっている。

次は七海の出番であるが、休憩中。

「ところで、中嶋君？あの対戦相手とはどういうご関係？どうして桜の従姉妹さんとお知り合い？それに“識さまあ？”ええ？」

「いや、あのそれは…ぐるじ！」

識は七海に首を絞められ尋問…というより拷問に近いことをされる。

「ぎぶぎぶ！つか何だその黒いオーラは！？」

「さて、あの夫婦コントは置いておいて、次は…って七海だよ。おいそろそろ、閉め落とすか、殴ぶり殺すなりして、会議しようよ。」

「その殺す前提の選択肢なんだ！」

我を取り戻し、識をポイツと投げ捨て、会議に加わった。

「次は“バイク”ってことだから、七海の得意分野だね。」

「まあ私は得意だよ。でも問題が出たら結構ヤバイよ。」

七海は社会以外は絶望的な成績である。

「あ、氷柱。どこ行ってたの？」

先ほどまでいなかった氷柱が会議室にやってきた。

「次の試合は、コースを回るらしくて、説明書きが配られてるのほら」

氷柱は桜に一枚の紙を手渡した。

「これは！！」

コースは第二グラウンド一周。

格コーナー四箇所にて折〇×問題を応える場所がある。

そこまで、自転車や三輪車など指定された乗り物で向かうことがルールである。

「七海？」

「ここ見て。」

七海が指したのは第二コーナーを抜けたところの円形の土俵。どうやらここも通ることが決められている。

「この注意書き。“土俵の外に出たらコースアウトとして失格となる。”」  
「なるほど…。」

そして、橘高校。

「ここだ。」

「なるほど…。これは使える。この平均台。」

時間がきた。

全員第二グラウンドに集合して、七海と橘の生徒はスタート位置にいた。

「誰が相手？」

相手は、橘生徒A。先ほど祐介に殴り飛ばされた人物だ。

「ふっふっふ。桜相手が悪かったね。」

「何い？」

わざわざ、恋美は雲の上チームのところまでやってきた。

「彼は一件間抜けに見えるが、自転車と一輪車の操縦は天下一品級。というかそれ以外とりえがない。」

「聞こえているぞー。」

「それでは位置について、よいスタートー！」

七海が最初に目にしたのは三輪車。

「うー、やっぱり漕ぎにくい。」

七海の漕いでいる様子を見て、桜と雪音はあることに気づいた。

「識くん。」

「あ、雪音さん。どうしました？というか一話ぶりくらいに話しましたね。」

「その…えっと…」

雪音は丁重に言葉を選んでいた。だが

「識。」

「ん、ってぎゃああー!」

桜により目潰しVer.V指。

「ちょっと目を閉じていなさい。」

「な!なんで!言葉で言えっつてえ!」

目潰したのは、七海の光景にあった。

二つの胸が身体の振動で上下しており…

「あれは識くんにはまだ早いです。」

「目の毒ね。」

そんなことをしていると、七海は問題コーナーにたどり着いた。相手との差は20Mほど。

ブー、

ブー、

ブー、

二択の○×問題で三連続不正解。

その間に相手に抜かれてしまった。

「畜生！」

次は一輪車に乗り、平均台を渡る。

平均台から落ちたらその位置から逆戻りして、また渡る。

「どりゃあー！」

相手はまるで躊躇しないかのような走行で平均台を渡る。

「素早い走りね。でも！」

それに負けないような走りをする七海。

「何！ええい！連邦の○ビルスーツは化け物か！」

「伊達に赤い眼鏡をかけているわけじゃない！って桜の受け入りだ  
けど！」

第二コーナーで相手と七海は並んだ。

お互い、一回目で正解して、次の乗り物、自転車に乗った。

そして、円形の土俵に着いた。

ここでお互いが動いた。

（今だ！）

七海は自転車をウイリィーさせ、相手自転車を攻撃しようとした。それは相手も同じだった。

「な…！？」

「に…！？」

相手も驚いた様子であった。

タイヤの前輪と前輪がぶつかる。

お互いのバランスがくずれる。距離的に相手のほうがリング外に近い。

「でえい！」

七海がしかける。

前輪タイヤによる突撃で相手は後ろへホッピングする。

「今だ！（いや、これは…）」

七海は足を動かし、前輪を上げたまま突撃。だが、相手はそれを読んでいた。

大きくホッピングし、攻撃をヒラリと交わし、七海へと自転車の向きを変えた。  
そのまま突撃。

「甘い！」

それを読んでいた七海は後輪を軸に180。タイミングよく回し、自転車によるビンタで相手をはたく。

予想外の攻撃に完全に相手はバランスを崩し、相手はリングアウト。

その時点で七海の勝利が決まった。

これで2勝2敗。

そして、5回戦。

単純なクイズ対決であった。

雲の上の選手は、雪音であった。

場所は、七海が使ったステージであった。

「雪音さんって…」

「クイズというか、一般常識もところどころ欠けている。つか山暮らしだったからな。」

雪音がステージに上がる。





学園の勝利！！！」

橘の生徒は口をあんぐりと空け、事実を受け入れることができていない様子であたった。

こうして、雲の上学園の綺麗な1勝を飾った。

次回、VS大江戸大付属高校

## 58 インターミッション

桜たち雲の上学園は橘高校に勝利し、次の対戦高校である、大江戸大付属高校との対決まで会議室でひと時の安らぎの時間をすごしていた。

今は、大江戸が橘と試合をしている。

「次の大江戸だっけ？氷柱、何か知ってる？」

情報通である氷柱に桜は問いかけた。

「生徒会長の徳川海さんは知ってる？」

「ああ、昨日会ったよ。」

「そう。彼女はうちの徳川空君同様、何か不思議な感覚を持ってるわ」

実際、徳川空と対峙したことがある桜はその“感覚”というのを身をもってしっていた。

「でも空君とは違う…：そうね、威圧？というのかしら。そういった相手をひれ伏すような感じ。」

「ふ〜ん。他の生徒は？」

「副会長の織田信長君は、剣術の達人。その片腕として明智光秀君

「何か歴史人物と同姓同名なんてね…。」

「まだいるわ。豊臣君、石田君。慶事。市さん。の七人が生徒会よ。

「そりゃまた、名前が“偶然”だね。」

すると、エヴァが声をかけてきた。

「おい、貧乳。」

「貧…！って何？」

「アタシ次でんのか？」

「さっきの試合に出ていない人は出るよ。」

「ちっ、メンドクせ。」

悪態をついて離れていった。

「ちよっと！真面目にやってよ！」

手だけを振って、了解の合図をした。

桜はいまいち信用ならないと思いつつも、エヴァの運動神経は北海道で証明済みなので、真面目にやりさえすれば大丈夫だろうと思っていた。

会議室のドアがトントンと叩かれた。

大江戸の職員が試合に関する紙を届けにきた。

紙はこう書かれていた。

『オーダー表・雲の上学園

一回戦

二回戦

三回戦

四回戦

## 五回戦

」

とだけ書かれていた。

「何をやるかは、まったく秘密ってわけか。」

「桜。」

「あ、椿。すっかり忘れていた。」

「失礼ね。」

椿はいつも通り、黒いドレスを身にまとっていた。

「私、一回戦に出させてほしいんだけど。」

「へ？別にそれはかまわないけど？」

「とつとと終わらせて、シャワー浴びに行きたいのよ。」

「ウチらの試合はまったく興味がないわけ？」

「ないわ。しいていうなら、桜が運動したときに見える素肌には大いに興味があるわ。」

「勘弁してください。」

「一眼レフカメラでとるわ。」

「勘弁してください。」

「じゃあ、よろしくね。」

椿は用件だけ伝えると、一人会議室を出て行った。

椿はこの大会中、フリーダム。一人でどこかに行っている時間が多い。

どこで何をしているのか気にはなるが、詮索するほど興味もないし、謎多き人物であるので放置しておく。

「無い乳。」

「な…！胸から離れる！」

「アタシ二番な。」

「あ、ちよっと！」

エヴァもそれだけ伝えると、時間には会場にいい、部屋を出て行った。

「チームワークゼロだけど…」

「だけど？」

「みんな、桜が好きなのよ。」

「ッ！」

意外にもシャイな桜は顔を赤くしてしまった。

その様子を氷柱は笑って見ていた。

「じゃあ、そんな桜が大將ってことで、五回戦でいいわね。」

「さくらちゃんがんばる！」

「ちよっと！南も無責任な！大將ってことはね」

「桜が負けたら雲の上全体の負け。」

わざと七海が鋭く言った。

普段の七海からは創造できないような鋭く、冷たい声であった。

「な…七海？」

「驚いた？私こんな声の出し方できるんだ。脅しになったでしょ。」

この流れで、桜は五回戦に出ることになった。

あとは、間宮と識がジャンケンをして、間宮が三回戦・識が四回戦に出場するようになった。

一回戦・椿  
二回戦・エヴァ  
三回戦・間宮  
四回戦・識  
五回戦・桜

でオーダーを提出した。

桜はそろそろ、四回戦をやるだろうと思いい、外に出て、大江戸対橘の試合状況を確認しにいった。

スコアボードには、驚愕のスコアが記載されていた。

大江戸 5勝 0敗  
橘 0勝 5敗

橘のストレート負けであった。

桜は恋美元に話を聞きにいった。

「恋美! どうしたの!?!」

「あ、桜…。」

少し疲れた様子の恋美の姿があった。

「うん、なんとというか、スポーツ対決だったんだけど…。圧倒され

「ちゃった。」

「そんな…」

恋美は決して運動オンチではない。むしろ逆で、一般的に運動神経がいい方である。

「徳川海つて会長？」

「いや、会長は出なかった。あいつら…、気をつけて。たいしたことなく無いやつもいるけど、桜並みのバケモノもいるわ。」

「な…！」

桜並みのバケモノという言葉にイラつときたが、自分と同程度の実力の持ち主ときいて、恐れるどころか、ワクワクしてきた。

「大丈夫。恋美たちの仇とるよ！」

「なんだかすつごいうれしそう…」

そして、時間が来た。

次回、雲の上学園 vs 大江戸大付属高校



## 59 椿 vs 明智光秀

第一回戦はプールで行うらしく、大江戸の特製プールステージに移動した。

「椿？あんたドレスのままやるの？」

「これは私のトレードマーク。脱ぐことは無いわ。」

「あ、そう…。」

一応身を案じていったのだが、無駄であった。

「それに私は負けない。」

力強い発言である。

プールには直径5〜6mほどのプカプカ浮いているステージで行うらしい。

司会の人物がステージに立ち説明をはじめた。

「さて、雲の上対大江戸第一回戦。“叩いて叩いて叩き落せ！”です。

ルールはお互いにやわらかい太いチャンバラ棒を持ち、相手をプールに叩き落としていただきます。棒を手放しても負けとなります。」

説明が終わり、係員が椿に着替えるよう言った。

「お断りします。私、“黒雛椿”は黒雛家のこの制服で闘います。」

その言葉に雲の上生は全員驚いた。

「「「黒雛!!??」「「「

黒雛というのは、雲の学園の理事長である黒雛理事長と同じ姓である。

「つつつつ椿??あんだ!黒雛って??」

「あら?言っていないかしら?私は理事長の娘よ。」

聞いてねえええ!!!と全員が心の中で思った。

「じゃあ、相手をサクつと片付けてくるわ。」

椿は驚いている全員をよそに、スタスタと戦場まで行った。

「あ、対戦相手は?」

正気を戻した桜は相手サイドを見た。

相手は紫の長髪といった不気味な雰囲気な雰囲気な細い男であった。相手も服は水着でなく、制服であった。ちなみに、大江戸は赤い制服である。

「明智。」

「何です?信長さん?」

「相手はタダ者ではないぞ。気を引き締めよ。」

「んっふっふ。私は負けませんよ。あなたを副会長の座から引きずり落とすまでえ!!」

明智は織田に飛び掛る。

織田は簡単にカウンターをし、プールに落とした。

「明智君…まだ下克上狙ってるの?」

「お恥ずかしい限りです。」

徳川海はあきれながらつぶやいていた。

「あら?あなたが、対戦相手?」

プールの中から明智は現れ、ステージに上がった。

「んっふっふ。貴女を潰す男ですよ。」

「そうかしら?もうぬれて帰る準備ができているようだけど?」

「んっふっふ。あなたのその服。ぬれた姿が楽しみですよ。」

お互いは棒を構える。

「さあ!では一回戦“叩いて叩いて叩き落せ!”はじめ!」

開始の合図がすると、ゆっくりと明智が歩き出した。

「んっふっふ。私のお話でも聞かせてあげましょう。」

「どっぞ、どっぞ自由だ。」

明智は気分良く話し出した。

「私はね、副会長の座がどうしても必要なんですよ。その為には、あの織田が邪魔なんです。あの織田を排除するためなら私はヤツの言いなりになり寝首をかることもする。」

「真正面からじゃあかなわないからかしら？」

「んっふっふ。ええ、正攻法では返り討ちにあうのがオチですから。」

「でもどうして副会長？会長ではなくて？」

「んっふっふ。会長では都合が悪いのですよ。この学校は徳川海のせいで、特殊になったんですよ。ま、そのおかげで私は徳川海を相手にしないですむのですが。」

「へ〜」

椿はあまり興味がなような返事をし、明智の反感を少し買う

「この学校を牛耳る。そのため、足がかりとして貴女を討つ！」

明智は一気に距離をつめ、攻撃に出る。

「貴女が一回戦に出ることは調査済みでしたよ！」

棒と棒がぶつかる。

「女であるうえ、データを見る限り貴女が一番勝率が高いんですよ

「！」

「ぶっん…」

明智は乱暴に棒をふり、椿は避けつつ、防戦一方となる。

「さあ！私の計画の礎とお！」

「つまらないわ。」  
「な……にー！！」

「ふっ」

椿による一閃。

明智にとっては何が起きたのか視界ではとらえることができていなかった。

明智の身体は椿の一閃で激しく吹き飛び、水上でバウンドして沈んでいった。

椿にとって明智は暇つぶしでしかなく、まったく相手ではなかった。

「し、勝者！雲の上学園！」

## 60 水が踊る私の意固地

雲の上学園は大江戸から一勝を勝ち取り、二回戦目の会場へと歩いていた。

「あれ？椿は？」

一回戦で華麗な勝利を納めた黒雛椿の姿が見えなかった。

「さつき』あとはよろしく。決勝には間に合うようにする』なんて言って帰ったぞ。」

「椿め…、本当に消えたな」

そうは言っても予測がついていた事態なので、それほど困ることもない。

気を取り直し手、次のエヴァの試合に専念しようとする。

「なあ、桜。」

「ん？何、識？」

「エヴァって人のことはあまり知らないんだが。」

北海道で、桜はエヴァと闘った。

その時、識がいなかったことを桜は思い出す。

「口は悪いけど、うちののような運動神経持ってるよ。」

“うちののような運動神経”というのは、識や桜の常人離れしたこ

とを指す。

「確かに、身体つきを見ると、なかなかのものだ。特に桜と違って胸：痛てて！」

「何が違っつてえ？」

ぎゅっつと腕をつねる。

「とにかく、運動関係の競技なら楽勝だな。」

次の会場は、先ほどと同じプールであったが、飛び込み用の深いプールを使うようだ。

「第二開戦は、深水お宝大作戦！ルールは、プールの底に沈められた宝を制限時間内に持つてきてもらいます。宝にはポイントがついており、宝の重さに比例します。」

競技内容を聞いて、桜はほぼ勝利の確信を持っていた。相手を見ると、細く柔な女性であった。

エヴァに大会前に運動はできるか聞いた所、全般的に得意と言ったので、これは大いに優位な勝負だ。

だが、エヴァは青ざめていた。

その様子を見て、一つの懸念事項が浮かんだ。

「エヴァ？」

応えが返ってこない。  
とりあえず、どついてみる。

「…！」

まるで魂が抜けていたかのような反応であった。  
いつもなら、どついたりしたら、即怒るのだが、何が起きたかわからないといった感じだ。

「エヴァ？まさか…？」

「ばばば馬鹿野郎！べべべ別に“金槌”なんかじゃあねえよ！」  
明らかに狼狽していた。

そのまま、おぼつかない足取りで、水着に着替え、競技のスタート地点までたどり着いた。

スタート地点はプールから5m程の高さがある飛び込み台である。

「それでは、両者スタート位置に着きましたね。」

対戦相手である、市という少女は、正に可憐なお姫様という言葉が似合う女の子

であり、それに伴う笑顔を浮かべていた。

反対にエヴァは、その笑顔と対称的な顔をしている。



「では、スタート！」

司会の合図と共に両者浸水…はしなかった。

市は直ぐに飛び込んだが、エヴァは待機していた。

「何してんの！早く飛び込みなって！」

桜が言う。

それを聞いたエヴァは、意を決して、飛ぶ。

飛び込むという表現ではなく、落ちるといふ表現が正しいだろう入水の仕方だった。

水が大きな音を放ち、飛び上がる。

「…ねえ桜？あれまズくない？」

「うちもそう思う。たぶんエヴァは“金槌”な気が…」

すると、水面から市が慌てた表情で顔を出した。

「だ！誰か！あの人溺れてます！手伝ってください！」

やはり金槌であった。

それを聞いて、真っ先に飛び出したのは、桜であった。

「やっぱりそうだったか！」

桜は綺麗なフォームで飛び込み、救出に向かう。

エヴァは気を失い、沈んでいた。  
これはある意味幸いであった。

溺れている人間はパニックになりやすく、その状態での救出は困難であるが、気を失っていたなら、直ぐに助けられることができる。

桜は直ぐに地上へと連れ出した。

「だめ！呼吸してない！」

「任せろ！」

桜が状態を伝えると、直ぐに行動を起こしたのは識であった。

救急隊のような迅速な処置であった。

心臓マッサージを的確に行い、人工呼吸をする手本となるような動作であった。

その甲もあり、息を吹き返した。

「……」

「……もう。泳げないならそう言えばいいのに。」

「うるせ」

「とにかく、助かってよかった。礼は識に言いな。蘇生したのは識だし。」

「手間かけたな。」

エヴァは最低限の言葉しか言わなかった。

だが、恩は感じているようであった。

こうして、成績は1勝1敗となった。

## 61 迷いの国の物語

続いている試合は、間宮が出る3回戦である。

選手以外は、全員モニタールームという場所へ案内される。

モニタールームはいわゆる大会議室のような場所であった。席に座ると、モニターに試合会場が写し出された。

そこは、大庭園であった。草木で道が作られている迷路のような庭である。

司会が説明を始める。

「次の試合は“大迷路”。先に王冠を見つけた方の勝利となります。草木を破壊

してでの通行や、登るなどの行為は失格となります。」

モニターを見ると、一ヶ所高い塔があった。

「塔に登り、迷路全体を把握するかが勝負の鍵になります。」

この勝負は、早さが物をいう。

その点では、間宮は有利であろう。

相手は、“石田三成”。氷柱からの情報では、学年首席の人物らしいが、運動はできないらしい。

「では、スタート！」

開始と同時に、間宮が走り出す。目指す場所は塔である。

石田は走らず、歩く。

分岐点では、迷わず道を選び歩く。

モニタールーム

「あ、あそこにいるのは徳川海。」

大江戸の選手もモニタールームにいた。たまたま近くに海がいたので、声をかけてみた。一人では心細いので氷柱を連れていく。

「こんにちは。」

「ああ、東海林か。それから……」

「雲の学園生徒会長、北皇子氷柱です。」

その名前を聞いて、ああと海は頷いた。

「お兄様から聞いたな。たしかSクラスの。」

「ええ、同じクラスです。」

「それに北皇子病院では、お兄様が世話になってる。」

桜にとってそれは初耳であった。

話していると、徳川空が歩いてきた。

「やあ、試合はどうだい？」

「お兄様。残念ですが、海は出られません。織田達が必ず勝利してくれます。」

「

「ちよい待ち！それはうちらが負けるって話かい？」

「違うのか？」

バチバチつと火花が散る。

「石田は運動はできんが、オツムはなかなかの物だ。塔に登ったら確実に迷路全体を把握する。」

「間宮は犬のように素早いよ。ノロノロ歩いている間に終わっちゃうよ。」

お互いの自慢が始まった。

少し離れた所に、氷柱と空が二人。

「あの二人、仲良くなれそうでよかったよ。」

「そうなの？」

大迷路

「…行き止まり。」

間宮は、迷っていたが、確実に塔に近づいていた。

石田は…

「どこか。」

塔の麓きいた。

迷うことなく、塔についた。

モニタールーム

「どうして!？」

「石田は分析したんだ。」

桜と海はなんだかんだで、二人でモニターを見ていた。

「石田は二三回行き止まりを見て、設計者の癖を見抜いた。海でもそんな芸当は

できない。あいつは天才なんだ。」

「天才…」

雲の上にいたならSクラスにいただろう。

桜は思った。

「それに、もし石田をつけて、王冠を見つけたら奪おうとしても無駄だろう。尾

行を巻く術を持っている。」

「くっ…!」

王手をかけられた気分であった。

海のいうことが本当なら、石田は迷わず王冠まで一直線である。

モニターを見ると、間宮は塔に今たどり着き、石田とすれ違った。

石田は歩きながら、周囲に気を配る。

間宮はその警戒を察した。

そして…

間宮は消えた。

モニターから消えた。

「間宮は？」

「おかしい。カメラ班が見失うなんて。」

雲の上集団で雪音は一人違う意味で驚いていた。

(これは！妖術！？でもあの人は人間。じゃあまさか！)

間宮が消えたまま、石田は王冠へと歩く。

王冠が見えたその時、

「助かった。」

「何っ！」

一瞬、間宮が石田の隣にいた。  
だが、直ぐに追い抜いてしまった。



「私の警戒網をどうして!？」

「足消」

「何!？」

そして間宮は王冠を抱えた。

『雲の学園の逆転勝利!』

「そんな…」

石田は膝を地面につけた。

何が起きたかわからない人。

「お兄様。あれは。」

「うん。気づいたよ。“彼も”だね。」

間宮を見る人。

「のう、識よ。よくわからんが勝ちを喜んでよいのじゃろ。」

「ああ、勝ちが勝ちだ。」

とりあえず喜ぶ者がいた。

雲の上はあと一勝で勝利となった。

「喜ぶのは間違っただ、東海林。」

「そっちはあと一敗で負けだよ。」

「これから出る豊臣は、大江戸四天王と呼ばれる男よ。」

「四天王って…いるんだ」

「まあ、見てのお楽しみね。」

「うちの識だつて、伊達に東海林家で住み込みで執事してるわけじゃ…」

あつ…と思った。

今の言葉を雲の上の人には聞かれていないことを祈った。

だが、その願いは叶わなかった。

後ろには移動するので桜に声をかけにきた氷柱、七海、南の三人がいた。

「桜？それって同居？」

「いや！なんとというか同居というか、一緒の家に住んでるだけで！」

「桜ちゃん、それは世間一般的に同居だよお。」

「…あはは。」

バレた。

同居の経緯を説明をして、納得してもらった。

「なるほど、中嶋くんの家をアンタが爆破したからってことね。」

「直接は馬鹿兄貴がやったんだけどね。」

「まあ薄々気づいてたけどね。七海は特に敏感だから。その件は。」

「なっ！べ、別にそんなんじゃないんだからね！」

「なぜツンデレ？」

## 62 男の戦い

雲の上は次の会場であるグラウンドに移動する。

グラウンドには、相撲の土俵が設置されていた。

「相撲か？」

司会がやってきて説明を始める。

「第四回戦は、“喧嘩相撲”。ルールは相手を外に出すか、地面に背中をつけたら勝ち。相撲と同じく蹴りは禁止です。」

「そいつは腕がなるな！」

格闘関係と聞いて識はやる気を出したようだ。

対する相手は

「我に挑むのは小僧、貴様か。」

豊臣秀吉であった。

二人が土俵に上がる。

「お前はぶん殴りたいと思った。」

「我が前に、立つな。愚民」

「いい加減猿山の上から落としてやるよ。」

豊臣は2mの大男であるのに対し、識は170くらいの平均身長。外から見て、明らかに豊臣の方が強そうだ。

この二人は昨日出会い、喧嘩をしそうになっていた。そういつた因縁があり、お互い、始まりを心待にしていた。

識は制服のブレザーとネクタイを外す。

豊臣は、違法制服である自前の服を脱ぐことはなかった。

「は、始め！」

司会が告げるとお互いの拳がぶつかった。

「ふん！やはり昨日は本気ではなかったようだな！」

「それはお互い様だろ！」

豊臣は宙に跳んだ。

下に向けて拳を構えた。

さすがにこれを直接はくれない。

すぐに避ける。

豊臣は、着地と同時に識へとダッシュ。

勢いのついた拳を識へ当てて。

「くっ！」

「体格による違いだ。貴様ではこうはいくまい。」

腕が痺れる。

「消えよ」

豊臣の唐竹割り

識のガードが崩れ、直撃し、地面に叩きつけられる。幸いうつ伏せに倒れた。

「がっ！まだ…」

「そうまだだ。」

起き上がる識に豊臣は追撃として、拳の連打を浴びせる。

止めの一撃。

「今だ！」

識は一瞬の攻撃の止みを待っていた。直ぐに豊臣の近くから離れた。

「ほう。まだ動けたか。」

識は少しフラついていた。

「今一度我が猛襲を受けよ。」

「…仕方ない。桜以外には使うとき思わなかったが。」

識は左手を前、右手を引いた構えをとる。

「いくぞ…。」

「我が前に…！」

識は高速移動。いつの間にか間合いを詰め、肘打ちを腹部に炸裂。

「が…」

「ふん！」

続いて識は掌底を突く。

この二連コンボは綺麗に入り、豊臣は円のギリギリまで吹き飛ばす。

「とどめ！」

「甘い！」

識はとどめに正拳突きを放つが

「うわっ！」

あまり体重が乗っていない拳であったせいもあるが、拳が豊臣の身体に当たると識が吹き飛んだ。

「な！なんだ！？」

「内功を練ればこの程度、どうということはない。」

「内功…？」

どうやら豊臣はただの暴徒ではないようだ。

「ところで、お前、何者だ？」

「…。我は…常に上を見る者。そうするよう、幼少の頃より教育を受けた。」

「…」

観客には聞こえないような声で話し出す。

「いかなる時においても我は王としての気品を持っていなくてはならない！ゆえに強者でなくてはならない！全てを壊す力！力があれば我が前を塞ぐ障害を全て排除する！」

「王であるために破壊するのさ！」

「無論！力こそ全て！眼前の石ころは我が前から排除し！我が王道を行く！」

「そうか…。わかった。」

識は試合中に関わらず、目を閉じる。

「俺もな。昔は力があればと思い、力を欲したことがあった。そして力を得た。これで俺はできなかったことができると思った。」

識は拳を目の前に持っていく。

「だけど、それは違う。俺もお前も…お前が思っている石ころなんだ。」

「何？」

「同じ石ころだ。」

「我を愚弄するか！！！」

「力があれば偉い…それは違っつてことさ。これがな。」

「貴様あ！」

豊臣は拳を向ける。

識が開眼すると…

ゴー！と大きい音が鳴り、識の顔面に拳が衝突する。

識は一步も引かない。

「力だけ求める…それじゃあな…いろんな意味で強くなれないんだよ。」

「ぐっ！」

「俺は守る為に闘うことを教えてもらった！」

豊臣はさらに。先ほどよりも鋭く拳を連打する。

「見切った！」

識は身体をひねり、しゃがみ込み、足のバネをためる。そのままスリ足で豊臣の真下へと滑り込む。

「しま！」

「大地印・昇脚」

識はまさに重力を支えにし、軸を固定し上へと蹴り上げる。完璧に重力を捕らえた蹴りを放った。

激しい衝撃を与え、豊臣が宙に浮く。

それを追いかけるように識も蹴ったまま、浮いた。

「まだまだああああ…!!！」

身体を反転させ、再び、蹴りの構えをとる。

「大地印・押印脚」



ズドオオオン！！と大きな音と共に、砂埃が上がった。

豊臣を空中で蹴り飛ばし、真下である地面へと垂直落下させ、地面に“押印”を押しした。

豊臣はかるうじて意識は繋いでいる様子であった。

「ぐ…」

「はあ…はあ…」

あたりが静まりかえる。

その静寂を破る司会声が響く。

「…け…蹴り技を使ったので！反則負け！！大江戸の勝利いい！！」

544

「やぐ…」

「し〜き〜」

「あ・いやつい熱中して！いやだから！」

識は桜に殴られた。

雲の上2勝。

大江戸2勝。

そして、桜の出る決勝戦を迎える。



### 63 勝利を決める橋

識が負け（反則負け）大江戸も雲の上も後がない状態になった。

「ねえ桜。織田って人でしょ？決勝の相手。」

「そうね、一度手合わせしたんだけど、負けそうになった。」  
「桜が！」

氷柱にとって桜は基本敵なしの人物。

「決勝はまたプールに移動だっけ？」

「うん、まただね。水着に着替えるのかな？」

「桜が水着着てもねえ」

「七海の水着は世間の毒だけだね。」

「桜は発育不足ね」

桜たちが話していると、椿がぬつといつの間にか桜の背後に現れた。

「つ！椿！つて乳揉むな！」

桜の裏拳をヒュツと椿は避ける。

「つて！椿。帰ったんじゃないの？」

「桜の試合は別よ。私の本当の楽しみの一つよ。」

意地悪な笑みを浮かべる。

そして、決勝会場のプール。

プールの細いつり橋がかかっていた。  
普通のつり橋とは違い、橋の端につかまる所などなく、簡単に落ちてしまう橋であった。

司会がつり橋にのぼり説明を始める。

「最終戦は！“決戦の橋”。両者武器を持っていただき、先に相手を落としたほうが勝利！ガチバトルです！」

ラストはガチバトルらしい。

桜にはうってつけの勝負である。

「よっしゃあ！いつちよやってくるよー！」

「桜ちゃんおっとこ前え〜」

桜は激励されながら、つり橋の上へと昇る。

「織田君。」

「む？」

「東海林はおそらく…」

「わかっておる。余はお主以外に負けるつもりはない。」

織田はそういい残すとつり橋へとあがる。

桜と織田は対峙する。

「主とは昨日以来であるな。」

「ええ。」

「余の木刀。“妙法丸”の錆びとなれ。」

「ウチの木刀。“村雨”の錆びにしてくれるわ。」

木刀を構える。

「それでは始め！」

始まった。

織田はゆっくりと動く。

桜は一度力をため、解き放つように走る。

走り出した瞬間、橋が大きく揺れた。

(やっぱり無理か！)

桜のバランスが崩れているとき、織田はスッとバランスを崩さぬよう移動する。

「うわ！」

織田の縦切り。

桜はどうかか防御するが、バランスの悪さ・織田のパワーが重なり、いやおうなく桜は後ろへ転がる。

当然つり橋での転がりには危険であったが、他にどうにもできなかった。

「くっ！」

「ぬるい。」

転んでいる桜に容赦なく攻撃を繰り返す。

(このままじゃあ！現状を打開する手は…)

桜もどうにか立ち、バランスをとることができた

(力比べは?)

織田と衝突するよう刀を振る。

ガチッと大きな音が鳴る。

少し競り合うと織田の方が力があるようで、押し負けた。

「やるね。」

「無価値。」

「何?」

「その程度でこの信長と刀を交えるか。」

その言葉を聴いて、桜はニツと笑う。

「そっかい!」

その瞬間、無謀にも桜は跳躍した。

つり橋でまさか飛ぶとは思わず、一瞬の隙を作った。

「意表をついたつもりか!」

再び木刀がぶつかり、お互いがすれ違う。

「」

「無価値かな?」

織田の肩にかすり傷。

おそらく、すれ違ったとき、桜が一瞬で二太刀入れたのであろう。

「よかるう。この信長。貴様を敵と認識しよう。」

織田が鋭く睨む。

ブワッ 何かに桜は蹴落とされた。  
思わず、膝を落としそうになる。

(これは!?)

「ほう、我が“威圧”に耐えるか。」

「“威圧”?」

「貴様らでは不可能な業である。」

「逃げ」

織田は走る。

桜は先ほどの“威圧”という業で動きがわずかに遅れる。

カンッと大きな音になると桜の腕が上へとはじかれた。  
それは防御がガラ空きとなったことを意味していた。

「っ!?!?!」

織田が放ったのは“突き”であった。

桜の腹を突き、桜は遙か後方へと飛ばされた。

幸い、真後ろであったため、リングアウトすることはなかった。

「つつ…あ…」

桜はまだ倒れたままであった。

「ほう意識がまだあるか。で、あるが。」

織田はゆっくり近づいてくる。

おそらく次でとどめを指すか、リングアウトするために吹き飛ばすであろう。

桜は少し目を閉じ、先ほどの“威圧”について考えていた。

三年前。

「ばあちゃんと稽古なんて死んじまうよ。」

「じゃかあし！一太刀でも入れたら桜ん勝ちじゃ、ってやつよ！」

「ちつきしょう！我武者羅剣！」

「ふん！」

御春が桜を睨むと尻餅をついてしまった。

「何だよこれ！」

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！これは…」



ここで、桜は目をあけた。

「そうか！」

それと同時に織田がふたたび“威圧”をかけてきた。

「終わりだ。」

ブワツと威圧がかかる。

「渴ッ！！！」

今度は何も起こらなかった。

「何？相殺しただと…？」

「ウチにも使えたようだね。ま、うちはこれを“ヨウリヨク”って教わったけど。」

「であるか。ならば、この木刀にて引導を渡してくれよう。」  
「うっ！！！」

また威圧がかかった。

おそらく無自覚に発生した威圧であろう。

織田は木刀に力をこめる。

「じゃあ、ウチもやらせてもらおうよ。だけど、少し汚いマネすっけどー!!」

桜は両手で木刀をもち上へと高く高く構える。

「消えよ!!!」

桜は息をスウッと深呼吸する。

目を鋭く、相手を鋭く貫くような冷たい眼で見る。

「一ノ太刀・断罪」

桜は下のつり橋へと木刀を叩きつける。

その衝撃で橋が全壊した。

「うお!!」

「今だ!!」

桜は橋が完全にプールに落ちる前に、足場が崩れた織田の上へと跳躍した。

「なんとお!!」

「いけええええ!!」

織田は木刀で防御をとったが、桜の上からの攻撃で、織田は真下へと一直線。

もう橋がない以上、織田と桜はどちらが滞空時間が長いかの勝負となる。

どちらが、早く落ちるか？

今の状態は織田が下にいて、すでに二人は空中。お互いの木刀の射程外にいる。

桜の勝利はもう間違えないと思われた。

だが、

崩れた橋が偶然にもまとまって織田の真下に落ち、それにぶつかり、織田はプールへの入水をするの遅らせた。

織田が、橋のまとまりにぶつかっている間に桜が

「うそお!!??」

ザパーーン!!とプールへと着水。

その刹那後に織田がプールへと落ちた。

「試合終了!!!!勝者!大江戸大付属高校!!!!!!」

雲の上学園は負けてしまった。

## 64 アフター・フラグ

桜たち雲の上学園は大江戸に敗北をしてしまった。

予選Aブロックでは大江戸が勝ち進むことになった。

休憩室に行き、桜たちが談笑しながら、帰る準備をしていた。

「そういえばBブロックってどうなってるの？」

「たしか、さっき見たらサントアンヌと海皇の試合だったよ。」

「どっちが勝ってる？」

「海皇のストレート。」

海皇。

氷柱の話では、金獅子・銀我の二本柱が脅威の学校である。

六学校の総理事長・副総理事長の息子だとかで、驚異的な頭脳・身体能力の持ち主だとか。

考えていると、ドアがノックされ、徳川海が部屋へ入ってきた。

「東海林。話がある。」

「うち？」

何だろう？

徳川海とは大会中若干仲良くなったから、メルアドの交換かなという気持ちで桜は呼び出しに応じ、近くの会議室まで連れて行かれた。

「東海林、あの金獅子。どう思っ？」

予想外な話であった。

まさか金獅子の話がでるとは思っていなかったので、返答にすこし時間がかかった。

「どつって…、一瞬見ただけだから。」

「そうか。」

どこか残念そうな表情を浮かべる海。

このままじゃあいけないと思った桜は一生懸命金獅子のことを思い出し、搾り出す。

「うん。あ、そうそう。なんだかオーラが違うよね。それにあの人間は大抵普通の人間じゃないことくらいはわかるよ。」

「そうだな。だが金獅子はバケモノではない。」

「？」

「あれは魔獣だ。」

それはオーバーな、と思ったが海は真剣な目をしていた。

「そうなの？」

「でも、お前なら太刀打ちできるかもな。」

「はい？ウチ織田に負けたんだよ？」

っはっはと軽く笑う。

「もちろん今のお前では指一本で吹き飛ばされるだろう。可能性ってやつだ。」

「はあ？」

「ま、お前とは今後も仲良くしたいもんだ。すまなかったな。」

海は会議室を出ようとする。

「それと、大江戸と海皇の試合は見るな。」

「どうして？」

「お前には海の本気をまだ見せたくないんだ。」

「どうして？」

「どうしてもだ。」

最後だけ強く言われた。

いまいち理由がわからないが、他の皆もそれほど試合に興味がなさそうなので帰ることにした。

「わかったよ。じゃあな海。」

「ああ、元気だな、東海林。」

廊下

「やあ海、どうだった？」

廊下には徳川空が立っていた。

「お兄様。ええ、金獅子のことは伝えました。」

「東海林さんには悪いけど、僕らの計画に必要な人だからね。」

「ええ、彼女は恐らく切り札になります。そのためにも金獅子のことは伝えておく必要があったので。」

二人は肩を並べ歩き出した。

「ええ、恐らく今回は海皇を倒すことはできませんからね。」  
「来年だっけ？ “海皇討伐会” は？」

「あ、桜。新幹線の時間ないよ！」  
「ごめん。ちょっと待って！ぐっ！」

桜は京都駅で駅弁を食べていた。

「喉…詰まった…」  
「何してんの！ほら早く！」

七海に引つ張られながら、桜は新幹線に乗った。

「水くれ…」  
「ああもう！」

鞆の中からお茶をだす。  
それを受け取りグビグビと飲む。

「プファ…。あーやばかった…」

一息つき、桜はあらためて七海にお礼をいう。

「いやあ助かった！お礼にこれをあげよう。」

七海は桜からキーホルダーをもらった。

「このボタンあるでしょ。」

キーホルダーには小さなボタンがついていた。

「これを押すと、催涙ガスが噴出する防犯キーホルダー。」

「危な！誤って押したら危ないでしょ！」

「二回ボタンを押すと閃光弾になるよ。」

「こんな凶器いらないよ！」

そのまま、席へ座り、到着まで寝ることにした。

「ついたら起こして七海」

「ケータイのアラームでもつかえ！」

こうして桜は寝た。

ふと、何かを思い出し、目を大きく開眼させ、声をだした。

「家へのお土産忘れた……！」



## 次回予告

桜「長いたびがやっと終わった。」

識「今回も負けだったな。前は徳川に負けて、今回は織田か。」

桜「あんたも前回ウチに負けて、今回は豊臣に反則負けでしょうが！」

識「ぐっ……。で今回はどんな話だ？」

桜「話変えたな。で、今回はとある家の事情に深く入り込みます！」

識「あ、それと番外編、“僕が私で彼女が彼で”も同時連載中。よろしくな。」

65 第六章『西園寺一家』（前書き）

さて、新章です！

読者を増やすためにも頑張ります。

あとできたら評価を厳しくお願いします。

ぜひとも今後参考にさせていただきたいので。

ではスタート！

65 第六章 『西園寺一家』

私は…

私の本当の願いは…？

家族のため？自分のため？  
誰のための未来？

違う。

私はもう決めていたじゃないか。

私が…やらなきゃいけない。

さようなら、みんな。

六月

梅雨：

桜達生徒会は今、内部での戦いを行っていた。  
桜と南は生徒会室で目線を合わせ、火花を散らしていた。

「準備はいいね？」

「いつでもお！」

静寂が流れる。

「南、一つ言っておくことがある。」

「何かなあ？遺言だったら聞いてあげるよ。」

桜は拳をグーにして、力の限り手を握った。

「南が勝ったら殴り潰す！」

「はひい〜〜！」

「ジャケポン！勝った！」

桜が脅して動揺している間に、チヨキを出して勝った。

「桜ちゃんずるいよ〜」

「うちは勝ったもん勝ちでしょ はい」

桜が手渡したのは、ペットボトル。

ラベルはなく、中身は茶色く、濁っていた。

「…人体に影響あるんじゃない？」

「大丈夫。うちはそれを飲んだことがあるから。」

その濁ったペットボトルの蓋に手をかける南。

「うっ」

「あ、さあ！さあさあさあさあ！」

歌舞伎のノリで南を急かす。

意を決して、蓋を開け、口に鼻をつける。

「……………！！！？、ぎにゃあああ！！！」

正に激臭が南を襲った。

例えるなら、生ゴミをもっと生々しく腐らせたものである。

南はソファで倒れた。

「ぎゃっはっはー！」

「笑いごとじゃないよお」

南はソファに顔を埋めながら反応した。

「はあ……」

笑い終わり、何か足りない。そんな風なため息を桜は漏らした。

「やっぱり、足りないよね」

「うん…。最近どうしたんだろう。」

「ねえ氷柱？」

「何？」

机で雑務をテキパキとこなしている手を止めず氷柱は応える。

「七海さー、ここ二週間休んでるけどどうしたか知ってる？」

そう、生徒会役員である西園寺七海は理由は秘匿で欠席をしていた。この学校は秘匿を理由に休みを得ることができる。

「わからないわ。秘匿だと、理事長くらいしか知らないし、理事長もそれを話し

たら大問題が起こるから、いくら桜でも聞き出すのは無理でしょうね。」

「人の弱味をちくちくいじる情報通の氷柱でも知らないかあ。」

氷柱はカチンときた。

「何か言ったかしら？Aカップの東海林さん？」

氷柱に悪口は禁句、倍返しされるようだ。

その日のホームルーム後

桜はダメ元で担任教師の紫部に七海のことを聞いてみた。

「センセ、七海のこと知りませんか？」

「あー、私も心配でな、自宅に行こうとしたんだよ」

「あ、やっぱり一応先生らしいことするんですね。」

「お前成績下げるからな」

「嘘です先生の鏡です」

「でな、自宅がAレベルの秘密でな、自宅にも行けない状況だ。」

Aレベルの情報。

超お金持ち学校ということもあり、個人情報 は 厳重に保護されているが、Aレベル

ルの情報は、特別にその家からの要請を理事長が承認すると、教師ですら情報を

知ることが許されない。

知っているのは理事長のみとなる。

「まあ、一応理事長にはこの件のことで問い合わせしたが、秘匿としか帰ってこ

ない。」

「そっか。」

桜は手がかりを掴めず落胆した。

紫部もなんとかしたいが手が無いといった様子である。

「センスありがと。」

先生に別れを告げ、次なる場所へ移動した。

美術部アトリエ。

「椿は知らない？」

「知るわけないじゃない。お母様は仕事の義務は真つ当する方よ。」

家族といえど  
ね。」

さすがに校内一位二位を争う情報通が知らないのではお手上げである。

これ以上の収穫はないと思い、アトリエを後にしようとした。

「お待ち。」

椿が制止をかけた。

「何？」

「大会の約束。赤羽刀は？」

「うっ……」

5月、雲の上生徒会は椿などの助っ人を引き連れ、六姉妹校での交流大会に出場した。

その時、椿が助っ人になる条件としてら赤羽刀を賞品としてもらうことが約束されていた。

結果、予選負けしたので、何も賞品は出なかった。

「で？どうするのかしら？」

「えっと……うんと……」

「私から提案があるわ。」

椿は一枚のチケットのような紙を取り出した。



「何？」

「私の言うことを何でも一回きく券。」

「何でもって？」

「恋人になれから…えっちなことも…」

桜は未だにかつてない寒気に襲われた。

「ひいいい！」

「はい、拇印」

すつといつもの高速移動で指に朱肉をつけられら勝手に判子を押しされた。

「あ！こら！」

「約束を破った当然の報いよ。」

「あうあうあう…」

「これは大事にとっておくわ。」

桜は椿のところに行かなければよかったと後悔をしてアトリエを出ていった。

西園寺七海。

桜とは、中学からの仲であるが、プライベートでの交流はあまりなかった。

いや、プライベートは荒れていた。

彼女は喧嘩三昧の毎日を通す少女であった。

高校一年の10月にとあることをきっかけに更正し、桜達とゆるゆる生活を送るようになった。

そのことを知っているのだから桜は再び不良になったのではない心配であった。

翌日

結局桜は七海の手がかりを得ることはできなかった。どうやっても情報が手に入らないので、七海がどうにかして学校に来るのを待っているしかないと思った。

「氷柱？七海はどう？」

「相変わらずね。」

連絡・手がかりなしということらしい。

七海のことは時間が解決してくれることを願おう。  
七海のこととは別に今日は氷柱に申し出があった。

「それと氷柱。これ見てチョンマゲ。」

「ギャク古！」

「オヤジギャグ以下！」

「うるせっ！」

氷柱、南のWツッコミ。

「で、これ。」

桜は一枚の紙を出す。

A4の紙に文字が印刷されている。

「え、これってっ!!」

南はまったく反応しなかったが、氷柱は驚愕の表情を浮かべた。

「あの超豪華中華料理屋『黄龍』じゃない!!」

「何それ？」

中華料理屋『黄龍』

政府の人間。海外の大統領、国王も御用達といわれている中華料理屋。

完全防音個室で打ち合わせなど、プライベートなど公私共々利用者が多い。

破格の値段であることで有名であり、病院の娘である氷柱にとっては話には聞くが食事なんて夢のまた夢の話である。

「招待状!しかも無料よ!…桜!どんな悪いことしたの!?!」

「そう疑いますっ?」

はつきり言っつて心外だ。

でも、そう思われても今回はおかしくない。  
それくらい奇跡的なことだ。

「まあ、うちのじいちゃんが招待状貰ってね、いけないからってウチに回ってきたんだ。」

桜のじいちゃん、東海林世界はどういうわけか知らないが、よく大

統領とかからプレゼントを貰うらしい。

「で4人なんだけど…」

「私、南、桜と？」

あと一人足りない。

本来なら、七海を連れて行くところだ。

だが、その七海がないので、空席に迷う。

「どうする？」

三人はしばらく考える。

「エヴァちゃんはあ？」

「あ…」

はっきり言って迷う。

確かにエヴァなら暇そうだが、正直エヴァは一緒にお食事という間柄ではない。

桜は迷う。

「それかあ、つばきちゃん！」

「それはイヤー!!」

断固たる拒絶をした。

そういう悩んでいると生徒会室エレベーターが上がってきた。

チンと音がなり、浦島ともう一人中学生かと思われる少女が入ってきた。

「ぬしら三人のみか？」

「ああ、識はいないよ。デートのハウトウに詳しい人物はいないよ。」

「失敬であるな…、今日は紹介したい人物がおつてな。」

浦島はとなりにいた少女の背中を押した。

「今日から二年G組に編入した浦島乙姫じゃ。」

少女は懐から扇子を出す。

その動作を見て桜は椿を思い出す。

「わらわが乙姫じゃ。ふむ。」

浦島のような喋り方である。

「乙姫は工学関係の天才なんじゃ。最近ではロボットを作った。」

「この学園にはよい環境と教師がおつての。」

すると浦島たちを追いかけてくるように、エレベーターが再び上がってきた。

「乙姫さん？やっぱりここにいたのね。」

来たのは、保険教師兼科学教師の鏡レイナであった。

「あ、巨乳教師。」

「あらあら桜ちゃん。嫉妬はよくないわ。」

「のうレイナ殿ではないか。」

先ほど言ってた優秀な教師とは鏡レイナのことであった。

「このレイナ殿とわらわの共同作業で対暴徒用兵器“ガイア1号”を作ったのじゃ。」

「何だそれ？」

「うふふ、ひ・み・つよ。」

どうやらまた理事長の災害以外にも迷惑名物が増えそうな気がしそ  
うである。

放課後。

「仕方ないから三人でいこう。」

「識を誘うという案はなかった。」

## 66 女は二つの顔を持つ

土曜日。

「桜、遅刻しますよ。今日は浜横ですから、ジェット機は使えませんが。」

「今行く〜!」

朝の東海林家、桜は約束の時間ギリギリまで寝ていた。

約束は11時に浜横駅改札口。10時に出ればギリギリ間に合う。

屋敷の掃除を切り上げ、メイドである茜が桜を叩き起こし、着替えなどを急かしている。

「これを着て、あれを着て…よし!」

前日に準備はしており、早々と支度を終え、家を出ようとした。

「じゃあ、行ってきます!」

「ああ、桜。店長さんには失礼のないようにするんですよ。」

「あいよ!」

玄関をあとにする。

庭では、ペットである狐の不知火と鷹の大鷲と触れあっている、メイド雪音と執事の識がいた。

「桜さん。行ってらっしゃい。」

桜に気づいた雪音はペコリと頭を下げる。

「きいてけてな。」

「識、あのさ…」

「西園寺のことだろ。」

桜が言いたいことを察していた。

識としても、七海のことは心配だったので、顔の広い識は独自のルートで搜索をしていた。

「うん。何かあったらよろしく。」

「おう。」

雪音と識に見送られながら、桜は家を出ていった。

「何だ？西園寺つつーと、お嬢の友人か？」

喋ったのは不知火であった。

この狐は妖怪であり、話すことくらいはできるらしい。

このことを知っているのは、同じ妖怪である雪音と、偶然会話を聞いてしまった

識の二人だけだ。

「ああ、西園寺はそろそろ三週間謎の休みなんだ。」

西園寺の名前を聞いて、雪音はああと顔を思い出した。



「西園寺さんってあの眼鏡の般若顔の人ですよね。」

「いや、般若って…あれは怒った時の顔でデフォルトは違うぞ。」

不知火は大きくあくびをした。

「とにかく、今回も妖怪絡みじゃなさそうだしな。俺の出番はなしつと。平和が

何より…」

散歩すると言い、トコトコ歩いていった。

「あいつって平和好きな妖怪なんですか？」

「いいえ、不知火はもともとその筋では知らないものはいないくらいの暴君、大

妖怪ですよ。今は妖力を失って話すくらいしかできなくなって、丸まっただんです

よ。」

今の姿からは想像できない話であった。

浜横駅改札口

「桜ちゃん！こっちだよ。」

約束の場所にはすでに二人が待っていた。  
やはり桜は一番最後であった。

「ごめんごめん、遅刻ではないっしょ。」

「あと1分で遅刻だったのに惜しいわ」

「罰ゲームすること期待してたんかい！」

桜たちの間では、遅刻をした場合など、罰ゲームを行うことが多い。

「またメイド姿はごめんだよ。」

「あれはかわいかったよお。」

「南チヨイスは怖いよ。」

南はかわいい物好きであり、その手の衣装は所持している。

「さて、時間は6時に黄龍だから、時間まで遊ぼう。」

それから桜たちは、時間までカラオケやボウリングをし、時間を過ごした。

ボウリングが終わり、次の遊びを選んでいるとき、ふと周りをキョロキョロして  
いる女性を見つけた。

今桜たちがいるのは回りくねった道が多く、地理感を掴めない人から迷子になっ  
てしまうような場所であった。

女性を見ると、おそらく中国系の女性であった。

スーツを来ている所を見ると、桜たちより年上に見え、顔は20代を思わせる美

形の顔立ちである。

肩まである黒い髪を垂らしている。

トリードマークなのか、方耳には涙形のイヤリングが目立つ。

迷子なのか、桜は声をかける。

「あの？どうかありませんか？」

女性は少し挙動不審に応える。

「ワタシ…ワカラナイ。」

片言の日本語であった。

女性をよくみたら、一枚のプリント用紙を持っていたので、それを貸してもらった。

「氷柱、これわかる？」

「これは…黄龍の近くのビルね。折角だから案内してあげましょう。」

桜は、女性に中国語で話す。

「『これから、このビルへ案内します。ついてきてください。私の名前は東海林』」

桜

女性は中国語を話せる桜に少し警戒感を解いたようだ。

「『よろしくおねがいします。私は大橋』」

スツと手を出した。

桜も手を出し、握手をした。

「桜ちゃん中国語できるんだあ」

「まあ、民族語以外なら大抵は話せるよ。」

その時、前後から二人のチンピラが近づいてきた。

少し薄暗い所だったから、カモにされたのだろうと桜は思った。

「げへへへ。おい姉ちゃん。俺たちとちよつと一緒に遊ぼうぜい」

「げるるるる、変なことはしねえよお、げるるるる」

どう見てもまともな人間ではない。ただの変態だと思った桜は

「向こうで腐つてな。つーかも腐ってるか？」

その言葉にカチンときたチンピラは顔を赤くし、怒鳴り散らす。

「んだあえおらあ！」

「あんじゃおりあ！」

怒鳴っている間に桜は行動を起こしていた。

前の男に溝打ち、そのまま後ろに飛び、後ろの男に延髄蹴り。

男たちは一秒とかからずに倒れてしまった。

「さ、行こう行こう。」

女性は驚いた表情を浮かべていた。

当然である。少女が大の男を二人も一瞬で倒してしまったのだから。

「『桜さんは強いですね。』」

「『うちは武術を習っていたからね。』」

「『そうですか、すごいですね。』」

その時、女性の目付きが一瞬だけ鋭く、何かを見透かすような目付きになった。

一瞬であったため、桜はそのことに気づきはしなかった。

#### 中華街

街は活気にあふれていた。

浜横の中華街は、中国からの出稼ぎの人が多い。

路上販売を行っている場所もあれば、裏では怪しい商売をやっている者も少なくない。

「中華街は初めて来たよお。」

南は目を輝かせて、見たことのない物に夢中であった。

「ヤシのみだぁ！飲もうよぉ！」

「大橋さんを送ってからね。」

しづる南を引きずる。

大橋の探しているビルがすぐ目の前に見えてきた。

ここで大橋とはお別れである。

「『桜さんありがとう。』」

「『いいってことよ。ん？』」

ビルの前に大きな男、例えるなら、フランケンシュタインというのを見たことがあるだろうか。

体格的にはそんな感じの大男がいた。

「『私の同僚です。ありがとう桜さん』」

そして大橋はビルの中へと消えていった。

「九蛇様、予定の時間に来られないので心配しておりました。」  
「すまないな。少し気になる女を見つけてな、観察していた。」

先程まで大橋と名乗っていた女性は、ビルのエレベーターを使わず、その裏にある階段で地下へと降りた。

「父様の計画を邪魔したやつら、何と行った？」

「西園寺です。」

「父様はつぶす気か？」

「はい、そのため、三国龍を召集したそうです。」

女は眉を曲げ、嫌そうな顔をした。

「あいつらか。お前の方が役に立つんだがな。父様はそこらへんがわかるのだ。」

「それから、例の作戦ですが、いつでも。」

「そうか。時が変わるのも近いな。」

不適な笑みを浮かべていた。

彼女の名前は九蛇。

## 67 桜の満腹黄龍記

黄龍

「…あ」

「…」

二人はあつげにとられていた。

まるで、目の前に掃除機かバキュームカーがあるのかという気分させられる。

出てくる食べ物が次々に桜の口へと入っていく。

「…ビイみたいだねえ…」

「人間ではないわね。」

そんなことばなど聞こえず、食べることに集中する。

「桜にはおいしい食べ物でも何でもよさそうね。」

「味なんて関係なさそうだねえ。あ、これ美味しい。」

桜は下品に、

氷柱と南は上品に食事をとる。

普段は、値段や客層からいって、それほど大量の品をつくるわけではない。

厨房では、あんなの来るなんて聞いてないぞ！と叫ぶ若者腕がなると意気込む年配の者。

桜一人で黄龍は大忙しの一日を過ごしていた。



「くはああ！食べた食べた！」

調理人はげっそりとしていた。

奥から支配人が出てきた。

「さ、桜様。ご満足いただけただけでしょうか。」  
「うん、大満足。じいちゃんに言っとくよ。」

（あんなに食べたのに体格が変わってない！？）

（あんびり〜ばぼ〜！！）

桜は馬鹿食いしたのだが、まったく体格が変わっていなかった。これを“桜七不思議”と呼ぶことになった。

桜たちの個室のかなり奥に一組のグループが食事をしていた。

「親父。“九龍”の動きを調べていた部下ですが…、死にはしなかつたらしいですが…」

「そうか。」

「親父、俺は堪忍袋の尾がそろそろ切れそうだ。部下は俺の息子も同然。肉親が病院送りされてだまってはいられねえ。」

「まあ、待て。今は手打ち状態だ。俺らもやつらとは互角の勝負をしているところだ。おめえがここで弾けたら息子の犠牲が無駄になる。」

男三人、酒を飲みながら話していた。

「お嬢はどこに？」

「家にいる。今となつちゃあ、あいつも誘拐されかねない。」  
「賢明な判断です。」

やくざの親分・その片腕らしき男・その部下と思われる三人。

「あいつら！汚ねえ真似なんて朝飯前だ！やっぱり先手で！」

「やめねえか、弁慶。親父に二度同じことを言わすな。」

弁慶といわれた男は怯む。

この人物はかなり熱しやすい性格をしているようだ。

そのとき、親分の携帯がなり、携帯を見て顔を険しく変えた。

「…！、清盛、弁慶！」

「ええ、感じました。」

「親父はここに。」

男二人は部屋を出た。

“何か”を持ちながら…

桜たちは…

「それじゃ、ご馳走様でした。」

三人は支配人に礼を言い、店を出ようとした。

ちょうど、そのとき一組のグループとすれ違った。

「っ！！！」

桜は鋭い目つきで振り返り、今の人物を見る。

「氷柱、南、急いで駅まで行って。」

いつものやさしい声ではなく、命令するような厳しい口調であった。氷柱たちはいったい何が起きたのかわからなかった。

「ちょっと、どうしたの？」

「いいから早くっ！！！！」

そういうと、氷柱たちは経験から相当な危険が差し迫っているのだと察知した。

桜の言うとおり、氷柱と南は駅まで走っていった。

桜は二人が行ったことを確認すると、再び店内へとはや歩きで歩き出した。

男二人は部屋を間違えたふりをしながら個室を開け、何かを探している。

桜が二人に追いつき、足音・気配を感じられないように近づく。

そして、男がドアを開けたのを確認し

「おい。」

男は驚いて後ろを振り返ろうとする。

その前に男二人を蹴り飛ばし、個室の中へと押し蹴る。

「なんだあテメエ！」

個室のドアを閉じる。

この部屋は完全防音の個室である。

「悪いけど、その懐に入っているもの。」

男二人は顔を合わせる。

そして、

「気づかれたんじゃないあ、死んでもらう！」

男は銃を構える。

それと男が指をかけるまえに桜は廊下で手に入れた箸を投げる。  
それを銃口へとスツと入れる。

「それで撃つたら爆発すんよ」

「ぐっ」

男は箸をとろうとする。

桜は一瞬で跳躍し、男たちの頭上へと移動し頭部へ蹴りを二撃。

だが、それだけでは倒れなかった。

桜としては、ここで銃を発砲させ騒ぎにするのは防ぎたかった。  
なので、先ほどの蹴りで勝負を決めてしまいたかった。

今男はふらついている。

片方に掌底し、壁へと吹き飛ばす。

これで一人は気絶させたが、もう一人が体勢を立て直し、銃を構えようとする。

もう手持ちの武器はない。ならば！

「逝けえ！」

間に合わない。

それは相手を倒すことはできないという意味であった。

瞬間、桜は手を伸ばし、銃の先端を掴み射線を変えた。

「ば、ばけもの！？」

「うちは普通の女の子だあ！！！」

アッパーカットが決まった。

放物線を描き男はノックアウト。

「まったく。危ない危ない。っと」

桜は慣れた手つきで男の持っていた銃を分解し、パーツを握力で潰した。

「ここに持ってきていいのは財布と携帯くらいだよ。」

桜はそのまま支配人に暴漢におそわれたなどいい警察を呼んでもらい、店をでた。

その奥の部屋。

「親父、どういわけかわからないが九龍の連中は俺たち以外のや

つにやられたらしいですぜ。」

「直に警察が来ます。親父、早いところ」

「ああ、しかし何ものだ？その九龍をやった野郎は？」

ヤクザの三人は裏口から出て行った。

桜は入り口を出て、氷柱たちの待つ駅に走っていた。

(うーん、婆ちゃんの言いつけで、いつもこういうことしちゃうけど、まあ氷柱たちは大丈夫かな？よし近道だ。)

桜は裏通りを通り、近道をした。

薄暗いビルとビルの間を通り。とっとと突破しようと思っていた。

すると、

ヒュッ

何かが空気を切り桜へと近づいてくる。

耳が以上発達している桜はそれが何かはわからないが、危険物であることは感じ、大ジャンプで避けた。

「何だ！？」

桜が先ほどまでいた場所には大型の30cm程のナイフというより刀が地面に突き刺さっていた。

上を見ると、廃ビルの非常梯子に一つ、影がぶらさがっていた。目をこらして見ると、チャイナ服を着た頭をお団子にしたアニメのチャイナっ子のような人物がいた。

「おう！やるアルネ。お前、今殺すつもりだったアルネ。」

「うちそんな悪いことしたっけ？」

「私、バイトね。そんなこといちいち知らないアルネ。」

「バイトって？何？」

女はうつすら気味の悪い笑みを浮かべた。

「殺しアルネ」

## 68 桜と殺し屋

桜の頭上には女性が刃物を持ち、非常階段にぶら下がっていた。

「お前のこと店でるときから見てたアルネ。ターゲット間違いないアルネ」

「人通りがないところに行くのをつけていたってことか。」

「ま、そういうことだから死ぬアルネ。」

「まったく、語尾は『ある』『か』『ね』のどっちかにしろっての！」

殺し屋は宙に舞うと同時にクナイを取り出し桜に向け乱射。

(ここなら村雨を！)

「村雨！」

桜の手元に木刀・村雨が飛んできた。

それで飛んでくるクナイを叩き落とす。

その様子を見て、殺し屋は「おお」と驚きの声を上げていた。

「避けるか逃げるかと思っていたアルネ。」

「今までアンタが会ってきた人物とは一味も二味も違っつてことだよ。」

「それなら、少し遊んであげるアルネ。今までのやつは遊ぶことすらできなかつたアルネ。」

殺し屋は地面に突き刺さった刀を拾う。

その刀は桜はゲームとかアニメで見たことがあった。



“青龍刀”というやつだ。

殺し屋は慣れた手つきでそれをブンブン振り回す。

「クナイに青龍刀。まだ隠してる？」

「あと小型爆弾もアルネ。」

「そうかい！」

桜は近くのポリバケツを野球のフルスイングのように打ちつけ殺し屋へと飛ばした。

「アイヤー！目隠しのつもりアルネ。」

殺し屋は体勢を低くし、滑り込むように飛んできたポリバケツの下をくぐる。

「近くにいるのわかるアルネ。」

その言葉通り、桜は近づいていた。

「これあげるアルネ。」

殺し屋が出したのは、小型のライター。

桜は先ほどの話から、それが危険物であることを察知し、

「バクっ！」

桜はとつさに連続バク転をし、退避する。

殺し屋はワイヤーを上へ投げ、上へと移動する。

ボンッと小さな爆発がおきた。

小さいとはいえ、至近距離で衝撃をつけたら致命傷は避けられない。

「あいや！」

「うっ！」

桜の背後に殺し屋は飛び降り、青龍刀を振り下ろす。

シュツと桜の背中を切る。

寸前で前へ交わしたおかげで服が切れる程度ですんだ。

「まだまだアルネ。」

殺し屋はクナイを構える。

「パターンが同じなんだよお！」

桜は反転し、殺し屋へと向かう。

前進する桜へとクナイが飛んでくる。

それを避けるように桜はムーンサルトを決めるように跳ねる。

その時、一瞬手を伸ばした。

「すごい避け方アルネ。」

その勢いを殺さず、桜は殺し屋へと木刀を振る。

殺し屋も防御の体勢をとり、構える。

一撃。

強烈な音が路地に響く。

桜は地面に足をつけ、木刀を構え、

「桜式四ノ型・飛翔。」

桜は木刀を真つ直ぐ投げつける。

その瞬間、殺し屋の目が遊びから本気のみ、殺しの変った。

腰を後ろへ曲げ避ける。

「チツ生意気！」

顔を上げたとき、殺し屋にクナイが飛んできた。

先ほど、桜がクナイを避けたときに回収をした一本だ。

余裕がなかったので今度は転びながら避けた。

「村雨え！！！」

桜は飛ばした村雨を再び呼び戻し両手で上段構えをした。  
地面に背中をつけた殺し屋へと

「一ノ型・断罪！！！」

転がった殺し屋へ重い一撃を振り下ろす。

殺し屋はそれを刀で防御するが：

キンっと高い音がなり、刀が折れた。

そこで桜は木刀を止めた。

殺し屋の携帯がピリリっと鳴る。

「出てどうぞ。」

『おい！てめえ何やってんだ！標的を逃がしやがって！』

「おう、標的間違えたアルネ。でもお前たちが写真を入手しなかったミスアルネ」

『いいから早く戻ってこい！！』

ガチャッと音を切らした。

殺し屋は急に笑顔になり、刀を納めた。

「間違えたアルネ。金にならない殺しはゴメンアルネ。」

「はあ？」

「そういうわけで、」

グルンと後転し、立ち上がった。

「さいならアルネ」

「おい、チャイナ！」

殺し屋はワイヤーで上へと昇っていった。  
最後に女は告げた。

「名前、私は“麗伶”アルネ。」

「…東海林桜。」

目を合わせると、麗怜はどこかへと行ってしまった。

桜は無駄に本物の殺し屋と戦ったようだ。

駅

「桜、どうしたの？」

氷柱と駅前のカフェでお茶を飲んでいた。

「いやいや、支配人さんと我が家のことで相談があつて。聞かれたら東海林家暗殺部隊に殺されちゃうような話だったからさ。」

さすがに銃を持った男とバトルしたとか、殺し屋と戦ったとは言えなかった。

少し、嘘について桜は心がチクリと少し痛んだ。

## 69 ヴァイオレンス

学校

「わあ、すごい。」

「エヴァさんというのはなかなかのものね。」

「倉田さん。久々の登場ですが、“あれ”は女の子と呼べるのでしょうか？」

「そうですね。あれはバケモノじみた女の子ですよ。」

南、椿、倉田、村瀬の四人。いや教室にはもつといたが、全員が注目している光景があった。

「うるああああ!!!!」

「どるああああ!!!!」

お互いの拳が頬をめり込み、衝撃波を生む。

その勢いに負けずに、二人はさらに接近する。

「エヴァあああつあ!!!!」

「さあくらあああ!!!!」

殴り合っているのは桜とエヴァであった。

ボディーブロー・リバーブロー・デンプシーロールの殴りあい。

「ふんがあ!!」

桜のヘッドバット。

「くそつたれえ!!」

エヴァは桜の後ろをとる。  
そこからジャーマンスープレックス!!

「ぐはっ！」

そして、桜の肩車。

「どらあああ!!」

周りの被害が拡大していく。

この喧嘩の発端は

「銀座の流星菓子の限定クッキーだよ」

「いったただっきまゝす」

今日は南が、昨日のお礼でクッキーを持ってきた。  
クラス全員に持ってきたようだ。

「あれ、一個余った。」

ということ、ジャンケンをした。  
残ったのが、エヴァと桜。

「最初はグー！ジャンケンポン！」

「ポン！」

「ポン！」

なかなか勝負が決まらない。

(こうなったら！)

(隙をみて、)

(ここにクッキーを口に入れるしかない！！)

二人の脳内は同じことを考えていた。

「ジャンケン」

「いただき！！！」

二人の行動はまったく同じであったので…

二人してクッキーをはじいてしまった。

「しまったああ！！」

クッキーは地面へと落ち、

(世の中には三秒ルールがあ！)

またしても考えていることは同じであった。

床に落ちたクッキーに手を伸ばす二人。

だが、

「まったく、先生もプリントは自分で運べっての…」  
グシャリ



識が教室に入ってきた第一歩で、クツキーを踏み潰した。

「「ああああー！！！！」」

「お？何だ何だ？」

二人の殺意は、識へと向かい、

「どうした？怖い顔して、べふ！！」

識はW面パンチを受けノックダウン。

二人は即座に振り返り、今度は拳をお互いに向ける。

「「次はてめえだああああ！！！！」」

ということである。

「どっちが勝つかしら？」

「私は東海林さんかしら、倉田さんはどちらですか？」

「私はあの外人さんですかね。」

遠くでは、すでに賭けすら始まっている。

すると

「くおらああああ！！！！てめえら！何騒いでやがんだあ！！！！」

担任紫部の一喝。

二人は手を止め、

「「だつてコイツが！」」

「やかましい！殺すぞ！隣のクラスから苦情きてんだ！給料減るだろ！」

とりあえず、紫部の仲裁により、二人の喧嘩は終わった。

「おい桜。」

「何だよ。」

「くせえ」

二人は飼育小屋の掃除をしていた。

喧嘩した罰として、放課後、うさぎ小屋の掃除をしていた。糞などが散らばっている。

「そういえば、じじいからの私ものがある。」

「じいさん？」

「伽羅女流のオーナーの海坊主」

「ああ、」

海坊主という名前は知らなかったが、伽羅女流という言葉は覚えていた。

「あのハゲか」

「そうだ。ハゲから、つい最近手紙が来てな。ほら」

「ここで渡すかね？」

と言いつつ、桜は手紙を受け取った。

封筒を空けたら、手書きの手紙がでてきた。

『東海林桜へ。』

大会とやらで、エヴァのやろつがおぼれて迷惑をかけたらしいな。お詫びとして、一回エヴァを自由につかっていいぞ。俺が許す。  
海坊主』

「だよ。」

「ざっけんな！！あのじじい！！」

中指を天に向け、あの禁止ポーズをとる。

「でもお、エヴァっちが負けたのは事実だし。」

「ぐっ、てめえ……」

「よろしこ」

「機会があつたら、テメエのドタマからケツまで貫通させてやんよ。」

桜は満面の笑みを浮かべていた。

それにむかつたエヴァは箒でうさぎの糞を払い、桜の顔面にヒッ  
トさせた。

「ぶぎや！口に入った！」

東海林家

「え〜！今日だっけ？」

「はい、お嬢が了承した話ですよ。」

家で、ゲームをしていた桜に黒井は告げた。

「本日七時から、会食があります。以前告げたとき、わかったただけ言っていましたよ。」

「あ〜…」

桜には薄っすらとその記憶があつた。

あのときはかなり適当に了承したという記憶だけ残っていた。

「いかなきゃだめ？」

「だめです。茜さん呼びますよ。」

「ひっ！」

茜を呼ぶ

強制的に脱がされる

キヤー！

「いいいい今着替える！！えつとドレス？」

桜はドレスに着替えた。

今日は正式な東海林家と他家との会食なので、それなりにしっかりとした服装が必要であつた。

「桜〜、準備はいいですか？」

「今行く！」

ドタドタとあわただしく階段を下りる桜。

「急いでくださーい」

玄関には、移動用黒いリムジンが止まっていた。

そのリムジンを運転するのは黒井である。

桜家の乗り物を運転するのは基本的に黒井が担当している。  
たまに茜が運転する。

こうして、桜家の桜、黒井、茜は会食場所である料亭へと向かった。

#### 次回予告

識「今回は殴られたままですよ。」

雪音「それに喧嘩の火付け役でしたね。」

不知火「てめえのことより、次回の予告しろ。」

識「ん？そうだな…、とりあえず言い切れることは、次回は不知火はできません！」

不知火「んだと！てめえ！くらえ“狐火”」

識「おわっ！お前妖術使えるのか！？」

不知火「最近火を出せるようにまで回復してきたんだよ。」

雪音「ああ、それじゃあ完全復活までもう少しですね。」

不知火「バカ野郎。完全復活なんて夢のまた夢のまた夢だ。」

識「そうか、次の妖術がどんなのか期待してまってよう。では！」

## 70 極道と桜と九条と料亭

### 高級料亭

財界の人間など、地位の高い人物がたびたび会食などで訪れる有名な料亭。

桜はこの常連であり、食べつくしているので高級料理といってもそれほど乗り気ではなかった。

リムジンがつき、予想以上に早くついたようだ。

「今日はどこが来るの？」

聞いても聞かなくてもどうでもいいことだとわかっていたが、一念のため聞いてみた。

黒井はメモなど一切見ず応えた。

「本日は九条家、北皇子家、それから東海林家からは、瞳様一家、御春様がいらっしゃいます。」

北皇子家ということは氷柱が来るらしい。

これは意外な話であった。さっそく氷柱でも探そうと思った。

「ちょっと散歩してくんね。」

「時間にはお戻りください。」

桜は料亭の廊下をぐるぐる回ることにした。

料亭の中には複数のスーツを着た人間、ドレスに身を纏った人間が

ばらばらといた。

そこへ、桜の不注意により一人のスーツを着た男性にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさいね。」

桜はそれだけ言い、去ろうとしたが、腕を掴まれた。

掴んだのはぶつかった本人ではなく、その後ろにいたチンピラ風の男であった。

桜からしてみれば、たいした握力ではなかったのですが、振りほどくことは簡単であったが、無用な衝突は避けるためにあえて振りほどくことはしなかった。

「待てよ、姉ちゃん。それで詫びてるつもりかあ？あああん!？」

威圧的に言った。

さてどうしたものか？

こいつ一人片付けるのはわけないが、親分さんがいるので、本格的な争いになりそうだ。  
正直それは避けたい。

あれこれ考えていると、親分さんらしき人が

「待て、堅気に迷惑をかけんじゃねえ、それにそこに姉さんはとうに謝った。謝るなら因縁つけてるテメエだ。ケジメつける。」

親分の鋭い眼光。

チンピラは逆らうことは一切せず、桜に90°の角度をつけて謝った。

そのさらに後ろにいる人物に桜は注目した。

体格がごつく、おそらく親分の右腕とかそういった人物であろう男。一目見てわかったことがある。

(あいつ…相当できる。)

戦うということはないだろうが、いざ戦うことになったら苦戦するだろうことが見てわかる。

それは男も感じていた。

(あの姉さん、重心がまっすぐしてやがる。それにあの物腰…できる。)

男はサングラスの下から鋭い眼光で桜を見ていた。

二人がすれ違う。

(だが、機会があれば手合わせ願いたいものだ。)

二人は同じ瞬間、同じ考えでいた。

その後、桜は氷柱を搜索したが、まったく見つからなかった。

変わりに、ヴァレンタイン家、つまり桜の母の義理の兄の一家を発



見した。  
つまり愛歌・恋美・恋継の家である。

「やあやあ桜。」

「あ、恋美。愛歌たちは？」

恋美一人で、ほかの二人の姿はなかった。

「それが、愛歌は風邪で寝込んで、兄貴は最近旅に出ちゃってね。」  
「旅!？」

失恋旅行なのか、よくわからなかったが、帰ってきたら面白話でも聞かせてもらおうと思った。

「それよか、親はどうした？」

「父さんしかいないよ。母さんは愛歌のつきそい。」

「そっか、じゃああとは婆ちゃんだけか。」

「わしならここにいます。」

どこからか御春の声がした。

周りをグルリと見渡すがどこにもいない。

気のせいかと思った。その瞬間

「でっ!」

頭部に衝撃が走った。

何かが落ちてきた。

それは…

「ババア！！」

ポカン！と杖で殴られた。

「ババアとは何じゃ！」

「使わない杖は殴るために持っているのか？」

「桜よ、常に四方だけではなく、上下四方八方注意せよといっておるじゃろうに！」

「ごめんよ。だから杖を振り上げるのはやめてくれ。」

そこへ、黒井がやってきた。

「御春様。お久しぶりでございます。それから恋美様もお元気そう  
で。」

「おう、黒井かえ。相変わらずいい男じゃな、ってやつよ。」

「ありがとうございます。そろそろ会食の時間でございます。」

そして、桜たちは会食の席に座った。

北皇子家を見たが、氷柱はいなかった。

おそらく体調を崩したのだろう。氷柱にはよくあることだ。

九条家を見ると、先月の大会の時に知り合った、九条貴怜がいた。

乾杯の合図がすんだあと、廊下に出て九条に話をかけた。

「お久しぶり。」

「たしか…東海林だったか？」

「ええ、雲の上のね。」

九条は少しうる覚えのようだったが、ようやくはっきりと思い出し

た。

「ああ、そうか。今日は北皇子がいなくて残念だったな。」

「いや、氷柱にはよくあることだから。」

そこで、桜は少し気になることを聞いてみた。

「大会のことだけど、決勝戦って、海皇と大江戸でしょ？どっちが勝ったの？」

「海皇の圧勝だ。いい勝負をしたのは大将の徳川くらいだな。あとはよくて織田だな。」

たしか、徳川海は海皇の金獅子とのために力を温存させるため、雲の上との勝負にはでなかつたと聞く。

海には試合を見ないでほしいと言われた。だが、聞くなどは言われていない…などと屁理屈を言い訳に考え、興味本位で聞いてしまう。

「どんな戦いだったの？」

「それはだな…」

そこから真実が語られる

と思われたそのとき

「おい、姉ちゃん。さっきはよくも恥をかかせてくれたな。」

先ほどのチンピラである。

どうやら、部下を2、3人引き連れ“お礼”をしにきたようだ。

ここは人通りが悪い場所でもあった。  
トイレに行くときに偶然見つけて好機に思ったのだろう。

「で、どうするの？ぶつとばしにきたの？」

チンピラは下衆に笑う。

「わかってんじゃねえか。」

「じゃあ、まともに相手するから、表にでな。店に迷惑がかかる。」

そして、駐車場。

「どうして、九条がついてくる？つーか何でうちの前にでる？」

「女性に喧嘩は似合わない。俺がやろう。」

と、レディを気遣うように言った。

そんな扱いを生まれてから一度もされたことがない桜はそれだけで、顔を赤くしてしまった。

が

「ちょっと！うちの喧嘩だよ！」

「女性に喧嘩をさせるわけにはいかない。」

二人でギヤーギヤー言っていると、チンピラが痺れを切らせたようだ。

「お、俺を無視してんじゃねー！やっちまえ！」

男が二人ほど襲い掛かってきた。

二人は言い合いをやめ、追撃にでた。

桜は顎に回し蹴りを、  
九条は溝に肘打ちを  
放ち、気絶させた。

「やろう!！」

チンピラはチョウチョのようにひらくことから名づけられたナイフ  
を取り出し、桜へと一直線で突撃。

九条が前へ出た。

すると桜は不思議な現象を見た。

九条が手を上へ、上げると、手に触れていないのにチンピラは上へ  
と回転して舞い上がり、地面へと落ちた。

その際、ナイフは高く高く上がり、駐車場の天井へと突き刺さった。

「てめえ…」

チンピラが立ち上がるつとすると…

「馬鹿野郎があっ!!!！」

大きな声が駐車場に響き渡った。  
カツカツと革靴がこちらへと向かってくる音を立てる。

男は先ほど桜が目にした大男。親分の右腕かなと思った人物であっ  
た。

サングラスを光らせ、チンピラへと近づく。

チンピラは助けがきたと思ったのだろう。  
明るい表情を浮かべていたが、大男が近づくとつれて、その表情は次第に恐怖へと変化していった。

そして、

「あに」

ポオン！！と大きい音を立て、チンピラは吹き飛ばされた。

チンピラは痙攣したまま大男を見ていた。

「あれほど、堅気に迷惑をかけるなと言ったはずだ。」

「け……ど……あに……き」

「俺にもう一度同じことを言わせるつもりか？」

大男の鋭い眼光はサングラスの奥に隠れているにもかかわらず、威圧感を感じさせられる。

サングラスをとり、桜たちに顔を合わせる。

「姉さんすまねえな。二度も。」

「え、いやいって。」

「こいつにはケジメをつけさせる。俺らのやりかたでな。」

大男はチンピラの首根っこを引っ張り回収をする。

「姉さん。俺の名前は“源頼朝”」

「東海林桜。」

桜はつい反射的に自分の名前を言ってしまった。  
頼朝は少し笑い、奥へと消えていった。

残された二人。

桜は先ほどの現象についてきいてみる。

「なあ、さっきのアレ。何？」

桜は興味心というより、敵意をむき出しにたずねた。

九条は桜の眼を見る。

自分の眼鏡の位置を少し直し、何も応えない。

痺れを切らし、桜から言葉を発した。

「もう一回見せてくれない？」

桜の好奇心は限界に近かった。

すでに木刀を構えていた。

「貴様の場合、ただの怪我では済まんぞ。」

九条も手を桜に向け構えた。

一触即発…何か音がすればそれが戦闘開始の合図になるような空気であった。

だが、そんな空気を割る間の抜けた声が聞こえてきた。

「あるえ〜、さっくらじゃん？何してんの？」

恋美であつた。

二人はそんな何もしらない恋美の乱入に毒気が抜けたようだ。構えをとぎ、九条は料亭の中へと戻つた。

「何？つーかあの人かつこよくね？」

「バカ」

「な！？桜にバカと言われる日がくるなんて！」

桜は頬を膨らませて、料亭の中へと戻つた。

そして会食が終わった。

あれ以降、九条とは話すことはなかった。

駐車場へと戻る桜一家。

恋美たちかというと、恋美が腹痛ということとトイレにこもつてから、先に帰ってくれということだ。

「それにしても、桜はいつものように下品にがつつかなかつたですね。」

「へ？」

急に茜に声をかけられた。

何を言われているのかすぐには理解できなかった。

「料理ですよ。」

「あ、ああ。」



九条の未知の力のことで頭がいっぱいで、料理よりもそのことを考えることのほうを、桜は優先していた。

車の中へ入り、外をぼけ〜っと見る。

薄く眼を開け、適当に外の風景を眺めようと思った。

あ、っと思った。

先ほどのチンピラと大男の集団が車に乗っていた。

面子を見ると、あれは極道の者だなとすぐ理解できるような顔ぶれ。あんなのに関わったのかと思う。

あれあ親分さんで、その隣が…嫌そうな顔をしてないところを見ると娘さんかな？

若い女…？

長い髪をして…

眼鏡をかけて…

巨乳で…！！

ってあの巨乳！！

桜の視点は胸から顔へと上がる。

視力7,0の桜は見間違えるはずがないが、まさかの見間違いであることを願ってしまった。

その人物は、桜の脳内で誰かを認識できる人物であったためである。

嘘だ。

このときばかりは、自分の視力の良さを呪った。  
見間違えるわけない。

どうして？

少しずつピースが埋まる。  
まだ、空欄のピースが多いが、確実に埋まっていく。

極道の親分の隣には…

西園寺七海がいた。

71 乙姫の仕事（前書き）

すみません。

しばらく休載していました。

最近忙しくて…と言いつはこのへんにしまして、  
せっかくのアクセス数を一気に減らしてしまったのは悔やまれるこ  
とですが、いまさら悔やんでもしかたないので、元気に連載再開と  
いきましよう！！

## 71 乙姫の仕事

「父様、お酒は控えてくださいとあれほど…」

「好きな物飲んで身体に悪いわけねえ。」

「この前だつてお医者様に忠告されたでしょう?」

黒いリムジンの中、後部座席で会話しているのは西園寺七海であった。

「西園寺組の未来を背負っているんですからお願いしますよ。」

七海が話をかけている人物、西園寺大海。

西園寺組の首領である。

「親父」

「頼朝。どうした?」

「弁慶から連絡がありました、今日も“あの”連中にシマを一つ潰されたようです。」

「そうか、“九龍”のやつら…」

大海はくやしそうに口を噛む。

桜のリムジン

七海を発見し、かなりの動揺をしていた。

しばらくして正気を取り戻し、車に入ってきた黒井に思わず相談してみる。

「くくく黒井くん！」

「はい！何ですか？」

桜は思わず大きな声を出してしまった。  
そんなこと構わず続ける。

「あの車って何かな？」

すつと指で七海の乗ったリムジンを指す。

おそらくヤクザ関係の車であろうことは面子から予想していたが、  
確信が欲しかった。

いや本当は“そうである”確信が欲しかったわけじゃない。

“そうでない”確信が欲しくたずねていた。

「あれは、…極道の車ですね。どうかしました？何ならナンバープレートから身元まで調べましょうか？」

さすがは優秀な執事だと桜は関心する。

だが、調べれば恐らく、『西園寺』という名前がわかる。

調査を拒否しようと思った。

他人の素性を調べるなんて恥知らずである。

だが、桜は我慢できなかった。

最悪七海に嫌われても構わない。

七海がもし危険なことに巻き込まれたらと思うと、桜は

「お願い。」

「承知しました。」

茜はまだ車に乗っていなかったので話を聞かれることはなかった。

翌日

「おいその…」

「あん？」

桜は学校の廊下で声をかけられた。

そこには先日浦島から紹介をされた妹の乙姫であった。

「乙姫。」

「いきなり呼び捨てとは、ところでお主は…」

乙姫は桜を下から上へと見る。

そして腕をポンッと叩き、

「つるぺた。」

「また胸ネタ！ー！つーかアンタも同じ貧乳でしょ！」

「わらわはまだ貴様より三つ四つ年下じゃ。これからじゅ、それに  
「！」

バツと服を捲り、ボディを見せる。

「この見事なプロポーションを見よ！少し歳を重ねればくびれがで  
きるぞ」

言うだけあって見事なボディーラインであった。

「お主は腹筋がすごそうであるが…」  
「う…」

凶星であった。

「で、何のよう?」

「忘れておった。校門の前に怪しい殿方がおるのじゃが…」

「警備は?」

「手を出して怪我をしたら問題じゃ。わらわが手を出さぬよう止めておる。それにわらわが気づいたときには一人侵入しとる。」

「は!?!」

雲の上学園のセキュリティは嚴重である。

そこに進入できるとなると、かなり腕の立つ者である。

「なるほど。で、うちに退治しろと?」

「その通りじゃ。わしもガイア壱式で出る」

「1号じゃなかった?」

「わらわ式に変えたのじゃ。」

「あ、そう。それじゃあ、もう一人腕の立つやつも連れて行こう。」

「エヴァ昼飯食おう!」

「何?うお!」

腕を強制的に引っ張り、乙姫の指定した場所へと行った。

「テメエ何してんだ!? 打ち殺すぞ!」

「まあまあ、ここかな?」

場所は部活棟の科学部室の前であった。

目の前には大きな倉庫があり、シャッターが下りている。

『またせたの。』

放送から乙姫の声が聞こえ、シャッターが上がった。

出てきたのは、2 m程のロボットというより、強化外装・アーマー  
ドといったところだ。

足にはローラーがついている。

「おい何だこれ？」

「うちもサツパリ。」

『おいおい、つれないの？まな板、それから…エセヤンキー。腕に  
つかまれ』

「誰がエセヤンだ！」

「そのタバコに見せかけたシュガースティックでしょ。」

二人はガイア壱式の腕につかまる。

すると、ローラーが回転し、高速で移動し始めた。

森林エリア

桜たちが校門を入り、校内電車で移動するエリアである。

ここは自然保護を目的とした場所であり、普段は誰も近寄らない。

そこの外れまで桜たちは移動してきた。



「まだあ？」

『辛抱せえ。そろそろじゃ。』

「おい貧乳。アタシらは何で移動してんだ？」

「説明がまだだったね。侵入者退治」

「ざっけんなてめえ！どうしてタダ働き…」

『ついたぞよ』

急ブレーキをかけ、桜とエヴァを放り投げる。

「いてっ！」

「あだっ！」

乱暴に放り投げられ、顔面から地面についた。

『あやつらが侵入者じゃ。』

目の前にはお面をつけた人が二人。

中国で買うような不思議なお面である。

服は軍服のような動きやすい服。赤と青である。

武器はなさそうに見える。

「ま、とにかくコイツらをぶっとばせばいいってこと。」

「しょうがねえな…」

エヴァは腰から銃を取り出す。

「トカレフタイプだ。」

「知らん。で乙姫もそれで戦うの？」

「わらわのガイアはバッテリー切れじゃ。」  
「ポンコツッ！！！」

勝手に運ばれて観戦という乱暴な態度にややきれぎみ。

それと同時にお面をつけた二人が襲い掛かってきた。

「おい桜！お前赤な！」  
「ああ！」

二人は笑っている。  
どうやら同じ性格らしい。

二人と謎の二人の戦いが始まった

## 72 赤と青と男

赤は手品のように武器を出す。

青仮面の者はナイフを、赤仮面の者は素手で戦うらしい。

「上等っ！」

桜が踏み込む。

手を広げ、木刀・村雨を召還した。

それを見て、対峙している青仮面は大きく跳躍し、桜との距離を詰める。

青仮面の攻撃は手に持っているナイフではなく、足により蹴りであった。

目標までの距離測定を誤ったのか、それは桜の少し手前で空を切るような状態になった。

桜も空振りかと思ったが、桜の戦闘実践に基づく直感が危険を告げる。

「違っっ！これはっ！」

とっさに桜は横とびをし、回避行動をとる。

それは正解であった。

青仮面の仕込み靴からナイフが勢いよく飛び出した。

『ヨケタ…』

それは機械を通じて出した、青仮面がはじめて発した言葉であった。

「次はこっちから行くよ！」

桜は駆け寄り、横一閃。様子見のような一撃を繰り出す。

それを舞うようにバク宙で回避する。

それは中国雑技団を思わせるような見事な技であった。

青仮面は回避するだけでは終わらなかった。

そこから、手によるナイフ投擲。

拳銃の弾丸を弾く桜にとってはナイフの投擲など問題ではなかった。いつものように弾く。

青仮面は地面に着地し、再びナイフを投げる。

「何度やっても同じさー！」

さっきと同じように弾こうとする。

向かってくるナイフは一本。

桜は木刀を振り下ろす

だが、そのとき気づいた。

ナイフが先ほどのものとは違う  
少し大きいナイフ。

何か仕掛けが？

そう思ったとき、ナイフが閃光弾のように発光した。  
それは単純な目くらまし。

桜は光を直視はしなかったが、怯み、隙をつくってしまった。

(まずい！けど！)

桜は目を閉じ集中する。

(ここは森。現在風なし。なら… 桜式・六ノ型…)

耳を極限まで澄ます。

桜の鍛え上げられた聴力。そして直感…いや、超直感ともいえる感  
覚を完全駆動させる。

閃光が放たれて一秒ともたたない間のことである。

桜の背後に青仮面が忍び寄り構える。

「そこおっ！」

いわゆる切腹をするような斬撃。

わき腹を通り抜け、背後への突き攻撃。

相手にも予想外の攻撃であり、腹部へと直撃。

青仮面は吹き飛ばされる。

「どつだ！」

青仮面を見るとすぐに立ち上がり、腹部をさする。

『…………アセ』

「ん？」

『オマエヲ…ホンキ…コロス』

桜が戦闘を始めたころ、エヴァも赤仮面との戦いを始めていた。

木々を走りながらエヴァはトカレフタイプの銃で射撃をしていた。ちなみに弾丸は実弾ではなく、ショック性ダメージの強い弾丸である。

「ちっ、」

赤仮面は隠れるばかりで、未だ攻撃をしてこない。

見た目は何も持っていないが必ず何かを隠し持っている。

エヴァはそう思い、距離をとりつつ警戒をしていた。

(どうやってヤローに手を見せてもらうか…。めんどくせー、いっそ接近してみっか。)

エヴァは接近戦を試みる。

一気に近づく。

赤仮面は木に隠れている。

その木を回り込むように接近し、赤仮面に銃を向ける。

すると、赤仮面は袖口からワイヤー付のクナイを一本発射。

だが、速度は遅い。

エヴァの動体視力なら簡単につかむことができる。

クナイをつかみ、赤仮面へと銃を向ける。

「これでチェックだ！」

違和感

そう、エヴァは異様な違和感を感じる。

この学園に忍び込むにはよほど腕の立つ人物なはず。

それにクナイの速度が、これを掴めと言わんばかりの速度であった。

罨！？

そう思い、とつさにクナイから手を離す。

丁度話した瞬間、クナイから『バチッ！』という音がした。

恐らく電流であろう。

あと一瞬でも遅かったら感電していた。

「この根暗野郎が！」

『シッパイ…』

次は逆の袖口から小さな丸い物を発射。

「火薬！？」

普段から火薬の臭いをかぎなれているおかげでそれが“爆弾”であることがわかった。

防ぎようがないので木に隠れてやり過ごす。

小さな爆発音が鳴る。

音が鳴り止むと、エヴァは反撃のため、得意距離である中間距離にまで離れる。

赤仮面から見て、エヴァの姿が見えた。  
クナイを連続ではなつ。

「危ね！」

頬スレスレの位置を通過した。  
仕返しとばかりに、銃を発砲。

エヴァの発砲を仮面は簡単に回避した。  
エヴァも回避されることをあらかじめ知っていたかのように反応した。

「ほらよー！」

背中から銃をもう一丁取り出した。  
素早く発砲。

さすがに仮面は反応できず、弾丸は眉間部分に直撃…したかのように見えた。

仮面はわずかに顔をそらし、直撃は防いだ。  
しかし、弾丸の威力で、仮面にひびが生えた。

「っ！」



仮面は顔をおさえ、逃げようとする。

「させつかよ！」

両銃で連続発砲し、追撃する。

仮面はそれを回避できないと悟ると、逃げることをやめ、攻めにでた。

仮面から手を離れたとき、ひびが広がり、ついには仮面が真っ二つに割れた。

そして仮面が落ちた。

素顔があらわになった。

「女!？」

女は素早くエヴァの背後へと跳躍する。

その時、エヴァは気づいた。

いつも間にか自分の首元に鎖が巻かれている。

「!？」

とつさに、エヴァは鎖が首を完全に絞める前に、手を鎖と首の間に入れる。

女は地面に着地すると、一気に鎖を引く。

エヴァは鎖を握り、どうにか首を締め付けられないようにする。

だが、女は鎖を握られていることを悟ると、片方の手で懐からナイ

フを取り出し真っ直ぐ投げる。

「ぐはっ！っ…」

ナイフはエヴァのわき腹へ浅くではあったが刺さる。

女は再びナイフを取り出す。

「させつかあ！」

エヴァは鎖を掴んでいない手で銃をたくみに操り、背面打ちを試みる。

目は前を向き、後ろの物を射撃する技術。

対象は女ではない。恐らく銃を向けた瞬間避けられるであろう。

自分にすぐ後ろの鎖を狙う。

エヴァは自分の腕を信じて発砲。

キン！っ和高い音がなり、鎖が千切れる。

女は驚いた。その行動に驚くと同時に、力強く引っ張っていた鎖がちぎれた反動で、後ろへと下がる。

エヴァは急いで振り向く。

今の一撃で銃の残り弾をなくしてしまったので、腰の弾層を入れなくてはならない。

その時間を与えるわけにはいかなかった。

エヴァはポケットから何かを取り出し、投げつける。

それは閃光弾だった。  
通常の閃光弾と違い、音がならず、光だけであったが、効果はあった。

からだが、後ろへ流れていた女は反応できず、閃光弾をまともにつけた。

激しい光で女は視界を奪われた。  
その隙にリロードを終えて、銃をまっすぐ構える。

「っしゃあ！これでえ！」

その瞬間、エヴァに横からの衝撃が襲った。  
重い衝撃に吹き飛ばす。

何があたったのかエヴァはわからず、振り向くと、そこには190cmはある大男が立っていた。

「油断しすぎだ。」

その男は修羅場をくぐってきたであろう険しい表情。  
長いトレンチコートを翻し、エヴァへと向く。

「小娘。なかなかの腕だな。だが。」

男が一瞬で消える。

というより、トレンチコートをエヴァへと投げつけ一瞬視界を奪われたあと、男を見失った。

「何!？」

目の前で消えた。耳を澄まし、場所を探る。  
この間は1秒もないやりとり。

スナイパーでもあるエヴァは常人より五感が優れている。  
さらに風を読むことには長けている。

その“風”を感じ相手の位置をさぐる。

「そこか！」

再び背面撃ち。

そこの男はいた。

が、

ギリギリのところでは男は避けていた。

「貴様の腕を先ほどみせてもらった。このくらい読むとわかって  
いた。」

男はエヴァが気配を探り攻撃をしてくることを読んだ上でさらにそ  
の一步先の行動をしていた。

男の両手を勢いをつけてエヴァへと当てる。

「波ッ！！！！！」

ズーン！！と重い音がなり、エヴァが息を吐き飛ばされる。

桜もその光景を見ていた。  
見たのは人が飛んだというところであった。

「な！」

エヴァも桜同様常人以上の肉体を持っている上、桜と互角の勝負をする人物。

そのエヴァが飛ばされるとただ事ではないことがわかった。

視線の先に男が構えをしており、その人物がエヴァを倒したのであることがわかった。

視線が合い、男が口を開ける。

「女！ここは引かせてもらおう！貴様らのような奴らがいたとは誤算であった！」

そういうと、スモークグレネードを投げ、撤退をした。

桜は追うことを考えたが、エヴァの容態が気かりで断念した。

「エヴァ大丈夫？」

エヴァの下へ駆け寄り、攻撃された場所の具合を確認する。

「あ…のヤロウ…。手を抜きやがった。」

「え？」

「女の方だ。まだ奥の手を隠してるような感じだった。」

くやしそうに歯をギリギリとかみ締める。

その時、もう一人の存在を思い出した。

「おのちびっ子、乙姫は？」

周囲を見渡すと、横たわっている機械を発見した。

「ちびっ子！」

そこには乙姫の乗っていた機体が転がっていた。

桜が急いで駆け寄ると、中には乙姫の姿がなかった。

「おい、桜見る。」

エヴァが指を指すところを見ると、機体の腹部にあたる場所がへこんでいた。

それも綺麗に拳の形を残して。

「これって。」

「あの“男”だ。」

エヴァを吹き飛ばした大柄な男のことだ。

「たしかにあいつなら、やりそうね。」

「ああ、それでチビ介は脱出したんだろう。ほらあれ見る。」

先を見ると、とぼとぼと乙姫が歩いてきた。

「うむ、まさかわらわのガイアが一発で機能停止にさせられるとは思わなかったぞよ。」

「やっぱり男に？」

「うむ、そなたらの戦いを高みの見物しとったらな、見るのに夢中になりすぎて、対人センサーを見るのを忘れておった。」

「完全に油断じゃねーか。」

桜たちは呆れつつ、ガイアを破壊した威力を忘れずに心の中にその絵を刻んでいた。

### 73 胎動する影

その晩のとある倉庫

中には三人の人物がいた。

二人は仮面を被っていた女、顔はかなり若い容姿をしている。桜たちと同年代であろう。

そして、大柄な男もいる。

「隊長はまだか？」

「連絡…つかない。姉様。」

「連絡…ない。姉様。」

仮面の女二人は互いに相手を『姉様』と呼ぶ。

そのことを男は最初は気味悪がっていたが、もうなれていた。彼ら組織の中ではこの姉妹を気味悪がって一切近づかない人物もいる。

というより、姉妹は自分達と隊長以外には心を開かないので、それもあり話す人物がない。

すると、倉庫のドアがギィツと重い音を鳴らして、一人の女が入ってきた。

『おっは~~~~！「ぶさた~~~~！』

「「「……「「「」

三人のメンバーにはない明るい声を出した。

入ってきた女は口にマスクをしている。

昔のスケバンがしているような黒いマスクである。そして長い黒い



髪。

そして、着衣している物は真つ赤なドレスに赤のハイヒール。その格好によつて女を不気味な人物に仕立て上げている。

『あら、フェイちゃんファイちゃん。それにダオ君じゃない。』

名前を呼ばれて、三人は少し険しい顔になった。

「マスク、俺はともかく、二人の名前は！」

『あらあ、ごめんなさい』

恐らく確信犯であろう。まったく反省をした様子はない。

「姉様、あいつ嫌い。殺していい？」

「ダメよ姉様、先生に叱られるわ。」

先生、とは隊長のことである。

『小娘なんかには殺されないわよ。証明しましょうか？』

緊迫した空気になる。

なにか音がしたら三人の殺し合いが始まりそんな空気である。

が、そこに再び大きなドアの重い音がなり、

「ん待ったあ おまた？」

倉庫内にまぬけな声が響いた。

いかにもオカマ口調で話すその人物は筋肉がガツシリとした人物であった。

『あら、バケモノちゃん。』

「いつてくれるわね。あなたも“妖怪”じゃない」

『化け猫ちゃん。』

「ブサイク女。」

二人は相手をにらみつける。

またしても、臨戦態勢に入った。

「おい、やめろ。直に隊長が来る。」

化け猫と呼ばれた人物は急に笑顔になり、男へと振り返った。

「あんらあ　ダオ　相変わらずいい身体してるわねえ」

「…」

男ことダオはこの人物が苦手なようだ。

「でも、このブサイク女は早いうちに消さないと後々やっかいよ」

『あんたごときに消される私じゃないわよ。』

「いったわねえー!!」

二人が一気に駆け寄る。

もはや二人を止めることはできないと思ったその時、

「っ!!!!」

『っ!!!!』

二人は何か気づき急に後ろへと飛びのいた。

その視線の先は…

「何をしている？」

「隊長。」

「先生。」

「あんら、九蛇ちゃん。」

「九蛇様。」

九蛇がいた。

紺色のコートに身を包み、髪を後ろで束ねているのが特徴な人物。頬には傷あとが目立つ。

「貴様ら、私闘は禁止しているだろ。ダオ！」

「はっ！」

「貴様がいながら…」

「申し訳ありません。」

「それで、結果を報告しろ。」

ダオはファイルを取り出し、そこらかレポート用紙を取り出した。

「雲の上学園に侵入し、西園寺家の令嬢のデータを盗む作戦ですが、二人の人物により失敗しました。」

九蛇は失敗を聞いたが、眉一つ動かさず、報告を聞く。対して、化け猫は

「失敗ですって？だからアタシがいけばよかったじゃない！ねえ、マスク！」

『私に振らないでよ、マオ。』

オカマの方は“マオ”という名前らしい。

「二人の写真の撮影は成功しています。」

写真を二枚九蛇に渡す。

「九蛇ちゃん見せてよ。」

「…」

マオは写真を九蛇の後ろから見る。

「あら、女なのね。つまらないわ。」

『私は好きよ、この子』

マスクは桜を指さす。

「そうはいかん。こいつは私の獲物だ。」

『九蛇様が興味を！』

一同が驚いた。

「それで、例の計画は？」

「はっ、九蛇様の予定通り、事が運んでおります。」

九蛇はニヤリと笑う。

その姿を見て、ダオは背筋が凍る。

（九蛇様が笑った。九蛇様が笑ったときは、殺戮をするときだ。や

はり、この計画、危険すぎる…。」

「先生…、私たち先生のためなら…」

「わかっている。だから、これからお前たちは…」

いままで通り、“九条家で使用人”をしている」

「はい、先生。」

再び九蛇は笑う。

「つくつく…。我が家の歴史が変わるぞ。私の手で！」

巨大コンテナ船

「九蛇はどこじゃあ!!」

船内の立派な一部屋。赤絨毯に壁は金の装飾品で飾られている。

「九龍様。九蛇様は外出中です。」

「むう、そうであったな。…では仕方ない、劉、曹、孫の三人で西園寺家の令嬢を誘拐してこい。」

「はっ！例の作戦の方は？」

「問題ない。それと麗怜もつれていけ。まだ契約は残っている。」

西園寺家

七海は自室で、頼朝から雲の上学園に襲撃があったことを伝えた。

「そっ、」

「伝えるか悩みましたが、お嬢に隠しことはできないと思ひまして。

」

「ありがとう。」

それでも七海は憂鬱な顔をしていた。

ドアがコンコンっとノックされた。

開くと、若い細めの男性がいた。

「お嬢、旦那様がお呼びです。」

「あ、義経さん。わかった。」

すつと、七海は立ち上がり、廊下へと出て行った。

少し離れたところに、頼朝と義経が並んで歩く。

七海に聞こえないように小さな声で話す。

「兄貴は…」

「何だ？」

義経は少し間を置いて言う。

「この組の将来を考えたことがあるか？」

「何を言ってる？」

「いまや西園寺組は疲弊の一途をたどっている。跡継ぎはお嬢だけ。お嬢の兄にあたる海斗様は今は京都。」

「…」

「もし、仮に、今“九龍”が本腰で攻めてきたら？だから…」

「俺は西園寺組に一生仕える。七海嬢を守ると決めた。」

義経は目をつぶり、何かを考えた。

「すまなかった。兄貴。」

二人は並んで歩く。

一人はまっすぐに…

一人は背中を丸めて…

それは今の心の状態を表しているようであった。

## 次回予告

桜「ここで一回組織の構成員についてまとめてみよう！」「  
識「作者が低脳だからみんなに伝わりにくいからな。」  
桜「で、こんなもんよ」

西園寺組

頭首 西園寺大海

その娘 西園寺七海

息子 西園寺海斗

副党首 頼朝

その他 弁慶

義経

九龍

頭首 九龍

その娘 九蛇

参謀 劉

孫

曹

その他 マオ

フェイ

ファイ

ダオ

マスク

雇われている殺し屋 麗怜」

識「こんな感じだな。ではまた！」





## 74 誘拐

午後9時、西園寺家の屋敷には頼朝と弁慶、その部下数名がいた。いつもなら、もっと大勢の人間がいる屋敷だが、事情があり、今はガラガラである。

出先から戻ってきた頼朝は事情を知らなかったので、弁慶に事情を聞いた。

「お嬢はどちらにいかれた？」

「近藤組との会合のため、車で出掛けられた。」

「先日、お嬢を目当てに雲の上を襲撃した奴らがいるのに、親父は許可したのか？」

「ああ、義経を警護に付かせた。それに、俺達以外の腕の立つ用心をお嬢の周りに付かせた。」

それは、完璧に見える防御網である。

西園寺家総出の外出に見える。が、組内の三本指に入る、頼朝、弁慶を家に残す

点に弁慶は疑問を感じる。

「お嬢は数で守るから、家は質で守ることにするらしい。」

「誰の案だ？」

「義経です。」

車内

豪華なリムジンを運転してるのは義経、助手席には部下を、その後部座席には七海が一人座っていた。

「お嬢、到着するのは明朝ですので、今はお休みください。」

「ええ、これを書いたら休むわ。」

七海が書いているのは日記であった。

「それにしても、今回の会合は、よく参加されるご決心をされまし  
たね。雲の上  
が襲撃された事件をご存知でしょうか？」

「それでも、私は次期党首だから、多少の危ない橋は渡ってでも、  
顔を広めてお  
かないと。」

「ご立派な考えです。」

それからしばらく、七海は日記を書くことに集中した。

今、車の前後には、西園寺家の用心車が10台でガードしている。

七海より先に出発した、当主大海も同様の警護をしている。

現地や通過場所、休憩予定所にも人員を配置している。

しばらく車を動かし、七海が日記を書き終えたので寝ようとした時、  
義経が声を

かけた。

「ところで、お嬢。」

「何？」

「組の未来をどう見ますか？」

「未来？」

「九龍と抗争し、勝てるかという意味を含みます。」

少し考える。

「確かに、九龍は巨大な敵だわ。だけど、以前にもそれ以上大きな組織と戦って勝ったことだって！」

「あれは、様々な組が協力してくれたおかげです。それは大海様の人望が成せる業といえます」

それは七海もよくわかっていた。

七海はその事を考える度に不安になる。

次期当主が女である。

それは組にとって大きなアドバンテージを負う。

この業界では女でのしあがるには、極めて大変な事だ。

それに女という理由で相手にされないこともあるだろう。

しかし、七海はだからこそ、今、積極的に行動してら他組からの信頼を得ようと  
している。

「だから今！私は！」  
「お嬢」

義経の冷めた声で、七海は口を閉ざした。

「私はね。勝ち組でいたい。」

「その為なら」

「未来を感じない所なんか」

「捨てる」

その瞬間、車内からガスが発生し、七海は何かを言う前に意識を失った。

それと同時に、前後の警護車に黒い装甲車が横から突撃をする。一台につき、装甲車一つ突撃。

警護車は横転、スピンをする。

突然の襲撃であった。

装甲車の窓からスナイパーが顔を出し、警護車のタイヤへ発砲し、動けなくした。

そして、七海が乗っている車、義経は、装甲車と共に予定進路を変え走り出した。

警護車の人間が最後に見たのは、飛んでくるRPG 7ミサイルであつた。

その出来事が大海を含む組の人間に知らされるのにそう時間はかからなかつた。

七海の警護グループの後続グループが車の炎上現場を通つたからだ。

その中に偶然意識を保つ者がいて状況を説明した。

襲撃犯と義経の行動。

そして何より、

西園寺七海が誘拐されたこと。

西園寺家

「あの野郎！ぶっ殺してやる！」

怒号と共に壁に拳を当てる。  
弁慶はかつてない怒りを覚えていた。

無理もない。義経と頼朝、弁慶は西園寺家三本刀と呼ばれる者達だ。  
三人は西園寺家に骨を埋める契りをした仲であった。

怒号を上げる弁慶とは逆に静かに何も言わない頼朝。  
その静けさとは裏腹に、サングラスの奥の眼は怒りより憎しみがこもっていた。

その時、屋敷の電話が鳴る。

こんな時間に誰かと思ったが、もしやと思い、頼朝が電話に出た。

受話器からは、予想していた通りの聞き慣れた声が聞こえた。

『頼朝かい？』

『…！義経。てめえ…。』

『怒っているな。まあ、無理もないと言っより当然か。』

『お嬢を返せ。』

怒鳴ることなく、怒りを静かに抑え話す。

手は震え、今にも受話器を破壊しそうである。

『意外だな。どうして裏切ったとか聞かないのか？』

『てめえのことなんか、興味がねえ。』

『つれないな。まあいい、お嬢を返してほしかったら、一人で指定する場所へ来い。』

義経は場所を言った。

場所は京都のとある廃ビル街。

『少し遠いけど、いいかな?』

「…」

『来たら、俺が裏切った訳とか教えてあげるよ。』

「興味がない。」

『くれぐれも一人で来い。さもないと、お嬢の命はない。』

そして電話が切られた。

すると、再び電話がなった。

義経かと思いついたが、それはないだろうと思いつき、受話器を取った。

電話口からは予想外の事態を告げる声が聞こえた。

『あ！兄貴！頼朝兄貴!』

聞き覚えのある部下の声

何か非常に焦っている様子だ。

「どうした?」

『親父が！親父が倒れた!』

「何だと!」

先ほどまで冷静を保っていた頼朝だが、今の言葉を聞いて、思わず大声を上げてしまった。

『京都へ行く途中の車内で、発作を起こして!』

以前から組の頭首である大海は心臓病を持っていた。



恐らく、七海が誘拐されたことを聞いて、発作を起こしてしまったのだろう。

「そうか…。今病院か？京都の病院…ああ…わかった。」

あらかた状況を聞いて、頼朝は電話を置いた。すぐに弁慶が何があったのか聞いてきた。

「兄貴。」

「親父が倒れた。弁慶、お前は屋敷にいる。」

「親父が！俺も親父の元へ…」

「お前は、屋敷を守ってくれ。」

「それはわかった。だが…」

おそらく一本前の電話のことを聞いているのだろう。

「義経からだ。」

「何い！！あのやろう！」

「お嬢を帰してほしかったら、一人で来いだと。」

「兄貴、畏だ！俺も！」

「お前は屋敷を守れ。義経のことだ。次は屋敷を襲撃するかもしれない。お前はここを頼む。」

それだけ言うと、頼朝は“長い筒”を持ち、組の車へと乗り込む。

「兄貴！気をつけて！」

「ああ。」

## 75 西園寺七海

京都のとある廃ビル

七海は目を閉じたまま、夢を見ていた。

それは二年前のことであった。

私は一人でいた。

ずっと一人でいようとした。どうせ私は組を次ぐ存在。父に入学させられた雲の上はお嬢様学校。組の人間だとわかったら、友人だろうが手のひらを返すに決まっている。だから一人でいたかった。

私はいつもと同じように屋上で一人昼ご飯を食べていた。

このとき、私は眼鏡をかけていなかった。

周囲を見渡すと、いつもと同じ風景の中に、一部分、オレンジ色の触覚が見える。

壁の中に埋もれている…？

いや、よく見たら忍者がするように、壁と同じ色の布を広げ、隠れているつもりのようなが、髪の毛のてっぺんの跳ねている部分が見出ている。

私は一人の空間を壊されたと重い気分を害したので、文句を言ってみようと思ひ、声をかけてみる。

当時、不良だった私は通常の生徒なら一声かければ、逃げ出すだろ

うと思った。

「おい。何してんだ。」

「…」

答えない。

無視しているというより、本人はばれてないと思っているのか？

「おい。そこのお前。」

「…」

いい加減イラついた私は、手に持っていた牛乳を投げつけてやった。布に牛乳がかかるが、やつはまだ何も言わない。

私はツカツカと歩き、布を蹴り飛ばし、本人の顔を見る。

布で隠れていたやつは、たしか…

「お前…、なんとか桜か？」

「む！なぜバレた！」

「何してんだ？」

すると再び布を持ち、

「“ステルス迷彩”！！！！」

こいつは馬鹿なんだろうと思った。

「ここで何をしてんだっつってんだ！」

カツとなつて、私は桜の胸倉をつかんだ。

「いや、いつも一人だからさあ、一緒にご飯たべようと思って。」

「消える。」

「一緒に食べようよあ」

馴れ馴れしく、ひつついてくるので仕方なく今回だけということであらう。食べることにした。

無論私は桜の喋ることを相手にするわけなく、無言で食べていた。

「…でね。茜さんっていう若作りしている人がね…。って聞いてる？」

私は答えない。

すると、桜は予想外の行動をしはじめた。

「ねえ、それ食べていい？」

いい？と同時に手を出し、私の唇に飯のアンパンを一口で食べた。

「あ、お前！何してんだ！」

「ん？モグモグ。あ、お茶頂戴」

「てめー！」

さらにお茶まで勝手に飲む。

「じつそさん！」

「お前…」

大好きなアンパンを食べられ、コイツやってやるつかと思った。

翌日

昼飯を食べようと思い、屋上へ行くと、明らかに不審な“ダンボール”が置いてあった。しかもデカイ。人が入れるくらい大きい。

こんな馬鹿なことをするやつは一人くらいしか思い浮かばない。

「おい、馬鹿桜。」

「…」

仕方ないと思い、ダンボールを引っぺがしてみる。予想通り、桜が体育座りをしていた。

顔を見ると、驚いた様子であった。

「っ！なぜわかった！」

「お前が馬鹿だからだ。」

その日も、私の昼飯は桜に食われた。昨日以上に。

それが一ヶ月続いた。

懲りることなく、毎日新しいネタを持ってきた。こいつ暇人なのかと思った。

ある日の夕方、不良である私は川原で他校の連中相手に一人で喧嘩をしていた。

喧嘩は日常茶飯事なので、問題なく相手を殴っていた。

「西園寺い！てめえ！うちの姉さんを！」

怒鳴るやつを蹴り倒す。  
やれやれといった所だ。

「ぐ…、西園寺…。明日またここにきやがね。ヘッドをつれてきて  
仇討ちしてやんよ！」

捨てセリフを吐かれた。

まったく、面倒臭い。

私のお気に入りの煙草を取り出し、火をつける。

「はあ…」

つまらない。

喧嘩しても、まったく手ごたえがない。

帰ろうとしたその時、歩道を見ると、桜がいた。  
手を目の前で丸くして、私の存在を確認しているようだ。

「あの馬鹿、何やってんだ？」

私の存在を認識し、私のもとへ駆け寄ってきた。

「何してんの？ってか喧嘩か。」

私の周りに転がっている連中を見て判断したらしい。

「へえ、男も女も相手したんだ。一人でやったの？」

別に自慢するわけではないが、肯定する意図を含むよう、頭を縦に振る。

煙草をすいながら、桜を見ると、何やら診察をしているみたいに、けが人を見る。

「これといって致命傷はないから、命に関わる問題はないよ。」

私は特にそんなことには興味がなかった。その様子を見て、なんとなく桜に聞いてみた。

「お前、医者の娘か？」

雲の上は金持ち学校。医者の子がいてもおかしくはないし、珍しくもない。

「いんや。ウチの親父は医者なんて立派な人じゃないよ。」

「何やってるんだ？」

「冒険家」

「は？」

冗談だろうか、真意がわからないので、この話は辞めた。そして私は帰ろうとすると

「ねえ、七海。」

「呼び捨てかよ。」

「明日の昼も一緒に食べれる？」

私は一瞬考えた。

先ほど、雑魚が明日ヘッドとやらをつれてくると言っていた。

「明日は…まあな」

はっきりと答える義理はない。

私は、それだけ言い、自宅へと帰った。

翌日、雨が降っていた。

私は学校を3限目で早退し、約束の川原へと行った。

桜のことが気がかりであった気がするが、そんなものは気のせいだ  
と思い、歩き出した。

土砂降りの中、傘をさし、一人歩く。

川原にはすでに集団の中に一人雰囲気が違う人物がいた。

格好は、黒いコートにセーラー服といったいまいちセンスを感じない  
服装である。

「お前が西園寺か？」

「ああ。てめえは？」

「“来栖”」

あまり聞かない名前だ。



「うちの“ザク”でもが世話になったな。」  
「ザクか。いい例えだ。」

傘を捨てる。

私はその女へと向かう。

雲の上屋上

「あり？」

ウチこと東海林桜は七海を待っているわけだが、もう昼休みを終えてしまう。

風邪でも引いたかな？

重い拳が頬をえぐる。

今までにないくらい“痛い”を感じる。

私は地面に顔をつけ、泥水を飲んでしまう。

「君、終わりか？」

頭の上に足が乗る。

足を払いのけ、私は拳を向ける。

「うるああー！」

スツと避けられる。

そして、腹部にカウンターをもらい、私は膝をつける。  
勝てない

その言葉が脳裏を回る。

次元が違うとはこういうことを言うのだろう。

私は、意識を失いかける。

「く、く…る…」

「名前は覚えたようだね。それじゃ。…ん？」

そこで、私は夢から覚め、現実の映像を見た。

私は紐で手を巻かれ、ソファアの上に寝ている。

「そうか、誘拐…されちゃったのか…。」

薄暗い四隅コンクリートで固められている部屋

逃げるには目の前にあるドアからしか出られないようだ。

するとドアが開き、義経が部屋へ入ってきて、頼朝が来ることだけ伝えて、出て行った。

## 76 救出作戦

### 監禁部屋

七海はソファーに座り、これからどうするか考えていた。ポケットを探り何かないか探す。

案の定携帯電話は没収されていた。他に何か入れてないか探る。

あつたのは家の鍵だけだった。当然これでは何もできない。

はあつとため息をつく。

すると、義経が再び入ってきた。

「お嬢。私がどこに裏切ったとか興味ありませんか？」  
「興味ない。」

フイツと顔を横へと向ける。

「ふふふ、頼朝と一緒にですね。」

「頼朝さんと……」

「あいつはここに來て死にます。」

心臓に衝撃が走る。

私のせいで、頼朝が……

「ご安心を。その後、あなたも殺します。その時は銃で一瞬ですか

ら。」

「あなたは！」

「西園寺組は近い将来滅びます。」

「だからこうして、会合をしたりして！」

「私は西園寺組にいるより、“九龍”に席を置くことを選びました。」

「

「ッ！！よりによって！あいつらが何をしたか！わかってるの！」

「西園寺組の幹部を殺した。それだけです。」

「だけって…」

もうずいぶん前から組に忠義がないのだと思う。

「では、お話は以上です。」

義経は出て行った。

再びポケットを探るが、やはり何もなし。

仕方ないので家の鍵をいじる。

(そういえば…、このキーホルダー桜からもらったやつだったけ…)

しばらくキーホルダーを見る。

(昔もこんなことあったな)

それは昔、球磨川と喧嘩して負けた後、倉庫に連れて行かれた後…

そこで、キーホルダーをいじっていると、ボタンがあることに気づく。

不審に思い、ボタンを押してみる。

すると、キーホルダーの穴の中からガスが大量に噴出した。  
一瞬で部屋にガスが充満して七海もガスを吸ってしまった。

「ゲホツ！ゲホツ！あの馬鹿桜！なんつーもの…」

そこで、七海の意識は途絶え、眠ってしまった。

東海林家

午後3時

桜含め、屋敷の人間は全員睡眠していた。

静かな屋敷内に突然、ビー！ビー！と警報音が鳴り、赤ランプが光る。

深夜に何事かと思い、識はあわてて、部屋を出て、広間へと行く。

広間には茜がいて、識は何があつたのか尋ねてみた。

「茜さん！これは何事ですか!？」

「これは桜の身に危険が迫ったとき、防犯ブザーを押したら、鳴る警報音です。」

その当の桜がソソソと桜が広間へやってきた。

「桜？防犯ブザー押しましたか？」

「ウチ押してないよ。」

「ならどうしてなってるんです？」

茜は明らかに不機嫌そうである。  
深夜に起こされたのだから無理はない。

「ん〜。とりあえず、どこでボタン押されたか調べてみよう。」

桜は壁のボタンを押して、大きなスクリーンを出した。  
スクリーンには日本地図が表示され、一箇所光っている。  
そこを縮図して場所を確かめる。  
場所は京都。

「桜、先日京都に行ったときに、ブザー落としたんですか？」

「そんなはずは…、あ、そうか先日、七海にあげたんだ。」

「西園寺さんですか？間違って押してしまったんですか？」

桜は壁のボタンを押して、カメラモードに切り替える。

「これで、キーホルダー付近の映像がわかるはず。」

画面にはコンクリートの壁が映し出された。

さらにカメラを回すと、眠っている七海を発見。

「桜、催眠ガスが出るって言いましたか？」

「言ったよっな、言っていないよっな…。」

さらにカメラを回すが、コンクリートの壁しか見えない。

そこから茜はある答えを出した。

「これは監禁されていますね。」

「監禁かあ〜って監禁！」

「西園寺が誘拐されたのか!？」

茜はコンピューター操作を試みる。

「ここは廃ビルですから、監禁にはもってこいの場所ですね。」

「黒井君!」

桜が屋敷内に響くように叫ぶ。

どこからか、黒井が上から登場した。

「ここに!」

「ハリヤーで…!」

「待ちなさい!」

茜が制止する。

「わかっているんですか?あなたは今から何をしようとしているのか!？」

「七海を拉致つたやつらをぶつ殺しに行く。」

「相手は銃器を持つてるんですよ。」

「わかってるよ。でも、友達を見捨てちゃいけない。」

「…!」

「…!」

茜が本気で睨む。

桜もそれに怯むことなく受け取る。

「わかりました。」

「へ?」

「御春様からこのような事態が起きたら、桜に強い意志があったら

やらせるようにいわれてますから。」

「茜さん。」

「でもかならず帰ってくるんですよ。」

桜は茜へと振り返る。

丁度扉が開き、風が桜の髪を揺らす。

「行ってきます。」

京都の廃ビル

ビル周辺には複数の黒服を着た男たち。

手にはライフル・マシンガンといった銃器を持つ。

七海が監禁されている場所はビルの七階である。

「義経。頼朝さんが来たらどうするつもり？」

義経はぶきみに笑う。

「私が九龍に入るための条件として向こうが提示してきたのは、あなたの首と頼朝の首。なので、来たら私の手で。」

義経は銃を構える。

大きさからしてハンドガンより少し大きいサブマシンガンといった銃だ。

「これで蜂の巣です。」

「まともに勝負もできないのね。腰抜け。」



その言葉に義経はピクリと反応する。  
パンつと乾いた音がなり、七海の頬が赤く染まる。

午前6時

ハイヤー内

「桜嬢！中嶋！後、5分で目的地に到着します。」

「識！準備はいい？」

「ああ！かく乱の方頼むぞ！」

桜は木刀を構える。

「この特殊部隊のような服どうにかならないか？」

識が着ているのは紺色のピッチリと身体に密着した特殊部隊のスーツ。

桜に渡されて強引に着させられた。

「着なきやクビだなんて脅すんだもんな。」

「それウチが着たかつたんだからね！メンズしかないからしぶしぶ譲ったのに……」

本気で悲しそうな眼をしている。

桜は戦隊ものなどが非常に好きなのでこういうものを好む。

「ところで識。ここからパラシュートなしで飛んでもらうけど」

「いや死ぬだろ……！」

「そのスニーカーキングスーツなら大丈夫。これはいて」

桜が渡したのは底の厚いブーツ。

「これをはくと、足裏からブリストが出て、着地の衝撃をなくしてくれるわ。ただし一回こっきりだからね。」

「そんなことしたら気づかれるだろ。」

「だからあんたは、ビルのずっと前におろす。そこから下水道を通ってビルの下まで行って。地図はスーツ機能の腕モニター見ることが出来るから。」

ブーツによるダイブって。識は死ぬかもしれないと思った。

「大丈夫。東海林家の技術部である、恋継の兄貴が作ったものだから！」

「確かその人“俺の家を爆破”した人だよな。」

「さあ行くぞお！」

「聞けえ！俺死ぬかも…。」

廃ビル上空

「さあ！行ってみよう！」

「お前…」

「オラ行け！」

痺れを切らした桜は識を蹴って外へと追い出す。

「バカさく……。」

最後に『ら』が聞こえた気がしたが桜はまったく気にも留めなかった。

「くっそお！ぶつつけ本番ってやつかよ！」

落ちながら恨み言を言っても仕方がないと思い、靴をいじる。  
桜の説明ではかかとのボタンを押せば…

「…ボタンが壊れてる！！！！」

ダイブ中にパニックになるのはいけないことだとわかっているが、  
これは焦る。

「あんのバカ桜あ！不良品渡しやがって！くそ、冷静になれ。かか  
とがダメでも他にどこか…」

必死に靴をイジルが何も無い。いたって普通のブーツである。

そこで、桜の言葉を思い出す。

腕モニターで地図が見れるといつていた。

ならば、地図機能以外にもあるかもしれない。

腕のボタンを押す。

ピツという音で腕からデジタルモニターが出てきた。

「えっと…」

現在も落ちながらボタンを必死に操り、操作方法を探す。

「あつた！…緊急用ブースターは…これかあ！」

両ブーツを打ち付ける。するとモニターから

『緊急用ブースター発動　OK?』

「OKだ急げ!」

地面まで数メートル。

靴底から爆発的なジェット噴射がでる。

そのおかげでギリギリ地面との直撃はさげられた。

「し…死ぬかと思った。」

生きた心地がしなかった。

77 三連戦

識は一人下水道を通り、七海の監禁されているビルへと近づいていく。

「臭え〜」

下水道特有の激しい刺激臭が鼻を襲う。

それに耐えながらも識は腕に搭載された地図を頼りに歩く。

「ここら辺か？」

識の目の前に梯子が見える。

これを昇り、ビルの一階へ潜入することを試みる。

梯子に手をかけたとき、

「っ！！」

殺気を感じる。

周囲を見渡す。

すると、闇の中から一瞬光が見えた。

その光は識へ向かい高速で飛んでくる。

「これは！」

反応が若干遅れたが、ぎりぎりのところで避けることに成功。光っていたものは識の後方へと突き刺さる。

ナイフであつた。

飛んできた方向を再び見ると、人影が。大の男が、識の前に姿を現した。

「頼朝デハなかつたか。」

「誰だ？」

「私は、劉。殺し屋劉と覚えるイイ。」

ところどころ片言になる所を見るとどうやら外人。容姿から中国、韓国人かなと思う。

「そうか、ターゲットじゃないなら見逃してくれ。」

「ソノ提案を拒否スル。」

やっぱりそうだよな。と思う。

劉は懐からナイフを数本取り出す。

「見られたら、処理スルよう言われた。」

「そうか。じゃあ、俺もここでやられるわけにはいかない。」

識も構える。

構えると同時に劉はナイフを投げる。

識はあわてることなく、ナイフを受けとる。

「こんな曲芸じゃあ、俺は倒せないぜ。」

受け取ったナイフを天井へ投げる。

「ナラ、これは」

劉は新しいナイフを取り出す。  
刃の部分が、緑色に光る。

「あの…それって…毒？」

「イエス、アイ、ドゥー」

投擲を開始する。

刃に毒が塗られているため、刃には触れない。

「避けるしか…」

ヒュッヒュ！っと避け続けるが、次第にもう少して刃に触れそうになる。

「ソロソロ限界か？」

「お前無限に持つてるのかよ？」

「そんなワケない。」

よく見ると、移動しながらナイフを拾っていた。

それですつと投げているわけだが、百本近くナイフを持っているのは間違いなさそうだ。

「仕方ない。ちょっと難しいが、頑張ってみるか！」

避けることを止めたように向き合う。

「避けなくてイイのか？」

ヒュツとナイフを一本投げる。

識は考える。

このスーツ。多少の傷なら治癒してくれるって説明書に書いてあったな。

毒はどうだ？やはり難しいだろうが、かけるか？

…時間がない。この騒ぎを他のやつらに知られるわけにいかないし、桜たちの陽動作戦を無駄にできない。

識はナイフに集中する。

そしてタイミングよく足を上げる。

キンツと音がなりナイフは天井へと突き刺さる。

「…。デキル。」

劉はさらにナイフを投げる。

今度は三本連続。

識は足を使い、ナイフを天井、横壁へとはじく。

「このクツがけっこう丈夫にできていてな。ナイフだったらはじくことぐらいわけない。」

「だが、」

今度は両手合わせて十本を取り出す。

「コレは避けられるか？」

「そ…それは」



識は後ずさる。  
それを追い詰めるように劉は前進する。

劉は自分の優勢を確信し、顔から笑みがこぼれている。

「ところで…、」

「ム？」

「ここボロくね？」

「廃ビル街ダカラな。それがドウシタ？」

「つまり…」

識は大きく息を吸う。

そして両手を太ももへ置く。まるで“しこ”をふむようだ。

「何が言いたいかワカランが！」

劉が両手を上げ、投げようと構える。

「粉ッ！！！！」

識は足を思いつきり地面へ叩きつけるように踏む。

ボロイ場所であって周りがゆれる。

その光景に劉は驚いて動きが止まる。

その時、

天井に突き刺さったナイフが、振動でゆれ、真下へ落下した。

そのまま、その場所へ誘導された劉のところへ、突き刺さった。

「なっ！」

毒が身体を一瞬で蝕む。

「こ…」

そして膝をつき、まだ動く手をポケットへ移動させる。

「これが“大地印・振脚”。んでもって！」

そのまま、劉へ顔面蹴り、ノックアウト。

「ふう…。さて」

識は劉があさっていたポケットを探る。

(予想通りなら…。)

識の予想した物がポケットの中に入っていた。

それは小さな小瓶であった。

小瓶のラベルは何も書いていなかったが、識はそれが、『解毒剤』であることをほぼ確信していた。

「毒使いつてことは、自分の毒があたったときの対策をするのがよくあるパターン。」

そう予測しての行動であった。

識は梯子を上り、七海が捕らわれているビルの一回へたどり着いた。

周囲には何もなく、殺風景な部屋であった。  
ドアが一つだけ見える。

その数分前。

「よし！黒井君！作戦行くよ！」

「了解！では桜嬢、手はずどおりに。」

黒井は黒服の男たちの上空へと移動した。  
そしてへりの底からミサイルを発射。

そのミサイルは地面へ着弾する前に“ガス”を噴出。  
ガスを吸った男たちは地面へと倒れる。

「催眠ガス散布。引き続き外の敵兵に対して散布をし続けます。」  
「OK。それじゃあウチは。」

桜はへりから垂らされて、地面へとついているロープを掴み。

「んじゃ。ウチは内部をぶっ壊し……じゃなくて、七海を助けに行つてくる。」  
「お気をつけて。」

ロープをつたって地面へと降りる。

どこかの特殊部隊のようにスムーズに降りる。  
顔には催眠ガスを吸わないようにマスクを装着しているので余計、  
特殊部隊を創造させる。

桜としては、内部の敵に対しても催眠ガスで眠らせたいのだが、七  
海がいる廃ビルはミサイルをつっこませたら崩壊しかねないので、  
断念した。

そして識。

識はドアを通り、階段を見つげようと歩き回る。

ビルの見張りがあわただしい。

どうやら桜の作戦が成功したらしい。

見張りは外へと出て行くのを見た。

階段へはホールを通らなくてはいけないが、先ほど大量に出て行っ  
たので、

今はホールには3人しかいない。

これなら何とか無力化できると思い行動に出る。

まず、近くにいた人物にスーツの内部道具の一つ、電気ワイヤーを  
投げる。

ワイヤーは男の首にかかり、電流を発する。

男は何も言わず倒れる。

その様子を見て、残り二人の男が駆け寄る。

その瞬間、識は一気に男へと跳躍して近づく。そして確実に急所を攻撃してダウンさせる。

「よし。片付いた。」

ふうつと一安心するのもつかの間。またしても殺気。

これは雑魚ではなく、先ほど戦った劉と同格の人物。階段から一人近づいてくる。

「我こそは、九龍参幹部う！孫であるう！」

声がかい。

このままでは潜入がばれると思い、一刻も早く戦闘不能にするため、ダッシュで近づく。

「我が一撃とくと受けい！」

孫は後ろから大きな大剣を取り出す。慣れた手つきでクルクルと振り回す。

「でいやあああ！」

「うるせえ！」

孫は大声を出しながら走ってくる。識は迎撃するために構える。

「奥義をくらええええ！！虎ああ斬りい！！！！！」

声が大きいに振りも大きいので完全に隙だらけである。だが、識はその攻撃に威圧を感じた。

（これはマズイ！）

識は隙を攻撃するのを辞め、後ろへと逃げた。

孫の振り下ろした刃は地面へとたたきつけられ、激しい音と巨大な煙を上げた。

それは孫の攻撃威力を測るには十分な光景であった。

「おいおい…、まじかよ…」

煙の中から孫が再び突進してくる。

「虎あ斬りいいい！！」

「うわ！また！」

再び先ほどの力強い攻撃を繰り返す。

さすがに防御しても簡単に崩されるとわかっているので、とにかく逃げる。

「はあああ！！」

突進。

まさにながむしやらに突き進むとはこのことだろうと思わせるほど、激しい攻撃と、攻撃の連続。

「くそつたれ！」

「でいいいやああ!!」

こうしても同じことの連続だ。

識はどうにかして打開策を考えているが、考える時間も与えてくれないほどの連続攻撃。

「でえええいいい…」

ずっと逃げていると、孫が息切れしかかっていることに気づく。

(まさか…)

そのまさかである。スタミナ切れが近づいている。

あんな大きな剣を連続で振り回していれば、息切れもする。

「ぎ…貴様ああ!逃げるなああ!!」

「そんな大きい獲物振り回して逃げるなって無理だろ!」

「おのれえ渾身のおおお…」

今度はいつも以上に身体を反り大きく振りかぶる。

識もスタミナ切れを待とうかと思っただが、チャンスがめぐってきたので、足を踏み出した。

そして、足払い。

身体を反っていた孫は簡単に頭から転んだ。

追撃として、溝に打撃。

「へぶ!」

孫は気を失ったようで、倒れた。

「これで、やっと二回へ昇れる。もう出てくるなよ。」

そ

んな淡い期待を胸に、二階へと上る。

やはり淡い期待だったようだ。二階にはすでに一人の男が仁王立ちで待っていた。

「今度は誰？」

「余は、九龍最強の男。曹である。」

顔には立派な髭を生やしている。

どこか偉そうにしているのが、腹立つ。

「愚民よ。余に挑むか。」

腰から普通サイズの刀を取り出す。

「いや、できればパスしたいんだけど……。」

「余を横切るといふのか。その罪、万死に値する！」

また面倒なやつにでくわしたと識は落胆した。

先ほどの人物と同じく、ぶっ飛ばすしかないかと思い、両手を構える。

「うし、やるか。」

「余の前にひれ伏すがよい。」

曹は刀を振るう。

識にはまったく届かない位置で空振りをするように振るった。



識は何をしたのかまったくわからなかったが、ほんの一秒後、身をもって何をしたかを実感する。

ポオン！っと小さな爆発が識の胸付近で連続で起こった。

「ぐっ！」

完全に油断をしていたので、衝撃は大きかった。

曹の持っている刀は仕込み刀で、振るうと同時に小型の火薬を発射していた。

「お…お前、意外と細かい芸を…」

「勝てばよからう。」

さらに剣を振り、火薬を出す。

今度は火薬を見逃すまいと、識は目を凝らす。まったく見えない。識の視力は公式に推定した結果5・0である。ちなみに桜は7・0

その識が見えないとなると、火薬は見えない物ということになる。

「まさか!？」

「そのまさかである。」

今度は腕を前に出して、爆発を防御する。

小さな爆発なので覚悟をしていれば、それほど脅威ではない。

「ステルスだと!？」

「九龍の技術のすべてを注いだ試作品である。」

ステルス機能。物体を不可視状態にする機能である。

「馬鹿な、そんな完全ステルス機能はまだ開発すらされていないはず！」

「うむ、確かに余も疑問はある。しかし、あの“小娘”。なかなかおもしろいものを持ってきてくれる。」

「誰だ？」

「ボスの娘だ。」

「優秀な娘さんだな。」

識は気がかりであった。

（俺の情報網ではあんな完全ステルス機能を作れるのはまだまだ先  
のハズだ。もし作れる企業があるとすると、そいつはかなり巨大な  
企業……。まさかあの“影の商人達”か？）

識には心当たりがある企業がいた。

「では続けてくらうがよい。」

曹はステルス弾を発射する。

「弾は見えなくても、斜線はわかるんだよ！」

識は持っていたワイヤーをムチのように振る。

ムチに弾があたり、爆発する。

だが、ワイヤーですべてを当てたわけではなかった。

識にも弾が当たり、爆発する。

「ほう、まだ対処ができていないようだな。」  
「ぐっ……。」

確かにまだ対処できていない。

というか弾が見えても全て防げるかどうか微妙である。

近づきさえすれば、一瞬で勝負がつくが、この爆撃の連続では近づけない。

距離をとられて、連続で攻撃されてたらと思う。

「ではそろそろ。余の前にひれ伏せ!!!」

曹は剣を連続で振り、弾を連続発射。弾がまったく見えないのでかなりの脅威。

識は知恵を振り絞る。

あれを連続で食らうとさすがにまずい。避けることができないので、防御体制をとってもいつかはやられる。

と考えているうちに識の身体中で爆発する。

「はっはっは！身動きできまい！」

ならば！っと識は秘策を考え出した。

地面を殴り、砂煙を舞い上げる。

さらに

「波あつ！……！」

地面をおもいつきり踏む。  
さらに煙を上げる。

曹は気にすることなく、連続で発射する。

識は一瞬で曹の近くへと移動する。  
そして、

ガシッと剣をつかむ。

「何を！」

「これなら弾が出ないだろう？」

「ぐっ。しかし、貴様、剣をつかんで手から血がでていぞ？」

「すぐ終わる！こんな近くなら俺の射程内だ！」

識は一瞬剣を離し、

「音速弾ッ！」

ドドンッ！と両手で一瞬殴る。相手からは見えないくらい早く殴る。

速さ、そして威力もあり、曹は後ろへと吹き飛ばす。  
壁を突き破り、隣の部屋にまで吹き飛んだ。

「うし！一丁上がり！」

識はさらに上の階へと進む。

桜は外にいた…

「しまった！全員眠らせてしまったから、ぶっ飛ばす相手がない  
！！」

先ほど、黒井がハイヤーで催眠ガスを散布してしまったので、起きてるやつがない。

「早く、ビル内部にいかないと、識が全員片付けてしまう！つーか七海の救出しないと！あーもう！」

## 78 遅れてきた男

桜が廃ビルに向かっているころ、識は三階へと足を進めた。

三階で待っていたのは

「ぐっへっへっへ。ここで通行止めだぜえ」

下衆な笑い声とともにお出迎えしてくれたのは、北〇の拳の雑魚で出てきそうな連中数人。手には鎖やら鉄球など武器を持っている。すでに下での識の戦いのことを知っていて、待っていたようだ。

「通行料はテメエのたまだあ！」

七海は…

「お嬢。どうやら助けがきたようですよ。」

「え！？頼朝さん？」

「いえ、あなたのご学友ですか？よくわからないガキです。」

頼朝が助けにくるということを聞かされていたので、それ以外の人物が助けにくるなんて予想だにしていなかった。

それに同い年の人物となると桜ではないかという疑念がよぎる。だが、桜がこの場所を知るべきがない。

「誰？」

「ですからわかりません。男が一人で、九龍の三幹部を倒してしま

いました。」

男と言われて、ますます誰なのかわからなくなった。

「麗玲！いるか！」

七海の記憶では、麗玲とは九龍が雇った殺し屋だと先ほど義経が言っていた。

ドアから中国人の女性が入ってきた。

「呼んだアルネ？」

「下の階に行つて、ガキを一人消して来い。」

麗玲は少し考えて

「お前、ワタシの雇い主じゃないアルネ。ワタシの雇い主九龍の旦那。旦那に言われて、西園寺七海の誘拐の手助けする言われた。お前の命令聞け言われてない。」

「貴様！」

「それにいいアルか？お前一人になるアルネ。」

「どつという意味だ？」

自分の命令に口を出されて、義経は眉間にしわを寄せた。

「お前一人になって、誰かにここはいられたら死ぬよ。」

「っ！！貴様俺を舐めてるのか！」

最後の『か』を言った瞬間、義経の首下に何かひんやりと冷たい物が当てられた。

それは麗玲の青龍刀であった。

「西園寺七海の誘拐のための命令協力する。けど、任務失敗しそうな命令拒否する。おわかりアルネ？」

ドスの聞かせた声。そして、鋭い目つきで言う。

そういつた世界で生きている義経は、たいていのことでは怯まないが、麗玲は本物であった。人を殺す目つき。まさにそれであった。

「そういうわけだから、弱いお前のボディガードもしてるアルネ。」

刀を納め、笑顔になった。

義経にとって、その笑顔は逆に恐怖を感じる。

「わ、わかった。だが、この階に来たときは！」

「わかってるアルネ。しっかりと殺してやるアルネ。」

その頃、丁度桜はビル内部の侵入した。

「あ！誰もいねえ！つーか一人倒れてるし！」

そして黒井の乗っているハイヤーのガソリン補給のため、一度基地へと帰還しているときビルの裏側に一台の車が止まっていた。

黒い立派なリムジンの中から、男性が出てきた。

頼朝である。



『細長い筒』をもって、ビル内部へと歩き出す。

だが、タイミングが悪かった。

丁度、一階に入った時、桜と鉢合わせをしてしまった。

ヤクザ者の中に女がいるのは珍しくない。

だから、こんなところにいたので、桜を敵と認識した。

桜も、大柄の男で、手には細長い筒：日本刀を持っていたので、敵と認識した。

双方が敵と認識したとき、とる行動はひとつしかなかった。

二人が踏み出したのは同時だった。

頼朝は日本刀の中身を出し、斬り付ける。

桜も木刀・村雨を出し、対抗する。

日本刀と木刀がぶつかり、あたりに衝撃が走る。

「ほう…、姉さん只者じゃあねえな。」

「あんたも、雑魚じゃなさそうね。さくつと片付けたいんだけどね。」

「俺は…、お嬢を助ける…!!」

その瞬間、一気に頼朝の力が強くなり、桜が押し負けた。

桜の体勢が崩れた。

そこへ、頼朝の力をこめた斬撃が襲う。

ぎりぎり、桜は木刀を身体の前に出して、防御することができた。だが、力強い義経の攻撃で、桜は壁まで飛ばされた。

「つつ…、こんのクソ力が！」

足を壁につけ、その壁を利用して、跳躍。

予想外の身軽さに、頼朝は驚き、わずかに反応が遅れた。

飛んできた桜の一撃を完全には交わすことができず

桜の反撃を完全には避けられなかったが、肩に若干の傷をつけた。

「姉さん、やるじゃねえか。素早い」

「あんたはクソ力の持ち主だけどね。それに一度刀を合わせてわかつたけど。」

戦いの最中だが、桜は木刀を下ろして、頼朝を真っ直ぐ見つめる。それは、頼朝が攻撃をしないということ信頼しての行為である。

「あんたは、悪い人じゃない気がする。少なくとも今は黒い物がなくて…こう何か善なることをしてる。」

「俺は自分の信念、そしてお嬢のため生きてる。」

それを聞いて桜はある疑問が浮かんできた。

「お嬢って誰？」

「何をとぼけてる。テメエらが誘拐した、七海嬢だろ。」

なるほど、これは俗に言う『勘違い』ってやつだったらしい。  
さらにそのまま、日本刀を持った人物と殺し合いをするという、骨  
折り損ってやつか。

とにかく、時間も惜しいので、頼朝に自分がここにきた経緯を説明  
し、誤解を解いた。

二人が上の階へ進むと、そこには大量の人が倒れていた。  
転がる人、壁に突き刺さっている人など、おそらく識に倒されたの  
だろう。

二階、三階、四階と同じ光景であった。

そして、五階。このビルは六階立てなので、ここにいなければ七海  
は六階に監禁されていることになる。

五階も同じく人が倒れていたが、その中に一人肩で息をしている人  
物。識がいた。

「あ、やっと追いついた。識！あんた全員ぶっ飛ばして！つーか潜  
入バレてんでしょ！」

疲れた様子で、識は首だけ声がした方向に向けて、息を荒くし口を  
あける。

「それに関しては…申し訳ない…」

素直に謝られたので、少し毒気が抜けてしまった。

もう少し言い訳をしてもよかったのにと、桜は少し残念そうにする。

「まあいいよ。後はウチとここのデカイのがやるから」

「デカイの…」

自分が『デカイの』で説明されたことに少し嫌そうな雰囲気を出す  
頼朝。

「じゃあ、識は外で待機してて。黒井君が拾ってくれるはずだから。」

「わかった。それじゃあ後はまかせた。」

識は息を整え、桜たちの横を通り過ぎ、下へと降りていった。

「さて、上に七海がいるから行こうか。」

「ああ。」

頼朝はすでに日本刀の中身を出して、すでに臨戦態勢をとる。  
同様に桜も同じく木刀を手に、集中力を高める。

## 六階

部下らしき人物は誰もいない。

ガランとしており、人の気配すらしない。それゆえ、待ち伏せをさ  
れているのかという不安が襲う。

「ところで、その義経ってのは、日本刀でも持ってるの？」

「いや、義経は…」

「待った!!!」

桜は急に義経を制止をした。

桜が黙って指をさす。

義経がチラッと見るが、何も無いように見える。

「ほらもつとよく見て!」

桜に言われ、目をこらして見る。

すると、何かが光っているのが見えた。小さくキラッと光る。

「なんだ?」

「手榴弾トラップだよ。」

仕掛けてあったのは、ピンと張つてある透明性が強いピアノ線。

足がひっかかるように張られており、そのピアノ線は手榴弾につながっていた。

「これは…」

「足をひっかけたらウチとあんたはドカン!だよ。つってもこの大きさからして、建物に影響する破壊力ではないけど、ウチらはドカン!だよ。ウチがここから見た感じだとこの階にたくさん仕掛けられているね。」

「つまり、ここには七海嬢と、義経はいないということか。」

爆破に巻き込まれないためにも、義経と七海は別の場所にいることを意味する。

「ここからいける場所となると、あとは」

「屋上。そして、これは時間稼ぎ。」

「早くいくよ!ついてきて!」

桜が先導して屋上へと急ぐ。

屋上

「義経！どうして屋上へ！？」

「あなたを助けにきたのは義経だけではなかったので、計画が大いに狂いました。いったんここから離れるためにもへりに乗っていた。あと30分は待ってください。」

「ちよつと。それって誰…ん？」

義経は七海に催眠スプレーを振りかける。  
それを嗅いだ七海は眠ってしまった。

「おい麗玲！」

「どしたアルね？」

「義経と一緒にいるやつを始末しろ。方法はまかせろ。」

「殺していいアルね？」

麗玲は怪しく笑い、青龍刀を構える。

その行動から、いかに麗玲が好戦的であるかを物語る。

「義経はどうするアル？」

「俺が殺す。」

義経はトランクの中から拳銃を二丁取り出す。

義経の戦闘スタイルは拳銃使用である。

西園寺家の中での一番のガンマンといえる命中精度。そして、両手での変わらない射撃能力を持って、西園寺家の三本刀まで上り詰めた。

「行くぞ！」

銃をスーツの懐にしまいこむ。

義経と麗玲は眠っている七海は屋上に放置し、階段を下りて、六階へ降りていった。

## 79 三本刀が折れる時

桜と頼朝は手榴弾があるエリアを突破し、屋上へと出る階段を見つけた。

「あとはしかけられてないから、ここをまっすぐ行けば大丈夫……ん？」

「人の気配が！」

階段をみると、そこから二人。麗玲と義経が降りてきた。

「頼朝さん。どうも。」

「義経え！」

頼朝は平静を保つことができず、声を荒げてしまった。それを聞いて、義経は薄気味悪く笑う。

「おう！恨みかってるネ。それと……おう！“むねなし”ね！久しぶりアルね！」

「あんたは！殺し屋の……誰だっけ？」

「麗玲アルね。お前を殺す女。メイド喫茶のお土産に覚えておくいアルね。」

喫茶はいらねえよ。とツッコみたかったが、雰囲気的につつこむことはできなかつた。

なんせこれから殺し合いが始まるのだから。

「さて、ヘリが来てしまうので、そろそろあなたたちには消えてもらわなくてはなりません。やれ！」



合図とともに麗玲が袖から、小型の爆弾を取り出す。すばやい動きで、桜たちのもとへ放り投げる。

ドンつと小さい爆発がおきる。

爆発をする前に桜と義経は左右に分かれ避ける。

それこそが、狙いであった。

頼朝には義経が

桜には麗玲が向かった。

義経はスーツから拳銃を二丁取り出す。

「頼朝さん！私に勝てるんでも！？」

バン！バン！つと撃つ。

それを部屋の柱をつかって避ける。柱に弾があたる。

「西園寺組でも私とあなた、弁慶の三人は力差が均衡している！」

「それがどうした！」

柱から飛び出て、義経へときりかかる。

「普段私はこの日のために力を抜いてるとしたら？」

「何を言っただやがる！」

刀を拳銃で受け止める。

頼朝の力が強いせいか、銃がいまにも真つ二つに分かれてしまいうだ。

急に義経は拳銃を捨てて、後ろと飛びのき、サブマシンガンを二丁手に持った。

「私の最強武器はこれですよ!!」

サブマシンガンを連射する。

通常、サブマシンガンは反動が大きいので、片手撃ちなどできるわけがない。

しかし、西園寺家の三本刀と呼ばれる義経だからこそできる技でもあった。

頼朝は着ていたコートを脱ぎ捨て、一瞬義経の視界から自分の姿を隠す。

その隙に、再び柱へと隠れる。

「はっ！また隠れましたか！ですが！」

ドドドドドツと柱に向かって連射する。

柱からポロポロとコンクリートの破片が崩れ落ちる。

「このビルの柱くらいなら私の銃で壊すことくらいいけない！」

古く、ボロボロのビルなので、柱の耐久性が悪い。

直にでも柱から弾が貫通して、頼朝へと直撃しそうだ。

「さあさあさあさあ！」

なおも撃ち続ける。

義経は勢いよく飛び出る。

「やっと出てきましたね！」

義経へ銃口を向ける、

頼朝へと弾丸が発射されそうになるその瞬間。頼朝は地面に転がっている大きなコンクリートの破片を刀の峰でゴルフスイングをするように飛ばす。

大きな石は義経の手へとあたる。

「ぐっ！」

右手に持っているサブマシンガンを落としてしまったが、左手に持っていたサブマシンガンを打ち続ける。

だが、手に石が当たったとき、義経は頼朝を一瞬視界からはずした。その瞬間に、頼朝は刀を振り上げ、義経へと近づく。

そして、刀を振り下ろす。

シュツという音とともに、義経の“右手”が飛ぶ。

「ぐわああー!!ぐー!!」

頼朝は痛がる義経を一切気にせず、さらに刀を振り上げとどめをさそうとする。



義経は膝をつき、そのまま地面へとうつぶせに倒れた。  
もう二度と立ち上がることはなかった。

「三本刀……。折れちまったな……」

背を向けている頼朝がサングラスを直しながらポツリとつぶやいた。

## 80 殺し屋の仕事

「それぞれそれぞれえい」

麗玲は身体のいたるところから武器を出し、桜へと投げつける。

「その…チャイナ服の…どこに、うわ！しまってるんだ！」

麗玲はいわゆる暗器使い、しかも現実離れた使い手である。やけに袖が長く、

少しぶかぶかなチャイナドレスを着ており、そのいたるところから武器を出して

いた。

四次元のポケットでもあるかと思わせる武器の多さである。

「ナイフなんかじゃお前殺す無理わかったアルね。」

「じゃあどうする？爆弾でも使う？」

「そうするアルね。」

素早い動きで麗玲は両袖から手榴弾を取り出した。

それをトスするように桜へと放る。この間は一秒ほどであった。

だが、桜はそれを読んでいたかのような行動にでた。

「四ノ型・“乱飛龍”！」

持っていた木刀を横に、ブーメランのように回転させる技である。

桜の狙い通り、横回転した木刀は、手榴弾にヒット。

カン！と乾いた音を立てて、手榴弾は麗玲の元へと戻る。

ポオン！と爆発する。

煙が晴れると、耐火マントで身をくるめた麗玲がいた。

「あんだ手品師に向いてるよ。」

「でもそろそろ、手品のネタもつきてきたアルね。お前楽しませる手品ここまで

アルね。次は…」

背中に手をやり、そこから青龍刀を取り出す。

取り出した青龍刀は二本。柄の先端に紐が付いて、二本の青龍刀を繋いでいる。

「お前の解体ショーアルね！」

どうやら紐はゴム性のようで、伸びている。

麗玲は両手に持った青龍刀を桜に向けて構える。

「チンケな手品師が！そろそろお開きにしてやんよ！」

麗玲は片手に持っていた、青龍刀を投げる。

簡単に桜はよけるが、避けた時、麗玲は手に持っている青龍刀を引いた。

「そうかつ！」

投げた青龍刀はゴムに引かれ、再び桜を狙う。

気づいた桜は間一髪で首の頸動脈への攻撃を避ける。

「あつぶな…。あと少しで“鮮血の結末”PCバージョンだったよ」  
「“スクールイズ”アルね。」  
「知ってんの!?!」

などと、桜はちょっとした親近感を感じたが、麗玲はさらに攻撃を加える。

今度は接近をしながらの投擲。

「さつきみたいのはごめんだね!」

飛んできた青龍刀を上へと打ち上げる。

「お腹空いてるよ?」

その打ち上げの動作をしている時、麗玲は片方の青龍刀を投げた。

「ぐっ!」

ぎりぎりの所で横へと回避することに成功した。

麗玲の猛攻は続く。

飛んで宙に浮かんだ刀を取り、さらにゴムを引っ張り片方の刀を手元に戻した。

回避をしたばかりで、まだふらつきが残る桜へと降下する。

桜もそれに気付き、木刀を上へと向けて、防御体制をとる。

二人の刀が衝突する。



その反動を使い、麗玲は後ろへと下がる。

「これ待ってたよ」

「え？」

防御した時、麗玲の力強い攻撃でまだ痺れが残っている。

その桜へと向けて、麗玲は靴の爪先を向ける。その先から出てきたのは、“小さな針”だった。

ビュツと飛び出て、桜の肩へと刺さる。

「いつ！」

すぐさま針を取る。針を見ると、緑色の液体がついていた。

「私殺し屋アルね。毒針の一つ持てる。」

「あー…そうだったね…」

「速効性のはずアルね。お前倒れないけど、時間の問題アルね。」  
「なら…速効でぶっ倒す！」

桜は足の力を溜め、そこから一步、力強く踏み込んだ。そして今までにない速度で走り出した。

通り道の砂が飛ぶ。それほど早い動きだった。

素人なら動けないだろうが、相手は殺しのプロ。驚きはしたが、横へ飛んで避けられてしまった。

「やるね！」

「見くびってたよ！」

カン！カン！つと麗玲と桜の刀が当たる。麗玲の二刀流に負けない桜の剣捌きに

麗玲は正直興奮していた。

「なら！これはどうする！？」

空中で縦に横回転し、刀に遠心力を加え、威力をつけようとする。

「また力技か！いや…」

力技と思ったが、回転している最中に、刀が一本、勢いよく飛んできた。

「パターンが一緒なんだよっ！」

桜は刀が飛ぶ前に行動をしていた。

前へと前進して迎撃の体勢をとっていた。

飛んできた刀を首を反らし避け、回転している麗玲へと目を向ける。

そして麗玲より早く

「一ノ型派式・天誅」

身体を一瞬後ろへ引き、筋肉を収縮。そして弓のように身体を放つ。そして宙に

いる麗玲へと刀を向けた“突き”を撃つ。

麗玲の刀が桜に届く前に、桜の突きが先に届いた。腹部を直撃し、突かれた方向

、上へと飛んでいく。

耐久性が脆かったためか、天井を突き抜け、屋上へと飛ばされていた。

「まずい！たぶん屋上には七海が！」

この階に七海がないことはすでにわかっている。残るは屋上のみ。追い詰められた殺し屋なら、人質をとるか、もしくはは

「くっ！七海っ！」

その先を思うよりも先に足が動いた。

階段を急いで上がる

「麗玲っ！」

記憶を辿って殺し屋の名前を思いだし叫んだ。奴の目を七海に向けてたくない。そんな思いから自然と行った。

麗玲は先程の一撃をモロに受けたようで、まだダメージが残っているようにふらついていた。

（七海は？…）

七海を探すと、麗玲の後ろ、桜とは反対側に眠っているように倒れていた。

「少し…」

ポツリと麗玲は呟く。

「楽しかったよ」

こんな時に何を言ってるのか？遺言か？などと桜は理解できなかった。

だが、次の言葉を聞いて行動を見て理解すると共に今立ち尽くしていることを後悔する。

「お前と戦う。楽しい。けど私の仕事。どんなことしても勝つことアルね。」

袖口から小さなダイナマイトのような物を取り出す。それを桜のいる方向とは逆方向。つまり

「七海っ！」

七海の近くへ投げる。

それも小さな爆弾なので複数個投げていた。

（間に合うか…）

桜は走る。

走る桜へ小型ナイフを投げる。だが、もはやそんなもの気にする場合ではない。

最低限の防御である首と心臓だけ手で守り、あとの部分にはナイフが刺さる。

丁度、麗玲とすれ違ったその時

「終わリアルね！」

次はナイフではなく、刀を投げてきた。これは避けなくては致命傷になる。

(避けなきゃ)

桜は身体を捻りながら前へと進もうとした。

その時、桜は直感した。

その“直感”に従い、軽く後ろを見る。

(間違いない。ウチが避けたら『七海に当たる』)

だが桜は選択肢は一つしかなかった。

(刀は二本、一本ずつ弾けば…だけど、止まったら爆弾に間に合わない。)

耳を澄ます。

麗玲が投げる瞬間が勝負だ。

カチャリと小さな音と空気を切る音なる。

桜は身を前に進みながら身体を後ろへと翻し、刀の位置を確かめる。

(しまった！？早すぎた！)

一本目は持っている木刀で弾ける。だが、二本目は一本目よりも後ろにあり、弾

くには足をもう一本踏まなければ身体が倒れてしまう。後ろを向いたままもう一歩踏むことはタイムロスを示す。

(くそおっ!!)

即座に桜は二つの刀のうち、二本目にあたる頭部へ向かっている刀に向けて木刀を投げる。

残る一本は…

桜が前を向くと同時に背中に冷たく、そして痛みを感じる。

グサリと背中に刺さる青龍刀。

だが、身体を貫通はしなかった。

それは桜の着ている服のおかげであった。今着ているのは、対殺傷用特殊プロテクター。

だが、青龍刀を完全に防ぐなどできるわけではない。

それでも桜は七海の元へ駆けつける。

七海の前へ行き、爆弾と七海の間に入り、七海を抱くように覆う。

その時、丁度タイミングを狙ったかのように、爆発した。

8 1 瞬(またたき) (前書き)

最近更新が不定期でごめんなさい・・・



## 81 瞬（またたき）

爆弾による煙が舞い上がり、辺りには火薬独特の臭いがする。

煙が晴れるとそこにいたのは、七海を庇うかのように覆い被さった桜の姿であった。

全て、麗玲の計算通りであった。

七海へ爆弾を投げれば、桜が助けに行く。ギリギリ桜が間に合うように導火線の長さも調整した。そして爆弾を全て弾くことができないと悟ったら七海を庇い爆破を直撃するであろうことも。

いくつか、桜に蹴り飛ばされてしまったが、致命傷を与えるには十分な爆弾が残った。

「…、あ…。」

さすがの桜も声を振り絞るのも困難な状況だ。

これを勝機と見た麗玲は飛び出し、青龍刀を振り上げる。

その時桜は

（やばい、死にそうだ…。直撃はまずかったな…。でも…）

ヨロヨロとふらつきながら立ち上がる。

（今、すっごい集中してる…）

麗玲の青龍刀が桜に襲いかかる。

すると、麗玲が動くはずがないと思っていた桜の腕が動いた。持っている木刀を上へと上げ、青龍刀を止めた。

「そんな！？だけどお！」

逆の手に持っていた青龍刀に力を入れて、横へと斬りつける。桜の木刀は青龍刀を一本押さえている。二本目は防御できまいと思った。

桜の目が鋭くなる。

上へに持っていた木刀を斜めに傾ける。麗玲は上の青龍刀を適度に力を入れるこ

としか集中していなかったためか、青龍刀が下へと流れる。その青龍刀を避けるように身体を捻りながら、上へと跳躍した。その跳躍は高く

、麗玲の頭上へと“翔んだ”。

そのまま捻りの遠心力を活かし、木刀を逆手に持ち麗玲の横顔へ強烈な一撃を入れる。

麗玲は横へと飛ばされる。受け身をとったものの、ダメージは大きい。

「女の顔：ルール違反アルね…」

「仮にルールなんて物があつたなら！最初に破つたのはお前だろおっ！」

叫ぶ桜に威圧される。

気を取り直し、麗玲は次で決めようと青龍刀に力を入れる。

「次で終わらせる。麗玲だったね。この“技”は失敗する確率が高い。だけど、

上手くいけばアンタなら倒せる。」

「ほう…。なら、やるよろしっ！」

麗玲は今までにない早さで桜へと突進。

恐らくまた青龍刀を投げるのだらうと桜は思う。

「『二ノ型…』」

足を地面へと踏み込む。

ぐっと、力強く、地面がへこむくらい強く押し込む。

そして貯めた力を一瞬で解放し、素早いスピードを生む。

一瞬の間に、麗玲を通りすぎる。

彼女の目には、木刀を構え、一瞬向かってくる桜が見えた。そして

「『瞬』」  
またたき

麗玲は強烈な衝撃を受け宙に舞っていた。そのまま、受け身をとることなく、空に流され、ビルから落ちていった。

それを確認してか、今はいない麗玲へとポツリと呟いた。

「“瞬”は、目にも止まらない高速の斬撃。それゆえ、当たれば強烈…でも」

足がガクリと崩れる。

「まだ…ウチじゃ反動が強すぎるかな…」

爆弾のダメージも重なり、“瞬”による反動でついに限界を超えたようだ。

「つつても…、生死の境目くらい…の…時の…集中力がないと成功すら…しないで…こけちゃいんだけどね……………」

桜はその場に倒れた。

目線の先には未だ眠りから覚めない七海がいた。

（つーか、こんだけドタバタやったのに起きないってドンだけ！）

などと思いつつながら、気を失った。

## 82 西園寺の誓い

桜が目を覚ましたのは、家のベッドの上だった。

「ん…あれ…？」

確か廃ビルの屋上で…と桜は記憶をたどる。

周囲を見渡すと、茜が椅子に座って眠っていた。おそらくずっと看病してくれたのだろう。

布団から出ようと、ベッドから足を下ろす。

すると

「いっででででっ！…！」

体中に痛みが走り、悲鳴を上げる。

その声を聞いて、茜が目を覚ました。

「ん…桜？」

茜が目にしたのは、ベッドに寝ている桜ではなく、地面に寝ている桜であった。

「寝るならベッドに寝てください。」

「…そんな冷静なツッコミ…」

「というか桜、あなた戦争でもしてきたんですか？」

「戦争屋に近い殺し屋と戦ってきた…。」

茜が笑っている。桜にはその笑いは、鬼の形相に見えた。

(殺される…)

死を予感した。

茜から聞きたいきさつでは、屋上で一人寝ている桜を識と黒井が回収したということらしい。

「待つてよ！七海は！？」

「西園寺さんはいませんでしたよ。」

それを聞いて、一つの可能性が頭をよぎる。

おそらく頼朝というやつが、七海を回収したのだろう。

「なら、安心かな。」

西園寺家

「…ん…」

「お嬢！…！」

七海が目を覚ましたのは西園寺家の自室であった。

そばにいたのは、頼朝と弁慶。他の組員はどこにもいない…

いや、何か雰囲気がおかしいと感じる。

「頼朝さん。何が？」

「はい。それが」

桜たちが、廃ビルで戦っていたとき。

弁慶は他の組員と西園寺家で待機をしていた。

「弁慶の兄貴！客人が来てます。」

「客だと？今は親父もないから追い返せ。」

組員は玄関へと走る。

「こんな時間に何だっただ、」

時計は午前6時。

あきらかにおかしい客人であった。

組員に追い返すように指示をしたが、少し胸騒ぎがした。

「おい待て！」

大声で呼び止める。

返事が返ってきた。間に合ったようだ。

「俺が直接追い返す。下がっている。」

「へい。」

弁慶が玄関へ行くと、一人の男性が立っていた。

大柄な体躯に灰色の長いコートを着ており、どこか異様な雰囲気をも出し出していた。

早々に早く追い返そうと思った。

「悪いが、親父もいねえ。今日は帰ってくれ。」

「そうか。」

立派な日本語を話す。

外国語だったらどうしようかと思った。

「でしたら、これだけでもいいので渡してもらえませんか？」

男はコートの中から、手紙を取り出した。

その手紙には、文字が書いてあった。

「九……龍。九龍!？」

それに気づいたとき、弁慶の身体にはナイフが刺さっていた。

「がっ……」

まだ動ける。弁慶は力を振り絞り、相手を睨む。

だが、すでに男は弁慶の後ろへと移動していた。

「ま……て……!」

男は首だけ振り向けると、冷たい目をしながら言葉を残した。

「お前はもう、負けている。」

瞬間、身体中に刺された大量のナイフに気づいた。

「ぐあああっ……!」

「もう切られてる。」



その叫びを聞いて、組員がわらわらと出てきた。

「兄貴っ!!」

ナイフを持っている男を見て、こいつがやったのかと思い、ドスを抜き出して突撃をした。

向かってくるドスを指だけで掴み、弁慶へと振り返った。

「我が名は、“九龍の幹部、ダオ”だ。覚えておくといい。」

そのまま、前へ進むと同時に組員が倒れていく。

「そんな…。」

七海は自分がない間に起きた惨劇を聞いて、血の気が引いた。

「犯人は…?」

「おそらく九龍の幹部かと。」

「あいつら!!」

ぐっと唇をかむ。何もできない自分を悔やんでいた。

「私は…」

「お嬢。」

すると、屋敷内の電話が鳴った。

話を中断し、失礼、と言い頼朝が電話を取りに言った。

「はい、」  
『どうも、私は九龍の者です。』

頼朝の手が一瞬震えた。まさか、襲撃したグループから連絡があるとは思ってもしなかった。声からして女のようなようだ。襲撃犯ではないが動揺を気取られないよう、気を取り直し対応する。

「何のようだ。」

『すこし動揺してるかなと』

「……」

『本題に入ろう。西園寺七海を出せ。』

「断る。」

『そうくると思った。なら貴様らに有益な情報をやろう。どうせ近くにいるんだろう？スピーカーボタンでも押して聞かせてやれ。』

チラリと後ろを見ると、七海がいた。何の話をしているのか聞かえているわけないが、頼朝の様子からおおむねどういった話かは理解しているようだ。

概要を七海に伝え、スピーカーボタンを押し、七海にも通話声が聞こえるようにした。

『さて、貴様らがほしがっている九龍の当主である、“九龍”の首だが、くれてやるチャンスをやろう。』

「それを信じてでも思っているのか？」

『私は、組を辞めたいんだよ。だから貴様らに情報をくれてやってみる。』

七海としては、現在もう手がかりがないので願ってもないことだが、信憑性にかける。

『まあ、信じる信じないは貴様らの自由だ。いいか、明日の17時横浜の××港で船に乗り中国へと帰還する予定だ。極秘のことな小さい船で移動することもあって、警備の数もすくない。つまり襲撃するならここしかない。』

「そうか。」

『やるときは、私も手を貸してやる。16時30分だ。それまでに付近のY倉庫に來い。チャンスはこれを逃したら一生ないと思え。』

そして一方的に電話を切られた。

「お嬢…どうします。」

「行きましよう。」

七海は迷うことなく言った。

「父が倒れている今、私が西園寺組を支えていかなくてはいけない。私の組をここまで破壊した九龍をこのまま中国へ帰すわけにはいきません。情報が嘘であっても、そこには九龍のメンバーがいるはず。返り討ちにします。」

七海の目はいつになく真剣であった。

頼朝は思った。西園寺七海は本当に、組の長である大海の血を引いている、迫力のある眼をしている、と。

「だから…」

七海は眼鏡を置いた。

そして、大海の部屋まで歩いて、奥にある刀・名刀“時雨”

「私は闘います。父のため、みなさんのため。それが私の願いです。」

### 83 七海の眼鏡

次の日の雲の上学園

「ねみ〜。」

「おい桜。一応…力は怪物、胸はペツタンコの色気なしたが、一応女なんだからそんな…」  
「うっさい！」

隣を歩いている識へと鉄拳制裁。

「ウチ生徒会室に忘れ物あるからちょっと行ってくるから。」

「あ、待て桜。西園寺のことだが。」

「ん？七海？」

「九龍って組織知ってるだろ。」

記憶をたどる。う〜んっと頭をひねる桜。

「先日戦ったやつらだろ。」

「ああ、誘拐したやつらね。」

「あいつらは、目的のためならしつこいって話だ。だから西園寺は…」

「大丈夫っしょ。頼朝ってデカイやつ、あいつが傍にいるから。」

少し、遠い眼をしていたが、本人は気づいていなかった。

「じゃ！遅刻しないつもりではいるから！」

「サボるなよ！」

桜は駆け足で生徒会室へと走っていった。

ゴウンつと古めかしい音がなり、生徒会室への直行エレベーターが上がる。

雲の上学園の象徴とも言える時計台の中に生徒会室がある。時計台自体が設立と同時にできたものなので、その中のエレベーターも古めかしい物であった。

チンつと音が鳴り、扉が開いた。

桜の用事は、自分の机にP Pを忘れていただけであった。

「さつて、ウチのゲーム 授業サボりのお供ちゃん」

授業サボる気満々だった。

机をあさっていると、ゴトつと音がした。

「ん？隣かな？」

隣の部屋は何もないが、見晴らしのいい部屋で、バルコニーもある部屋である。サボりにはもってこいの部屋でもある。

「南かな？」

サボり常習犯である南を考えた。

仲良く授業をサボろうと思ひ、明るい声で登場しようとした。

「みつなみ 授業さぼ……」

そこで見た人物は予想外の人物であり、眼を見開いた。

「七海…」

七海がいた。昨日まで謎の不登校をしていたのだが、今日になってなぜかと思ったが、今はそんなことどうでもよかった。

七海は無事に登校してきた。ただそれだけが嬉しかった。

「七海。久しぶり…」

どこかぎこちなく挨拶をしてしまった。

先日あんな目にあつた人物で、それを助けたのが桜だが、そのことは秘密にしようと誓っていた。

「ええ、桜。」

七海もぎこちなく挨拶をした。

自分に後ろめたさがあつたためか。

「こんなところに、こんな時間にどうしたの？」

「忘れ物…かな。」

「“忘れ物”か。」

桜は内心、“忘れ事”ではないかと思っていた。

「ウチね…」

「桜。」

急に言葉を遮るように止められた。

後ろを向き、表情が桜に見えないようにした。

「私ね、昔さ。不良だったでしょ。」

「あ、ええ。」

「だからさ、誰も近づかなかったし、話すことがなかったでしょ。だから桜が話をかけてくれたとき嬉しかった…ようなうざかったよな。」

「おいおい…。」

「まあ、それと、アンタが生徒会に誘ってくれたとき。すっごい嬉しかった。いまさらだけど、ありがと。」

桜は急に嫌な予感がした。

七海がどこか離れてしまいそうな、そんな気がした。

「な…。」

「じゃあね。桜。」

「待って！」

何を言おうか考えていなかったが、つい呼び止めてしまった。

「何？」

「あ…いや。」

何か言わなくてはいけない。そんな衝動にかられてしまう。

そして必死に言葉を探して振り絞った答えが

「明日も来るよね？」

不良時代の七海に言った言葉が出てきてしまった。

七海は少し虚をつかれたように呆然として、すぐに笑いながら。



「うん。」

ただそれだけ応えて、生徒会室を出て行った。

「あれ？」

桜は違和感を感じる。七海の言葉にではなく“七海自身”に。その違和感を考える。

「そうか！何で気づかなかった！」

机に手を置いたとき、カチッと音がして、プラスチック製の何かが落ちた。

それを拾い上げたとき、桜の疑惑が確信へと変わる。

「七海は眼鏡をしていなかった。いや、ここに置いていった!？」

七海は不良時代には眼鏡をしていなかった。眼鏡をつけ始めたのは、若干更生した後だった。

七海の状態から察する、眼鏡を捨てる…つまり今の暮らしと決別する証。

頭の中でいくつかのシナリオが浮かぶ。その中で最悪かつ、現実的な事を口に出す。

「死ぬ気だ。恐らく九龍と刺し違えてでも…。」

七海は、九龍に一太刀でも入れることができれば、死ぬ気だ。

桜は七海の態度を見て、そう思った。

## 84 桜の決意

桜郎

いつものように元気がない桜を見て、茜が声をかけたが、桜は何も答えられなかった。

（七海を止めるか？ だけど… 七海の強固な意志を止めていいのかわの眼にはそれだけの覚悟があった。 どうすればいい？）

考えながら歩いていたらいつのまにか、一人で屋敷の湖を歩いていた。

水面に映った自分の顔を見る。

（なんて眼…、こんな死んだような眼じゃあ何も…、七海を助けるなんて…）

大きく溜め息をつく。

後ろでジャリつと小石を踏む音が聞こえた。振り向くと、庭師である白井がいた。

「白井君。 ずいぶん久しぶりだね。」

「ええ、最近はお出番をずっと黒井に取られてましたから。 それよりお嬢。 悩み事

ですか？」

「…まあね。」

内容は言う気にはならなかった。

「ふむ…」

白井は何か考えるように手を顎の下へとやる。

「私は庭師をしていつも思うことがあります。我が庭園には美しい花がたくさんあります。」

「はあ。」

「でも全て美しかったわけではありません。中には腐ってしまう花もありました。」

庭の花畑は全て白井が管理しているので気が付かなかった。

「花は全て私の娘、子供とってます。ですが、他の花に影響を及ぼすとわかっていたら、何もしないわけにはいきません。」

「捨てるの？」

「活かすのです。」

「活かす？」

「確かに捨てますが、その場所に新たな命を植えます。言ってしまえば花の為に」

「はなく私のエゴかもしれません。」

後ろからビニール袋を取り出した。中には黒く腐った花が入れてあった。

「私は恨まれても、命を救うことをします。ですからお嬢も他人に恨まれても恨まれても、時には自分の思った正しいことをしなくてはならないと思います。後悔することになっても何もしないで後悔するより何倍もいい。」

自分が正しいと思っていること。

それは…

「お節介かもしれないよ。」

「それでいいじゃないですか。人はみなエゴイストです。」

はは、と少し笑ったら元気になった。

「ありがとう、白井君。少しでもうするべきかすっきりした。」

「そうですか。お役に立てて光栄です。」

桜は立ち上がった。

「ちょっと出掛けてくるよ!」

「はい、いつてらっしゃいませ。」

西園寺家

七海は稽古部屋で頼朝と瞑想をしていた。

長い沈黙の後、七海が呟く。

「頼朝さん。」

「どうしました？」

「まだ父が回復しないというのに、九龍を殺す機会がきて、あなたを危険なこと

に巻き込んでしまつてごめんなさい。」

「何を言いますか、親父が動けない今、貴女が西園寺組当主です。

俺は貴女の刀

です。」

ガラツと部屋の襖が勢いよく開く。

「俺もいるぜ！」

「弁慶！」

「弁慶さん！」

包帯を外した弁慶が立っていた。

「身体は大丈夫なんですか？」

「俺は身体の頑丈さがとりえですぜ！」

胸を叩いて、頑丈さをアピールする。頼朝は気づいていた。それがやせ我慢であることを

だが、頼朝は止めなかった。それは幾多の戦いを共にしてきた弁慶だからこそ止

めなかった。弁慶を信頼して、共に戦うことを選んだ。

「では、お嬢。そろそろ時間です。」

「うん。」

七海は着物の襟を正す。  
同時に、西園寺七海の人格が変わったかのような声、そして目付き、  
全て風格が  
出てきた。

「いきましよう。」

「お供します！」

桜邸

「桜嬢！西園寺家の行きそうな所が判明しました！」

コンピュータールームから黒井の声が響き渡る。

「横浜の××港です！」

「わかった！ハイヤーは！？」

「ダメです！前回の出撃で燃料が切れてます。」

「くっ！なら車で！」

「ダメです！現在渋滞してます。推奨する移動手段は自動二輪です。」

「バイク…って黒井君？」

いきなり黒井が黙りこむ

「乗れないよね？自転車とか二輪類いは…」

「はい…」

黒井は様々な乗り物の運転ができるが、唯一、二輪関係は運転ができなかった。

「ならまかせろ！」

玄関の方から識の声がした。

玄関へ行くと、識がバイクに股がって待機していた。

「識！乗れんの？」

「バイク便の仕事をしたこともある！問題ない！」

「よし、行こう！じゃあ、黒井君！茜さん！後処理よろしく！」

茜は心配そうな顔になった。

「桜：、それに識君：。必ず戻ってきてくださいよ。」

「もちろん。行つてきます！」

識の後ろに乗って出発した。

家を後にする桜の顔は少し憂鬱だった。

七海の行きそうな所を調べる時に、桜の情報網では限界があった。

そこで、なり

ふり構つてられない桜は最後の手段である東海林家本家の力を借りることにした

。東海林家がその気になれば衛生を使った操作はもちろん。様々な監視カメラに

ハッキングしての調査も可能になる。だが、それは本家に“借り”を作ることにな

った。

(どんな無理難題を押し付けられるか…)



「…桜！おい桜！聞いているのか！」

「おおう！なな何か!？」

「ボサツとすんな！さっき電話しなきゃとか行ってたがいいのか？」

「ああ、そうだった。え〜と…」

桜はヘルメットに内臓された電話を使う。操作ボタンは外側にあり、モニターはヘルメット内部に表示される。

「保険はかけなきゃね〜。」

電話をかけた先は…

『何でデメエこの番号知ってたんだよ…』

クラスメイトのエヴァであった。

「この前の大会の時に、携帯を見せてもらった」

『勝手に見やがったな!』

怒るエヴァとは対照的に明るい声を

「それで、仕事の依頼をしたんだけど。」

『仕事だと？報酬はちゃんと出るんだろうな。』

「ウチはお嬢様だよ。仕事を“完遂”してくれたらちゃんとあげるよ。」

『本当だろうな。で、何だ？仕事ってのは。』

そしてカクカクシカジカと話す。

『ざけんな！バーロー！ドタマに弾ぶちこむぞ！間に合っわけねえーだろ！』

「だからこそアンタに依頼したんだよ。どんな手を使ってもいい。後処理はウチらがやる。頼む。」

いつもと違いえらく真剣に頼まれたので、エヴァは断るに断わる気になれなかった。

『わかった。なら手段は選ばねえ。』

そして、電話を終わらした。

「エヴァに何を頼んだ？」

「ただの保険だよ。それよりちゃんと前見て運転して。ん？」

現状の体勢を見て桜はあることに気づいた。

「ウチのオツパイが背中にあたってるからって、興奮して事故るなよ」

「エアおっぱいが何言ってる！痛！」

桜はヘルメット越しに伝わる鉄拳を炸裂させた。

## 85 ドライブ・ハイ(前書き)

今回は少し日本語的におかしいところが多々あります。  
文章が下手ですみません

## 85 ドライブ・ハイ

「黒井君！七海との距離は？」

『距離2キロ。あと数分で追いつきます！』

横浜の国道を走っている。

識の用意したバイクで法廷速度を無視した走り、七海にまで追いついてきた。

「識。」

「何だ？」

「たぶん、七海の車を止めると同時に、ウチと大男の殺し合いが始まる。」

“殺し合い”と聞き、識は少し胸が痛くなる。

「本当にやりあうのか……って、もう腹くくってんのか。本当なら俺がお前の代わりに戦うのが男なんだがな。」

「ウチがやらないといけないんだ。七海のためにも。」

それっきり、その会話を終わらせた。

七海の車

「頼朝さん。弁慶さん。」

「どうしました。お嬢。」

「私のわがままにつき合わせてごめんなさい。」

後部座席から弁慶が顔をだしてきた、

「そんなことねえですよ！俺らの望みでもあるんですし！」

「弁慶の言うとおりです。お嬢。やつとの待ち合わせ場所についたら……」

「無論。西園寺組をここまで壊した罪を償わせるため、情報者もろともほります。」

その表情は冷たく、研ぎ澄まされた顔であった。

頼朝はサイドミラーを見て、違和感を感じた。

「頼朝さん？」

「お嬢。追って……、もしかしたら九龍のやつらが追いかけてきてもかもしれません。」

「本当ですか！アニキ！」

「異常な速度で近づくバイクがある。」

ヘルメットをしていて、誰かはわからなかったが、この車に向かっている感じがした。

「桜！見えたぞ！」

「識！まず最初にチェックしなきゃいけないのが……」

「何だ！」

「もし、運転しているのが、七海だったら最悪だ！七海の運転テクニックは異常だからね。まず車を停めるなんてことできないからさ。」

「その場合どうするんだよ！」

「考えはある。そのためのエヴァだから！」

「どづいっ……」

「さ、追いつくよ!」

一方的に会話を打ち切られてしまった。

だが、話している時間はもうないようだ。すぐ目の前に、七海の手が見える。すぐに横へとつけようと加速する。

すると、こちらの行動に気づいたのか、車はさらに速度を上げた。

「くっ! やろっ!」

識も負けじと、加速をする。

加速すると同時に七海の手は驚愕の行動に出る。

キイキイツと大きな音を立て、十字路でドリフトをし、右折をした。

バイクの達人ではない識が後だしで、それについていくことは困難であった。

ブレーキをかけ、どうにかドリフトをかける

が

別方向からブレーキ音になる。

七海は赤信号で右折をしており、合間を縫うようにドリフトを決めた。

だが、識はドリフトをかけるのが遅すぎた。反対車線の車が識へと迫ってきている。

「飛べえ!」



桜は交通事故を起こす前、七海が乗っていると思われる車の運転席を見た。そのとき、ある一つの最悪の条件がそろっていたことを知った。

「識、さつき運転席をちらっとみたんだけど、七海が運転してた。」  
「なにかまずいのか？」

識はいまひとつ桜の心境が理解できないでいた

「あんたは知らないかもしれないけど、七海はハンドルをにぎらせると、バケモノのような運転をするんだ！お陰さまでさつきはいたい目を見たでしよ。」

先ほどのドリフト。あれは並の腕でできり運転テクニックではなかった。

「だけだよ。俺はバイクのプロってわけじゃないぜ。なにか作戦がないと、また振り切られる。」

「だからこそその保険だ。エヴァに仕事を頼んだ」

「あの外人か。あいつ運転が得意なのか？」

「そうじゃない。もっと単純なことをしてもらおうか」

七海の車

「頼朝さん。先ほどのバイクのやつら。九蛇のやつら？」

助手席に座っている頼朝は少し考える。



確かに九蛇である可能性が高い。だが、九蛇以外にも追跡をして、今からすることを止めようとする人物に覚えがある。

七海が誘拐されたとき、一緒に救出にあたった女。そう桜である。

「十中八九、九蛇でしょう。」

頼朝はあえてそのことを言わなかった。

桜と七海は恐らく友人、それくらいしかわからないが、このことは黙っていたほうがいいのかも思えないと思った。

「今は？」

「もう追ってきていません。∴いえ、あれは。」

猛スピードでこの車を追ってくる影が一つ。

「きました。」

「ならさつきみたいに！」

七海はハンドルを切り、反対車線に乗り、強引に左折をした。

「おいおいおい！何だあれ！追いつけねえよ！」

さすがに識でもそれを追うことはできない。その技術がない。そこから一気に距離をつけられ識たちは七海を見失ってしまった。

「振り切ったみたいね。この港街を進めばやつとの待ち合わせ場所。」

「

「さすがです。お嬢。これならやつらも…」

常軌を逸したテクニクで、追っ手を振り切り七海は安心していた。その安心を一気に壊す音が炸裂した。

パアアン！！

つと破裂音。周りからではなく、自分の乗っている車から鳴った音だと確信したのは、自分の握っているハンドルの操作感の違和感であつた。

「パンク！？」

だが、七海はすぐに落ち着きを取り戻した。車輪一つパンクしているのだが、普通の運転と変わらない運転を始めた。

「お嬢、大丈夫ですか？」

「この程度なら、私の運転に支障はないわ。弁慶！」

「はっ！」

「周囲は？」

弁慶は後部座席から180度見渡すが、特別怪しい車はない。

そのとき、再びパアアンつと破裂音。パンクをした。

今度はその直後にまた破裂音。

「くっ！これは！！！」

さすがの七海も安定した運転をすることができなくなり、車が暴走

した。

「お嬢！ブレーキを！！」

「ここで車を止めるわけにはいきません！この西園寺組の車を！！」

だが、その思いとは裏腹に車は角で曲がることができず、正面にあった港の倉庫の中へと壁を破壊して入っていった。

幸運にもその倉庫は脆く、廃倉庫で誰もいなかったため、そのまま真っ直進。再び壁を突き破り、今度は倉庫の外へと出た。運転している七海は一度深呼吸をして、集中力を高めた。

「だけどまだ動くっ！！」

蛇のようにふにやふにやした運転ではあるが、目的地の方向へと進みだした。

速度が遅いが、確実に進む。待ち合わせの場所まですぐ近くなので、このままでも行けるはずだった。

だが、車の上に何か、大きな塊が降り注いで来た。

車のフロントにドォンと大きな音を立てて着地し、木刀を車体に突き刺した。

「きゃああああっ！！！！」

わけのわからない光景に、七海は取り乱し、運転操作を誤り、付近の硬い壁に激突をし、車を停めてしまった。

車に落ちてきたのは、ヘルメットをかぶった桜であった。

桜は木刀を抜き取り、地面へと飛び降りる。

それを見て、七海は逃げる事ができないのだからと悟ると、

「頼朝さん。弁慶さん。お願いします。」

「「御意。」」

三人は車から降りて、相手を目視する。

上を見ると、倉庫の上にはバイク、そして運転手がいた。

「おい！大丈夫か！？」

「問題ない！！早く降りてきな！！」

どうやら倉庫の上を走って、飛び降りたのだろう。なんてデタラメなやつらだ。と七海は思う。

もう一人が降りてきて、ヘルメットをかぶった二人。そして七海たち三人が向かい合った。

付近には煙を上げる車、そして少し歩けばすぐ港、ここは廃倉庫と廃倉庫が挟む場所。廃倉庫が並ぶエリアなので、人は誰もいない。聞こえるのは波の音、そして、船の汽笛の音が響いていた。

その場所からずいぶん離れたビルの屋上で…

「あの貧乳…、めっちゃくちゃ注文しやがって…、何が“走ってる車のタイヤを狙撃しろ”だ。ゴル じゃねえんだよ。まあできたがな。」

桜に事を注文されたエヴァがぼやいていた。

桜は先を見越して、七海の車のデータを送り、狙撃するよう依頼し

ていた。

そう、七海の車のパンクの原因はエヴァの射撃によるものであった。

#### 次回予告

雪音「わ！何ですかこのハイテクなスパイの基地みたいところは！居間ですよね??」

茜「あら、雪音さん。すっかり存在を忘れてましたわ。」

雪音「最近出番ないからって存在消すのはヒドイですっ!!」

茜「あらあら、私のほうがたぶん出てませんよ。雪音さんなんて、前章は桜と一緒に大会に出たじゃないですか？その間私は…」

雪音「あわわわ！ごめんない」

不知火「オレのほうが出てないっつーの。」

## 86 二人の想い

桜と識はヘルメットをかぶったまま、七海たちと対峙している。この静けさをやぶるように声を出したのは七海であった。

「あなたたちが…、九蛇の連中かは問いません。怨敵九龍の当主である九龍を滅する絶好の機会。そうでなくともやつらを滅する機会。あなたに邪魔はさせません。」

それを聞いて、桜は悲しい顔をした。もっともフルフェイスのヘルメットをしていたので表情はわからなかったが。

(七海…。七海にはそんなことを言ってほしくなかった。)

「あなたも顔をさらしたらどうですか？」

桜は言われて、ヘルメットへ手を伸ばした。それを見て識は桜へ小声で声をかけた。

「おい桜。いいのか？」

「戦う以上、ヘルメットは邪魔でしかない。あいつは余裕を持って戦える相手じゃないしね。仕方ない。」

ヘルメットをはずす。

ついでに着ていたライダージャケットを脱いで、雲の上の制服が出てきた。

素顔をさらすと同時に七海は目を大きく開けた。信じられないものを見た顔をしている。

「さ……く……ら？じゃないよね？」

先ほどの厳しい口調ではなくなっていた。  
桜は少し、本人たちとしては長い沈黙のように感じる間が流れた後、桜は声を出す。

「七海。悪いけどウチ…、桜だよ…。」

七海は二つのショックを受けていた。  
一つは、自分たちを追っていたのが桜であったこと。先ほど車上に降りてきたのは桜であろうことも容易にわかる。  
二つ目は、自分のことを知られた事。西園寺組の娘であることを知られたことであった。

「いつから知ってたの。」

「ちょっと前に料亭に言ったとき見たんだ。」

確かにあの場所なら雲の上の生徒がいてもおかしくない。迂闊だった。

七海は自分の行為の甘さに苛立ちを感じた。  
すると、横から頼朝が声をかけた

「お嬢。今まで黙っていましたがお嬢が誘拐されたとき、」

「やはり、頼朝さんだけじゃなかったのね。」

「気づいて…？」

「なんとなくだけだね。桜、どうして…。」

それは二つの意味を含んでいた。七海を止めていること。そしてなぜ西園寺家のことを知っているのかと。

「西園寺家のことを知ったのは偶然だよ。ある料亭に行った時、見ちゃったんだ。七海が車に乗るところ。」

「そう。あんなゴツイ連中と一緒にの車に乗ってたら、わかるよね。」

「そして、七海を止めてる理由だけど…」

「私のためだなんて言わないでよね。」

桜が次の言葉を言う前に七海が声で遮った。

その七海の眼は怒りを表すような厳しい眼付きだった。大抵の者ならここで怯んでしまうような眼付きであったが、桜は眼をそらすことなく、真っ直ぐに七海を見つめる。

そして、首を横へ振り、否定の意を表した。

「そんな友情万歳物じゃあないよ。」

「なら！どうして邪魔をする！！」

付近に声が反射して響き渡る。

「七海が来栖にボコられたとき…」

中学二年生のときの、話である。

「やっぱり桜だったんだ。私を助けたのは。私は気がついていたら家のベッドで寝ていた。誰に聞いても雲の上の保健室前で倒れていたとしか知らない。」

「まあそうだよ。ウチが七海を保健室前まで運んだ。あの時、あの前日、七海が何をしようとしているのかなんとなくわかっていた。」

「なら今回みたいに止めればよかったんじゃない？」

あえて嫌味のように言った。



「七海がしたいことをしようとしてる。だから止めなかった。止めることは七海の意に反するから。友達だからそうすべきかと思っていた。」

桜の眼から雫が落ちた。

頬を伝うように

「だから、もうあんな思いはしない。だから今は七海のためじゃない。ウチの勝手、でここにいる。ウチの勝手であんたをこれ以上かせない!!」

木刀を振るい、七海へとまっすぐに向ける。

「なら私はそれを振るい払う!」

そう言うと、頼朝が前へと一歩進む。

「その役目、この頼朝が果たします。」

「兄貴、俺も!っつ!」

弁慶も頼朝に並ぶが、傷が痛み出す。

「弁慶、お前はここでお嬢を守れ。」

「けど、兄貴!」

「あいつは俺が殺す。」

その瞬間、すさまじい気迫を感じさせた。弁慶は後ずさり、遠くにいた桜もビリビリを気迫を感じた。

自分の持っていた日本刀を弁慶へと預ける。今度は、七海へ手の平

を向ける。

「お嬢、あなたの魂、お借りします。」

七海はそれが何を意味しているのか理解していた。うなずくと、持っていた刀である、西園寺家の家宝である名刀“時雨”を頼朝へと渡した。

「お借りします。」

そして鞘から抜き、刀身を出す。太陽光が刀を照らし、光り輝く。

「いい刀だね。七海。」

「家宝だからね。桜、一応頼むけど、引いてくれない？じやなきや私はあなたを殺さなくちゃいけない。」

「答えは…」

木刀に力を入れる。そして、地面を削るように木刀を振り、塵を舞い上げる。

「却下だあつ！！！！」

七海は目をつぶり、何かを考えた。

「そつ…、なら、頼朝さん。お願いします。」

頼朝が前へと出る。

「識、手を出すな。」

「交通事故にあっただばかりなんだ。出せねえよ。行って来い。」

桜が前へ出る。

二人の視線がぶつかる。

港に船が通り汽笛を鳴らす。

音が倉庫街へ響く。

音の終わり、それを合図に二人の目が大きく見開かれ、足を動かした。

## 87 野獣達の牙（前書き）

すみません。一部分文章が抜けているところがあったので、加筆しました。

## 87 野獸達の牙

桜の村雨、頼朝の時雨が音を上げ、衝突する。

「ぎっ！」

「くっ！」

二人の力がぶつかり、わずかに揺れながら刀を合わせる。力勝負となり、二人は渾身の力をいれ、押し合う。

体格的にも頼朝の方が有利であった。

桜を木刀ごと押しこみ、隙をつくった。

「ぜえい！」

木刀で受け止めるが、頼朝の力で吹き飛ばされる。身体は流され、地面へと転げ落ちる。

「なんつー力！ってうわ！」

さらなる追撃、が桜を襲う。

床に寝ている桜へと、刀を向け両の手で突き刺す。

頼朝のいない方向へと転がりながら避け、地面を手で押し、立ち上がる。

そこへ、次なる攻撃、切り上げ。

まだ立ち上がって体勢を立て直していなかった。それゆえ防御はと

つたが、またも簡単に 木刀をはじかれてしまった。

「まずいつ!!」

「ふっ!!」

頼朝も刀を上げた状態だったので、前蹴りを炸裂。

大柄な体躯をもった頼朝の蹴りは強烈だった。

桜の身体は後ろへと飛ばされた。

そして、後ろにあった倉庫の壁にぶつかり、ガシャアアんと大きな音を鳴らす。

幸い、ぶつかった壁は、硬い壁ではなかったので、多少のダメージで済んだ。

ダメージの反動で少し動きが鈍っていると、頼朝の刀が襲ってきた。縦斬り。桜は頼朝の構えで察する。

(これは…、受けきれない!!!つかやべえ!!!)

足に緊急時の力を入れる。そして、後ろへ行くための力を解放する。ぶつかった時に、壁の耐久性はおおよそ把握していた。その計算を考えての行動だった。

壁をぶち壊し後ろへと飛びのく。

頼朝の刀は空気を切る鋭い音を出し下へと空振りした。

桜は立ち上がりながら、頼朝がわずかにきつた倉庫の壁を見た。

“くつきり”と刀の形を残していた。それは鋭い切れ味、そしてそれを成し遂げる頼朝の腕を物語っていた。

「ふう…。」

桜は服をパンパンっと払い、ホコリを落とす。

「まったくなんつー力だよ。あんたは、」

「姉さんもデタラメな動きをなさる。獣を狩りしている気分だ。」

「獣ね…。ウチは女の子だつーのにな。その表現だめでしょ。でもあんたも野獣のような力だな。」

「獣…か。」

頼朝は笑った。七海には背中を向けていたので笑い顔を見せることはなかった。

「たしかに、俺もあんたも人間とは言われないかもしれないな。」

ふたたび、刀を構える。

「なら、俺ももう少し荒々しく野獣のようにやるか。」

頼朝が駆ける。桜のいる倉庫内へと走り、刀を振るう。「

「うおおおおおー!!!」

すさまじい斬撃。これは受けきれないと思い、桜は避ける。

だが、桜も先ほどまでとは違った。

「んなるおう!」

倉庫内にあつた機材を踏み、三角跳び。頼朝の頭上へと移動する。

頼朝にとっては今までで始めて相手にする部類の敵だった。

「本当に獣、猿か！」

頭上で回転しながら木刀を振り下ろす。

頼朝も宙にいる桜へと身体を捻りながら刀を当てる。

その木刀がぶつかつた反動で、頼朝との距離を開けるように飛ぶ。着地するやいなや、直に頼朝へと駆け寄る。

「でああああ！！！！」

走る桜を見て、頼朝は感じた。

(コイツ…まさか！)

乱暴ななぎ払い。ゆえに頼朝は隙が多いと感じたが、手が出せなかった。

再び、桜の剣が頼朝に向かう。

(早くなつてきてやがる！)

桜は刀を振り回すたびに威力、速さが上がってきていた。

エンジンがかかってきた

そのような感じがする動きであった。

頼朝は防戦一方になっていた。



( やつのペースに乗せられてるっ！ここで、断ち切らねば！ )

頼朝は今一度力を込め、桜の刀の流れを止めるべく、力のぶつかり合いに持っていく。

刀と刀がぶつかり、そこで止まった。

ぶつかった瞬間、桜は一気に力のベクトルを頼朝と同じ方向へと入れる。

身体、そして刀の動きを頼朝に合わせる。

「六ノ型……」

流れて刀を反らすそして、

「流水”(未完成)「

飛び回し蹴りを顔面へ放つ。

カウンター技、それこそが“六ノ型・流水”だが、まだ未完成であった。

蹴りを顔面へと受けた頼朝は大きくのけ反る。愛用のサングラスが割れた。

その様子を見て、桜は木刀に力を込める。

外では、倉庫の中へ入った頼朝と桜の戦いの音だけが鳴っていた。

音の発信源を目視できないが、三人は倉庫を見たまま動かなかった。ふいに、識が七海へ声をかけた。

「西園寺。」

「何。」

識は七海を見たが、七海は倉庫を見たまま、識を見ることはしなかった。

「これが、お前の望んだ生き方か？」

「そうよ。それが？」

「友達と戦ってでも、家の仁義とやらを通すことがか？」

それまで、即座に返答していた七海はその質問にだけ、返答がわずかに遅れた。少し怒りを込めた眼を識へ向ける。

識はそれを見逃すことはしなかった。

「だから何！？私は“今”は西園寺家当主！！西園寺七海なんだよ！！」

言葉を吐き出すように言った。

対して識は口を開けたその時、

ガシャアアアン！！

先ほど桜が倉庫を壊したときになった音がした。桜が倉庫から飛ばされてきた。

「つてえええ！！！！今頭打ったあ！！」

頭をさすりながら叫ぶ。  
遅れて倉庫壁を壊して頼朝が歩いてきた。

「まったく、本当にちょこまかする野郎だな。」

桜は笑う。だが、その時

ズキッ

身体中が痛みだした。

（ぐっ！まさか、前の戦いの傷が！？）

少し前、桜は爆破をまともに受け、満身創痕の状態であったが、桜の並々ならぬ生命力で日常生活はまったく問題なかった。だが、今戦闘をし、傷口が開き、さらに身体に無理な負担を加えたせいで、完治していない身体が痛みだした。

その様子を必死に隠したつもりであったが、予想外の事態に頼朝の眼は誤魔化せなかった。

「戦いの最中に甘いぞ！！！」

痛みに一瞬の気をとらわれている間に頼朝の接近を許してしまった。それは今の“死合”では愚かで、致命的なミスであった。

（しまったっ！）

頼朝の居合い。

素早い斬撃。

桜は…

赤い血が横腹から飛び出していた。

とっさに回避して致命傷は避けることができたが、刀で人体は切られていた。

「っ！！」

横腹を押さえ、出血を少しでも止めようとする。

（馬鹿かつ！なんてことを…。クソっ！血は…応急処置は無理か…）

これからも戦いが続くことを考え、桜は手を離し、代わりにその手を木刀へと伸ばした。

頼朝は壊れたサングラスを投げ捨て、桜に感銘していた。

「感心物だな。戦う者として。だが、」

頼朝は再度、居合いの構えをする。

「次で、確実に仕留める。」

眼からは溢れ出す殺気を駄々漏れにしているように桜は感じる。

ふうっと深呼吸。そして頼朝を見つめる。

「うちも長くはやってられないな。」

桜も居合いの構えをする。

「三ノ型・“閃光”」

二人がすり足で近づく。

構えの形を微動だに崩さぬよう静かに、そして、確実に相手との距離を見ながら。

三ノ型・閃光は、実の所まだ未完成の技。であるが、居合い斬りをする技でそれ自体は完成に近かった。なので問題ないと思いき桜は選択した。

自分の踏み込む足と刀の長さ。そこから考えられる自分の制空圏。ふたりの制空圏がぶつかったその瞬間

二人の刀が一瞬ぶつかり、離れ、さらにぶつけ、離れ、と二人の打ち合いが始まった。

風が舞い上がり、小石から始まり、近くの方が二人を軸に飛ばされていく。

最中、頼朝が口を開いた。

「負けられん！！お嬢のためにも！！」

「七海のためだとお！？言ってみろ！お前の望みはなんだあ！！」

先ほどのように桜の攻撃速度が上がっていく。それにつられるように頼朝も速度が上がってきていた。

「決まっている！！今はお嬢の望むことを叶える！！それだけだ！」  
「組のためとか言うかと思っただ！」  
「親父とはそれ以上の大切な絆で結ばれている！！その娘のお嬢は俺にとつても大切な存在だ！」  
「七海いいいい！！！」

急に七海が呼ばれた。

「お前の望みは何だ！」  
「く…組のため私は…」  
「組の望みじゃねええ！“西園寺七海”個人の話だ！組とか、親父の為とかじゃない！」

七海は動揺した声で応える。

「私の家を守る。そのために九龍を滅ぼすことよ。」  
「家を守る。みんなと暮らすそうさ！そして頼朝！」  
「…」  
「本当に七海の望みを叶えることが望みか！？」

そのとき、頼朝は桜の瞳を見た。まっすぐに綺麗な瞳。それを見て

二年前

「親父、見てください。あれ。」

黒いリムジンを運転していた頼朝は後部座席にいた西園寺大海、つまり七海の父親に声をかけた。

「何だ？」

車を停止した場所は雲の上学園の近く、時間も下校時間であつた。頼朝が見る方向には桜、七海、南がいた。

「見てください。前まで一人だつたお嬢に友達ができたようです。」  
「ほう。」

「あんな笑顔をするお嬢を始めて見ました。」  
「なあ、頼朝。」

大海は真剣な顔をした。

「俺は昔つからあいつを極道の道へ進めることを考えていた。だが、最近のあいつを見てるとそうじゃなくてもいいんじゃないかって思う。」

「何故です。お嬢が継がなくては組が終わってしまいます。」  
「あの笑顔を見たり、友人の話を知ると、俺はあいつに笑って暮らしてほしいと思つちまうんだ。継いでほしいのは確かだ。だが、継いだとしても組のためとか、そういうことで死ぬようなことはほしくない。」

「親父……」  
「幸せに暮らしてほしいんだ。父として……。お前が思つてるようにな。」

そして、今は剣を振るう。  
七海のため、しかし

（お嬢を殺すため…剣を振るのか？俺は？いや！）

その時、桜の身体が再び痛みだし、一瞬力が抜ける。

そこへ頼朝の刀がぶつかり、刀が宙へと、上へと跳ね上がる。

頼朝は上段に構え、刀を振り下ろす。

桜は丸腰である。

桜の眼は諦めていない。頼朝の刀を全身系集中させて凝視する。

そして、気づいた。刀の速度がぶれて落ちていたこと。

「零ノ型！」

刀を左手で掴み取る。手のひらからは大量の出血。だが、速度に合わせ手を動かし、真剣白羽鳥もどきをした。

「無刀取り」

そしてわずかに刀の軌道を変える。

丁度、そのとき宙に舞った桜の村雨が桜の手元に戻ってきた。慣れた手さばきで木刀の底へ手のひらを当てるように添える。

木刀が指すは頼朝。

桜はまっすぐ腕を伸ばし、木刀を頼朝へと突き刺した。

「一ノ型“突式・獣牙”」



## 88 戦いの後へ

桜の強烈な一撃。放った突きは頼朝の腹部へ突き刺さり、後方、それは七海の近くの車へと飛ばされた。

車へ飛ばされた頼朝は、車体をへこませる勢いで飛ばされた。

「ぐはああ！！！」

そのままぐったりと気を失った。

「はぁ…はぁ…、ぐっ…」

気を失っている頼朝よりも桜の方が出血量でいえば気絶してもおかしくない状況だった。

先ほどの頼朝の刀を手で受け止めたとき、左手を刃に当てた為、かなりの血が出ていた。

「しばらくは…左は使えないな…」

腹部、そして左手からの出血、その他開いた傷口など、見るにたえない姿である。

その先、七海は

「どっぴして…、どっぴして…」

七海的眼から涙がこぼれていた。

「どうして？桜？」

「頼朝さんと刀を交えて…わかった。あの人が望んでいたのは…、組じゃない、七海本人が幸せでいること…だったんだよ。死なないこと…、あんたを死なせたくないって思ってた。」

「…そんな…、私は…、でも私は！父をあんな目に合わせたやつらを！」

「死ぬことは、あんたの父も悲しむ。命をはる所じゃない。死ぬことだけはダメだ。」

その時、気絶していた頼朝が気を取り戻した。

「お…嬢。」

話すだけで精一杯で、その場から動かず、口を動かしていた。

「頼朝さん…私…」

「すみません…、俺は…お嬢が…友人と笑っていられる未来を望んでしまいました。」

それ以上七海は何も言えなかった。

「識、行くよ。九龍のところへ。」

「桜！？あんたまさか！？」

「腕一本と首が動けば十分だ。」

そのとき、弁慶の携帯がなった。

「…はい、…はい、え！！はい！お嬢！！親父の意識が戻りました  
！！！」

「お父様が！？」

七海の足がガクリと崩れた。  
そばへ弁慶がかけより電話を渡す。

その頃、港では。

「…ふう。」

桜には大橋と偽名を名乗った、九龍の娘にあたる“九蛇”が港で樽の上に座っていた。  
吸っていた煙草を地面へ投げるつけ、足でこする。

「来ないか。」

七海たちを呼び出した九蛇は予想外のことが起きたなあとはやいていた。

「なあ、ダオ。意外だったな。」

後ろから大きな影、ダオが現れた。

「ええ、西園寺七海なら動くと思ったのですが。ですが、計画は我々だけでも実行は可能です。」

「西園寺家が行動を起こすということが都合よかったんだがな。」  
「仕方がありません。時間もありませんし、やりましょう。」

九蛇は立ち上がり、歩き出す。その後ろには五つの影。

少女が二人、フェイ、ファイ。

大きな男、ダオ

痩せた筋肉質の者、マオ  
マスクをした女、マスク

彼らは歩き出す。  
九龍の船へと…

七海は電話を受け取り、泣いていた。

『七海…、組のためにとか俺の仇だとかつもらねえことで死ぬようなマネするもんじゃねえ。』

「でも…、私はいつらが許せない。」

『たしかに状況は聞いた。だがな、お前の命をかけるヤマじゃねえ。俺はピンピンしてる。』

電話をしながら七海は、うなずきながら、泣きながら、応えていた。

その様子を見て、桜は思う。

(父か…、ああいうのっていいな。信頼感があるっていつか…。)

それだけ思うと、桜は踵を返し、識の元へ向かう。

「行くのか。」

「それが目的でもある。」

識と桜はバイクにまたがり、この場を離れていった。

## 九龍船

船への入り口は一つ、そこへ配備されている組員は何事もないだろうと、あくびをしていた。  
そこへ、九蛇がやってくる。

「あ、九蛇様。たしか船には乗られないはずでは？」

「父上に用がある。どけ。」

頭首の娘である九蛇の命令は絶対である。

道を開け通す。

その後ろ、九蛇の側近にあたるフェイ・ファイの二人がついていく。

船内の一室。パーティーも行つことができらるほどの広さを誇る部屋で九龍が席に座り、何かを書いていた。

部屋に入ってきた九蛇に気づいたようで手を止めた。

「どうした？」

「父上、話があります。」

「今は忙しい。後にしろ。」

「今必要なんです。」

やれやれという感じで、近くにこいと言った。

「あいかかわらず大勢のボディガードをつけていますね。」

部屋にもいたる壁にボディガードが待機をしている。

その他、船内にもいたるところに組員が待機していた。

「話とはなんだ。」

「お父様。私は常々あなたの行動を見てきて思っておりまして。」  
すると、九蛇は腕を腰へと回す。

「あなたのやり方は手ぬるい。私ならもっとうまくやれると。」  
「ほう、では私を殺して、頂点へと立つか!？」

九龍は机を蹴飛ばし、腰に入れていた拳銃を取り出し、九蛇へと向ける。

「我が一族、親を殺傷し、頂点を奪おうとする歴史は存在した。だが、全ては失敗に終わる。我が“九龍”は貴様にやるには早い!」  
「いいでしょう。では早いか、私の实力を見て判断していただきましょう。」

それを合図にしたかのように、船内で悲鳴が上がる。

「すでに兵を、いや小娘二人か。」  
「ええ、私が鍛え上げた、フェイ、ファイはよく働く。」  
「だが、二人はこの部屋の外。この部屋にいるのは貴様一人、どうする。」

部屋の中には九蛇を中心に囲んだ組員が銃を向けている。

「お父様、私はあなたの知らない所で強くなりすぎた。」  
「何を言っておる。」

「“言霊”という言葉をご存知ですか？」  
「知らん。」

ふうっとため息をつく。

「説明するのも面倒だ。お父様、さよならだ。」

まるで勝利を確信しているかのような台詞。自分の娘にそこまで言われてさすがに九龍も怒りにまかせて、言葉が走る。

「撃てえ！」

その言葉と同時に九蛇ばつぶやく。

「『止まれ』」

すると、九蛇を囲んでいた組員の動きが止まる。

その様子を見て、九龍は組員が九蛇の言葉をまともに受けたのかと思ひ、さらに怒りを増した。

「ふざけるな！九蛇を撃ち殺せえっ！！」

組員が再び照準を合わせる。それと同時に九蛇がまた呟く。

「『貴様らは寝ている。』」

その言葉を発すると、組員は全員急に意識を失ったかのように倒れ始めた。

摩訶不思議な光景に九龍は動じ始めた。

「き、貴様…何を！！」

「ですから、私が強くなりすぎたということです。では、」

バン！つと発砲音。

九龍の持っていた銃が火を噴いた。

飛ばされた弾丸は動揺していたため、九蛇の横を通り過ぎていった。

「く……くるなあ！」

「死ね。」

九蛇が部屋を出ると、それは惨劇という言葉が出てくる光景であった。

フェイ、ファイの二人それとダオが外から乗り込んで、組員を壊滅状態にしていた。

数名の反乱に賛同した組員を残して。

部屋から出てきた九蛇を待っていたダオから上着を受け取り、手渡された用紙に目を通す。

「お疲れ様です。」

船の外にはマオとマスクが暇そうに座っていた。九蛇が出てきたのを見て、マオが大声で叫んだ。

「ちょっと！九蛇ちゃん！！こっちにはぜんぜん人がこなかったじゃないの！！それにマスクが今日はブルーな日だからやりにくいわ！！」

隣では以前はしゃべりまくりであったマスクがうつ病であるかのようにならなくなった。

「ほら！アンタも何かいいなさいよ！」



『ワタシ…ハ…イケン…ナシ』

その様子を見て、九蛇は

「それは済まなかったな。だが、お前たち二人が船内で暴れると、船を壊しかねないからな。」

マオはまだ不満があるようで、ぶつぶつ言っていたが、九蛇はそこで話を無視し、歩きながらダオと話をし始めた。

「状況は。」

「現在、反乱に賛同した兵が拠点制圧のため活動中。制圧後、貴女様の“九龍討伐”の発表を待つべく待機することです。」

「よかるう。技術班の“ミラ”はどうなっている。」

「ミラ博士は現在潜入操作にて、技術の回収に努めております。例の…」

「ああ、“あの学園”だったな。ふふ、あの学園と私のやることはどこか因縁めいているものがあるな。」

何かを思い出し、笑みがこぼれる。

「それから“鏡恭介”殿の件は…」

「それについては移動の車で聞こう。」

船を降り、ダオが運転する車を待つ。

船はマオとマスクが運転し、予定された場所へと運ぶ。

「では、始めるか。我が組織、“九蛇”が門出として、父よ、安らかに眠るがよい。」

THE AFTER…

桜と識が港へ行くと、七海の言っていた時間が過ぎていたので、誰もいなかった。

その翌日。

包帯をグルグル巻きにしながら桜は学校へ登校してきた。

「ちよつと桜！？何それ！！？」

生徒会室へ入ったとき、部屋の中にいた氷柱に言われた。

「え〜つと…、ドーベルマンにかまれた。」

「嘘！？」

さすがに本当のことは言えなかったので、適当に流した。

「これなんだけど…、」

氷柱が手に持っていたのは、七海的眼鏡であった。

「七海的眼鏡よね。忘れたのかしら？」

七海的眼鏡…それは、不良であったその時代と決別するためにかけた物であった。そして、同じく、生徒会を辞め園寺家を継ぐため、今の生活と決別するために捨てた眼鏡であった…“が”

エレベーターが昇り、一人の人物が出てきた。

「おはよう。昨日眼鏡忘れちゃった。」

再び、日常が始まった。

#### 次回予告

桜「やつとこの章が終わった…。」

識「長かったな…」

桜「この話は連載前から考えていたけど、文章にすると、大変なんだなってよくわかった。」

識「まったくくだな。作者があまり本を読まないから、文章を作るのに大変だった。」

桜「それはさておき、今回は6月の話だから、次回は7月の話でもやるのかな？」

識「ああ、期末テスト編だ。」

桜「なっ！！きつきき期末テスト??？」

識「高校生なんだから当たり前だろ。」

桜「いや、うちはこのままバトルマンガにシフトしてくれたら嬉しかったけど…、テストって…テストって…」

氷柱「言っておくけど、私とクラスが違うからノート貸しても意味ないわよ。」

桜「あ、氷柱。いつの間に。」

氷柱「それと、テストの成績が悪いとペナルティがあるらしいわ。」  
桜「んなあ!？」

氷柱「詳しくは、次回本編でね。」  
桜「あ、締められた！とととにかく、次回、  
“期末テスト編”  
！」

## 89 第七章 雲の上期末テスト

7月、学生にとっては夏休みへのカウントダウンと同時に、期末テストへのカウントダウンを始めている時期。

雲の学園は、7月21日から夏休みが始まるが、その六日前よりテストが五日間連続で行われ、最後の一日、つまり20日にテストが返却される。

テスト一週間前の生徒会室

「夏休みどこ行こっか！」

「わたしい、海！」

「私は海外！」

わいわいと三人で夏休みの計画を立てている。期末テストのことなど頭の片隅にも置いていない様子である。

「氷柱はどこが…、って今日は休みだっけ。」

「たしか熱って話だよ。」

「氷柱ちゃん、身体が弱いから、季節の変わり目は一番体調を崩しやすいんだよねえ。」

「まあ氷柱ならどこでもいいって言いそうだけどね。」

あっはっはっはと談笑する三人。このとき、すでに三人はこの計画実行の窮地に立たされていることは知る由もなかった。

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り、昼休みの終わりを告げる。

外にいた生徒は次の授業のため、教室へと戻る。

「チャイムなつたよ。」

「ふーん」

「へー。ポ モンの通信やるー。ウチ、ホワイト買ったんだ。」

三人は生徒室に残り、ゲームをし始めた。当然授業サボりである。

「出席日数大丈夫なん？」

「大丈夫よ。そこらへんは南が計算してんでしょ。」

「六月はちゃんと授業に出たからねえ、七月はその貯金をたっぷり使えるよ。」

ここ数日、桜たちは授業をたくさんサボっていた。

そのため、今学校がどのような現状であるかまったく知らず、いつもどおりの時が流れる。そう思っていた。

789

Gクラス

「あの三馬鹿、大丈夫なのか？まったく。」

クラスでは識がぼやいていた。

「あら、中嶋君。桜はいないのかしら。」

「椿、ずいぶん久しぶりに見るな。」

「前章では出番がまっただけじゃなかったからね。まったく、学園の話以外では本当に出番がないんだから！」

「何の話だ？」

「こつちの話よ。それはそうと、いいのかしら？“あの話”桜たち

は大丈夫なのかしら？」

“あの話”という言葉聞いて識は溜息をついた。

「まあ、桜も知ってるはずだから大丈夫とは思ってたが。」

それは一週間以上前：

東海林家にて：

識は、いつものように庭掃除と不知火の餌やりをしていた。

「おい識。おい！聞いているのか！」

「何だよ、不知火。掃除の邪魔すんなよ。」

「テメエ…俺が心配してやるうってのによ。」

「心配？何だよ？」

識には心当たりがなかった。

「桜嬢がいつも苦戦してるテストってやつだよ。」

「私も知ってまーす」

どこからかひよっこりと現れた雪音。テストに興味があるらしく食いついてきた。

「何だ、雪女。興味あんのか？」

「雪女って呼ぶと、私の一族全員のことになりますよ。雪音と呼んでください。で話を戻しますけど、ちょっと前に大会に行ったの覚えてますか？」

大会…。雲の上の姉妹校六校で行われたレクリエーション大会のことである。

人数合わせのため、雪音も桜たちに混じり参加をしていた。

「そのときに、私テスト勝負をしたんですけど、“なぜか”相手が体調不良で棄権したんですよ。私“テスト”というものをやる絶好の機会だったのに…なのに……なのに…」

すると、雪音の特殊能力、“吹雪”を発生させた。

「さ！寒い！！ああ、不知火のドックフードが！」

不知火ははっとする。

「何っ！俺の飯はドックフードだったのか！」

「でもお前美味しく食べていただろ。」

「ぐ…、それより早く吹雪を止める！」

識は考える。どうするか。

「雪音さん！そうだ、雪音さんがいたからあの試合勝てたんだ！そう雪音さんは女神だ！」

急にパアッと明るい笑顔になり、吹雪がやんだ。

「本当ですかぁ うれしい」

それはまさに天女のようにであった…が、

「ああっ！識さんの足が凍ってる！いったい何があったんですか！



「？」

（いやお前だろ…）

不知火は心の中で冷静なツツコミを入れる。

「ってんなこと思ってる場合じゃねえな。貸し一つだぞ！“狐火”！」

不知火の口から炎が噴出される。炎は識の足の氷を溶かしていく。

「ああ、そういえば、お前は妖怪だったな。忘れてた。」

「その前に言うことがあんだらうが。」

「ああ、助かったよ。あんがと。」

識の氷は完全に溶け、再び談笑が始まった。

「で、雪音さん。テストにあこがれてるんですか？」

「はい、私…、実は友人と何かを競ったりとか、協力したりとか、山に住んでいたころはしたことがないというか…、歳の近い友人がいなくて。」

思ったより重い内容であった。

雪音は桜が山へ修学旅行へ行つたときに、家を破壊してしまったので、桜家で引き取つたようなものである。

それを思うと、識はふとある考えが出てくる。

（あれ、あいつ俺の家も破壊しなかったっけ？）

それは置いておくとして、雪音が今現在、桜家でしか生活をしていないのは事実である。

( 桜に頼んだら… )

すると、屋敷内から声が聞こえてきた。

「 識くーん。 ちょっといいですかー？ 」

茜が呼んでいる。

「 はい、 今行きます！… それでは。 」

識は雪音と不知火の元を去った。

「 ごめんなさい、 こんな荷物を背負わせて。 」

「 いいえ。 そんなことありませんよ。 」

識は屋敷の食糧倉庫から米を運んでいた。

「 そろそろ、 期末テストですよ。 お仕事休んで勉強をしてください。 」

「 いいえ、 そんなことできませんよ。 ちゃんと授業も出てますし、 合間を縫って勉強もしてますから大丈夫です。 」

それを聞いて、 茜は思わず悲しみの涙が出てきた。

「 うっ…、 桜もそんな立派な子なら…、 禁止点組を卒業できるのに 」

雲の上には、 赤点の半分の点数を “ 禁止点 ” という。

「あ、でも今度の期末で、禁止店をとつたら、夏休み返上でペナルティがあるらしいですよ。」

「ペナルティ？」

「何でも理事長が、設定したらしく、今回は試験的に行うらしいです。つとつか間違いない桜に標準を合わせた行動だと思いますが。」

「そのペナルティがあることを桜は知ってるんですか？」

「桜も知ってるはずですよ。朝のホームルームで言ってたんですから。」

「ちゃんと聞いていればいいんだけど。あの子、朝は寝てることが多いし、最近目は目を開けながら寝る技も身に付けてきたし。」

「という不安があるんだよね。」

「ま、桜がペナルティを受ける分には私はいいいんだけどね。」

ペナルティの内容を知っているかのような口ぶり。椿は理事長の娘なので内容を知っていてもおかしくはない。

「内容知ってるのか？」

「さあね。うふふふ。」

明らかに知っていて教えない。という感じであった。

「でも、禁止点なんて、普通ならとらないように教師も調整をしてるはずだから、桜も頑張ればどうにかなるはずよ。」

「そうだな。」

その頃、放課後。生徒会室にて…

「桜。今日も授業をサボったのか。」

「あ、識。…って何それ…」

識が手に持っていたのは、分厚い参考書と広辞苑。

「何って、テストのための学習道具。桜たちは勉強しなくていいのか？」

「ん、まあねえ…」

南にふる。

「わたしたちはあゝ」

七海にふる。

「いつもどおり。」

三人で同時に

「「「赤点ギリギリでいつかな。」「」「」

あつはつはと笑う三人に識はため息をつく。

「気づいてないようだから忠告しておくけど、今度の期末テスト、禁止点を一つでもとったら、夏休み返上で理事長によるペナルティがあるらしいぞ。」

それから五秒ほどたったであろうか。その間桜達は目が点になっていた。

そして、目が大きく開かれて

「んなああああにいいい！！！！！」

生徒会室に大音量が響く。そのショックウェーブは南を吹き飛ばした。

「ななななな！なんで理事長があ！！！」

「桜、落ち着け。とりあえず冷静になれ。」

桜の目が右へ左へと動く。いやもしかしたら上下にも動いていたのかもしれない。

「つーか桜！あんた理事長に目をつけられているからでしょ！」

「え…：やつぱり？」

「私らまで巻き添えだよ。」

「つーかさ。」

識は冷静な目で見る。

「このことは桜も出席していたホームルームで言ってたぞ。それに禁止点なんて普通とらないからな。まず勉強だ。」

「でも勉強って言ったって…！」

その時、生徒会室のドアが叩かれるように開いた。

「おーっほっほっほ！！！！！」

「この世にも奇妙な叫び声はっ！！！！！」

金髪、そしてドレスを身にまとった学生は一人しかいない。

「椿……」

「仕方ないから、“桜の家で”勉強合宿よ……」

「は??」

すると、今度は生徒会室のベランダから

「その合宿、わらわも参加させてもらおうかの。」  
「わしもじゃ！」

乙姫と浦島がいつの間にかベランダで日向ぼっこをしていた。

「あんたら、いたのか！」

「何やら面白そうなのでな。わらわ共々参加させてもらう。」

「ってあんたら、まだやるってわけじゃ！」

椿が持っていた扇子を広げて上へと掲げる。

「それでは、明日から桜の家で合宿会を執行する！」

「「「「おー……!!」」」」

こうして強制的に桜の家で勉強合宿を開くことになった。

## 90 桜邸で勉強合宿

椿に半ば強引に桜の家での勉強会を予定された桜は、その晩、勉強場所等の確保をするため、茜に相談をすることにした。

「茜さん。」

「どうしましたか？」

夕食の支度をしている茜は忙しいため、顔を向けず調理をしながら話を聞いていた。

「あのさ、明日からテスト一週間休みじゃん。」

雲の上はテスト一週間前は休日となる特殊な決まりがある。それゆえ、テストの難易度もあがる。

「ええ、もうそんな時期ですか。」

「それでね、明日からこの家で勉強合宿を開きたいんだけど…」

それを聞いたとき、茜はあまりの驚きで、目の瞳孔が開き、手が振るえ、手に持っていた皿を床に落とす。

「そ…そそ、そんな…。桜が勉強！！？明日は雷が雨のように降ってくるんじゃない…」

「いや、ウチの今まで勉強をすることがほぼ皆無だからってそんな反応…」

「あ、そうですね。喜ぶ事態なはずなんですが、ちょっと衝撃と目眩が…」

「ちょっと！目眩も!?!？」

茜はたまらず近くの椅子へと腰かける。

「ふう、でも桜が勉強をするなんて嬉しいわ。えっと準備でしたね。A会議室で勉強をするといいわ。それと客間と…、あ、ご飯の用意もしなきゃ。忙しくなるわ。」

茜は桜が自主的であるかは問題とせず、勉強をするという事実に喜んでいた。そのための準備をする顔はすごく嬉しそうな笑顔であった。

翌日の午後1時。合宿する者は桜の家へ集合する予定になっている。さすがに自宅前集合なので、遅刻魔である桜も遅れることなく集合した。

約束の10分前、今来ているのは、

七海

南

浦島

乙姫

桜

識

であった。

「あとは、椿だけか…、あいつが遅刻することはないだろうけど。」

意外にも発案者が最後であった。



すると、一台のリムジンが桜邸の前で止まり、中から黒服の執事が二人出てきた。二人で持っていた赤い絨毯ロールを転がして、レッドカーペットを作った。

「まさか……」

そのまさかであった。

リムジンの中から、白いドレスを着た椿が出てきた。

「ごきげんづるわしゅう。桜。」

道路の真ん中で車を止めてレッドカーペットを引いていたので、後ろで車が混雑していた。

ブーブーとクラクション鳴っていて、椿の声などまったく聞こえなかった。

「なんちゅう、自己中……、さすが理事長の血を引いてるわ……」

椿はクラクションなどまったく気にしている様子なかった。

さらにカーペットの上、つまり道路のど真ん中で止まり、扇子を取り、広げた。

「……………!?!」

いつものように、何かを主張し、桜へと扇子を向けている。

「聞こえねえよ!?!?!つか早く来い!?!」

そして、全員がそろった。

「それじゃあ、ついてきて。」

桜は家の会議室、つまり勉強部屋へと案内する。

「くれぐれも”はぐれないでね。変な道通ると警備トラップが作動しちゃうから……」

桜は後ろを見る。

識

七海

南

椿

間宮

「っていつの間の間宮いたの!？」

「あら知らないの？」

椿が扇子を広げる。

「『間宮千は私の第一執事よ。』執事なら私の後ろにぴったりと張り付いて行動するものよ。」

…

…

…

「「「「はいいいいい!!???」「」「」

その場にいる全員が驚愕した。

「椿ちゃんの執事!?七海ちゃん知ってた?」

「そういえばいつも一緒にいたような!」

「間宮もなんで言わないんだよ!」

全員で間宮を見る。

「…聞かれなかったからだ。」

「いや、確かに聞かなかったが、けどよ…」

「あ、ちよつと待って。」

桜が間宮談を静止する。

「そうじゃなくて、いない人がいたけど、いるはずの人がいないんだけど…」

桜

識

七海

南

椿

間宮

…

「乙姫と浦島がいねえ!!!」

「まずい、桜捕獲用トラップのある場所にいったかも知れない!あれは一般人には危険だぞ!」

識と桜は冷や汗をかく。  
ちなみに七海と南はその桜捕獲用トラップの破壊力は身をもって体験済みであった。

「ままままずいよお！死んじゃうよお！」

「桜！救出に行かないと！あ、でもあの二人行動力無駄にあるからな…」

ふうつと一ため息。

「よし、助けに行くか。」

「お待ち。」

椿が呼び止める。

「私と間宮も行くわ。」

「はあ！？何言ってるんの？危ないって！」

「私達の実力は知ってるでしょ。4人で探したほうがいいわ。」

桜は少し悩む。確かに椿と間宮は桜に匹敵するほどの身体能力を持っている。対して浦島と乙姫は運動音痴とまではいれないが、桜捕獲トラップで怪我をしないとは限らない。

「わかった！よし4人で行こう。南と七海は先に行つて。場所は知ってるでしょ。」

「うん。わかった。でも桜の家って本当に危ない屋敷だね。私達は慣れたからいいけど。」

桜たちは走り、乙姫と浦島の救助に向かうのであった。

## 9 1 サイド乙姫

「うむ、あの“うつけ”共、わらわからはぐれおった。」

浦島の妹である乙姫も同じことを言っていた。さすが兄弟である。乙姫がいる場所は、格納庫のような場所であり、周りにはヘリコプターや、高級車が駐車してあった。

「おお！あの車など、わらわが手をつければ、そこいるの戦闘機になど負けんぞよ。」

目を輝かせて、近くの車へと近づいていった。

その時、乙姫は特殊な色をした眼鏡を取り出して、装着した。

「ん？おお、これは防犯用赤外線レーザーであるか。わらわを罠にほめようとは1000年は早いぞよ。」

と言い、再び何か道具を取り出していると、

ピッ

何かを踏んだ。

「これは予想外であったな。」

その時、ガシヤリと何かが動き出した。

その数分前、

「よし、じゃあ二人のうちどちらかが見つかったら、連絡して。」

桜は浦島たちを救出するためのミーティングを行っていた。

ピピピピピピ

鳴ったのは桜の携帯電話であった。

「はい、って茜さん。」

「桜ですか？今モニタールームにいるのですが、桜のご友人らしき方が二人ほど迷子になってるようですが。」

「そうそう！それだよ！その二人を今から探しに行こうとしてるの！」

「そうですか。でも今防犯用スイッチが機動したので危ないですよ。」

「ってかなりピンチじゃないですか！冷静言わないでください！」

茜は二人のいる場所を桜に言った。

『ごめんなさい、桜。あれはここからでは制御ができない防犯装置なの。桜捕獲用と違って、ここでは制御ができないから、直接部屋へ行ってパスワードを入力してきてください。』

止める方法を聞いて、桜は班を二つに分けた。

屋敷の構造がわから桜と識を分け、

桜、椿

識、間宮

の二班に分けた。

桜たちは、乙姫のいるエリアへと近づいていた。

「ちょっと、桜。あなたの家って遊園地なの？」

「時々、ウチもそう思うよ。」

トラップが作動して、桜へ向かって、ハンマーが振り下ろされる。

それを軽々と避ける。

続いて、椿へ向かってドイツの矢が発射されるが、余所見をしながら矢を掴む。

「あそこだよ。乙姫がいるのは。」

「駐車場かしら？」

廊下を抜けて、大きな駐車場へと出た。

最初に目に飛び込んだできたものは、車が変形をし、二足歩行している警備ロボットであった。

「何かしら、あれ？」

「最近仕入れた警備ロボットだよ。それじゃあ、あのロボのコントロールパネルが部屋の所、っとこれか。」

警備ロボットを停止させるためのパネルは入り口のところにあった。先ほど茜から聞いたパスワードを入力して、停止させようと手を伸ばしたとき…

ビュンッ

何かが飛んできた。

飛んできたのは、ロボのロケットパンチ。桜たちを視界…いやサイトにいれて、迎撃行動をした結果であろう。

その拳は、桜をはずし、コントロールパネルへと直撃し、黒い煙を上げさせた。

「あ、やば。」

「どうするの?」

固まる桜、なぜか楽しんでいる椿、そして…

「ぬしら! いい加減助けぬか!」

ロボからの攻撃を車を盾にして逃げ回っている乙姫。

「とりあえず、もうあれを破壊するしかないかな。」

「でもいいの? あれ高いんじゃない?」

警備ロボなど、桜邸では今回試験的に配備をさせてみた。それゆえ、費用もそこそこかかったのは桜も知っていた。

ロボを仕入れた当日、桜は茜にこう言われていた。

『「これ、壊したら、桜も壊しますよ。」』

「ってわけだから、大破はさせたくないんだよなあ。」

「仕方がないわね。行動が停止したら、バッテリーを抜き取れば問題ないわ。」

「お、いいね。」



桜と椿が作戦を立てていると

「だから早く助けぬか！この大うつけ共！だが、作戦は理解した。わらわにいい考えがある！まず助ける！」

桜が前へ出る。乙姫を狙っているロボへととび蹴り。

「っ！？重い。」

蹴りを入れたがロボ自体は少しもよろけなかった。

「桜、手を抜いたでしょ。」

「バレた？」

壊れることを恐れてあまり力を入れなかった。

だが、蹴りを入れたことで、ロボの標的は乙姫から桜へと変わった。グイーンと機械音を鳴らして、桜へとボディを向ける。

「よし、まな板女、よくやったぞよ。」

「てめ！助けたのになんだそのまな板って！」「  
「事実でしょ。」

とどめは椿がボソリと言う。

「では、わらわは秘密兵器にて対処する。」

「「秘密兵器？」」

乙姫の秘密兵器とは？と考えていると、ロボは右腕を上げ、拳を桜へと向ける。

「うわ！乙姫早く！」

桜へ向けて拳を飛ばす、ロケットパンチ。と言っても拳は本体とワイヤーでつながっている。

ロボ自体が大きいため、拳の大きさは桜の胴体分の大きさであった。

「ふんぎっ！！！」

拳を身体で受け止める。だが、

ブシューーッ

拳の後ろからジェット噴射。さらに勢いをつける。

「これは…！」

勢いに負け始めた桜は、後ろへと下げられる。さらにロボは左腕を上げ、もう片方のロケットパンチを放とうとしている。

「仕方がないわね。」

今までずっと観戦をしていた椿が歩き出した。

「私、黒雞椿がお相手して差し上げるわ。」

いつものように扇子をバツと広げる。そして扇子を後ろへと振るい…

「待たせたであるな！」

椿が言った言葉ではない。構えた椿を遮るように声を出したのは、乙姫であった。手には大きいトランクを持っている。

「それが秘密兵器かしら？」

「得とごらんあれ、わらわの科学の結晶であるぞ！」

トランクを胸に当てると、開き、中から様々な機械が出てきた。機械は乙姫の身体を武装するように装着され、完成したのは…

『これぞ、携帯用戦闘スーツ“ガイア参式”』

見た目は、いわゆるアーマースーツ。まだ塗装が完了していないのか、灰色に光る部分が目立つ。乙姫の身体を二回りほど大きくしたスーツで、背の小さい乙姫はこのスーツのおかげで2m近い身長を獲得している。

『さあさあ！はじけるがよい！』

両手を肩の位置まで挙げ、両手を開いてロボへと向ける。

「こ…これは…」

「何、桜？」

桜が乙姫（ガイア参式）を見ながら手をふるふるとふるわせる。

「ビームだ…」

「はい？」

「手からレーザービームが出るよ！あの全国民の憧れである手からビームってやつだよ！」

その乙姫ガイアの手が発光し始める。

そして

ブスン…

何かが抜けるような音がした。

『おろ?』

手は発光を失い、シュッと煙を上げる。それから何も起きず、手をおろした。

『うゝむ、出力がギリギリであったかのう、失敗じゃ。』

「こんの「ドアホ!」

『だが、心配するでない!』

乙姫ロボは右足を前へと出し、駆け出した。その勢いを乗せた拳をロボへとくりだす。

「乙姫!?!」

『格闘モーションもダウンロードしておる。』

ロボは大きくよろける。

そして、再び右腕だけ肩の位置まで挙げる。すると手の甲部分から銃口が出てきた。

『鉄甲砲撃連弾式!』

ダダダダダつとマシンガンによる発砲する。

だが、先ほどの拳と違い威力はない。それゆえ弾ははじかれる。

『ふむ、ならば!』

逆の左腕を挙げ、左甲部分の装甲が上がりミサイルが出てくる。

『鉄甲砲撃爆散式!!』

ミサイルを二つ、連続で発射。

ロボの頭部と装甲が張ってる腹部に直撃。

中規模の爆発が起こる。その爆発で、腹部の装甲が破壊され

『とーどめえ!』

このままでは破壊される。そう悟った桜のとった行動は…

「やめろおおおー」

桜は攻撃を静止するため、まさにVFX技術使用のごとく、乙姫とロボの間へとダイビングした。

弾丸、ミサイルが発射される。

「あ、この後どうしよ??」

とりあえず飛び込んだものの、どのようにして止めるかなどまったく考えていなかった。

作戦を考える間なく、目の前にはミサイル。

「ぶぎゃああー!!」

被爆。

「あの大うつけ！自分からミサイルにあたりに行きおった！やはり第一印象通りの猿であるな。」

桜の身を案ずるより、行動の非難をしていると

「他に言うことあんだろ！」

復活した。

ロボを見ると、何やら不穏な動きをしていた。

「な、何？」

「エラーでも起こしたのであるうか？」

ロボの目が赤く、そして黄色く点滅する。

『ピー、リカイ不能不能』

ロボから見れば桜は自分からミサイルに当たりに行ったように見えたらしく、その行動が“意味不明”なので高度なコンピューターを搭載しているロボはエラーを起こした。

桜の自爆行動が逆に逆転への糸口となった。

続いて、蒸気を出し始めて暴れ始めた。

ロボは手を振り回し、内臓武装を取り出そうとする。その時

ヒュッ

黒い影、黒雛椿の高速移動。

椿はロボの背後をとり、そこからバッテリーの位置を見つける。

「そこね。」

閉じた扇子を振り下ろす。その下ろしたと思われた扇子を一瞬で上へと上げる。

広げた扇子にはバッテリーらしき物が置かれてる。

「桜を囷にする作戦成功ね。」

「な！囷！？」

持っていたバッテリーを桜へと放り投げる。

「だって、桜は獣のように動いてもらったほうがいいからね。」

「こんのー！！」

何はどうかあれ、乙姫の救出に成功した。

#### 次回予告

桜「そういえば、そろそろ100回だよ。知ってた？」

椿「当然でしょ、この私黒雛つば」

桜「で、100回は記念すべきことだから何かしようって思ってるらしいんだけど何かある？」

椿「私の名乗りを途中で妨げるとは…、桜！いい度胸ね！」

桜「あゝ、やっぱり理事長の血を引いてるよ…。ではまた次回、」

## 92 浦島サイド

「うむ、参ったのう。」

浦島は、桜邸の室内植物庭園らしきところにいた。

「あやつら、わしから離れおった。」

一人勘違いをしていた。

「うむ…ここからどのように合流するか…、ん？」

何かピツと機械音がした。何かを踏んでしまったのかと思い足を上げると、踏んだ場所が長方形にへこんでいた。

次の瞬間、浦島を背後から黒い影が襲った。

浦島の背後に大きな影。

影は浦島の足をロープのようなもので掴み、そのまま上へと持ち上げていった。

「なっ!?!何じゃ!?!?」

一瞬の出来事であったため、浦島は何が起こっているのか理解が出来なまま上がるし上げにされた。

ゆっくりと、周囲を見渡すと、そこには…

「なんじゃあ!?!この植物!?!」

浦島を掴んだのは、巨大な木。それもアマゾンの奥地の奥地に生息しているような謎めいた容姿をしている。



浦島を掴んでいるツタを乱暴に振るいまわす。この木には“意思”のようなものがあるようだ。

「はなあああせえ」

振るわれながら、搾り出すように叫ぶ。

そこへ、ヒュンッと何かがツタを通り過ぎ、ツタを切断した。解放された浦島は地面へとしりもちをついた。

「おう！…ててて…。間宮か！」

ツタを切ったのは間宮であった。

「…」

「相変わらず何も言わんのう。」

埃をはたきながら立ち上がる。相変わらず目の前には謎の木がツタをウネウネさせながら

「ところで識はどこじゃ？」

「部屋のセキユリティ操作を行っている。完了すれば、コイツも止まるはずだ。」

「ぬう、それまでどうにか逃げるしか…む！」

「どうした？」

浦島が指をさした。方向にはバラなどについている棘のついたツタ。それが間宮たちを囲いこのエリアから出られないように囲った。

「これは…」

「有刺植物のリングか。どうやら俺達はこの木の捕食エリアに踏み

入ってしまったようだな。」

動物などにあるだろう。自分の領域に入った獲物を、自分の知り尽くした領域に侵入した者を捕らえる習性。それに似たようなものである。

「どうするのじゃ?」

「中嶋がセキュリテイをオフできれば…」

すると、ヒューンつと有刺植物の囲いを飛び越えて飛来してくる識が見えてきた。

「あべ!」

着地に失敗し、転がる。

「中嶋、セキュリテイは?」

「ああ、それがオフにしたんだが、こいつだけが止まらない。どうやらコイツは何か違うようだ。それで、俺も加勢しようと思んできたわけだ。」

ぐつと識は拳を握り戦闘態勢に入る。

「しっかし、何だ?この木は?」

木に向かって足を踏み込もうとしたとき、木の幹が穴を開けるように開き始めた。

その中から多くの緑色のツタが出て、一つの塊に変貌し始めた。

「な!」

「んだ!？」

「…人型か?…」

塊は人の形を形成した。大きさは3mくらい、色は全身緑色なので、まるでシルエットののような塊である。

『我は“妖樹族”名は“ユグドラシル”。貴行ら不信人物の排除を仰せつかつておる』

話した。緑の塊がではなく、“木”から声が聞こえたような気がした。

「おいおい…。まさか…」

「妖怪か…」

ボソと間宮が言葉をもらした。それは、識に強烈な違和感を与えた。

「間宮?お前妖怪って…」

間宮は“妖怪”の存在を知っている。いくら識の周囲に妖怪がいるとはいえ、一般人が妖怪の存在を知っていることを知っているわけがない。つまりは、妖怪を知る事情があるわけである。

「来るぞ。」

「へ?」

完全に油断をしていた。緑の巨人が繰り出した拳を直撃した。拳が直撃した身体は後方へと飛ばされ、有刺植物へとぶつかる。幸い植物に生えている棘は鋭いが、大きさはなかったので大事にはいかなかった。

「中嶋！」

「だ…大丈夫だ。」

そのとき、浦島は識を心配するため後ろを向いてしまった。

それは完全な“隙”を見せる行為である。それを緑の塊は見逃すことはしなかった。

再び拳を振り下ろす。

「しまっ！」

かすかな音に気づいて振り返るも、すでに拳は眼前に迫っていた。

「っ！」

だが、拳は浦島へ当たることなく上へとはじかれる。

「間宮！すまない！」

「油断のしすぎだ。」

間一髪。間宮の蹴りが入ったおかげで浦島は助かった。

「それより、浦島。下がっている。」

「お、おう！」

浦島自身も自分が足手まといになるだろうことを察して後ろへと下がった。

代わりに後ろへ飛ばされていた識が復帰した。

「待たせたな。それじゃあ、あの“サーベルベア”と戦ったときみたいに共同作業と行くか！」

「…」

「あ、何か言葉が欲しかったな。」

「…」

拳が振り下ろされる。

今度は油断していなかったので、二人とも軽快に避ける。

そして、間宮が後ろへ、識が前へと移動する。

「いくぞ！間宮！」

まず、間宮がひざへと蹴りを放つ。

ガクンと体勢を崩した緑の巨人の顔へと連続で攻撃を決める。

「どうだ！」

攻撃で身体はのけぞりはしたが、緑の巨人はダメージを感じていないかのように動きだし、識の足を掴んだ。

そのまま、乱暴に振り回し、再び有刺植物へと放り投げる。

「させぬ！…」

動き出したのは浦島であった。

素早く着ている服の中から棒状の物を数本取り出した。それを全て連結させてできあがったのが、

「浦島式・鯨釣竿！！」

釣竿であった。それを識の飛ばされる方向へと振る。

釣り針が勢いよく飛び、識の足へと絡みつき、有刺植物へと当たる前に救出する。

「大物じゃあああ!!!」

捕らえた識を二、三回ほど回し遠心力をつけ、緑の巨人へと放り、糸の絡みが外れる。

「うぎゃああ!!!」

識は弾丸となり、緑の巨人へと体当たりをする。すさまじい勢いであったため、巨人は倒れた。

「どっじゃ!!!」

得意げな顔をする浦島。

巨人を倒した弾丸である識が頭をさすりながら起き上がる。

「馬鹿ヤロー!!!俺のダメージも深刻だぞ!!!」

頭から血がピューっと出る。

「倒したのだから問題なからう」

「大有りだ!つかてめーそんな武器持ってたのかよ!知らないぞ!」

言われて浦島は釣竿を自慢するように掲げる。

「うむ、これは我が宝具、“鮫釣竿”。鮫をもらくらく吊り上げると“噂”の釣竿じゃ。」

「宝?」

「そうじゃこれはのう…」  
「まだ終わってない！」

浦島は釣竿に気を取られていたので気づかず、識は背を向けていたの  
で気づかなかったが、間宮は見ていた。  
緑の巨人は、巨木へと吸い込まれていく姿を。

『小手調べは済んだ。次はこの森そのものが相手だ。』

ユグドラシルが言つと、付近の木々がざわざわ揺れ、音を立てる。  
何かの予兆を告げるようだ。

すると、ユグドラシルの周りの木の枝が急に伸び、識たちへと襲い  
かかる。

「そこまでだ!!!」

森に声が響き、植物、木、全ての動きが止まった。  
上から降ってくるように現れた人物、

「し、白井さん!!!」

東海林家の庭係を担当している白井であった。

「ユグドラシルよ。こいつらは不審者ではない。」

その言葉にユグドラシルはざわざわと反応した。

『了解しました。白井様』

それからユグドラシルはただの木に戻った。

「し、白井さん……。助けてくれたのか…？」

白井にお礼を言おうかと近づくと、白井が振り向く。

その顔は…

鬼のような形相であった。

「貴様：あれほど私の芸術の領域に入るなと忠告したのに…、貴様はああああ！！！」

「ぎゃあああああ！！！間宮は浦島を連れて…ってもういねええ！」

間宮と浦島はさっさと逃げていた。

「万死に値する！」

「ぎゃあああ！！！」

識は被害にあったが、浦島の救出には成功した



### 93 合宿シーンは書くのが面倒なので大幅カット

乙姫と浦島の救出に成功した桜たち、イレギュラーの事態を解決し、やっと本来の作業である学習をするため会議室へと集まっていた。

「まず、はいこれ。」

「ん？何、椿？」

ガチャリと音がした。

足元を見ると黒い輪の物体がつかわれていた、というより拘束されていた。

「あの…、椿??」

「桜は脱走しそうだからこうした方がいいって。」

「“いいって”って誰からの情報で…?」

おおよその予想はついていた。

桜の勉強脱走情報に関する対処法。

「茜さん。」

「やっぱりか！それにこの輪って茜さんからの提供物だろ!!」

「ええ、私は“首輪”がよかつたけど…。」

「SMプレイか!!」

「桜は脱走の名人だし、勉強となるとすぐ逃げるからってね。」

茜の手が回っているとなると、おそらく逃げる隙もないだろう。桜は覚悟を決めると

「南と七海も拘束した方がいいよ。」

「「巻き添え!?!」」

ガチャリと南と七海も逃走用の輪がはめられた。

英語、国語、数学、社会、理科と主要五科目を学習した。主に、総合成績一位である椿が講師となつての学習であつた。

「貸し一つよ。これで計二つね」

という約束で講師をしてもらった。

午後11時。勉強の時間が終わり、寝るだけとなった。

桜の提案で、男女別に広いホールに布団をしいて寝ることにした。

「う〜ん…。何年分の勉強をしたんだろう…。」

「私もお〜…限界だよお」

南は布団へとダイブするように倒れた。

「つつかれた〜。私も限界…。」

「ぐみゃっ!?!」

南の上へとダイブし、南はカエルがつぶされたような声を出した。

「あ、ウチも限界」

「っで!?!」

「ぶぶへっ!!!」

それを見た桜が楽しそうに乗っかってきた。  
南には二人分の重さが加わる。

それを見たある人物の目が光る。

「それは私にも参加しろという挑戦状かしら？」

椿が走る。飛ぶ。

「ぶっ！」

「ぶほっ！」

「っ…」

衝撃に耐え切れず、南は泡を吹いて意識を失った。

「あ、やべ！桜ならともかく、南が下なら当然か！」

南は医務室へと運ばれた。

翌日、昨日と同じようなスケジュールで学習を行いつつ、休憩を取りながらすごした。

その休憩中のひと時…

「不知火、大鷲、ご飯ですよ。」

餌係りである雪音は桜のペットである二匹を呼んだ。

間もなく庭へ狐の不知火、鷹の大鷲の二匹がやってきた。

「そういえば、今、お嬢の友人が着てるらしいな。」

「ええ、なんでも勉強会だとか。桜さんがめずらしく勉強をするって言ってるから茜さんが喜んでいましたよ。」

「それより、お前も気づいてるだろ。」

不知火は真面目な顔つきになった。

「ええ、先ほど…いえ、昨日から屋敷内に妖気を持った人物がいますね。」

「ああ、“妖怪”か“妖気をもった人間”かは定かではないがな。おい大鷲！お前はと思う。」

「僕は元は“ただの鷹”ですから、妖気なんて探れませんよ。」

大鷲は不知火の妖気の影響で言語を話せるようになった鷹である。元から純粹な妖怪である雪音と不知火とは違う。

「しかし…、誰だ？ただの妖気じゃない。明らかに大きい妖気だ。」

そして、休憩中の識は…

庭で遊んでいる桜たちを見ていた。

（ずいぶん俺の生活も変わったものだな。あれから四年前か…。俺が日本に着てから。）

笑って遊んでいる桜たちを見てふいにそう思った。

(あいつら…、元気かな…、俺が)

「中嶋。」

「うおっ!」

ふいに浦島に声をかけられ間抜けな声を上げてしまった。

「何じゃ、何を驚いておる?」

「いや、少し考え事をな。」

「ふむ…。」

浦島は黙り、何かを考え込む。

「女子のことか?」

「お前と一緒にすんな!…って言っても、一応女も含むやつらのことを考えていたんだけどな。」

「おお!どんな話じゃ?」

女絡みのことと聞き、興味を持ったようだ。

「昔の話だよ。そうだな…、前のつても中学での友人のことなんだけどな。最後にみんなが集まったとき、ちよつと事件があつてな。

それがきつかけで縁を切つて、話すこともなく転校してそれつきり。それでな、あいつらどうしているかなくなつて思つていたのさ。」

「ふむ…、複雑じゃな。人との縁は壊すのは一瞬じゃが、一度切れると修復に時間がかかる。それか修復ができませんかもしれん。」

識は浦島を見ず、どこか遠くを見て話していた。それは自然と行つていたことではなく故意的にやっていた。

今、中嶋識はわずかに嘘をついていたから浦島の目を見て話すことはできなかった。

「じゃが、同じ空の下に今も同じ時を過ごしているのじゃ。また会うこともあるじゃろうて。」

「…そうだな。」

(同じ空の下か…。会ったら俺達はどくなるのだろうか…。)

風が気持ちよかった休憩時間の出来事であった。

こうして、三日間に及ぶ勉強合宿が終了し、あと三日は自分達で勉強をすることになる。

「じゃ、ありがとね。…あと椿もありがと。」

「まあ、珍しく素直なのね。でも借りは二つよ。」

「うっ…」

椿は迎えの自家用車で帰っていった。

「桜も勉強サボっちゃだめだよ！」

「よぉ〜」

「それはあんたら二人もでしょ。」

南と七海も帰っていった。

「うむ、おぬしの家、なかなか楽しかったぞよ。またわらわを誘うがよい。」

「二度と勝手にであるかなければいいよ。」

「あのトラップの数々、わらわの研究材料になるぞ。」

「あ、トラップ発動させる気だな。二度とくんな！ウチが疲れる。」

乙姫と浦島も帰っていった。

「ふう、やれやれ。」

「じゃあ、俺夕飯の支度手伝わないといけないから先に行くな。」

「あ、うん。じゃあウチは不知火と遊んでるから。」

「いや、勉強しろ。」

など言う言葉は無視して桜は庭で不知火に会いに行った。

その時、

「っ！何この気配!?!」

庭で人の気配に似たものを感じた。

「この感じは…、たしか雪山の…、妖怪!?!」

「おい!」

背後から声がした。

距離をとりながら振り返る。

そこに立っていたのは…

「あれ、たしか雲の上の…座敷わらし?」

キセルを吸い、悠然と立っていたのは妖怪座敷わらしであった。

普段は雲の上学園の旧校舎に住み着いている妖怪である。以前、(第一章)で桜たちが旧校舎へ行ったときに知り合いになった妖怪である。

「つてあんた学校離れていいの？つかなんでウチの家知ってるの？」  
「いいんだよ。学校に張り付くのが座敷わらしの仕事じゃねえんだ。お前の家はある飲み仲間から聞いたんだよ。」

飲み仲間つとは不知火のことであつたが、桜には不知火が妖怪であることは秘密にするように言われているため、言わなかつた。

「ウチの個人情報駄々漏れ？」  
「で、用があんだ。」

人間にはばれない個人情報なぜ妖怪にはばれるのか聞きたかつたが、用事とやらを聞くことにした。

「今日の夜12時、雲の上の旧校舎に来てくれ。」  
「はい？」  
「じゃあな。」  
「あ、待って！」

座敷わらしは妖怪らしく“ドロン”と煙を残して消えた。

「何でこういうところは妖怪らしいんだ。」

やれやれと思いつつ、桜は夜に雲の上の旧校舎に行くことを決めていた。



## 94 学校の会談・再び

夜12時。桜は屋敷を抜け出して一人、雲の上旧校舎へとやってきた。

「茜さんに見つかったら殺されちゃうよ…。っーかあの座敷わらし…っーか幻想の座敷わらしのイメージをぶち壊しすぎだろ、あの格好は…」

すると、噂をしていた座敷わらしが現れた。

桜の思っていた幻想の座敷わらしとは、子供でおかっぱな女の子の姿であり、

対して今目の前にいる座敷わらしは、キセルを吸い、30代近い格好をしている。

「なんだ？私の噂でもしてたのか？」

「いや、考えて見れば、あんたが座敷わらしだっていう保障はどこにもないんだよね。だって今のところ自称なわけだし。他の妖怪さんがそう言ってるなら信じるけどさ。」

正直桜は、この人物（妖怪）を座敷わらしと信じたくないという部分があった。

「ああ、そうか。なら仲間を紹介しよう。みんな私を座敷わらしと呼んでいる。」

案内されたのは、旧校舎のとある教室。

「おい、連れてきたぞ。」

ふよふよつと鬼火が漂う。はっきりと異形な光景である。そして鬼火は形を成し、妖怪が現れた。

「おお、これが桜つて娘かえ？」

「……。」

桜は絶句した。

なぜならその人物は…

顔がない。首はあるけど顔がない。

「あ、わし“のっぺら坊”いいます。よろしゅう。」

「あんたどこで喋ってるの？」

桜はビビるより、そこを疑問に思った。

「魂で喋っております。」

「はあ」

いまいちわからないが、追求してもわからないと思いそこで止めた。

後ろでガラツと教室の扉が開く音がした。

「おまたせ。ごめんね、遅れちゃって。」

今度は人体模型。歩く人体模型といった所か。だが、なぜか声は女であった。

続いて入ってきたのは、外見は普通の男性。

「よ、座敷。」

「“首なし”。遅刻だぞ。」

首なしというわりには首と身体が繋がっていた。

「あれが、首なしなの？」

「ああ、わからんか。おい首なし、人体模型に返してやれ。」

「ちっ、仕方ねえな。ほら。」

首に手をやると、スコーンと首だけが外れた。

その反動で、頭部分が地面へと落ちた。

「痛て！模型とつてくれ！」

「私の首で遊んで何してるの！」

人体模型はコロコロと転がった頭を身体にセットしてあげた。

「…」

「っ！殺気！」

桜は背後に殺気を感じ、飛びながら距離をとった。

「花子、来てたのか。」

「は…：なこ…？？トイレの花子さん…？」

「知ってんのか。ああ、学校の七不思議だったのであったな。」

桜が困惑するのも無理はなかった。

トイレの花子さんと言えば、赤いワンピースの女の子というイメージがある。

だが、この花子さんとは、髪は怖いほど長く、後ろだけ長いのでは

なく、前髪も長く、髪で顔がわからない。来ている服は、赤いワンピースに赤い靴。

「正直かなり怖い……」

「あ……」

花子は何かを喋っている。桜は耳を花子の口へと近づけた。

「おなかへった。」

「やっぱり子供っぽいこと言ったのね。」

どうやらこれで一通りメンツがそろったらしい。

「さて、改めて紹介をしよう。のっぺら坊、首なし、人体模型、花子だ。」

「ウチの平穏な生活を返せ。」

「で、本題へ入ろう。」

プハハッと煙をはく。

「まず座れ。」

教室の椅子へと座敷わらし以外の五人（妖怪含む）。

「我々、旧校舎側の妖怪はいたって健全であることはお前らも知っていたことだが。」

「ウチまで妖怪で一つくりすんな。」

桜は手を挙げて主張するが、見ることなく無視をされた。

「だが、我々のことを快く思っていない連中、そう旧旧校舎の連中だ。」

旧旧校舎。桜には聞き覚えがない単語であった。

「その“メリー”と“テケテケ”に我ら飲み仲間である“二宮金次郎”が誘拐された。」

たまらず桜は手を挙げた。

「何だ、さつきから目障りだな。」

「あんたらさつきからウチの知らない単語ばかり言って、何言ってるのかわからないよ!」

座敷わらしは明らかに面倒くさそうな態度を取る。周りからも空気を読めなどのブーイングの嵐。

「まず、旧旧校舎ってのは、ここよりも古い校舎のことだ。」

「そんなのあったの?」

桜は小中高と雲の上学園に通っているが、旧旧校舎など聞いたことはなかった。

「ああ、一般には知られないように林の中に隠してある校舎だ。」

「なんでそんな…」

「のろい。」

喋ったのは花子であった。今までずっと黙っていたので桜は驚いて

腰を浮かしてしまった。

「の、呪い？」

「そうだ。呪いだ。呪いをかけられているから、黒離理事長も手を出せないんだ。」

桜は驚愕した。“あの”暴君で知られ、別名歩くサイクロンと呼ばれる黒離理事長が、何も出来ないなんて。しかもそれがすぐ近くに存在していたなんて。

「で、そこにいる妖怪ってのは正直“やばい”。私たちとは妖怪力のレベルの桁が違う。」

「ようりよく…?」

「妖怪が発する不可思議な力のことだ。で、そこにいる妖怪“メリー”“テケテケ”。あいつらに私達の仲間の二宮金次郎が誘拐されたんだ。」

これでやっと話に追いついた。おそらくその件で、桜を呼んだのであろう。

つまり、手を貸せということだろう。

「一度助けに行っただがな。」

周りが静まり返る。

(な…何だ?)

「紫ババが消された。」

それで、静まり返ったのかのはそれが理由かと桜は思った。

「頼む…、もうお前しかいないんだ。「あいつ」はこういう問題には規定で手が出せないから…」

その時

建物全体が何かに包まれるような圧迫感に襲われた。

「っ！！な！何だ！この威圧感！？」

「気づいたか。やつらが来た。」

「まさか！でもどうして！？」

座敷わらしは先ほどのやる気のない顔とは違い、険しく、まるで人を殺すような怖い顔になった。

「私たちを“狩り”に来た。」

座敷わらしは教室を出て、一階大広場と呼ばれていた場所へと歩き出す。

座敷わらしを戦闘に、首なし、人体模型、花子、のっぺら坊も歩き出す。

一階大広場。

ただの広いホールである。昔はここに様々な美術品が置いてあったであろうと思われる。

「テケテケテケ！狩りに来てやったぜ、」

妖怪テケテケ。真っ黒な身体をし、足はなく黒いスカートのように下へ行くたびに大きくなり地面に直接繋がっている。手には大きな





何やら会話を始めた。

「妖怪が携帯電話ってどうよ……。」

テケテケは話が終えたようで、こちらを見ている。

「おい、座敷。出る」

テケテケは電話を座敷わらしに投げた。

座敷わらしはスピーカーボタンを押して、周りにも聞こえるようにした。

『私、メリーさん。今旧旧校舎前にいるの。』

「で、用件は何だ。」

『私、金次郎さんと仲良くなりたいの。でも、あの子が私に心を開いてくれないの。だから、あの子の願いをかなえてくれたら私、身を引いてもいい。』

どういう理屈なのかさっぱりである。

「で、願いつて。」

『テストで100点とるの。』

ぶつと桜は吹く。

「よかろう。」

『一週間。それ以上はまたないで……』

しばらくの沈黙。

『あの子をきゆう収しちゃうから。』

気持ち悪く、心に嫌な記憶として残りそうな声で喋り、一方的に電話を切られた。

「仕方ねえ、お預けか…」

テケテケは地面へと飲み込まれるように消えていった。

「つてことで、頼む。」

「ふざけんなああああ！できるか！ウチは赤点ラインを飛行する人間だよ！」

「だから…」

妖怪一同、頭を下げた。

「このとおりだ。私達ではもう金次郎を救えない。お前しか…いないんだ。」

ここまでお願いをされたら桜は拒否できない。

東海林桜はそういう…基本頼まれたら断ることはできない人間である。

「はあ…、ま、がんばるか…」

桜のテストに一人の妖怪の存在がかけられることになった。

## 95 テスト本番

東海林桜は憂鬱であった。

まさか自分の学力が一人、いや一妖怪の運命を握ることになることは思わなかった。

「鬱だ。…ちなみに“鬱”って漢字もテスト範囲なんだよな…。はあ…。」

庭先でため息ばかりついていた。

「100点をとるとしたら、可能なのは英語かな。あ、でも今回は中国語も範囲に入るんだっけな。」

桜は数ヶ国語を話せるが、中国語は苦手であった。日常会話は可能だが、文章にするなどはたびたび間違える。

「でも他の科目は絶望的だし。」

ぶつぶつと庭で独り言をしている桜。たまたま不知火達に餌を上げていた雪音に見られ何事かと近づいてきた。

「桜さん？どうしましたか？」

「あ、雪音さん。いやあ、そうね…。」

雪音は桜を見て何かに気づいたようだ。

「桜さん？先日誰かに会いましたか？」

妖怪である雪音には、リーダーでもついているのだろうか？旧校舎で妖怪にあったことを悟られた。だが、まだ誰にあったかは知らないようだ。正直に言おうかと考えたが、現在人質…いや妖怪質がいることを知られるのは避けたい。雪音に心配をかけたくなかった。

「そ…そうかな！きき気のせいだよ！」

「ものすごい動揺してますよね。」

「どどつど童謡なんてしてませんよ！」

「漢字も間違えてますよ。じ…！」

匂いをかぐかのように雪音は桜へ寄る。

「妖怪の匂いがします。」

「ちょ、近づ…」

「匂いします。」

意外と頑固な性格であった。

完全に桜に密着するかのよう匂いをかぎ始めた。

その絵図らは外からみたら…

「何してんの？レズ…ですか？」

識に見られた。

「違うよ！って雪音さん離れて！誤解受けてるう！」

それから三日間、桜の茜監視による勉強が始まった。

飛ばして三日後。

テスト当日。

「桜、朝ですよ…え？」

毎朝のように茜は桜を起こしに、いや叩き起こしにきたのだが、いつもと違う桜の姿があった。

「桜が起きてる…。いけない、私、まだ寝てるようね…夢を見るなんて…」

「ウチがまっとうな行動するとすぐそれですね…。」

珍しく起きている桜に驚いて、びよ〜んと頬をつねり夢ではないことを確認する茜。

「今日はどうしたんですか？起きてるなんて??？」

食堂

「な…なんだ？今日の桜は気迫が違うぞ?」

「そうなんですよ。朝も自分で起きていて。」

「さ…桜が!？」

桜邸で働く者が聞いたら誰もが驚愕する内容であった。それほど普段の桜と今日の桜は違っていた。

「ここは何も聞かず、様子を見た方が。もしかしたらテストなんて気合いが入っ

てるのかもしれません。」

「そ、そうですね。でしたら邪魔はしてはいけませんね。」

二人でこそこそと桜には聞こえないように話した。

朝食を取り終えた桜は席を立ち、置いてあった鞆を手を取った。

「それじゃあ、茜さん。行って来ます。識、今日は先に行ってるから。」

「あ、ああ。気をつけてな……」

識も茜もそれ以上は何も聞くことができなかった。

桜が家を出た後、茜と識は未だに現実を受け入れることができず、呆然と立ち尽くしていた。

「怖いわ。」

「え？」

ふいに茜が呟いた。

「ずいぶん前に桜が今回と同じことをしたんですけど、その翌日、桜が血まみれ

で帰って来たり、ヘリが屋敷につっこんだり、不吉なできごとの前触れ気がする

わ。」

「それはまた……」

血まみれ事件は気になるが、どうやら今日、いや桜がああの調子でいるウチは気が抜けないようだ。

学校についた桜は教室で自主勉強をしていた。周りの学生も桜と同じく学習をしていたが、その中の一人が桜を発見し近づいて来た。

「あら、東海林さん。めずらしいというか、あり得ないことしてるわね。」

「村瀬。どうしたの、うちに声かけるなんて、そっちこそめずらしいじゃん。」  
「ええ、だって…」

とても艶美な目つきで、そして色っぽい仕草をし始めた。

「もし、東海林さんが頑張っているならあ

「ん？」

「あなたのこと“大”嫌いだから邪魔しようかとお。」

桜は口をあんぐりと空けた。特に嫌われるような心当たりが…

あった。

「って村瀬。あれはゲーム上仕方ないでしょ。いや倉田に弾丸あてたのは確かだけども。」

「へ〜。」

「うわ！うつろ眼！怖っ！」

桜と村瀬の因縁は詳しくは41話を見よう！

期末テスト一日目…国語

「…っ！」

桜は冷や汗をかいていた。

（古文ってこんなに難しいっけ？つか漢文まであるよ！あ、“鬱”  
って漢字がある）

どうにか国語では、平均点より少し下ではあるが、赤点はまぬがれ  
そうだ。

二教科目…家庭科

（わっかんね）

ほぼ諦めムードである。

（あ、ここ。椿に尻触られながら覚えた所だ…。なんて最悪な覚え  
方だ…。）

とても不本意ながら、身体で覚えたことが役に立った。

「へくちっ！」

遙か前にいる椿がくしゃみをした。



三教科目…社会

(見えるっ！ウチにも答えが見えるよ、アム！)

訳のわからないことを思いながら桜はスラスラと答案用紙に答えを記載していく。

「さあくらー！うつせえ！」

声に出ていたようで、紫部にしかられた。

二日目…数学・理科・統計学の終了後

「ねえ、南。」

「なあに？七海ちゃん？」

「あれ”何かわかる。”」

七海の指す方向には真っ白に、生気が抜けた空っぽの桜がいた。

「ジョー…、真っ白に、真っ白に燃え尽きちゃったぜ…。」

桜は理数系が苦手であった。

三日目。前半戦、中盤戦が終わり、残された教科は…

「英語…か…。」

唯一得意な教科、そしてこの数日間、一番勉強をした科目。それが英語である。

いつになく気合が入る。

「ね…ねえ、南。あそこ、なんか熱くない？」

「うん。熱気が出てるね。」

二人の視線の先。桜からは自ら熱気を出していた。

(…よし、今のところいい調子だ。このまま…)

スラスラと書いていく。

今までと違い、ふざけた思想などまったくなく、真剣に、集中して問題を解いていく。

「っ！」

急に桜の手の動きが停止した。

(なん…だと?)

目が見開かれ、さらに手が震え始めた。

(わからない…。わからない。)

いくら考えてもわからない問題が出てきた。

(くっ、このままでは…、あいつが…あいつが…)

桜はとらわれている二宮金次郎のこと、そして座敷わらし達のことを考えた。

(諦めちゃだめだ。諦めちゃだめだ。諦めちゃだめだ。集中、集中、集中、集ちゅっうっうっうっ!!!。)

そして、テストは終わった。

翌日、それぞれの科目のテストが返却される。

「佐伯…、東海林…、……」

桜は返事をせず、机へと視線を落として、考え事をしていた。

(もし、もしもウチが100点とれてなかったら、二宮が…、くそ！弱気になるな！)

「くおおおら、桜！テメえ呼んでんだろ！」

「ふあい！」

返された答案用紙、まっさきに見るのは英語の答案用紙。  
そこへ書かれていた数字は…

## 96 妖怪との戦い方

テストが返却されたその晩、桜は屋敷を抜け出した。

「ふう…。」

屋敷のセキュリティが今日は通常モードであったため、引っかかることがなく抜け出すことが出来た。

桜が抜け出しそうな日などは、茜の手により、セキュリティレベルが上げられ桜でも痕跡を残さず脱出することは不可能である。

「最近はいいい子にしていたからね。助かった。」

独り言をぶつぶつと言い、目的地まで走る。

桜の目的地、それは雲の上学園の旧校舎であった。

「よう、桜。準備はいいのか？」

旧校舎へ入ったとき、聞こえた第一声はこれであった。

「座敷わらし。ええ、準備は出来ている。」

「それか？」

桜の手にはA4サイズの鞆が持たれていた。

その中には、二宮金次郎を救うためのモノが入っている。

妖怪メリーさん。やつとの取引で、桜がテストで100点を取れたときに捕まえてる二宮金次郎を解放するという約束をした。

「あの…」

「あ？」

桜は少しいいにくそうにモジモジとした。

「悪いんだけど、あんたもここら辺で待っててくれない？」

「はあ？何いってやがる？私達の仲間が囚われてるってのに何を！」

「いや、だからさ。相手が相手なだけにあいつら絶対にタダで解放したりなんかしないでしょ。」

「…足手まといか。」

桜は黙ってしまった。

はつきりと言いたいことを言われてしまった。

「だが、それは聞けん。私にも意地がある。他の奴らの願いも聞ける。」

今日、他の妖怪がないのはそのためか…。

ウチの邪魔にならないように、他の妖怪を今日は呼んでいなかったのか。

それでも。それでもどうしても…

「おい、いくぞ。」

思考が切断された。

「あ、え、ちよつと！」

座敷わらしに先導されて、強制的に座敷わらしを同伴する形になってしまった。

旧旧校舎。

取引の場所である。

約束の十分前。緊張した空気が流れる。座敷わらしからしたら、自分の身近な友の存在をかけた取引なのだから当然である。

桜は腕時計を見る。

針が12時丁度を指したその時、ある地面に黒い円が現れた。

「来たか。」

「（ゴクリ）」

桜は唾を飲む。いつの間にか手に持っていた木刀・村雨に力が入る。

そして黒い円の中からずぶりと、沼から出てくるようにドロドロと謎の液体をたらしながらそいつは現れた。

「テケテケ。」

真っ黒そして、下まで、地面まで伸びている身体。

まさに外見からして妖怪といえる格好。

桜も妖怪を数体見てきたが、ここまでわけのわからない容姿は始め

てである。

「よう。」

「テケテケテケ。」

「おい！メリーはどうした！」

桜は物怖じせずと、あえて大きな声を出した。

「テケテケ！すぐにくる。金次郎も一緒だ。」

その時、風が流れる。

「っ！！な！なんて殺気！」

そこにはいつの間にかメリーと捕らえられている二宮金次郎がいた。二宮は気を失っているようだ。

「座敷！」

「二宮！今助ける！」

カアアアンつと金属音になる。

それはテケテケが座敷わらしと二宮金次郎の視線を切る軌道、そして音であった。

「テケテケテケ、だが、その前に。」

「私、メリーさん。私、約束をしたもの、見せてほしいの。」

桜は歩く。紙を持ち。

カツカツと、一歩ずつ桜はメリーと二宮へと近づく。

全員が見守るなか、それは突然だった。

座敷わらしが走る。走り、外へ出るドアを蹴破る。

テケテケとメリーは何事かと、座敷を見た。

そして…

「（二ノ型・応用・）瞬ツ！！」

桜が高速で走る。注意を座敷へと移していたメリーの手から、簡単に二宮を奪取した。

「飛翔ツ！」

木刀を投げる。標的は誰かではない。部屋の窓に向かってであった。パリーンっつと窓ガラスが割れた。

「な！何だ！？」

「今だ！」

テケテケは未だに状況がつかめていない様子であった。メリーに関しては呆然と立ち尽くしていた。

割れた窓に向かって桜はヒュっつと二宮をかかえて飛び出す。

旧旧校舎の外へと桜は脱出することに成功した。

一方内部では…

「あのヤロウ！俺達を騙したな！デケデケエエ！！！」



テケテケは怒りをあらわにし、ドアから桜を追撃しよつとする。

「…」

メリーは黙っている。

「メリー様??」

「『ゴゴあえdこんg.ヴあうdハツツ!!!!!!』」

メリーは突然意味不明な言葉を大声で発した。

その声は、雲の上全体に響く。

声と同時に妖怪の力である“妖力”による凄まじい“威圧”を撒き散らす。

「ぐっ!!」

外で旧校舎へと逃げていた桜であったが、メリーの“威圧”により、動けなくなり、地面へと膝をつく。

「なっ!?!?こっこれは!?!動けない…!!」

内部では、メリーが落ち着きを取り戻す。

「メリーさん。二宮金次郎さんを『取り返してきてほしいのおおお』」

「

テケテケはその言葉に威圧された。

「ひっ！」

それだけを言い、メリーは粉のように消えていった。

「まずい…、あいつを取り戻さないと、俺の存在が…消える…」

外では、やっと動けるようになった桜。再び二宮を担いで走り出すが、

「追いついたぞ…!!！」

「はやっ！」

テケテケの鎌が振り下ろされる。

「うお…!!！」

「ちっ！」

どうにか避ける。避ける時に、桜は二宮を放してしまった。

「しまった！…って座敷わらし！」

「二宮はまかせろ！」

桜を待っていた座敷わらしが、二宮を担ぎ、桜を先導するように走り出す。

だが、桜はそれを追うことはできなかった。目の前の敵に遭遇して

しまったから。

「先に行つて！」

そうこうしていると、テケテケとの距離が、戦闘する距離になっていた。

「ちい！この卑怯者があ！」

「何が！」

鎌と木刀がぶつかり、互いにはじく。

「騙しやがつて！」

「拉致つたやつらが言うか！」

「で、本当は何点だったんだよ！」

鎌を大振りに構える。

桜は勝機と見て、足に力を入れる。

「99点!!」

高速移動での一撃、“瞬”による一撃。

(捕らえた！)

だが、不可思議なできごとが起こる。

「あり??」

風を切るというか、空を切るというのか。感触がまったくくない。

「なぜ？」

「よう、99点とったご褒美に教えてやるよ。」

桜は距離をとる。

「お前、俺のようなタイプの妖怪と戦うのは始めてだろう。」

「タイプ？」

「“妖力”タイプだ。」

「何？」

「まあ、簡単に言うとだな、お前が人間の域にいる限り、俺は倒せねえ！」

テケテケは加速する。

桜は防戦一方となることを強制される。

(こちらの攻撃が効かないとなると…。いや、待てよ…。)

木刀と鎌がぶつかるのを見て、桜は思考する。

(どうして“鎌”は木刀とぶつかる？…ってことは、“鎌”は妖力で作られたものではない…。かと言って、鎌を手元からはじくなくて、あいつも素人ではないだろうし。)

「うわ！」

考え事をして、少し動きが鈍っていたのか。テケテケの鎌が身体をかする。

(どうすれば、当たる？妖力？婆ちゃん…織田との戦い…威圧…そ

して……)

「うiiiiiii!」

テケテケは奇声を上げ、鎌を高々と上げた。

「なっ!何だ?あれ…」

桜が目にしたのは、テケテケの鎌が光を纏っている光景であった。薄く、鎌に膜を張るように光を纏う。

「おい!テケテケさんよ!」

「なんだ!人間!」

「今何やってんの?」

「テケテケテケ!これはな!妖力を鎌に込めてんだよ!そうすると、こういうことが出来るんだよっ!」

鎌を振る。すると、鎌から光が、まるで鎌鼬カマイタチのように弧を描き、桜へと飛んでくる。

「まずっ!」

だが、鎌鼬は桜を通りすぎ、後ろの壁を破壊した。

「今のは威嚇だ。さあて、次は…俺の大好物…足をいただく!」

「“ありがとう”」

「何!?!」

急に礼を言われて、テケテケは困惑した。

対する桜は口元を歪め、笑みをこぼしていた。

「あなたの今の説明。とても為になったよ。」

桜は木刀を構える。

「視線で妖力を飛ばせるなら…、出来るはずだ…。力を刀へ。」  
「しまった！つい説明しちまった！」

桜の木刀に薄い膜ができる。

「させるかあああ！！！」

テケテケは鎌を振り上げる。  
それより早く、動いたのは桜であった。

「“飛翔”ッ！！！」

木刀を投げる。弾丸のように真っ直ぐ、風を切り進む。

「ぐげッ！」

テケテケへと直撃。妖力を込めた木刀はテケテケへとあたった。  
その怯んだ隙に一気に間合いを詰める。

「妖力パンチ！」

ただのボディーブロー。と言っても、桜の繰り出すパンチは一般人のとは桁が違う威力である。

木刀へ妖力を込めることができたのだから、拳にもそれはできるだろうという桜の考えは的中し、拳がテケテケの腹部へと突き刺さる。

ついでに木刀を回収。そして刀を後ろへと引き、

「さらに、一ノ型“獣牙”」

強烈な“突き”。テケテケはその場に踏みとどまることはできず、遥か後方、旧旧校舎の中へと送られる。

「ありがとよ。これで戦いの幅が増えたよ。」

聞こえない相手へと再び礼を言い、旧校舎へと走る桜。

旧校舎

帰ってきた桜は、先ほど会議をした教室へと戻り、座敷わらしに状況を確認した。

「ってわけでどうにか、逃げることはできたわけよ。でも、また追いかけてくるんじゃないの？」

「いや、それは問題ない。私たちが旧旧校舎に行ってる時、他のやつらが“ある人”頼んで結界をはったからな。」

「結界？」

「ああ、それさえ張ってれば、メリーだろうと、ここへは近寄ることさえできないだろう。」

安心しきった桜は一気に力が抜けたかのように、椅子へと腰をおろした。

「はあ。」

「今度、あらためて私ら全員でお礼をする。」

「いや、妖怪総出で、お礼をされても困る…。いって、それじゃあ、ウチ帰るから。」

旧校舎の別教室では、その“ある人”が花子たちにお礼を言われていた。

「ありがとうございます。」

「いいえ、いいんですよ。それよりも、結界を張るだけでよかったですか？」

「はい、大丈夫です。他のことは、私達でどうにかしますから。」

花子はその人物の手を握る。

「ありがとう。“薬師寺さん”」

彼女の名前は薬師寺良子。雲の上学園三年生。桜とは面識がある人物である。

旧旧校舎

「私メリーさん。今…」

意識を取り戻したテケテケは、最初に目にしたのは、目の前にいるメリーの顔であった。

「メ、メリー様!!!」



「あなたの魂をつぶしているの。」

妖怪テケテケは存在を抹消された。

97 忘れてない？禁止点は夏休み返上だよ？

翌日の雲の上学園

桜は、昨日の夜更かしの寝不足の目をこすりながらも、真面目に学校へ登校した。

「ふぁ…。」

「おっはよ！桜！」

机の上で眠っていた桜をたたき起こしたのは、七海であった。

「七海…。」

「どうしたの？眠そうにしているね。」

「いや、ちよつと寝不足でね…。」

「どうせゲームとかしてたんでしょ。」

前科があるから反論できなかった。

「桜ちゃんおっは〜」

「何年前の流行語？」

「あ、それより、」

急に出てきたのは南であった。

その南は鞆の中からあるものを取り出す。

「ほら 昨日の答案用紙 点数の見せ合いっこ忘れてたでしょ？」

いつも、テストが返却されると、いつも三人で点数を比べあう。

だが、昨日、桜は座敷わらしの件があったので、二人を置いてとっ

とと帰ってしまったのだ。

「そうだよ。昨日なんか桜が帰っちゃったからさ。私達二人でやるのもね。桜がかわいそうでしょ。」

「私達三人でやるからいいんだよお」

七海もプリントを取り出した。

「桜はだらしがないから、まだ鞆の中にプリントが入ってるでしょ？」

桜はこの仲間、友情というべきか。この意識に少し感動していた。同時に、昨日のことも思い出した。二宮金次郎という仲間が戻ってきたときの座敷わらしの顔は、うれしそうであった。

「二人とも……」

うるっと涙が瞳からこぼれそうになる。

その桜の感動をぶち壊す刺客…椿がぬつと現れた。

「でも、昨日、桜がいないとどちらかがビリになるから明日にしようって言ってたわよね。」

ピシッ

爆弾を落とすだけ落として椿は逃げ出した。  
空気が固まる。

「……」

「……」

「ふうん。そうなんだ。」

南と七海はあからさまに目が泳ぎ始めた。

「なんなの…：こことかなあ？」

「わわわ、わから、らないね？？？」

「嘘つけええ！！」

ガブリつと噛み付いた。

「じゃあ、始めよつか。」

「ふあい…」

噛み付かれた後が目立つ二人。

三人がプリントを出す。

「じゃあ、五科目でビリの人が罰ゲームね。」

「あ！こんなときに罰ゲームつけやがって！」

桜

国語 50点

数学 50点

社会 50点

理科 50点

英語 99点

英語	理科	社会	数学	国語	七海
60点	60点	90点	30点	70点	

英語	理科	社会	数学	国語	南
40点	90点	49点	90点	40点	

「つとこういうことで、総合得点桜がビリ〜!!!!」

「わぁ〜い！」

「…」

喜ぶ二人は舞い出した。

「さつくらの罰ゲーム」

「さつくらちゃんの罰ゲーム」

「…い…」

ボソリとつぶやく。

「いやだああああ!!!!」「あれ」だけはいやだああああ!!!!」

「桜!?!」

絶叫した桜は逃げる。窓から飛び出して逃げる。

「ば！桜！ここ4階よー！！」

「ああ！え！？」

足が地面につかない。足が空を切る。

「いやああっ！って…」

桜は4Fの高さから落下する。

このままでは地面へと直行してしまう。だが、桜はこのような場合のために、訓練をしていた…というよりやらされていた。祖父とのトレーニングにより…

足を伸ばせば横に見える校舎へ足が届く。

校舎を蹴り、向かいにある木へ足を届ける。

それを繰り返して、ジグザグの軌道を取り、地面へと落ちる。

その様子を4Fから、七海、南は見ていた。

「あいつは猫か？」

「獣類だよ。人類の枠をはみ出しているよね？」

と、いつもどおりの桜怪物論をする二人。

「って、そう。私達三人とも禁止点にはならなかったから、夏休みはあるんだよね。」

「そうだよ。その嬉しさを分かちあおうと思っていたのにい、桜ちゃんバツクれちゃったねえ。」

「まったく…。そんなに“あれ”が嫌なのかしらね。」  
“あれ”はね…。」

南は思い出す。桜が“あれ”をやったときのことを。

その後の桜は、あまりにも“不憫”や“哀れ”という言葉が似合う姿で落ち込んでいた。

「夏休みは、生徒会メンバーで旅行なんて考えていたんだけどね…。まあ明日にでも話そうかな。」

翌日。

朝、執事である識と一緒にクラスへと歩いていた。

「しかし、禁止点とらなくてよかったな。」

「まあね。これで夏休みは理事長と顔を合わせなくてすむ。こんなに嬉しいことはない！」

ピピピピ。

桜の元へメールが届いた。

『差出人・七海

おいしい和菓子作ってきたよー。』

「おかし!!!」

「????」

桜が絶叫した。

「何だよ？」

「知らないの？七海の作るお菓子は、っばないっすってくらい美味しいんだよ！それじゃ！」

教室へ向かっている足を回転させ、生徒会室へと直行する。

「トリックアトリーート！！！！！」

生徒会室へ入った第一声はこれであった。

「あ、来た。」

「遅いよぉ〜」

生徒会室には、七海、南、氷柱の四人がいた。

「で、お菓子は？」

「その前に聞きなさい。旅行の話よ。」

「旅行？」

氷柱が、ペーパー式の世界地図を取り出す。

「つとということで、旅行先を決めましょう。」

「はいはい」

南は元気よく手を上げる。

「とてもいい旅行先の決め方があります。」

「何？」



取り出したのはダーツ。

桜と七海は“まさか”と思う。氷柱は頭の上にドでかい“？”を浮かべる。

「世界ダーツの旅」

( ( やっぱり... ) )

ゴンつと机に頭を打つ桜と七海。対照的に氷柱は面白そうな顔をしていた。

「やりましょう なんだか面白そう!」

氷柱がダーツをとった。

その瞬間、桜と七海が驚愕の表情を浮かべる。

「ダメよっ! 氷柱が投げたら...」

氷柱がダーツを地図に向かって投げる。  
投げられたダーツの向かった先は...

「ぎゃあああっ!」

桜の額にダーツの矢が刺さる...寸前で腕で矢を止める。  
ほっと七海が胸をなでおろす。そして、キツと南を睨みつける。

「氷柱がこういうの持たせたら怪我人が出るって知ってるでしょ!  
桜なら問題ないものを...」

「あるよ!」

「ごめんよお。はい、じゃあ七海ちゃん投げて。」

まったく…と言い、七海が矢を持つ。

「ぶー、ウチも投げたかったのに！」

「はは、残念。黄金の矢は私を選んだ！」

「5部ですかー。ちよつと台詞が違いますよー。」

「うっさい！」

そして、七海が矢を投げた丁度その時、ふてくされた桜は机の上にあつた、七海が作ったと思われる和菓子に手をつけた。それを見た途端、七海と南が叫んだ。

「ダメー！ー！！！！」

パクリ。

和菓子を一口。

「ぶるわあああああ！！！！」

桜は倒れた。

「ちよつと！桜？どうしたの？」

「我が生涯…一片の……つて無理…」

「桜！？桜！？」

氷柱が桜を揺さぶるが、気を失ってしまったようだ。その様子を見ている七海と南が顔を合わせる。

（あのお菓子…）

（氷柱ちゃんが作ったんだよね…。）

小さな声で話し合う。

（だって食い物で釣らないと、昨日の“あれ”の件もあるし、絶対に来ないと思ったからさ。）

そう、氷柱は学業面では完璧超人であるが、料理はテロ級の破壊力を誇る人物であった。

そして、七海の投げた矢が刺した地図の場所は…

グアイ島。美しい砂浜、美しい自然。人はそこを“楽園の国”と呼ぶ。

#### 次回予告

桜「テスト編終わった！」

識「この章を作った感想だが、反省するところがあるらしい。」

桜「え？何？」

識「前話を作ったあと…少ない“お気に入り”と“評価”の数字が下がった。」

桜「まじで？」

識「まじだ。その点とかな、100話を迎える前に一度、反省会をしたいと思う。」

桜「まあ。“妖力”とかいきなり超展開ワロタとかなるだろうな」とか思ってたけどさ。」

識「そういうことを99話で話し合いたいと思う。」

桜「98話はどうするの？」

識「短編とか入れるんだろ…きつと。」

桜「そうかあ、ってことで、次の章は100話からだよ。その名も

“夏休み旅行編”ってね。」

識「それじゃあ、期待して待っていてくれ！少ない読者さんたち！」

桜「ばいばい。」

外伝です。

75話で軽く触れた過去編です。

なので、75話を読んでいないと話がわからないと思うので読んでくださいね

それは東海林桜が中学二年生のときのお話…  
75話『西園寺七海』の続きのお話。

西園寺七海が来栖という他校の不良の前で倒れているところに桜は  
でくわした。

そして、桜は相手が誰なのか、それはわからないが、来栖と喧嘩を  
していた。

長い時間の二人の暴力は互角の力であった。

桜が殴れば、それ以上、または同等の拳が返ってくる。

逆も同じく、来栖が蹴れば、桜も同じ以上、同等の蹴りを返す。

二人は長い時間、どう見ても学生の喧嘩の範疇を超えた殴り合いを  
していた。

身体が軋む。

自分の祖母以外でこれ程の力を持った人物は初めてかもしれない。

東海林桜は身をもってそう実感していた。

身体が悲鳴をあげ始めた。

警告。

いうならば、ボロボロの状態である。だが、それは相手も同じこと  
であり、先に

根を上げるなど、言わば心の敗北はしたくない。そういった喧嘩を  
している。

「うりゃあああ!!--」

「ぐおおおお!!--」

お互いの拳が頬に直撃する。

「はあ…はあ…」

「フウ…フウ…」

二人は一度距離をとり、呼吸を整えた。

「まったく、化け物って呼ばれたことない？え〜っと…」

「“来栖”だ。そう言うお前こそ、化け物って言われてるんじゃないのか？え〜」

「と？田中だったか？」

「知ったかぶりすんな。まだ名乗ってもいないよ。東海林桜だ、貴様を倒す記念

すべき女の名だ。」

「あら、いやだ。私に勝つ夢でも見てるのかしら？」

軽口を叩きながらも、正直な話、双方ともあまり余裕はない。

雨の降りが強くなり、すぐそこにある川の流れも勢いを増してきた。

二人の拳が交差する。

頬にあたると同時に雨が強くなり、雷が落ちる音がした。

「っ！…！」

「っ！…？」

拳が落ちる。そして、最初に地面へひざをついたのは桜であった。

「…」

来栖は膝をついた桜を見下ろす。

「姉御？」

いつまでも棒立ちする来栖へ声をかける来栖の部下達。来栖は未だ動かない。部下達が前へ回り目を見た。

「あ…姉御…」

勝者の目ではなかった。

目の光が失われて、意識はもうなかった。すると、

ビシヤッと来栖は前のめりに、地面へと倒れた。同時に、膝をついていた桜も倒れた。

二人の戦いはドロ―。引き分けとなった。

「おいおい、姉御と引き分けだと？」

「こいつ…どうする？」

「いつそこで川にでも流しちまうか？」

部下達の中で倒れた桜をどうするか、議論が始まった。

「待てい！！！」

声が響く。ただの大きな声というだけではなく、人の芯にまで響くような声がした。

部下達が声のした方向を見ると、一人の大柄な、2 mくらいの男性



が近づいてきた。

「誰だてめえ！」

「この鬭争、しかと見させていただいた。この引き分けに手を下すなどの下劣な行為。それがし、“本多忠勝”が許さぬ。」

「てめえ関係ねえだろ！引っ込め！」

部下達からブーイング、罵声の嵐。

「いた仕方ない。」

本多忠勝は息を吸い、睨みつける。

「っ！！」

バタバタバタつと不良たちが意識を失っていく。

その様子を見て、本多忠勝の背後から一人

「忠勝、何やってる。余計な時間を…。ってお前…、こいつらどうするつもりだ？」

「…」

「はあ、雨も振っているし、風邪引かすわけにもいかないから、救急車でも呼ぶか。」

「申し訳ございません。“徳川陸”様。ぬ、この者は…」

「どうした？」

忠勝は、七海を見る。

「西園寺組の令嬢です。この者を病院へ連れて行くと問題が。」

「ああ、西園寺組か。そうだな。こいつは、学校にでも送っておく



いた。

「まったく。どの生物と喧嘩したらそこまで怪我をするんです！」  
「だから“人”と喧嘩したんだって！」  
「嘘おっしゃい！その怪我、大事故にあったようにしか見えません！」

満身創痍の桜に対して、言葉を浴びせているのはメイドである茜。

「あの“来栖”のやつ……。今度あつたら決着をつけてやる……。絶対に……。七海をあんな目に合わせて……」

桜は悔しかった。

一方的な友人ではあるが、その友人が痛めつけられたこと。そして、来栖を倒せなかったことが。

その一週間後、桜の怪我は怪我を完治させ、雲の上学園へと、登校した。

「東海林さん。これ休みの間に配られたプリント。」

「お、ありがとう。南嶋。」

ぐるぐる眼鏡をかけた少女が言った。

「珍しいじゃん、南嶋がこんなことしてくれるなんて。」

雲の上学園中等部では、南嶋木葉は暗い雰囲気を持った少女であり、滅多に人と

は話さない人物であった。

「クラス委員だから。」

それだけ言っと、南嶋は自分の机へと戻っていった。

それと入れ替わるようにやってきたのは、西園寺七海であった。

「東海林ちよつと付き合え。」

「一週間ぶりの登校なのに、“お久しぶり”とかないの？」

「ない。」

「ひどい！あとこれから授業が……」

「サボれ。」

ということ、桜と不良である七海は教室を出て、屋上へと行った。

883

「なあ、お前この一週間どうしたんだ？」

「あ、ウチがなくて寂しかったんだ。」

「ばっ！そ、そんなわけねーだろ！そうじゃなくて、どうして休んでいたのかって！」

七海は桜に対して一つの疑惑を持っていた。

来栖にやられたとき、誰かが助けに入ってくれた。その人物は雲の上学園の制服

を着ていた。

まさかとは、思った。だが、どうしてもその人物が桜である可能性を否定はできなかった。

「学校の帰り道、熊に襲われた。」

「嘘つけ!!」

「そそそ、そんな疑うなんて、ひ、ひどいなあ。」

「そんな目が泳いでるやつ言うことなんか信じられるか!」

「それでも僕はやってない!」

「いきなり冤罪映画のタイトル言うな!」

桜は何かを隠したまま、喋ろうとしない。

こいつは私のことにはまわり付くのに、大事なことは何も言わない。

まったくムカつくやつだ。

でも、私自身気づいていた。

私は、この東海林桜と話している時間が、楽しい時間になっている  
コトに。

七海はため息をついて、真相を聞き出すことを諦めた。

「もついい。じゃあな。」

「どこ行くの?まだ授業間に合うよ?」

「サボるんだよ。クラス委員のえつと…南嶋には適当言っておいて  
くれ。」

「じゃあ、ウチも一緒にサボろうかな?」

「…」

「?」

桜は違和感を感じる。

普段なら七海は、「来んな」などと突き放すのだが。

「勝手にしろ。」

それは「一緒にサボってもよろしいですよ」という意味だろうか。

心を少し開いたってことか？

桜は呆然とする。

「おい、来ないのか？置いてくぞ。桜。」

ああ、やっぱりそう言う意味だったらしい。

「ツンデレ？」

「ッ！バカ！」

顔を真っ赤にして、屋上のドアを勢いよく閉めた。

「やっぱりツンデレじゃん。」

こうして桜と七海のサボリライフは習慣化していくのであった。

こののち、サボリメンバーに南嶋木葉、今で言う南が加わるのは、少し後の話である。

## 次回予告

東海林「どうも、作者の東海林です。今回は外伝的なエピソードである、桜の中

学生時代の話でした。これをシリーズとして、今後ちよくちよく本編の間に挟んでいきたいと思えます。さて、次回は予告通り反省会をしたいと思えます。

では99話でお会いしましょう

桜「はい、ということ、反省会の巻き〜！」

識「時間もないからとっとと進めるぞ。まず第一章から。」

桜「あれは、……その場で考えてかなり適当に作った話だからね。いまいち他と比べてぱっとしないんだよね。」

識「制作当初、考えていたのは五章や六章の内容だったからな。」

桜「う〜ん、ぶつちやけとっとと、五章の内容とかを書きたかったとこだったね。」

識「まったく、おろそかな内容だったな。」

桜「だけど、今後に必要な“妖怪”の存在を証明したってところだけは重要な内容だったね。」

識「ま、紹介の章って感じだな。」

桜「続いて、二章。」

雪音「は〜い！私の初登場した二章でえ〜す。」

桜「まず、ウチの屋敷の使用人を考えたときに、妖怪を一人いれようってことになったんだよね。」

雪音「それで、最初からいるのはどうかと思ったから、どこかで遭遇させたわけですね。」

桜「で、まあよく知られている雪女系を使用人にしたわけ。」

雪音「でも、ひどい話ですよね。」

桜「何が？」

雪音「だって、そのために、私の家破壊させたじゃないですか！」

桜「あ〜だってさあ、そうでもしないと、桜邸にこないでしょ……」

雪音「そうですね！」

桜「その雪山でウチの初のマジタイムン戦闘をしたんだよね。」

雪音「ええ、あの狼ですね。」



桜「そこからだね。この小説がバトル物に形を変えてきたのは…」

識「よし、続いて三章だな。」

桜「この話では珍しくバトルがなかったよね。」

識「そうだな。今後の展開のために、まず桜の家のことを紹介しなきゃいけなかったからな。あのギスギスした感じとかな。」

桜「ついでに識がうちにくるためのきっかけ作りもしたね。」

識「しかし強引すぎだろ。まさか“家を爆破”とはな。」

桜「あはは…。」

識「あははじゃない！」

桜「でも、こうでもしないと識を第二の主人公にするため、ウチの執事にする必然的な事情を作ることができなかったんだよね。ま、後半は今後のフラグを作ることができたからいっか。」

識「それ、言っているのか？」

桜「四章。…は、飛ばそう。」

識「飛ばすな。仕事しろ。」

桜「うゝ、だって…。」

識「むしろ飛ばしたいのは俺のほうだ。四章では俺とお前が戦って負けたんだからな。」

桜「識“ごとき”に勝ったのはどうでもいいんだけど、徳川ってやつに負けたのがくやしー！！」

識「ぶつころす。」

識「五章では、当初から考えていた姉妹校を登場させたって章だな。」

桜「ウチと織田の戦い。それから徳川海との出会いをさせればどうでもいいやつて感じで書いていたなあ。」

識「恐ろしくいい加減だな。」

識「六章は今までになく長い話になったな。」

桜「予想外に長くなったね」

識「ああ、正直無駄な話が多すぎた。これは反省すべき点だな。」

桜「でも、バトルパートはそこそこうまくいったと自負してるよ。」

識「何も戦ってないけど。」

識「ぐっ…痛いところを…」

桜「で、七章は…」

識「言うな。」

桜「と言っても、読者のために言わせてもらおう。蛇足であったと！」

識「勢いが急に落ちたよな。」

桜「総じて言うとなぜ人気がでないか！」

識「単純に作力と、更新期間が開きすぎていることだろう。それに

誤字脱字、そして展開が超展開な時がある。」

桜「…そうね。更新期間はどうにかしないと…。今後は改正しまっ

す。しっかし妖怪との戦い方を学ぶ必要があったとはいえ、“妖怪

との戦い方”でお気に入り数が減ったつてのはショックだった。」

識「作者も見えた瞬間悲鳴を上げたからな。」

桜「ま、こんなところですわ。この反省を生かして次回、八章“グアイ島”編でお会いしましょう！」

100 第八章 『楽園の背景は戦争』（前書き）

どうもどうも！

久しぶりの投稿です！

ぜんぜんアップしてなくてすみません！

ってなことで前前は西園寺七海のことについての章でしたけど、今回はもう一人の主人公という設定である中嶋識に関する章です。

ではスタート！

火薬、鉄、血、そして腐臭

俺はずっとその臭いを嗅ぎ続けていた。

手を握り、手を赤く染め、腐臭を作り出す。

何も思わず、何も感じず、機械のように。

天使がいた。

闘争と混沌の世界に、俺の前に舞い降りた。

だが、天使は死んだ。

その死と引き換えに俺は、“クニ”を捨てることができた。

あの人と、天使のおかげで今の世界があった。

ガタンッ！

昭和のギャグのような展開でベッドから落ち、中嶋識は目を覚ました。

「…なんて夢…。時間は…早いな。たまにはいいか。」

午前4時30分。若干早く目が覚めた識は、少し明るくなって来た外へと出る。

「そうか…夏なんだよな。」

8月。朝日が出るのが早い。そして雲の上学園は今夏休み真っ只中である。

新聞受けには今日の朝刊が入っている。  
朝刊を取り出し、一面を見る。

(…特にないな。)

識は屋敷へと戻り、新聞紙にアイロンをかける。

「あら、識君。今日は早いですね。」

「ええ、たまたま早く目が覚めて。」

声をかけたのは主人である桜を堂々と蹴り飛ばすメイド、茜であった。

「今何か余計なことを考えました？」

「いつ！いえ！何も！」

殺意の波動を持っていると、桜が言ってる。

「ところで、桜が旅行に行くって知っていますか？」

「ええ、たしか生徒会の四人でグアイへ行くとか。」

「識君も学生なんですから、休暇をとって旅行に行っつかまいませんよ。」

識は一瞬考えた。

(旅行かあ、一人で箱根温泉なんてのもいいよなあ。)

しかし、現実気がついた。

「…俺、金がないんだ…。」

「え？ちゃんと給料をあげてますよね？」

「そうなんですけど…、どうわけか、貯めていた貯金が先日、ゴツソリ盗られていたんですよ。」

先日、識は貯金残高の照会をしたところ、残高0円という驚愕の事実を目にしていた。

「ああ、たしかちょっと前に新聞に載ってましたね。預金残高強奪事件。まった

く痕跡を残さず預金を全て持っていくとう事件。」

「そうなんですよ。その被害者になってしまっ…」

「そついう事情でしたら…」

「いえ！それはダメです！」

識は茜がおうとしていることを制止した。

怒ると鬼のような茜であるが、本来は面倒見がよくやさしい人間なので、識を救済しようとしたのだろう。

だが、識はそれに乗るのは甘えだと判断したのだった。

「でもそれじゃあ、夏休みは識君どこも行けませんよ？青春というのは、後戻りで

きないというものでして、失って始めて…ってなんですか！その目は！」

「あ、いえ…」

（魂こもってるなあ。やっぱり歳を気にしているからか？…なんて死んでも言えな

いな…というより死ぬな。瞬 殺されんな。」

と識は笑顔で考えている。

「だれがベガ殺しをするんですか!？」

「心を読まれた!！」

「まったく、最近そういう所、桜に似てきてませんか？」

「はは…」

あかねは飽きれながらキッチンへと戻る。

これから朝食の準備をするようだ。普段は茜が調理をしている頃、識は掃除をす

る。今日も普段通りに掃除を始めようとした。

「あ、識君。」

「何ですか？」

「今日、朝一スーパーの特売日なんです。ですから」

「ええ、わかりました。あそこはたしか6時に開店だから、今が5時で。」

「お掃除は私がやりますから、これ。マークしたの買ってきてください。」

チラシのはメーカーで丸をつけられていた。

「それと雪音さんも連れて行ってください。」  
「雪音さんもですか？」

指定された物だけを買うのなら、一人で十分な量である。むしろスーパーの特売

日に他の人物を連れて行くことは邪魔でもある。

特に雪音は身体が細く、開店時のラッシュに巻き込まれでもしたらどうなるのか

わからない。

識はあかねの意図を聞いて見た。

「雪音さん、まだスーパーへの買い物に行ってもらったことがないんですよ。そ

こで、今日という一番激しい日に行ってもらって買い物の仕方を学んできてほしいんですよ。」

つまり、識は教育係りに抜擢されてしまったようだ。このようなことを白羽の矢が立つというのだろう。などと思いつつ識は承諾して、早速朝のスーパーへと出掛けた。

とあるスーパー

「し…識さん。なんですかここ？」

「これが特売日独特の空気、いえ、殺気ですよ。」

開店三十分前だというのにスーパーの前には人だかりができていた。その大半が主婦層で、激安商品を買うため早朝から殺気を押し殺し



ながら集まっていた。

「っていうか…苦しい…です。」

開店五分前となり、我こそが先へという思いから店の扉へと客が密集し、雪音は予想通り押しつぶされていた。

そして…

「では、開店します。」

店員が自動ドアを開けると、ドアが完全に開ききる前に、わずかな隙間から待っていた客がなだれ込む。

「っ……」

識にはわずかに雪音の声があったような気がしたが、周囲には姿形がまったく見えなくなっていた。

「っおおおおおおお！！！！！！」

識も他の客と同様に人という人をかきわけ走る。

時に転んだのか“誰か”を踏んだり、肘打ち、ボディーブローなど打撃技が識を襲う。なぜボディーブローが飛んでくるのかがわからないが、識はめげず真っ直ぐ進む。

「いやあ〜買った買った」

識は両手に袋いっぱいに入ったビニール袋を満足そうに見つめる。嵐の中を強行突破した結果、予想以上に多くの商品を買えたことに大満足していた。

いざ帰ろうとしたところ、大事なことを忘れていた。

「あ、雪音さん…」

開店と同時にはぐれてしまった雪音の存在である。

「し〜き〜さ〜ん。」

背後から寒気。いや冷氣といった方がいいのだろうか。何か怨念のこもった視線を感じた。

後ろを振り返ると、予想した通り雪音がいたが、前髪をたらしてお化け屋敷にいる人物のようにぶら〜りと手を垂らしていた。服はボロボロ、恐らく開店時に転んで踏まれたのだろう。

「ゆゆゆ雪音さん!？」

「私を見捨てて…あげくの果て、“私を踏みつけて”」

ああ、あの時踏んだの雪音さんだったのかあ。などとのん気に考えていた。

キラリと目が光る。

手にはビュ〜つと雪と風が舞い始めた。その風と雪は右腕に大きな雪の拳を形成し始めた。

「私を見捨てて踏んで…」

「いや、あの状況じゃ……」

「見捨ててええー！！！！」

「ギア……ぎゃあああ！！！！」

巨大な拳で殴られた。

「もう、識さんなんて知りません。」

「いや、すみません。」

識の右頬は真っ赤にはれている。

「あ、そういえばくじ引き券もらったので、もしよければ引いて見ますか？」

「くじ引き……ですか。何ですかそれ？」

機嫌直しのためにと思っていたの行動で、思い通り食いついてきた。

雪音はずっと山で生活していたため、世間一般の常識がうとい部分がある。という識の考えがあつての行動でもあつた。

「ええ、すぐその商店街でやってるやつなんですけど、ガラガラって箱を回して、玉をだすやつなんですけど、やってみますか？」

「やりますー！」

即決であつた。その雪音の目は少年が玩具をもらったかのようにキラキラと輝いていた。

先ほどのことなど忘れてしまったかのような態度で識を引っ張り商店街へと走る。

商店街の入り口、そこにくじ引きが設置されていた。設置されていたのは、もっともスタンダードな形をしている八角形型の回すタイプの物であった。商品を見ると

「ふーん、商店街のくじの割には結構いい物があるな。一等が…、海外旅行券？場所が書いていないぞ？」

ボードには海外旅行券としか書いていなかった。

商店街の人の手抜きというよりミスであろうか。それよりも識はその下の物。あたりやすい商品の方に注目した。

「買い物ギフト券、図書券五千円分。高級料亭三万円分券？金券が多いな？でも当たったら一番うれしいかな。で、雪音さんこれなんだけど一回分しか…」

と独り言をぶつぶつ言っている間に、雪音は券を係員へと渡し、ガラガラと回していた。

「あ、聞いてなかったのね…」

ガラガラつと音が鳴る。

雪音にとっては商品がどうこうというより、このくじ引きをするということに一番興味があった。なので、商品ボードなど一切見ず、ウキウキとした気分で回している。

カラんつと穴から玉が出る。

その色は…

「あ、識さん。“金色”の玉が出ましたよ。なんだが、今日一日いいことありそうですね」

何も知らない雪音はくじ引きを神社のくじ引きのように今日の運勢を占う物と勘違いしているため、純粹によるこんだ。

だが、“金色”が何を意味するのかを知っている人物からしたら、喜ぶどころか驚愕する出来事であった。

識も係員も呆然と金色の玉を見つめる。そして係員はわれに戻り仕事を始める。

「お、おお…大当たりいい!!!」

カランカランとハンドベルが商店街に響きわたる。何事かと、商店街にいる人々がこちらに顔を向ける。

「おめでとつございます！商品は“グアイ島”一週間旅行券です！」

グアイ島…今は“樂園”と呼ばれる国であった。

#### 次回予告

識「これをアップするのに一ヶ月くらいかかってしまった。」

桜「最近忙しかったからねえ…ってこれ前にも言い訳としてつかったね…」

識「だが、今回からの新章をやるにあたって、ユーザー数を獲得するために定期的に更新しなくてはならんな。」

桜「うーん、最近モハン3rdが発売されたから、そっちなやりのに…」

識「我慢しろ、ユーザーのためだ。」

桜「待ってて、リオア！レス！すぐにうちも行くから！」

101 そうだ、グアイへ行こう

識と雪音は買い物を終え、桜邸へと戻った。

それからは通常通りの仕事、雪音は庭掃除、識は屋敷掃除をし始める。ふと時計を見ると午前九時をさしていた。

「そろそろかな。」

識の役職は、桜の執事。その桜は夏休み中ということもあり起きてこない。識は仕事のひとつとして、桜を起こすため二階へと上がった。扉を開け中に入ると

「いてっ！…？何だ？」

部屋へと入るなり、何かを踏んでしまったようだ。その物体を見ると

「ドリ ヤス…？」

そこから視点をゆっくりと上げ、部屋の中を見渡す。

あたり一面ゲーム機が散乱している。ゲーム機だけではない、ソフ  
トやらDVDなどが散乱している。

「な…なんだ！？これは！？戦争でもしていたのか？？」

しばらくその光景に呆気にとられていたが、すぐにすべき仕事を思い出して桜を探した。

「おい！桜…って桜どこだ！？」

部屋の中にはゲーム以外にもマンガ、服もろもろが山のように積み  
れていた。  
声をかけてしばらく立つと、

ガバっ！

つと服の山の中から手が出てきた。

「おわっ！マドハド!?」

「うお〜」

低く、そして弱弱しい声が聞こえる。

誰の声か考えるまでもない、この部屋に寝ている人物。桜である。  
上に伸びた手が次第に力を失って、へなへなと落ちる。

「お、おい！桜！」

ゲームetcの山を飛び越え、桜の手を掴む。そして力を入れ引つ  
張り上げる。

服の摩擦が影響して、桜が出てこない。手間はかかるが山の服をか  
きわけることにした。

そしてようやく桜を引っ張り出せる状態になった。

「桜！大丈夫か？」

「ふぶ…」

とにかく安全な場所へ連れて行くことを考える。周囲は散らかって  
いて安全と呼べるようなスペースは存在しなかった。

外に出るしかない。そう思い桜をかかえた状態で廊下へと出た。

廊下へ出ると、先ほどの識の音がよほど大きかったのか、一階にい



た茜が駆けつけてきた。

「何があつたんですか!？」

「茜さん!桜の部屋に入ったら、桜が服の山に埋もれていて…」

それを聞いた茜の顔が慌てた顔から呆れた顔へと変化した。

「“また”ですね…。とりあえず桜を風呂場にかけていきましょう。」

「風呂場…ですか?」

そして気絶している桜を背負って風呂場へと着いた。桜邸の風呂場は銭湯並に広い。ライオンの口からお湯がでるような物まである。

「それじゃあ、識君。それを湯船に放り投げてください。」

「あ、はい。(ってか“それ”って)」

背負っていた桜を湯船へと落とす。

水しぶきがあがり、ぼこぼこ泡が出る。

「ぶおっは——!——!——!」

湯船から桜が復活した。

「げっほ…、げほ…」

咳き込む桜、その桜に近づくのは茜

「桜!またやりましたね!」

「え？」

「部屋を散らかした拳句、一人ファッションショーして片付けないで！」

「あはは…」

散らかしただけで、片付けはしなかったようだ。そして、そのまま熟睡。毛布代わりに着た服で身体を温めたようだ。

「だってさ、旅行の服そろそろ選ばないといけないじゃん。」

「それと片付けしないのは別問題です！」

そこから茜の説教が始まった。かれこれ二時間の説教となった。

「え？ 識もグアイ島に行くの？」

昼食時、朝のチケットのことを話し茜から休暇をもらおうとした。そのときに偶然居合わせた桜からの質問であった。

「ああ、そうなんだ。で俺らが行くのが一週間後なわけだが。」

「ふうん、偶然だね。」

「ああ、グアイ島とはな。」

「そうじゃなくて。」

桜がチケットを取る。

そして、見るのは行き先ではなく、日にち。

「うちらも、来週。ちょうどこの日にグアイ島に行くんだ。」

「何？ そんな偶然…」

ありえない。と言いたいが、ありえてしまったので仕方がない。

「そうですか。識君もグアイに。しかもちょうど同じ日に出発ですか。」

「それでなんですけど。」

識がチケットの枚数を見せる、  
チケットは四枚もらっていた。一枚は識、二枚目は雪音。あと定員が二人である。

「茜さんはどうですか？」

「私は来週本家の方に行く用事があつて。」

「そうですね…。なら他に…」

「黒井君と白井君も私と一緒に本家へと行くので、学校のご友人を誘ってみてはいかがですか？その方が楽しそうですし。」

茜の言うことはもつともである。学生の旅行となれば、友人でワイワイと行った方が楽しいに決まっている。

問題は誰を誘えるか。

とっさに浮かんだのは同じ生徒会の間宮である。さっそく電話をかけようとするど…

ピピピピ

着信音がなる。誰からか電話がかかってきた。相手は浦島であった。

「なんだ、浦島？」

『わしらをグアイ島へ誘え!!』

開口一番がそれであった。どこからその情報を拾ってきたのか。まさか屋敷に監視カメラなんかしかけたのではないかと疑う。

「なんで知ってるんだよ。」

『ふっふっふ。わしの情報網を甘く見る出ないぞ。』

『たわけ、わらわの監視小型カメラで見ただけであろう。』

察するに、浦島の妹である乙姫が声を出した。

「もしかして、妹もか？」

『うむ、その通りじ。まな板娘の付き人よ。』

「う…、あつてるが何かいやな感じが…。」

『とにかくそういうことじゃ。わしら二人がお主のチケットをつかってやるわ。』

「こんのクソジジイ。使つてやるわじゃねーだろ。」

『では、頼んだぞ。』

一方的に話を進められ切られた。

間宮を誘ったところで、来るとは思わないしまあいいかと思つ識。

こうして識のチケットの枠は全て収まり、後は一週間後の旅立ちの日を楽しみにするだけとなった。

が、

「ところで識。」

桜が指で識に来いと合図する。茜には聞かれたくないような素振りである。

「雪音さんのパスポートどうするの？」

「え？」

「なんだかアンタ知ってそうだからいいけど、雪音さん妖怪じゃん。戸籍とかないから正規のやりかたじゃあパスポート作れないよ。」

完全に忘れていた。

今まで、雪音は普通に問題なく生活を送っていたが、それはあくまで屋敷内でのことである。

雪音は屋敷から出たことがほぼない。

つまり身分を証明する物を発行したことなど当然ない。

ちなみに桜邸で働くとき、

「路頭に迷ってて娼婦をやりそうになっていた人だから拾ってきた。」

などとても本人には聞かせられないとんでもないことを言っただけのように手を回していた。

「東海林家の力でどうにかならないか？」

「うーん、パスポートの偽造かあ……。」

しばらく桜は考える。パスポートの偽造となると正直なところ本家には知られたくない。そんな怪しいことやってるのか！などと祖父である御春や、薔薇都おじさんに咎められてしまう。

「そつだ！手はあるよ！」

「本当か！」

「ウチの例のバカ兄貴、恋継兄さんならどうにかできるよ。」

「おいおい、東海林家の人間だが、大丈夫か？」

「大丈夫、騙せるし。」

「それが狙いか！」

急遽偽造パスを作るため、桜、識、雪音の三人はジェットで恋継の家へと飛ぶことになった。

その頃、椿は…

「お母様、グアイへのバカンスは本当に行かないのですか？」

豪華なソファア、天井にはシャンデリア、壁には動物の頭部の造形など豪華な部屋。そこは黒雛家のとある一部屋である。

ソファアにぐったりと寝ているのは雲の学園理事長こと黒雛理事長である。

「あ~~~~っつい。グアイなんてクソ厚いとこ行ってらんわよ。

私はもつと涼しいとこ行く。」

「お母様があそこに行きたいとおっしゃるから2名分の特別リゾートを予約したのですよ。」

「ああ…、そうだ椿、間宮と行ってこい。」

椿は少し驚いた様子で、扇子を口元で広げる。

「殿方と二人で宿泊しろとおっしゃるのですか！お母様！娘に言うことではありませんよ！」

「気にするな…、間宮はお前には興味がない…。」

「そういう問題ではありません！…まったくどうせなら桜と二人つきりで…甘い夜を…。」

椿の妄想タイムに入ったころ。

桜邸へリポート

「ひいっ！！！」

桜が急に奇声を上げた。桜の後ろにいた雪音がその奇声を怖がる。

「さ、桜さん？どうしました？」

「いや、ものすごい悪寒が…、何か背筋が凍るような…」

再び椿の家

「仕方ありませんわね。では私と間宮で行ってきますわ。」

「お〜〜らい。」

「“グアイ”ね。夏休みのバカンスにしてはよかった方ね。」

桜邸

「あひゃあ！！何か嫌な予感が！」

「さ、桜さん？本当に大丈夫ですか？」

## 102 旅行前の下準備

黒井が操縦する特殊ジェット機（四人乗り）が桜の従兄弟である恋継邸につくまでそう時間はかからなかった。

桜たちが出発した後、茜が一報入れていたので、恋継邸につくなり出迎えの執事、メイドがずらりと待ち構えていた。

「お待ちしておりました。桜様。」

「ども、久しぶり。」

執事長らしき人物が声をかける。

桜とこの人物は古くから面識があるようだ。

「恋継様はこちらです。ご案内いたします。」

ヘリポートから屋敷内部へと入る。

この家には、桜の母親である東海林花の姉にあたる、東海林瞳、その夫のヴァレンタイン、そして子供である恋継、恋美、愛歌の五人が住んでいる。

家自体はとても“家”と呼ぶには相応しくない15階建ての会社ビルのような外見をしている。

桜たちが今いるのはその屋上、ヘリポートである。そのエレベーターにて、恋継の部屋へと降りていった。

「よ、兄貴。」

「なんだ、桜か。今忙しいから適当に座ってくれ。」



そう言う恋継。何やら謎の科学薬品を作っているように液体を混ぜ合わせていた。

実はこの家は、家であると同時に会社でもある。名前は“東海林バ イオテクノロジー”。業界では大手の企業である。その次期社長として恋継は日々研究や経営に勤しんでいる。

「だってのに、どうしてガスが充満している部屋で火なんかつけるかね…。おかげで識の家は木っ端微塵になったよ。」

「何か言ったか？」

「いや、何も。」

識の家を木っ端微塵に爆破したのは、この恋継である。

その責任を感じて、路頭に迷っていた識を寝泊りが桜邸で可能な執事の仕事を紹介した。

だが、当の本人は誰の家を爆破したのかを知らない。それは恋継の責任ではない。東海林家の力に、いや東海林家長男である薔薇都の手腕によって、そこは「空き家」として処理し、恋継に報告していた。

世間体を気にする薔薇都ならではの規模の大きい行いである。一人の家の存在を消したのである。

しかし、桜はこの家。識の家を知っていたので、薔薇都によって情報が消されていても、識の家ということは知っていた。

「まったく、東海林家ってのは…」

ボソリと小さな声で愚痴を言う。

「でさあ、そこをどうにかあ〜」

「お前が可愛く頑張っても、可愛くならん。」

怒りのボルテージが上がってきた。だが、ここでいつものように殴ってはいけない。桜は残った理性で自分を抑えている。そして、待っている二人を見たとき、活路が閃いた。

「雪音さん。」

「はい？きやあ！」

桜は雪音の腕を強引に引つ張り自分のそばへと寄せた。

「ほら、こんなに可愛い子がお願いしているんだよ。」

「あつ…」

しどろもどろと、雪音はどうしていいのかわからず、困っていた。だが、その状態が幸運を呼んだ。

「萌え…」

とても小さな声で恋継が言った。

次の瞬間、ツーッと鼻の穴から赤い液が垂れた。

「いいだろう、桜。その子に萌えたぞ。その子のためなら作ってやるう！」

困惑している雪音を見て、逆に好感を持った。というより、萌えたらしい。

恋継は好感を持った女のためなら何でもする。プラス若干のロリコン属性の持ち主でもある。

その二つの要素を桜は知っており、利用をした。

以前、恋継部屋でイタズラをしようとして歩き回っていると、足元に何

かが当たった。それを拾い上げると…、18禁ゲームであった。しかも基本ロリキャラが登場するものである。

「さあ、雪音さん。こちらへ。二人で証明写真を撮りましょう。」  
本人は爽やかな顔をしているつもりなのである。だが、傍目から見れば、獣が餌を見つけよだれをたらしているかのような顔であった。

「そんな顔のやつに女と二人つきりにさせるか！ウチも行く。」

そんな出来事もあり、とりあえずパスポートの件は片がついた。一週間以内には出来るので、完成したら送るとのことである。

さて、旅行前の桜邸はこのようなものであったが、他の家はどうと…

西園寺家。

「お父様。」

七海の父親こと西園寺大海の部屋へと襖を開け入る。

「どづした。七海。」

自慢の髭の手入れをしていた途中であったのか、手鏡を持っていた。

「一週間後、グアイへ旅行として行ってきます。」

「何！グアイへ“殴りこみ”じゃと！！ええいわしもこうしてはおれぬ！わしもゆくぞ！」

「あの…お父様？殴りこみではなく…というかそれらしい言葉は言ってますが。」

「ふっふっふ。わしも若い頃は“旅行”と言って組潰しをしたものじゃ、血が騒ぐの…ぶはあ！」

無理に身体を動かしたので、身体に障ったようだ。

「え！？ちよっとお父様！吐血してるわよ！」

七海の家はこのような感じであった。

北皇子家。

プルルル、プルルル。

氷柱は自宅で電話をかけていた。相手は父、今は北皇子総合病院にて仕事中らしい。

「氷柱です。」

「氷柱か？どうした。」

「一週間後旅行へ行きます。」

それと言った途端、しばしの沈黙が続いた。沈黙ではあったが、何かガタツという音がした。電話でも落としたのであろう。

『な…な…』

「な？」

『なんだとおー！！お母さーん！！氷柱ちゃん！氷柱ちゃんが旅行に行く  
ちやうよ〜！！え〜ん』

氷柱の父は娘に溺愛していた。

電話の向こうからかすかに声が聞こえる。

『ちよつとあなた！ここは仕事場なんだから静かに！』

『氷柱ちゃんがあ〜』

北皇子家も忙しそうである。

南嶋家。

「パパア〜。」

「…」

南嶋家の父は、寡黙で厳格という言葉が似合う風格の持ち主。

妻はその夫とは対極的に温厚でやんわりとした物腰の持ち主である。

「わたしい〜、旅行に行ってくるねえ〜。」

「そうか。」

父と娘の会話は最低限の言葉のみで終わった。

南嶋家の父との会話は大抵はこのようなものである。父は最低限の言葉、動作しかしない。そこに威厳を感じてしまうのが不思議なところである。

グアイ島のビーチ

「ねえデルタ。」

「何だエコー？」

デルタと呼ばれた男性。エコーと呼ばれた女性。金髪の二人は水着でビーチで寝転がっていた。

男は身長が180はあるう長身のイケメンと呼ばれる美男子。

女は巨乳が目立つち、顔も整っている美女。

「さつきから何ボケツとしてるの？」

「ああ、何だかむずむずするんだ。」

「ちょ！私のナイスバディ見てそんな！きゃ」

「いや、そうじゃなくて。」

エコーはむすつとする。

「ちょっと、私のボディ見ても何も思わないわけ？」

自慢の巨乳は強調する。が、デルタは見ようとせせず、海をただただ見ていた。

「何だか、近いうち懐かしい気分に浸れそうなんだ。」

それを聞き、エコーは指をあごの下へあて、考える。

「そうねえ、アンタは勘が鋭いからねえー、あながち本当に“あいつ”に会うかもしれないわよ。」

“あいつ”か…。もつどこに行ったのかわからない…。本当に

会ったら。」

「殺すの？」

エコーは先ほどまでと雰囲気を一変させた。

「…、俺はそんなことしないさ。わかってるだろ。」

「まあねえ〜。っと時間よ。任務を始めましょう。」

「ああ。」

二人は起き上がり、ビーチを去る。

二人はグアイ島で“あいつ”と再会を果たせるのか？  
それは…

午前9時、空港ロビー

「あんの馬鹿は……」

「いつも通りと言えはいつも通りなんだけどねえ」

「これはお仕置が必要ね。」

七海、南、氷柱の三人が旅行鞆と一緒に立っていた。

三人ともあと一人、桜の到着をイラつきを抑えられず、あらわにして待っていた。

「毎度遅刻つてあいつは学習能力がないのかしら？」

「今回は飛行機に乗るから遅刻は厳禁つて忠告したのに。」

「でもさあ、まだ約束の時間から5分しかたつてないからさあ。」

なだめる南。すると、後ろの方からドタドタと乱暴な足音が聞こえる。

「ごおめ~~~~ん!!!!待ったあ~~~~??」

「遅い!!!」

「氷柱がキレた!」

雲の学園生徒会四人組は、夏休み中ということもあり、今日グアイ島へと旅立つ。

期間は一週間。グアイ島のとある高級ホテルへ宿泊する予定である。グアイ島とは、いわばバカンスの島。“こちら”というハワイのよくな所であつる。気候は暑く、海で泳ぐには最高の島である。

グアイ島までは飛行機で12時間。今からゲートを通り、荷物を流し、飛行機に乗るところである。



「まったく桜は！」

「ふらら、ほれとってひい？（氷柱、これ取っていい？）」

「駄目よ。駄犬にはしつけをしなきゃいけないもの。」

桜の両頬には“超強力巨大洗濯ばさみ”という物がつけられている。氷柱曰く、桜が不祥事を起こした際、お仕置き道具として最近購入したらしい。

「ほほへはっはの？（どこで買ったの？）」

「秘密よ。」

とは言いつつ、桜はおおよその見当はついていた。

（茜さんめ…。いらんものを…）

「氷柱、早く行こうよ。私たちご飯食べてないんだからさ。」

「そうね。猿のお仕置きはここまでにして、いきましよう。」

桜たちが去った後、そこに雲の上学園生徒が二人。

「たまには庶民的な移動もいいわね。」

「…」

手ぶら状態である黒雛椿。そして、大量の旅行鞆を持たされながらも、眉一つ動

かさないでついて来ている執事、間宮千である。

黒雛家は海外へ移動するときは、基本自家用飛行機に乗る。だが、

今回は飛行機

を別件で使うことが当日発覚したため、やむおえず民間の飛行機に乗ることとなった。

「まったく、グアイなんて間宮と行ってもつまらないに決まっているのに、お母

様は…。あんたも何か言いなさいな。」

話を振られるが、依然寡黙を通す。椿はこの性格は嫌いではあるが、執事としての能力は申し分ないので雇っている所がある。

「まあ、いいわ。それより思ったより時間が余ったわ。間宮。」

言われて懐からスツと取り出したのは空港内の店が書かれたマップ。

「上出来よ。それじゃあ、私はランチをしているからあなたは荷物を片付けてきなさい。」

返事らしききとは一切せず、すぐさま荷物引き渡し場所へと足を向ける。

そして椿はマップを見ながら一人で歩き出した。

その数分後。

「倉田さん。ここが愚民…ではなく庶民が行きかう空港というもの

ですよ。」

「そうですね。村瀬さん。」

老けた高校生、色気が強すぎる高校生コンビである、倉田とメイド村瀬サリサであった。

どこかの金持ち一家の跡取り息子である倉田はことあるごとにバカンスに出かける。無論メイドである村瀬も付き人として同伴する。

「ところで今日は私以外にも同伴者がいるようですが…」

村瀬が後ろを見ると、図体、体格全てが大きい。身長が2mはあるうかと思われる大男がいた。

村瀬はあまりその人物と目を合わせようとせず、それ以前にあまり見たくなさそうにチラ見をした。

「じ…自分がこのような場所へ来てよろしいのでしょうか？」

「大丈夫ですよ。堅威さん。」

堅威と呼ばれた大男は大量の荷物を持ち、その場に根を生やしたかのように直立していた。

彼は倉田と同学年、だがクラスがFであり倉田とは別クラスである。顔には立派な黒髭を生やしている。倉田が老けた老人に見えるなら堅威はおっさんである。

（私、この人、真面目すぎて苦手だわ。）

村瀬の悩殺がまったく効かない堅威は、村瀬の天敵に近い存在である。

「我が君よ。自分がこのような旅行に同伴などもつたいなき配慮。」

自分、感謝の意をこめ、喜びの舞を。」

「結構です。ね、村瀬さん。」

「おっしゃる通りです。」

珍しく村瀬は艶美な笑顔を浮かべず、目をとじてキツパリと無愛想に言った。

そして堅威は身長が低く、比喻ではなく本当に低く見えるほど落ち込んでいた。

「堅威さん。荷物をさっさと預けに行ってください。」

「心得た。」

ずしずしと思い荷物を抱え、一人で歩いて行った。

すると、先ほどの顔とは一遍し

「倉田さん。では離陸までお食事をしましょう。」

艶美な笑顔で倉田を食事へ誘った。

その数分後。

「雪音さん。重い？」

「だ、大丈夫です。」

とは言いながらも明らかに無理をしている顔をしている。

「雪音さ〜〜〜ん、俺が荷物を〜〜〜」

「兄上、わらわの荷を持つがよい。」

「じゃああしい！乙姫！」

識と雪音、その後ろにいるのは浦島とその妹の乙姫である。

「乙姫さんよ。」

「なんじゃ？小僧。」

「小僧言つな。それは置いておいて、その後ろにいるのはなんだ？」

乙姫の後方、そのにあったのは、高さ2mくらいの二足歩行型機械であつた。

「ガイア参式じゃ。」

「当たり前ですけどってオーラ出すな。」

その“ガイア参式”という機械に荷物を持たせているようだ。

「それ、飛行機には乗れないぞ。」

「な！なんじゃとお！！！」

ガガン！つと背景に雷が落ちたかのような衝撃が乙姫を襲つた。ふらふらとガイアへと身を寄せる。

「わらわの最高傑作が…、このような形で別れをすることになろうとは…。」

「いや、別れって…。」

「我が妹よ。」

「兄上。」

今にも泣き出しそうな乙姫の肩に手を置く。

それは識が始めてみる兄としての顔であつた。

「別れはいつか必ずくる。それが今なだけだ。さあ、自爆スイッチを…」

よく見るとガイア参式の後ろに赤いボタンが。

「そうじゃな、さらばじゃ、ガイア参式。」

「やめろ！馬鹿兄弟！！自爆って空港でやったらただのテロだろ！」

「しかし、どのようにすれば…。」

ガイアを見る。このような2mの機械など処理できない。まして飛行機に乗せることなどできるわけではない。

「どうにかして、これをお前達の家へ帰すことができれば…。」

「できるぞ。」

「できんのかい…！」

この一通りのやり取りを見ていた雪音は

「…ええっとどういうときは… 馬鹿ばっか。」

こうして雲の上学園生はグアイ島へと飛びだつのであった。

104 遠い荒野と近い楽園

燃え盛る業火。その炎を一瞥し、素早く自分たちの基地へと戻る。そのようなことを何度繰り返したことだろうか。

女と呼ぶよりは、少女と呼ぶほうが正しいであろう背丈と容姿をした少女は少し遅れて返答をした。

「それじゃあ、始めてくれ。」

俺が言うと、少女は目を閉じ、意識を集中させた。その様子をいつものように俺は見ている。

四秒：五秒。少女だけ時間が止まったかのように微動だにしないで、目を閉じている。

六秒たった所で目をゆっくりと開いた。

「車両三、ライフル兵四、目標一。距離三百。」

それから延々とその人物の細かい座標を喋った。それを全て聞いた俺は腰にかけてあったトランシーバーを手にとった。

余談だが、大きさは今の携帯電話とは比較するのも馬鹿馬鹿しいくらい大きく、重量もあった。

「聞いたか？」

ジジジ…っと、ノイズが鳴る。

『こちらデルタ班。オーケーだ。』

『オスカー班。いつでもいける。』

今、俺たちは三班で行動をしていた。

『フォックス。合図は任せた。』

“フォックス”。俺は昔、その名で呼ばれていた。

「リマ。ここで待っている。」

少女は無言で頷いた。

少女の名前はリマ。当時の俺のパートナーと呼べる人間であった。

リマは不思議

な力を持っていた。それは、動物を使い魔として、動物の視界を見ることができ

るというものであった。詳しい事は何もわからない。ただ、そういうことがで

きるという事実。それだけで十分であった。

「…今。」

リマが声を出す。

それを無線で聞いていた仲間達は同時に行動に移る。

俺は何をするかというと、他の仲間よりも先に標的と接触をする。

そして、浮き足立った所に仲間が現れ一網打尽にする計画だ。つま



りは“囿”ともいえる。

ここはとあるプライベート空港。どこの国の人間かはわからないが、標的が飛行機でこの場所に着陸する。それと同時に標的、及び取り巻きを“消す”。それが俺達に与えられた任務であった。

しかし、空港の着陸するであろう場所はとも見通しがよく隠れることができるような場所などはない。

リマと俺は大型のトラックの荷台にいた。無論、空港付近に停めることなどできるはずがない。なので、空港から数キロ離れた場所に停めている。

その荷台から出したのはバイク。しかしただのバイクではない。

経緯は知らない。俺達の“隊長”が、任務のために特別用意をしたカスタム機である。

説明によると、時速250kmは出る改造が施されている。

俺はそのバイクに跨り、アクセルをフルスロットル。豪快な音と共に、俺を目的地にまで運んでいった。

空港ではこの爆音には気づかない。なぜなら飛行機の着陸音にバイクの音がかき消されているからだ。だが、それはバイクが遠くにあるからという話である。

近づいてくるにしたがい、SPと思われる黒服の人物が異変に気づいた。

「何か音がしないか？」

「ああ、何かの機械トラブルか？」

飛行機は滑走路を停まり、中から人が出てきた。

「大臣。お待ちしておりました。」

「うむ。」

大臣と呼ばれた男。男は専用飛行機に取り付けられた階段から降りる。

それを出迎える男。

その二人は異変に気づいていない。

取り巻きのSPが異常を伝えようとしたそのとき。

ヴオオオオオオン！！！！

激しい音がし、その方向には猛スピードで接近してくる影。

「何だ！？大臣！機内へ！」

踵を返し、機内へと戻ろうとする大臣。

すると、数名いるSPの一人が動き出した。

その人物は高く跳躍して大臣の頭上を通り越し、飛行機と階段を連結させている部分へと飛んだ。

「黒爪”！！”」

連結部分へ拳を叩きつける。否、ひっかく。

すると、階段は破壊され、それによって物体のバランスは崩れた。大臣は落下。だが、この高さなら死ぬことはないであろう。

「よくやったオスカー！！！」

識はバイクを減速させる。

そして、バイクを捨てるように飛ぶ。その捨てられたバイクはSPの一人へと突撃をした。

飛んだとき、空中で足を組んで丸まり、前宙をし、次の行動のための遠心力をつける。

「奥義“落葉”！！！」

遠心力をつけた踵落とし。

識は踵で誰をどのように打撃を入れたか。それを見ることはせず、次のターゲットへと視線を移していた。

そのターゲットは識が見ていると、SPは何かには飛ばされたかのようには倒れた。

「…。」

耳につけた無線に音が入る。

『悪い悪い。暇だったからさ。』

「デルタ…。」

デルタの遠くからの狙撃。それはSPを二人射殺した。

恨み言の一つ言おうとしたとき、ガシャアアン！と崩れた階段からオスカーが出てきた。

「目標は私が滅した。」

オスカーの右手袋には赤い染み。そこから時々雫が落ちる。

「ちっ、それじゃあ、後始末するぞ。」

「それくらいは譲ってやろう。」

胸の中に入れてあった手榴弾。それを飛行機のエンジン部分近くに投げつける。

手榴弾が爆発した瞬間、爆破がさらに爆発を呼び、飛行機をガラクタへと変えていった。

「…きさん？ 識さん？」

識は目を覚ました。そこは飛行機の座席。識は思い出した。今グアイ島へと向かう飛行機に乗っていて、長時間乗ることになるのだから少し仮眠をとろうと思っていたのである。

「識さん、すごい汗をかいてますよ？ 悪い夢でも見ていたんですか？」

隣の席に座っていた雪音に言われると、自分はずいぶんすごい汗をかいていることに気づく。

「ええ、まあ。」

言えなかった。昔の自分の記憶。それを見ていたということ。

そして、彼らに乗せた飛行機はグアイ島へと着く。

再開。

すみません、ちょっと休んでました!!  
約一年間!いろいろとあつて・・・  
そして・・・

復活!!!再開!!!

雲の上学園生徒会から『新約的・雲の上学園生徒会』へとタイトルを変更して、再開します!  
とりあえず、今後は遅くても週一ペースで掲載をできるように頑張ろうと思います。

では、新約的・雲の上学園生徒会 8月篇再開します。  
今回の話はいろいろと重要なイベントが多々起きる章です。あいか  
わらず誤字脱字があるかもしれませんが、よろしくお願い致します。

106 旅行先では日本人をターゲットとした詐欺がけっこう多いらしい

桜達がグアイに到着した数時間後、識たちもグアイ島へと到着した。

「日本も暑いけど、ここも暑いな。」

「うむ、じゃが湿度が低い分汗は日本よりかかんな。」

識は絶句した。

なぜなら…

「お…お前がそんな豆知識を知ってるなんて…。お前誰だ？」

「失敬なことを申すで無い！わしだってその程度知ってるわい！」

「お兄様、先ほどの情報、わらわが教えた話ではないかえ？」

やはり知らなかったらしい。浦島はぐうの音がでないといった様子で下を向いた。

「のう、中嶋とやら。あのおなごはどうした？」

「雪音さんか？どこって隣に…。」

その隣。乙姫の言うように誰もいなかった。雪音も雪音の持っていた旅行鞆も。

識は思い出していた。

それは桜邸を出るとき、茜に言われていた。

『雪音さんは海外が始めてだって行ってましたけど不安ですねー。

なのでお願いしますよ。なにかあったら中嶋くんクビね。いや、冗談ですよ。“冗談”ですから』

あの時の茜の目は冗談を言う目ではなく、悪意ある殺気のもつた目であった。

「二人はここにいろ！俺の生活の危機だ！」  
「は？」

当然の如く二人はポカンと？を頭に浮かべていた。だが識はいたって真面目であった。クビになったら路頭に迷うことになる。

「まあそれだけじゃないけどな。」

と独り言をいいながら、全力で空港付近を探す。

「くそ、こういう時のお決まりパターンを考える。始めて海外旅行をした人の行動パターンを！」

周囲見渡す。旅行者、タクシーの客引きをする者、路店で縄のリングを販売している者、…。

「あつ！」

識の目に映ったのは、路店から謎のプロミスリングのような物を腕に巻いてもらってる雪音だった。しかも、その顔はとてとてもうれしそうだ。

識は海外では生活をしてきたからゆえの独特な嗅覚がある。ここでいう嗅覚は決して臭いという意味ではない。経験などによって培われた勘のようなものである。



その嗅覚が反応した。

「あれはプロミスリング詐欺！なんつーお決まりの詐欺に引っかかってるんだ！」

急いで雪音の元へ駆け寄るが時すでに遅し、雪音は3000リン（日本円で3000円価値）を支払い終えた所であった。

「ゆ…雪音さん。それは…」

「あ、識さん！今その人に“幸せになるプロミスリング”というのを売ってもらったところなんです 識さんもどうか？」

この先幸運が訪れるという思いで幸せそうな笑顔で話す。

「俺がついてなかったから…」

小声で自分の失態を悔やむ。

考えてみれば、雪音は近所のスーパーですらまともにいったことがない。そんな人物を一人にすべきではなかった。

だが、災難は終わってなかった。

「あれ？雪音さん？」

識は重大な事実気づいた。

「なんです？」

「荷物は？」

「さっきプロミスリングを売ってくれた人がホテルまで持ってきてくれるって言ってました …あれ？でもどうして私達のホテル知

「つてるんでしよう？不思議ですねー」  
「いや、疑えつて！！」

荷物は騙し取られたようだ。  
路店商人はすでにその場にはおらず、走って離れたタクシー乗り場で今まさに乗車を終えたところであった。

「逃がすかあつ！！」

視目した瞬間、猛スピードで走り出した。

タクシーとの距離は30mほどであろうか。タクシーが走り始めた。

初速の段階ではまだ識に分がある。

だが、このまま加速をされたら交通状況にもよるが、一気に離されてしまう。

などと考えていたら

ドオオン！！

車が何かにつつかる音がし、停車をしていた。

駆け寄るとそこには見覚え：本当に親しくはないが覚えがある程度の人物と遭遇した。

「む、貴様は東海林の所の学生か？」

「ああ。桜基準で覚えてるのか。徳川海。」

大江戸大附属高校の生徒会長である、徳川海であった。

「六月の大会以来か。まさかこのような場所で会つと偶然だな。東海林のやつはいるのか？」

「まったくの別行動だが、グアイには来てるぞ。それにしても、」  
識の視線は止められた車へと向けられる。

「これは一体…？」

と、今まで海のことに関心をとられていたが、車を止めたのは海ではなかった。

その海の隣、直立不動の体勢をとっている２メートルはあろう大男。こいつが止めたのだと識は感じた。

（マジかよ…車のボンネットがあいつの手の跡でへこんでる…。真つ正面から力技で止めたつてののか？）

「その通りだ。」

「くっ！最近心を読んでくるやつが多いな。」

「ほら、あいさつなさい。」

ズツ、とこちらを向き腰を45°。ぴつたりと曲げる。

「其れがし、名は“本多忠勝”。徳川家にて代々執事業を任せられる本多一家代…」

「うるさい。」

ペシッと額を扇子で殴られる。

殴られると同時にロボットのスイッチが切り替わったかのように仏頂面で休めの姿勢を取り出した。

「忠勝は馬鹿正直すぎて、放っておくと止まらない馬鹿なんだ。だが、性能は折り紙付きだ。」

「それよりさ、その車の中だけど、盗られたもんがあるんだ。回収していいか？」

「ぶっ！」

海は突然吹き出した。

ハツとして品を欠いたと思ったのか、口元を扇子で覆い隠した。

「お前こんな空港で物を盗られたのか？こんなマヌケ共に？」

所々笑いながら話す様子は、確実に識を馬鹿にしていた。

「てか、盗られたのは俺のじゃない。それは…」

「執事たるもの、自身の物だけではなく、仕える主、主の友人に被害が出ぬよう常に気をはるのは当然の所業である。」

ムツツリと黙っていた忠勝が識へ忠告した。

当の識は自分が雪音を守れなかった事実。それをつきつけられ何も言えなかった。

「まあ、今回は返ってきたことで、精進したまえ、え〜っと。」

「中嶋識だ。（こいつ桜以外憶えて知らないんじゃないかね？）」

「まあ、実際その通りだが。」

「また読まれた!？」

「いや、今のは声に出していたぞ。無能執事。」

グサリと言葉の槍が深く刺さる。

「それとこいつらだが」

タクシーの中で気絶をしている男。雪音を騙した者のことである。

「なんだか、知っているようだな。」

「こいつは“ねずみ男”。まあなんといいかだな……」

先ほどまでのハッキリとした態度とは違い、何か言葉を濁すような態度である。

「……まあいいか、お前なら。妖怪だ。」

「そうか。」

…

…

しばしの沈黙。

識の反応に最初は少し驚いていた海だが、次第に目つきが厳しいものに変わった。

「なんだその反応は？」

「ん？いや、妖怪か、そうかという反応だが？」

「妖怪の存在を知っているのか？」

「ああ。」

頭をホルドそのまま

「私の躊躇いを返せっ！……！」

厚底キックッ！

「ぐはっ！なんで!？」

雪音の荷物を回収した識は急いで皆のいる所へと戻った。

「ずいぶん時間がかかったのう。」

「悪かったな。窃盗一人追っていたようなもんだからな。」

荷物を持ち、識、雪音、浦島、乙姫の四人はホテルまでの直行バスに乗った。

そのころ、海と忠勝は…

「主よ。このねずみはいかがいたす。」

ひょいっとねずみ男の首根っこを軽々と持ち上げる。

「ちちちっ！許してくれよお。ちよっとしたイタズラじゃあないか。」

小汚い格好をしたネズミ男は悪びれもせず、笑っている。

「“陰陽隊”に引き渡すか。」

それを聞き、先ほどまでの笑い顔が崩れ、急に顔色が真っ青に染まる。

「ちっ！そそそれはご勘弁をお！靴でも指でも舐めますからあ！」  
「そんなら気持ちの悪いことをしたら存在を消すぞ。まあ、陰陽隊は勘弁してやるが、本家へ移送で手を打ってやる。」

よほど嬉しかったのか、その場で土下座を始め

「ありがとう〜」

土下座体勢から海へと跳躍。唇を突き出して。

「無礼者っ！！」

忠勝の拳が飛ぶ。ねずみ男の頬にめりめりっとな打ち込み、男は遙か後方の電柱へと飛ばされる。

ガインっとな鉄の曲がる音がし、電柱にねずみ男の型が作られる。形的には助けられた海は、忠勝を見上げ、ため息をつく。

「修繕費、誰が出すと思ってるんだ？」

「うっ…、かたじけない…」

忠勝は俯いてしまった。

次回、砂浜激闘編

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6260h/>

---

新約的・雲の学園生徒会!!!

2011年11月23日23時47分発行